

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 644 集

こ なり 2
小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 644 集

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

2015

(公財) 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
岩手県文化振興事業団

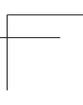
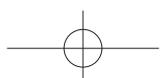
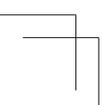
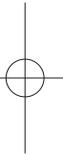
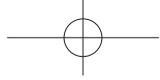
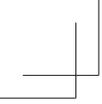
2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

(公財)岩手県文化振興事業団

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査





小成Ⅱ遺跡遠景（上が東）



調査区全景（上が北）



SI14 全景（南東から）



磨製石斧

序

本県には、縄文時代をはじめとする数多くの埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要となりますが、それらの開発にあたっては環境と調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来岩手県教育委員会の指導のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路事業に関連して、平成 25 年度に発掘調査を行った小成Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、縄文時代中期後半に営まれた集落跡が明らかとなりました。様々な形態の炉を伴う多数の竪穴住居跡が検出されたことをはじめ、多くの縄文土器や石器などが出土しています。これらの分析結果から、この地が小成川流域における拠点集落として縄文時代の人達に利用されたことが判明いたしました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、岩泉町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成4-36ほかに所在する小成Ⅱ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、三陸沿岸道路事業に伴う緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の協議を経て、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は、以下の通りである。
小成Ⅱ遺跡 遺跡番号…L G 53-0313 遺跡略号…K N Ⅱ -13
- 4 発掘調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。
調査期間 平成25年7月1日～10月11日
調査面積 1,900 m²
調査担当者 藤本玲子・村上 拓・高橋麻衣子・佐々木隆英・森 裕樹
- 5 室内整理期間・整理担当者は以下の通りである。
室内整理期間 平成25年11月1日～平成26年3月31日
室内整理担当者 藤本玲子・佐々木隆英
- 6 本報告書の第Ⅰ章は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所に依頼している。
Ⅱ～Ⅶ章は藤本が執筆し、Ⅳ章とⅣ章の縄文土器については、当センター高木晃主任文化財専門員が監修を行った。全体の編集は藤本が行った。
- 7 鑑定各種・分析は次の外部機関に委託した。
石質鑑定：荏岡岩研究会
黒曜石産地同定：(株)パリノ・サーヴェイ
¹⁴C年代測定：(株)加速器分析研究所
石器実測：(株)ラング
- 8 基準杭設定は(株)鈴木測量設計に委託した。
- 9 野外調査及び本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った(順不同、敬称略)。
田鎖康之・宇田川浩一・北原 治
- 10 野外調査では岩泉町、宮古市田老地区の方々にご協力いただいた。
- 11 本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会などで公表されているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
- 12 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

- 1 本報告書収載の遺構実測図に付した方位は、国土地理院座標第X系(世界測地系)による座標北を示す。
- 2 土層注記は基本層序にローマ数字、遺構埋土層位にはアラビア数字を用いる。
- 3 土層注記は次の順に表現し、粘性・しまりについては以下のようにアラビア数字5段階で表記することにする。

例 土色 土質 粘性しまり 混入物
 1. 10YR1/2黒 砂質シルト 1 3 φ1~5mmの炭化物10%
 2. 10YR1/1.7黒 砂質シルト 5 2 φ1~20mmの黄褐色土50%

粘性	しまり
弱 ——— 1	疎 ——— 1
やや弱 — 2	やや疎 — 2
中 ——— 3	中 ——— 3
やや強 — 4	やや密 — 4
強 ——— 5	密 ——— 5

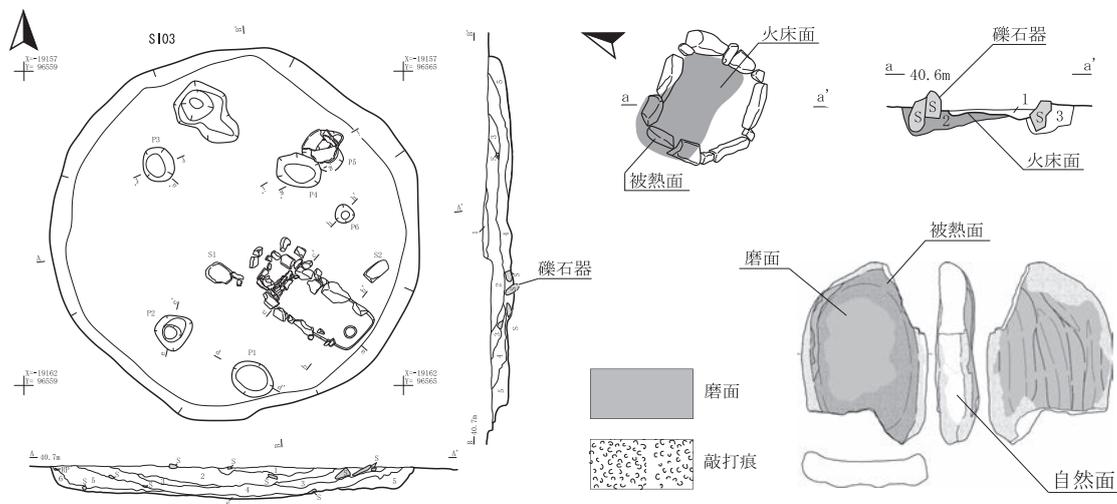
- 4 表中の()は法量の残存値を示す。
- 5 遺構名に用いた略号は以下のとおりである。

SI……竪穴住居跡 SN……焼土遺構 P……柱穴
 SD……溝跡 SK……土坑跡

- 6 遺構図中の遺物表記は以下の通りである。

S……礫・石器(礫には自然石も含まれる) RP……土器

- 7 遺構図の断面にかかると礫石器にはスクリーントーンを使用し、平面図には用いない。平面図の礫においては被熱を受けたもののみスクリーントーンを使用する。その際、断面図のスクリーントーンと区別するため、火床面および焼土範囲に用いるスクリーントーンと同じ濃さの物を使用する。挿図中に使用しているスクリーントーン、遺物実測の表現は以下の通りである。



目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	1
	1 遺跡の地理的環境	1
	2 歴史的環境	1
III	野外調査・室内整理方法	7
	1 野外調査	
	(1) グリッド設定	7
	(2) 調査の手順	7
	(3) 調査過程	10
	2 室内整理	
	(1) 遺構記録の整理	11
	(2) 遺物の整理	11
	(3) 室内整理過程	11
	3 基本層序	13
IV	検出遺構と遺物	14
	1 概要	14
	2 遺構	
	(1) 竪穴住居跡	14
	(2) 溝跡	31
	(3) 焼土遺構	31
	(4) 土坑跡	31
	3 出土遺物	58
	(1) 縄文土器	58
	(2) 土製品	62
	(3) 石器	62
V	自然科学分析	100
	1 黒曜石の産地同定	100
	2 放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）	104
VI	総括	107
	1 縄文土器	107
	2 石器	108
	3 遺構	109

4 三陸沿岸北部の縄文中期後葉集落について	110
報告書抄録	201

図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第36図 出土遺物 縄文土器(4)	68
第2図 地形分類図	3	第37図 出土遺物 縄文土器(5)	69
第3図 地形区分図	4	第38図 出土遺物 縄文土器(6)	70
第4図 周辺遺跡分布図	5	第39図 出土遺物 縄文土器(7)	71
第5図 周辺地形・調査範囲	8	第40図 出土遺物 縄文土器(8)	72
第6図 遺構配置図	9	第41図 出土遺物 縄文土器(9)	73
第7図 基本層序	12	第42図 出土遺物 縄文土器(10)	74
第8図 SI01・02・32竪穴住居跡	32	第43図 出土遺物 縄文土器(11)	75
第9図 SI03竪穴住居跡	33	第44図 出土遺物 縄文土器(12)	76
第10図 SI04竪穴住居跡	34	第45図 出土遺物 縄文土器(13)	77
第11図 SI05竪穴住居跡	35	第46図 出土遺物 縄文土器(14)	78
第12図 SI06・19竪穴住居跡	36	第47図 出土遺物 縄文土器(15)	79
第13図 SI07竪穴住居跡	37	第48図 出土遺物 縄文土器(16)	80
第14図 SI08竪穴住居跡	38	第49図 出土遺物 縄文土器(17)	81
第15図 SI09・10竪穴住居跡	39	第50図 出土遺物 縄文土器(18)・土製品	82
第16図 SI11竪穴住居跡	40	第51図 出土遺物 剥片石器・敲磨器類(1)	83
第17図 SI12・13竪穴住居跡	41	第52図 出土遺物 敲磨器類(2)	84
第18図 SI14竪穴住居跡(1)	42	第53図 出土遺物 敲磨器類(3)	85
第19図 SI14竪穴住居跡(2)	43	第54図 出土遺物 敲磨器類(4)	86
第20図 SI15・16竪穴住居跡(1)	44	第55図 出土遺物 敲磨器類(5)・磨製石斧(1)	87
第21図 SI16竪穴住居跡(2)・SI17竪穴住居跡	45	第56図 出土遺物 磨製石斧(2)・垂飾・石皿(1)	88
第22図 SI18・19竪穴住居跡	46	第57図 出土遺物 石皿(2)	89
第23図 SI20竪穴住居跡	47	第58図 竪穴住居集成図1(石囲炉)	110
第24図 SI21・22竪穴住居跡	48	第59図 竪穴住居集成図2(複式炉)	111
第25図 SI23・24竪穴住居跡	49	第60図 竪穴住居集成図3(地床炉)	112
第26図 SI25・26竪穴住居跡	50	第61図 竪穴住居集成図4(土器埋設)	112
第27図 SI27・28竪穴住居跡(1)	51	第62図 遺構内出土遺物集成1	113
第28図 SI28(2)・29・30竪穴住居跡	52	第63図 遺構内出土遺物集成2	114
第29図 SI31・32竪穴住居跡	53	第64図 遺構内出土遺物集成3	115
第30図 SI33・34・35竪穴住居跡	54	第65図 遺構内出土遺物集成4	116
第31図 SI36・37・38竪穴住居跡	55	第66図 遺構内出土遺物集成5	117
第32図 SK04・05土坑・SD01溝跡・SN01焼土	56	第67図 遺構内出土遺物集成6	118
第33図 出土遺物 縄文土器(1)	65	第68図 遺構内出土遺物集成7	119
第34図 出土遺物 縄文土器(2)	66	第69図 時期別変遷図	121
第35図 出土遺物 縄文土器(3)	67	第70図 三陸沿岸北部遺跡図	122

表目次

第1表 周辺遺跡一覧	4	第3表 土器観察表(1)	90
第2表 遺構観察表	57	第4表 土器観察表(2)	91

第 5 表	土器觀察表 (3)	92	第 10 表	土器觀察表 (8)	97
第 6 表	土器觀察表 (4)	93	第 11 表	石器計測值一覽表	98
第 7 表	土器觀察表 (5)	94	第 12 表	出土遺構別石器數量	99
第 8 表	土器觀察表 (6)	95	第 13 表	三陸沿岸北部遺跡表	122
第 9 表	土器觀察表 (7)	96			

写真図版目次

写真図版 1	調査前風景・基本層序	127	写真図版 38	SI28 竪穴住居跡 (2)	164
写真図版 2	SI01 竪穴住居跡	128	写真図版 39	SI29・30 竪穴住居跡	165
写真図版 3	SI02・32 竪穴住居跡	129	写真図版 40	SI31 竪穴住居跡	166
写真図版 4	SI03 竪穴住居跡 (1)	130	写真図版 41	SI33 竪穴住居跡	167
写真図版 5	SI03 竪穴住居跡 (2)	131	写真図版 42	SI34 竪穴住居跡	168
写真図版 6	SI04 竪穴住居跡	132	写真図版 43	SI35 竪穴住居跡	169
写真図版 7	SI05 竪穴住居跡 (1)	133	写真図版 44	SI36 竪穴住居跡	170
写真図版 8	SI05 竪穴住居跡 (2)	134	写真図版 45	SI37 竪穴住居跡	171
写真図版 9	SI06 竪穴住居跡 (1)	135	写真図版 46	SI38 竪穴住居跡	172
写真図版 10	SI06 竪穴住居跡 (2)	136	写真図版 47	SD01溝跡、SN01焼土跡、SK04・05土坑跡	173
写真図版 11	SI07 竪穴住居跡	137	写真図版 48	縄文土器 (1)	174
写真図版 12	SI08 竪穴住居跡 (1)	138	写真図版 49	縄文土器 (2)	175
写真図版 13	SI08 竪穴住居跡 (2)	139	写真図版 50	縄文土器 (3)	176
写真図版 14	SI09 竪穴住居跡	140	写真図版 51	縄文土器 (4)	177
写真図版 15	SI10 竪穴住居跡	141	写真図版 52	縄文土器 (5)	178
写真図版 16	SI11 竪穴住居跡 (1)	142	写真図版 53	縄文土器 (6)	179
写真図版 17	SI11 竪穴住居跡 (2)	143	写真図版 54	縄文土器 (7)	180
写真図版 18	SI12 竪穴住居跡	144	写真図版 55	縄文土器 (8)	181
写真図版 19	SI13 竪穴住居跡	145	写真図版 56	縄文土器 (9)	182
写真図版 20	SI14 竪穴住居跡 (1)	146	写真図版 57	縄文土器 (10)	183
写真図版 21	SI14 竪穴住居跡 (2)	147	写真図版 58	縄文土器 (11)	184
写真図版 22	SI14 (3)・15 竪穴住居跡	148	写真図版 59	縄文土器 (12)	185
写真図版 23	SI16 竪穴住居跡 (1)	149	写真図版 60	縄文土器 (13)	186
写真図版 24	SI16 竪穴住居跡 (2)	150	写真図版 61	縄文土器 (14)	187
写真図版 25	SI17 竪穴住居跡	151	写真図版 62	縄文土器 (15)	188
写真図版 26	SI18 竪穴住居跡	152	写真図版 63	縄文土器 (16)	189
写真図版 27	SI19 竪穴住居跡	153	写真図版 64	縄文土器 (17)	190
写真図版 28	SI20 竪穴住居跡	154	写真図版 65	縄文土器 (18)	191
写真図版 29	SI21 竪穴住居跡	155	写真図版 66	縄文土器 (19)	192
写真図版 30	SI22 竪穴住居跡	156	写真図版 67	縄文土器 (20)	193
写真図版 31	SI23 竪穴住居跡 (1)	157	写真図版 68	石器 (1)	194
写真図版 32	SI23 竪穴住居跡 (2)	158	写真図版 69	石器 (2)	195
写真図版 33	SI24 竪穴住居跡	159	写真図版 70	石器 (3)	196
写真図版 34	SI25 竪穴住居跡	160	写真図版 71	石器 (4)	197
写真図版 35	SI26 竪穴住居跡	161	写真図版 72	石器 (5)	198
写真図版 36	SI27 竪穴住居跡	162	写真図版 73	石器 (6)	199
写真図版 37	SI28 竪穴住居跡 (1)	163	写真図版 74	石器 (7)	200

I 調査に至る経過

小成Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（田老～岩泉）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付国東整陸2調第701号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月5日～9日にわたり試掘調査を行い、平成24年11月12日付け教生第1541号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

II 立地と環境

1 遺跡の地理的環境

小成Ⅱ遺跡は岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成4-36他に所在する。三陸鉄道北リアス線小本駅から南約3kmの国道45号線沿いに位置する。丘陵部を縫い、小成川の河口からは約2km程遡った場所である。東は太平洋に面し、3方が北上山地の山々に囲まれている。遺跡は岩泉町小本地区の最南端に位置し、調査区西側は小成川を挟んで宮古市田老地区と隣接する。

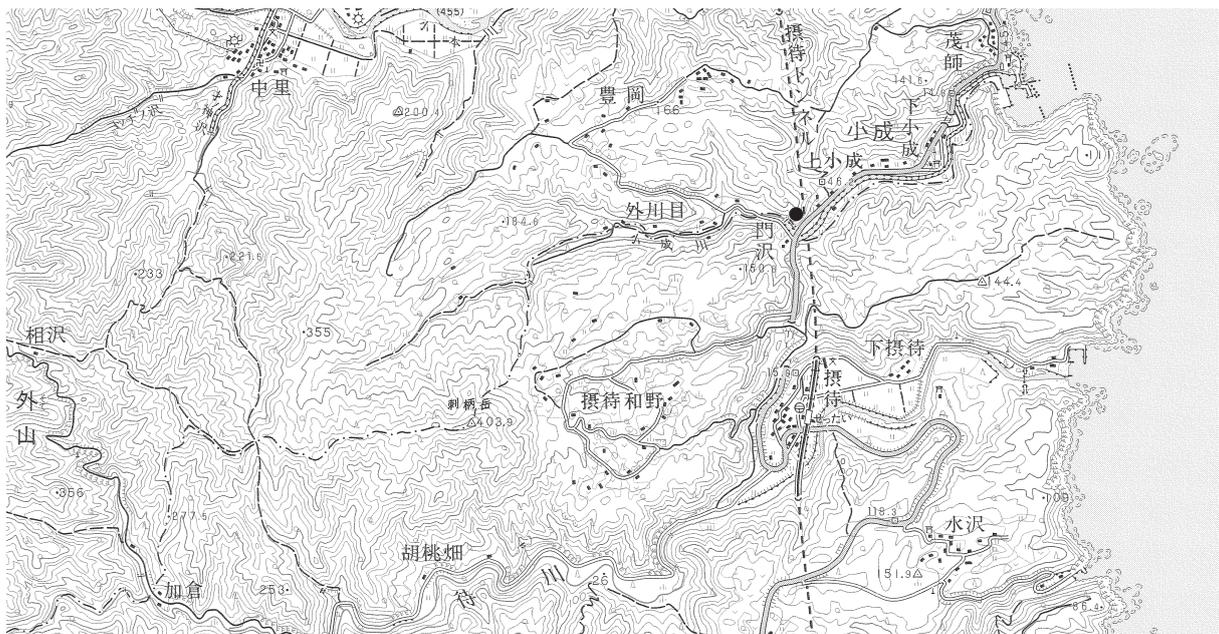
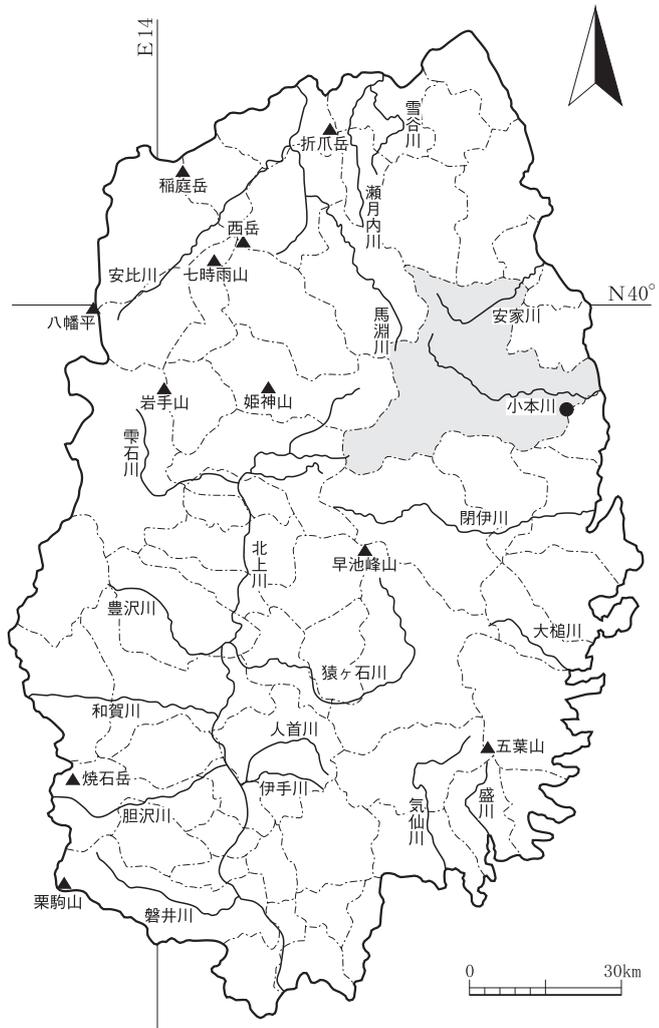
岩泉町は東西51km、南北41km、992.92km²の面積を誇り、これは本州一である。しかし、周囲に標高1,000～1,300mの山地が連なり、大半を山林が占める。御大堂山等を水源とする小本川が町の中央を横断し太平洋に流れでる。宇霊羅山内部には鍾乳洞である龍泉洞が存在する。

遺跡が所在する小本地区は町内6地区のうち、最も面積が小さく、北は同郡内田野畑村、南は宮古市田老地区に面し、西側は岩手郡葛巻町、盛岡市玉山地区に接する。調査区は北側に広がる小本丘陵の末端から小成川に面した低地、谷底平野及び氾濫平野の緩斜面上に立地する。標高は40m前後である。調査区内北半には十和田中堰テフラの二次堆積層が広範囲に分布し、上面が縄文中期の遺構検出面となる。調査区南側では黒色土の堆積が厚く礫層が確認された。調査前は水田として利用されており、開田による削平が著しい。

2 歴史的環境

岩泉町は岩手県北東部に位置する。現在の岩泉町は昭和31年、旧岩泉町、大川村、小本村、安家村、有芸村、昭和32年に小川村が合併して誕生した町である。

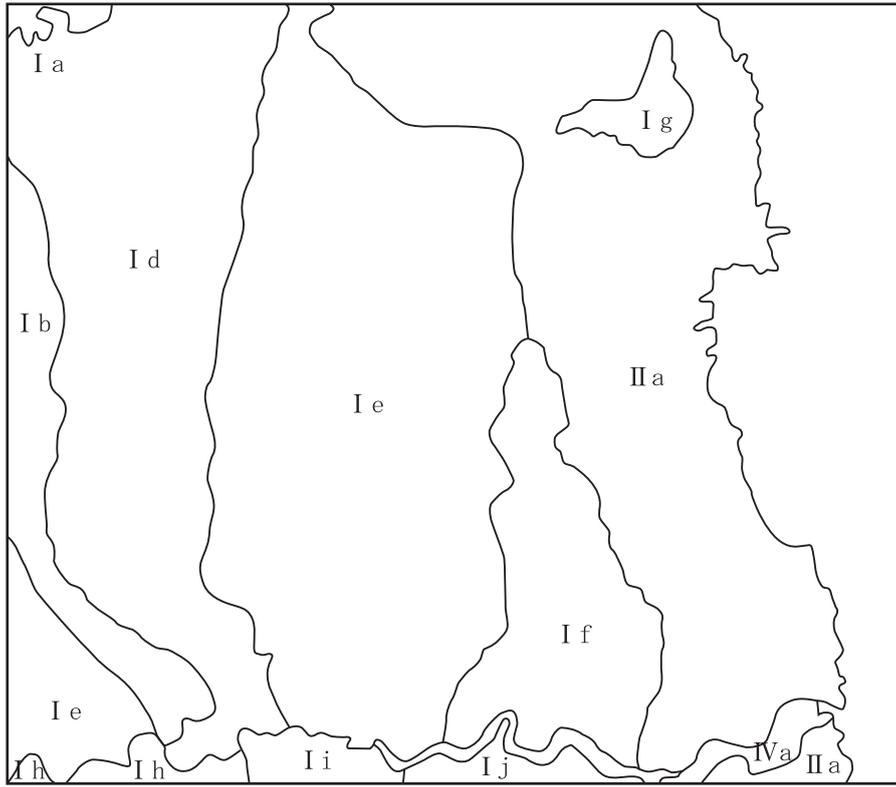
岩泉町内には、約600か所の遺跡が確認されており、うち小本地区は101か所遺跡が存在する。町内全域では、龍泉洞新洞遺跡といった後期旧石器時代末～縄文時代草創期をはじめとして、森の越遺



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図



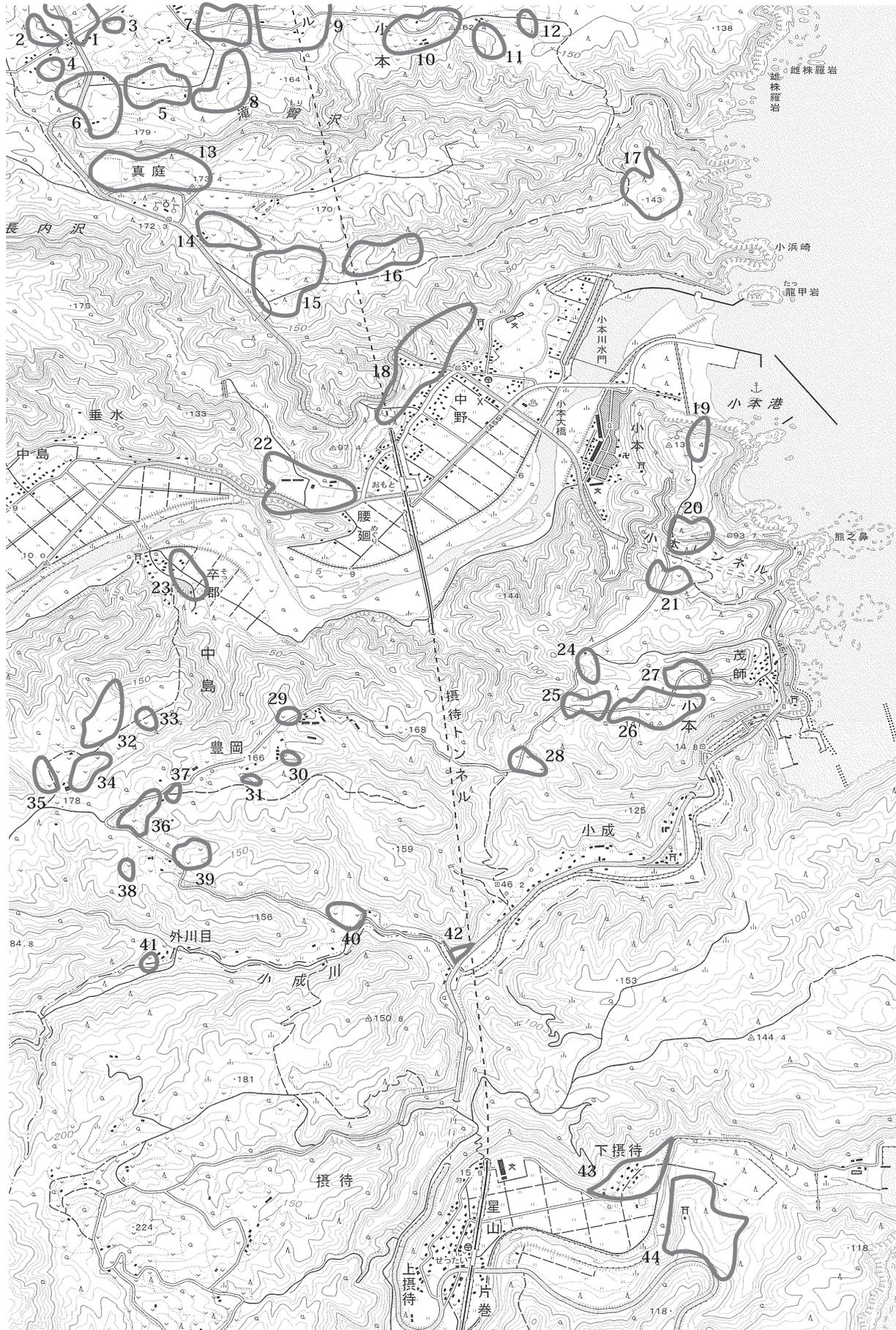
- I 山地
- I a 和佐羅比山地
- I b 安家石灰岩山地
- I c 穴目ヶ岳山地
- I d 甲子山地
- I e 続石山地
- I f 大津賀山地
- I g セツ森山地
- I h 峠ノ神山地
- I i メンヅクメ山地
- I j 刺柄岳山地
- II 山稜
- II a 小本丘陵
- IV 低地
- IV a 小本川低地

縮尺 1 : 200,000

第3図 地形区分図

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	清水野Ⅲ	散布地	縄文(中～後期)	23	卒部	散布地	縄文
2	清水野Ⅱ	散布地	弥生	24	茂師大平Ⅱ	集落跡	縄文(前・後期)、弥生
3	清水野Ⅳ	散布地	縄文(中期)	25	茂師大平Ⅰ	集落跡	縄文
4	清水野Ⅰ	散布地	縄文(中期)	26	茂師上野	集落跡	縄文(前～中期、晩期)、奈良、平安
5	古松林Ⅱ	集落跡	縄文(前～後期)	27	茂師貝塚	貝塚	縄文(晩期)
6	古松林Ⅲ	散布地	縄文	28	小成	散布地	縄文(前期)、弥生、奈良、平安
7	清水野Ⅴ	散布地	縄文	29	豊岡Ⅰ	散布地	縄文(前期)、弥生
8	小松林Ⅰ	集落跡	縄文(前・後期)	30	豊岡Ⅱ	散布地	縄文(前期)
9	清水野Ⅵ	集落跡	縄文(前～後期)	31	豊岡Ⅲ	散布地	縄文(中～後期)
10	松坂Ⅲ	集落跡	縄文(中～後期)	32	豊岡Ⅹ	散布地	縄文(前期)
11	松坂Ⅱ	散布地	縄文	33	豊岡Ⅺ	散布地	縄文(前期)
12	松坂Ⅰ	散布地	縄文	34	豊岡Ⅸ	散布地	縄文(前期) 弥生、奈良、平安
13	真庭	集落跡	縄文(後期)、弥生	35	豊岡Ⅷ	散布地	縄文(前期)
14	真庭平	集落跡	縄文(前期)	36	豊岡Ⅴ	集落跡	縄文(早～後期)、弥生、奈良、平安
15	崎無Ⅰ	集落跡	縄文(前～中期)、弥生	37	豊岡Ⅳ	散布地	縄文(前期)
16	崎無Ⅱ	散布地	縄文	38	豊岡Ⅵ	散布地	縄文
17	有畑	散布地	縄文	39	豊岡Ⅶ	散布地	縄文(中期)
18	中野	集落跡	縄文(後～晩期)、古代	40	外川Ⅰ	集落跡	縄文(前期)
19	カモイカ	集落跡	弥生、奈良、平安	41	外川Ⅱ	散布地	縄文
20	にした平	集落跡	縄文(前期)、弥生	42	小成Ⅱ	集落跡	縄文(中期)
21	岩ヶ沢	集落跡	縄文(前期)、弥生、奈良、平安	43	接待	散布地	縄文
22	腰巡館	城館跡	古代、中世	44	館の畑	散布地、城館跡(伝)	縄文、中世



1:25,000 岩泉・田老・鉦山

第4図 周辺遺跡分布図

2 歴史的環境

跡など全域で縄文時代草創期～晩期にかけての遺跡が広範囲で分布する。龍泉洞新洞遺跡出土の爪型文土器は盛岡市大新町遺跡出土土器とともに県内で最も古い草創期後半の土器である。縄文時代中期の遺跡が最も多く、小本川流域は谷底平野が狭い範囲で形成され、川に沿って縄文時代の遺跡が点在する。

小成Ⅱ遺跡が所在する小本地区は、遺跡の大半が河岸段丘上に位置し、若干弥生時代の遺跡も見られるがほとんどは縄文時代のものである。小本川沿いの河岸段丘上には縄文時代や古代の遺跡も見られる。平成3年に文化財補助事業3ヵ年計画の2年目としてとして小本地区、有芸地区の町内遺跡詳細分布調査が岩泉町教育委員会によって行われた。この調査によって、町内の遺跡数は急激に増え、小本地区は55ヶ所増の100ヶ所となった。また、それまで不明であった町指定文化財の遮光器土偶の出土地点が明らかになり、茂師貝塚（第4図27）の遺跡登録につながった。現在では平成25年に調査された本遺跡と腰巡館跡を入れ、小本地区内で102ヶ所の遺跡が登録されている。

茂師貝塚（27）は、平成6年に遺跡の一部が岩泉町教育委員会によって発掘調査され、竪穴住居跡9棟、竪穴状遺構2基、土坑2基、墓壙1基、埋設土器遺構3基が確認された。縄文時代早期～晩期の土器が出土しており、うち縄文時代後～晩期の土器が最も多い。大型石斧、垂飾、石棒等も出土している。縄文時代晩期の遮光器土偶は全長が約30cmあり、町の文化財に指定されている。豊岡Ⅴ遺跡（36）は、平成16年に水道施設建設工事に伴う事前調査として岩泉町教育委員会によって発掘調査され、町内初の弥生時代後期の集落跡であることが確認された。弥生時代の竪穴住居10棟、土坑2基が見つかり、住居内からは在地の赤穴式土器と北海道系の後北式土器が共伴して出土した。またアメリカ式石鏃、木製品、多量の堅果類等も出土している。小成Ⅱ遺跡から北西約2.25kmに位置する腰巡館跡（22）は、平成25年に東日本大震災に係る移転地造成盛土材採取事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が岩泉町教育委員会、岩手県教育委員会によって行われ、平安時代の集落跡と中世の館跡であることが確認された。竪穴住居4棟、郭2基、土塁1基、空堀3条、道状遺構1基、銭貨集中1基、炭窯3基が検出された。空堀からは寛永通宝13枚がまとまって出土した。

参考文献

- 岩泉町教育委員会 1980 『岩泉町史』〈上巻〉
1992 『岩泉地方史』（地質編）
1992 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ—小本・有芸地区—』岩泉町文化財調査報告書第24集
1994 『茂師貝塚—平成6年度発掘調査概報—』岩泉町文化財調査報告書第29集
2006 『豊岡Ⅴ遺跡—平成16年発掘調査報告書—』岩泉町文化財報告書第43集
2014 『腰巡館跡—東日本大震災に係る移転地造成盛土材採取事業地発掘調査報告書—』岩泉町文化財調査報告書第47集

Ⅲ 野外調査・室内整理方法

1 野外調査

(1) グリッド設定

調査区前は田地で、三陸沿岸道路（田老～岩泉）事業に伴い道路建設予定地部分の調査を実施した。調査区面積は 1,900 m²である。調査に必要となる基準杭設定を外部委託し、3級基準点を調査区内東西に2点、南に区画付杭4点の計6点打設した。調査区内に遺物包含層が確認されたため、基準点1（基1）を原点とし、西端から東端をアルファベット a～q、北端から南端をアラビア数字 1～9 とふりわけ、全域に 5 m グリッドを設定（第6図）することで、調査区内の遺構・遺物の検出土状況把握に努めながら調査を進めた。打設した杭の世界測地系による座標値は以下のとおりである。

	X	Y	Z
基-1	= -19160.000m	96550.000m	40.752m
基-2	= -19160.000m	96600.000m	39.911m
付1	= -19180.000m	96550.000m	40.568m
付2	= -19180.000m	96575.000m	40.350m
付3	= -19160.000m	96575.000m	40.629m
付4	= -19160.000m	96585.000m	40.142m

(2) 調査の手順

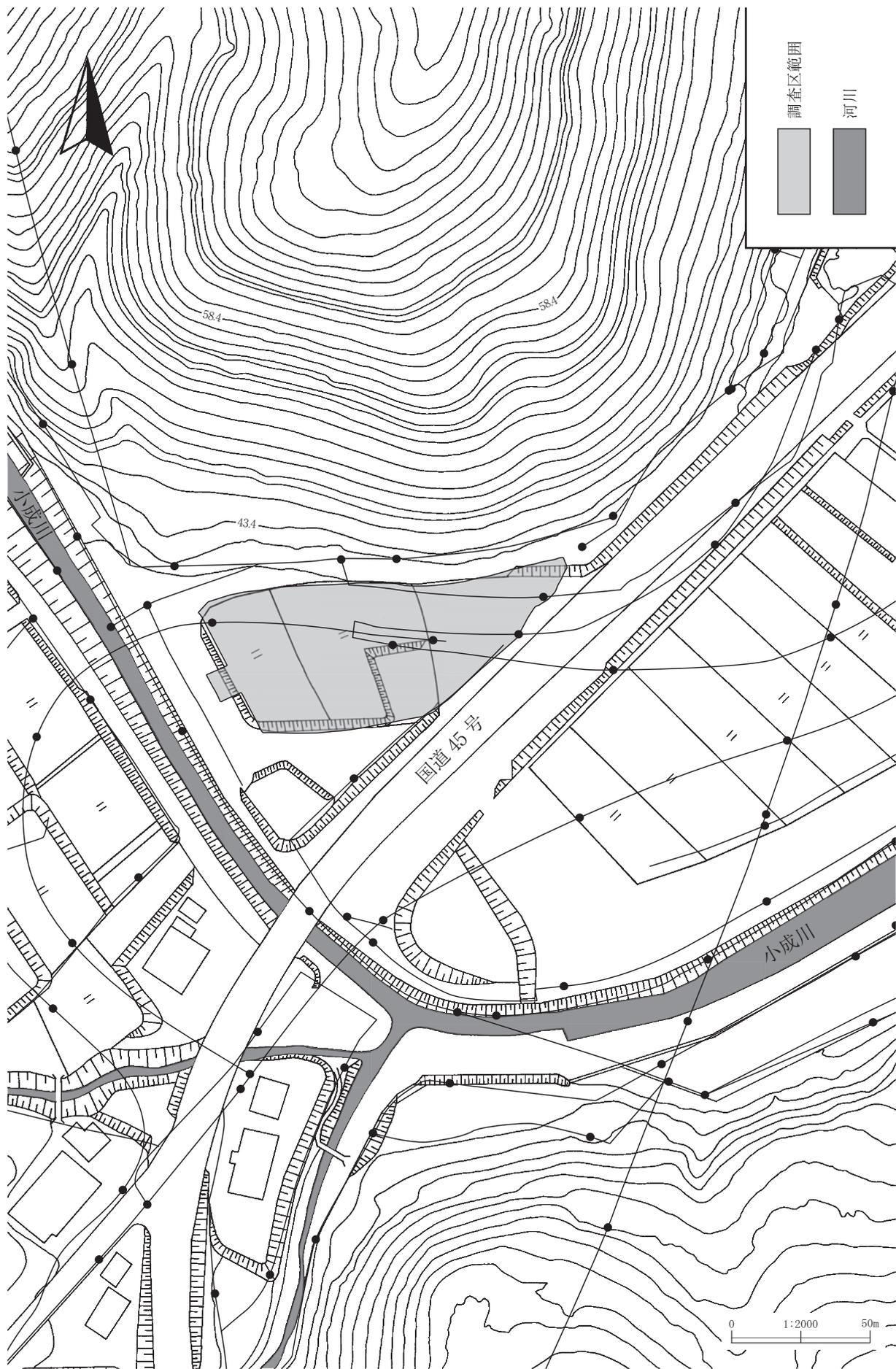
調査開始とともに雑物撤去を行い、土の堆積と地形観察、確認のため調査区内各所にトレンチを設定し、人力で掘削を行った。土層観察の結果、遺跡の基本層序は大きく I～IV 層に分層することができ、II 層より遺物が多く出土したことから遺物包含層と判断した。また、III・IV 層上面で遺構を確認し、遺構検出面とした。III 層は黄色味が強く、前後の層位堆積状況、出土遺物年代から To-Cu 火山灰であると判断した。III 層上部は田地開墾時に上部が削平されたため消滅したものと判断した。IV 層は地山とした。

以上を確認し、II 層の遺物包含層上面まで重機を使用し掘削を行い、次に人力で掘り下げ、遺構検出と調査を行った。

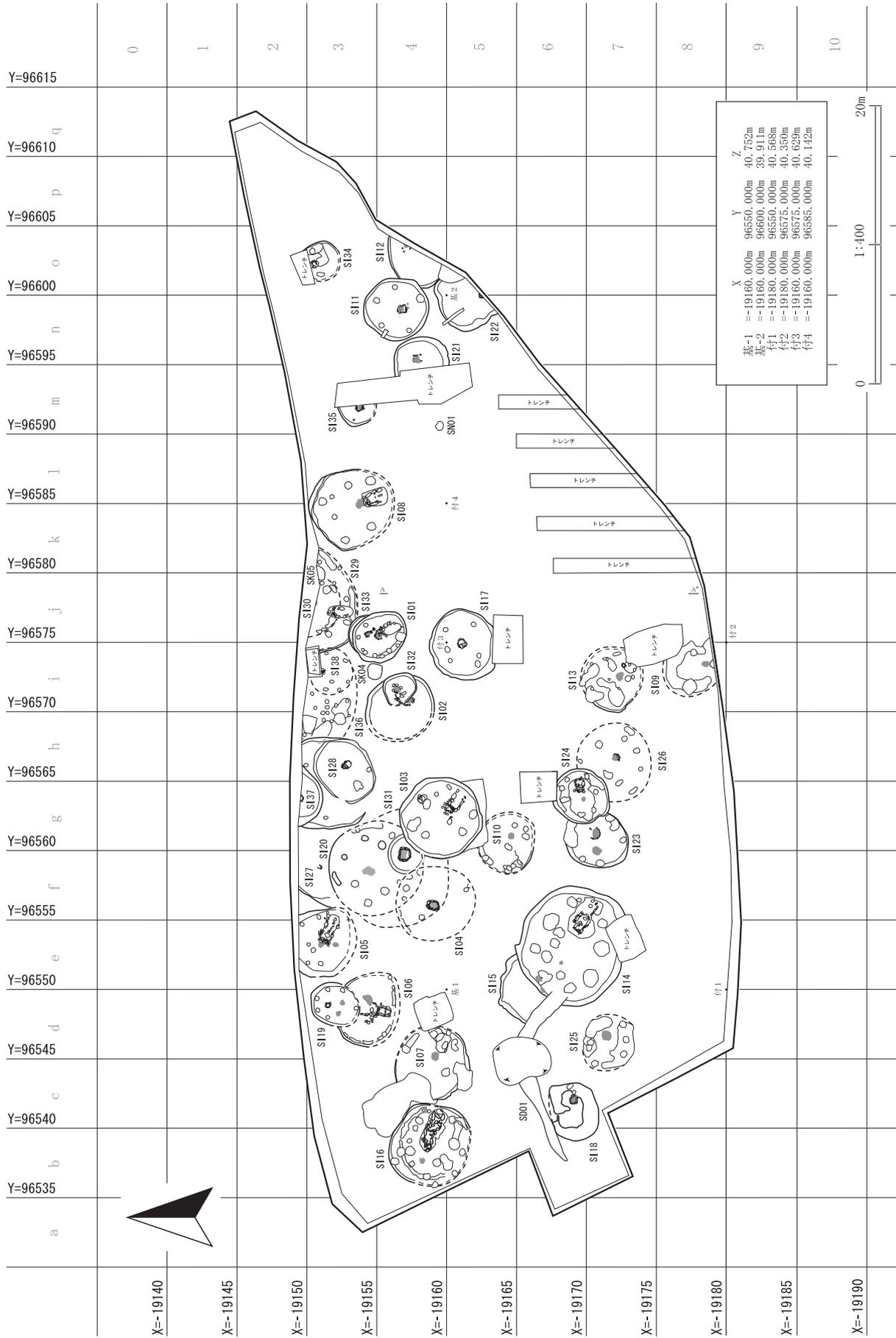
検出した遺構は、奈良国立文化財研究所が採用している遺構略号を使用した。竪穴住居跡、土坑跡の掘り下げ、観察、記録には種類・規模に応じて 6 分法と 4 分法、2 分法を用い、溝状遺構は数か所にベルトを設け掘り下げた。

遺構の実測は、平面を電子平板測量で行い、断面は基準杭の標高値を基にレベル測量から、S = 1/20、1/10 で手実測を行った。使用した基準杭値（X、Y、Z）は上記の通りであり、第6図中に記された場所に位置する。現場の記録撮影には 35 mm 記録にデジタルカメラ、フィルム記録に 6 × 9 カメラを使用した。

1 野外調査



第5図 周辺地形図・調査範囲



第6図 遺構配置図

(3) 調査過程

調査記録

平成 25 年 (2013 年)

- 7 月 1 日 事務所設営、環境整備
- 7 月 2 日 試掘トレンチ掘削、基本層序確認、重機搬入
- 7 月 3 ~ 5 日 安全柵設置、重機による表土除去開始、排土運搬
- 7 月 8 ~ 12 日 重機による表土剥ぎ、確認トレンチ掘削、遺構検出開始
- 7 月 16 ~ 19 日 重機による表土除去、遺構検出、排水作業 (18 日は雨天の為作業中止)
- 7 月 22 ~ 25 日 遺構検出、グリッド設定、トレンチ掘削
- 7 月 29 ~ 31 日 遺構検出、遺構精査
- 8 月 1 ~ 2 日 資材整備、遺構精査、藤本調査員合流
- 8 月 5 ~ 8 日 遺構精査、確認トレンチ掘削
- 8 月 9 日 現場長期閉鎖による安全対策、遺物水洗
- 8 月 19 ~ 23 日 遺構精査 (20 日は雨天の為作業中止)、森調査員合流
- 8 月 26 ~ 29 日 遺構精査、重機搬入、調査区内 U 字溝撤去、表土除去、土山固め
- 9 月 2 ~ 6 日 遺構精査、現地説明会準備 (2 日は雨天の為作業中止)、佐々木調査員合流
- 9 月 7 日 遺跡現地説明会
(国土交通省三陸国道事務所 副所長 戸嶋 守氏 他 2 名 来跡)
- 9 月 9 ~ 30 日 遺構精査 (10 日事業団理事長視察)
- 10 月 1 ~ 10 日 遺構精査
- 10 月 11 日 遺構精査、現場撤収作業、機材搬出

来跡記録

- 7 月 3 日 岩手県教育委員会 (以下略) 生涯学習文化課 半澤氏来跡
- 7 月 10 日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏 来跡
- 7 月 11 日 PPP 小林氏来跡 (旧水路確認の為)
- 7 月 12 日 鈴木測量来跡 (基準点打設打合せの為)
- 7 月 16 日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏、生涯学習文化課 菅氏来跡
- 7 月 23 日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏、宮古労働基準監督所 澤田氏、生涯学習文化課 菅氏 来跡
- 7 月 25 日 共同通信社 西蔭氏 来跡取材
- 7 月 29 日 岩泉町教育委員会 田鎖氏 来跡
- 9 月 3 日 岩手日報社 阿部記者 来跡取材
- 9 月 5 日 国土交通省三陸国道事務所 金濱氏他 2 名 来跡 (現地説明会打合せの為)

2 室内整理

(1) 遺構記録の整理

野外調査の際、電子平板測量で作成した平面図と手実測による遺構断面図から第2原図を作成し、デジタルトレース、編集作業を行った。図版スケールは遺構の種類・規模・性格により1/40、1/60などに統一することとした。

撮影した遺構写真は、モノクロームフィルムは密着写真とともにナンバリングを行い、ネガアルバム収納した。デジタルカメラによる記録は岩手県立埋蔵文化財センター内保管の記録媒体に保存している。報告書作成時に使用した写真は主にデジタルデータである。

遺構図版は佐々木・藤本が作成し、全体の作成・編集は藤本が行った。

(2) 遺物の整理

遺物の整理は、土器・石器・石製品・土製品ともに水洗後に袋単位で番号を付け、重量計測、登録作業を行った。その後、土器に登録番号を注記し、接合、復元作業を行った。土器の掲載基準は①残存率の高いもの、②遺構の時期推察に有効なもの、③遺跡の主体出土土器群とは異なる他型式土器と推測できるもの。石器・石製品は①使用痕が顕著に認められるもの、②加工が著しく認められるもの、③遺構の性格に有効な資料と判断されるものとした。土製品は残存率の良いものとした。遺物図版は、土器1/3、土製品1/2、剥片石器1/1、礫石器類1/4、石製品1/2/または1/1、石皿1/8で掲載した。

なお、遺物の原稿執筆・表作成は縄文土器・土製品を高木が石器は藤本が行った。

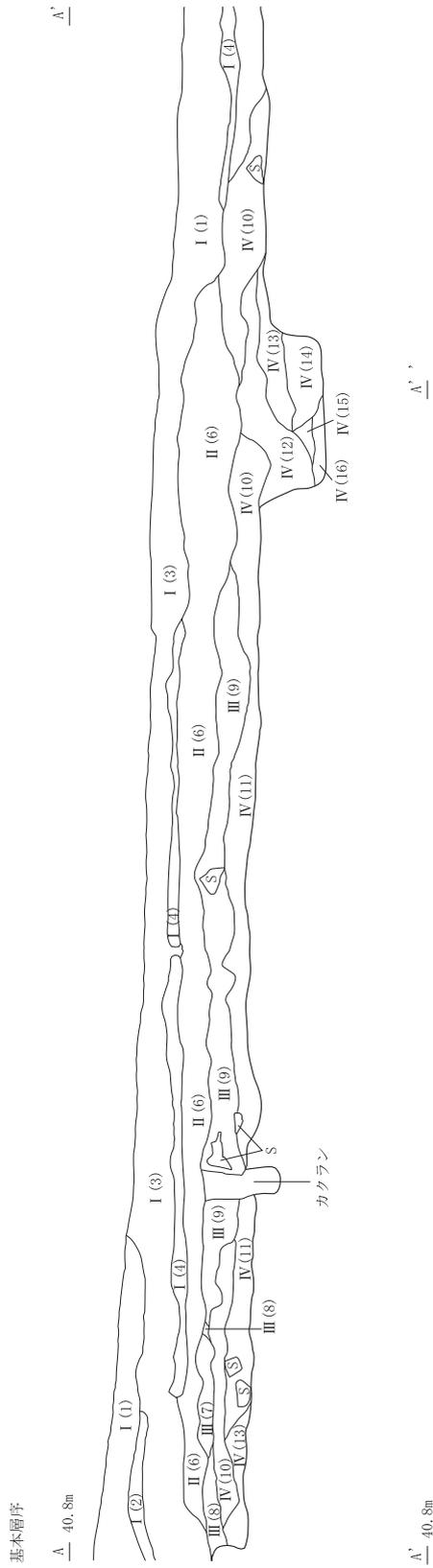
(3) 室内整理経過

平成25年(2013年)

10月18～22日	土器水洗
11月1日	土器仕分け、計量、遺構注記打ち込み
11月5日	土器計量、報告書本文作成開始
11月6日～12月27日	土器復元開始、遺構トレース、遺物観察表入力

平成26年(2014年)

1月6～23日	土器復元、遺構トレース
1月17日	遺物撮影開始
1月24～3月11日	遺物実測開始、写真整理開始
1月31～2月14日	土器拓影開始
2月17～18日	土器実測、写真編集
2月19～3月7日	土器実測、デジタルトレース
3月10～11日	遺物実測、拓本裏張り
3月12～18日	土器トレース
3月19～25日	遺物図版作成
3月26～31日	遺物収納



第7図 基本層序

基本土層

I層: 1 黒褐色 2 黒色 3 暗褐色 4 黄褐色	現表土 シルト シルト シルト シルト	現表土 + 耕作用土 耕作用土 床土	IV層: 10 にぶい黄褐色 11 暗褐色 12 暗褐色 13 明黄褐色 14 暗褐色 15 明黄褐色 16 黒褐色	砂礫 礫 シルト 礫 礫 礫 礫	地山 + 礫(自然堆積)
II層: 5 黒色 6 黒色	シルト シルト	遺物包含層			
III層: 7 黒褐色 8 黄褐色 9 黒褐色	シルト シルト シルト	To-Cu シルト シルト			*遺構確認面



3 基本層序

残存状態の良い調査区中央東西方向A - A''で基本層序を確認した。

I～IV層に大分し、I層が現代層、II層が遺物包含層、III層が遺構確認面、IV層が地山と判断した。層位理解の為、細分しながら行い、表記は第7図の通りである。I(1)～(4)層、II(5)～(6)層、III(7)～(9)層、IV(10)～(16)層と表現する。I層は近現代の耕作土層である。I(1)層は現表土、I(2)・(3)層は水田耕作土、I(4)層は床土である。II層は黒色シルト層である。層相のわずかな差異によりII(5)(6)層に細分した。部分的に開田による削平を受け消失しているが、残存状態の良い地点では層厚30～50cmで平坦に堆積する。比較的多量の縄文時代中期後葉遺物を包含する。III層は黒褐色シルト層である。中位に十和田中掬テフラ(以下To-cuと略)と見られる黄褐色テフラ層を挟むため、上位からIII(7)(8)(9)層に細分した。III(8)層がTo-cuである。調査区の北側から中央部にかけて分布する。III(7)層とIII(9)層は類似する層相だが混入物の差異が見られる。なおIII(7)～(9)層上面において遺構検出を行った。III(7)(9)層上面では遺物や炭化物の分布により遺構の判断を行っており明確なプランの検出は難しい。IV層は基盤礫層を中心とした所謂地山である。一部の深掘りトレンチにおいて約1m下位までを観察している。色調により複数層に細分した。IV層上面で検出した遺構も複数存在する。

小成II遺跡で検出された基本層序III(8)層とした火山灰層は黄色のシルト質壤土であり、色調・土質から縄文時代前期中葉に降下したTo-Cuと判断した。To-Cuは青森県南東部から岩手県北部において顕著に確認され、当該地域の発掘調査において遺跡の年代を知る指標とされてきた。色調・土性・土質からA種、B種、C種に分類され(星、茅野2006)、A種が十和田火山から約60km圏内の近郊、B種が約200km前後、C種は青森県から岩手県田野畑村和野遺跡などにみられるとされている。

三陸沿岸の遺跡事例では、北は種市町から南は陸前高田市までほぼ全域でTo-Cuが検出されている。噴出源からの距離は約70～200kmを測る。テフラの種類はB種とした所謂安家火山灰と呼ばれる黄色や肌色の粉状を主体に、C種とした白色の砂状を呈するもので、A種としたアワズナと呼ばれるものは確認されていない。

To-Cuが確認されている遺跡の立地は海岸段丘や、山麓斜面地、谷底平野などに多い。遺跡の標高は約7～270mの範囲で、小成川を由来とする谷底平野部に立地する小成II遺跡は標高約40m前後である。これはTo-CuのB・C種の降下標高の範囲内におさまる。しかし、当該遺跡で検出されたTo-Cuは、遺跡の立地する急斜面下という環境から判断すると降下当初の堆積状況を保っているとは判断しがたく、降雨などの自然現象によって山麓斜面上に降下したTo-Cuが二次堆積したものである可能性が極めて高い。遺跡内からはごくわずかではあるが、縄文時代前期中葉以前の土器が数点出土しており、古いものでは前期中葉から前期前葉のものが出土している。これは山麓斜面中に縄文前期中葉～前期前葉までの遺跡が存在し、To-Cuが谷底部へ二次堆積する際に巻き込まれて混入した可能性が考えられる。

参考文献

- 星雅之・茅野嘉雄 2006 「十和田中掬テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」
『植生史研究』特別第2号 pp151-180
- 菊池強一他 1981 「北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について」『東北地理』33-1,pp57-58

IV 検出遺構と遺物

1 概 要

小成Ⅱ遺跡の検出遺構数は縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居跡 38 棟、焼土 1 基、土坑 2 基のほか、時期不明の溝跡 1 条である。竪穴住居跡は大小の複式炉・石囲炉・地床炉を伴う縄文時代中期後葉大木 9 式、10 式段階のものが主体である。出土遺物のうち縄文土器の総重は重量約 188 kg、40 L コンテナで 19 箱である。土器の破片数は集計していない。このうち、260 点を掲載遺物として選抜した。他に、若干量の縄文早期中葉、同前期初頭、同晩期後葉の土器を含む。土製品では円盤状土製品が 1 点出土している。石器は 180 点、うち 82 点を掲載遺物として選抜した。石鏃 2 点、石錐 1 点、石筥 1 点、石匙 1 点、異形石器 1 点、スクレイパー 5 点、不定形石器 7 点、使用痕のある剥片 9 点、両極剥片 4 点、剥片 22 点、磨製石斧 17 点、礫器 2 点、石皿台石類 10 点、敲磨器類 88 点、磨製石斧 1 点、石製品 6 点、その他 5 点がある。他に琥珀碎片 9 点が出土している。

2 遺 構

(1) 竪穴住居跡

SI01 竪穴住居跡 (第 8 図、写真図版 2)

[位置・検出状況] 調査区中央北部 3i・3j・4i・4j グリッド、Ⅲ (8) (9) 層上面から、不整形プランを確認した。遺物の出土量も多く、規模から住居と判断した。上部は開田による削平を受けている。

[重複関係] SI33 を切る。重複関係にある SI33 のほぼ直上に造られている。

[長軸方向] -

[平面形・規模] 不整楕円形で開口部 4.0 × 3.5 m、深さ 10 cm である。

[壁・床面] 壁は崩落し立ち上がりは丸味を帯びている。南側は開田時の削平により消失している。壁際に柱穴がめぐり、南西側に一部壁溝を確認した。床面はⅣ (11) 層の礫層に到達し平坦ではない。複式炉前庭部南西側の壁際に土坑が 1 基確認した。埋土 2 層が SI33 の埋戻し兼貼り床であった可能性が高く、SI33 住居跡の炉を形成していた材石が散乱していた。床面積 7.9 m² である。

[堆積土] 4 層に分層した。切り合う SI33 の床面及び石囲炉の埋戻しである 2 層面が貼り床であった可能性が高い。1・3 層に火山灰が混入し、4 層とも基本層序Ⅱ層由来の埋土である。2・4 層に炉燃焼部由来の焼土ブロックを確認した。

[炉形態] 掘り込み部と石組み部の複式炉である。周辺からは石組部の構成材が検出された。

[柱穴] 9 個確認した。内、主柱穴は P 1～5 の 5 個と推測した。北側で検出された柱穴は重複する SI33 の柱穴である可能性も想定される。

[遺物] 土器の出土総重量は 4,049 g で、大木 9 式を主体とする深鉢が大半を占める。埋土中からは原体圧痕と繊維を含む前期の深鉢片も出土した。石器は敲磨器類 1 点、垂飾 1 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI02 竪穴住居跡 (第 8 図、写真図版 3)

[位置・検出状況] 調査区中央北側 3h・3i・4h・4i グリッド、Ⅲ h・i 層上面で不整形プランを確認し

た。上部は開墾に寄る削平を受けている。

[重複関係] SI32 を切り、ほぼ直上に造られている。

[長軸方向] N - 22° - W

[平面形・規模] 不整楕円形で、開口部 5.1 × (4.6) m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 削平の為、壁の大半が消失していたが、東側一部にわずかに残る。壁は崩落し立ち上がりは丸味を帯びている。南東方向に落ち込みを確認したが、現況で確定は難しい。床面はIV (10) 層の礫層に到達し平坦ではない。調査時に貼り床を確認できなかったが、使用時は貼り床がされていたものと想定される。床面にはSI32の炉を形成していた材石が散乱していた。床面積は不明である。

[堆積土] 6層に分層した。遺構北側はTo-Cu面で検出した。南側は開田時の削平により火山灰が消失し、Ⅲ (9) 層黒色土に到達している。2・3層に火山灰が混入し、埋土は基本層序Ⅱ層由来の埋土と推定した。1層に炉燃焼部由来の被熱土を確認した。

[炉形態] 石囲炉 (不整形)

[柱穴] 6個確認したが、調査の不手際により記録に残すことができなかった。内、配置から支柱穴とされるものは4基と想定したが、根拠は薄い。

[遺物] 土器の出土総重量は1,963g。炉直上からRLR縦回転の深鉢片が出土した。石器は剥片1点、磨製石斧1点、敲磨器類2点出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI03 竪穴住居跡 (第9図、写真図版4・5)

[位置・検出状況] 調査区中央北側4f・4g・4h・5f・5g・5hグリッド、Ⅲ (9) 層、IV (10) 層上面で確認した。明確なプランは検出できず、ベルトを設定し掘削をおこなったところ、中央部に多量の礫と炉石の検出がされたため住居跡と判断した。

[重複関係] SI31 を切る。

[長軸方向] N - 51° - W

[平面形・規模] 円形を呈す。開口部 5.9 × 5.6 m、深さ 50 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落し、外傾する。壁の北側は礫層に達する。床面は一部礫層に到達しているため、調査で確認できなかったが本来は貼り床がされていたものと想定される。P5の東側に埋設土器 (第9図、第34図11) を確認した。周囲は礫で石囲いされ、底部は欠損していた。口縁～胴部上半が平面形で三角状に組まれ、底には胴部が敷かれていた。床面積 20.5 m² である。

[堆積土] 6層に分層した。1・2層に火山灰が混入し、基本層序Ⅲ (8) 層由来の埋土と推定した。埋土中央部、北東側に礫を多量に含む。

[炉形態] 掘り込み部と石組み部の複式炉である。前庭部の中央底面に被熱した花崗岩と粉碎粒が確認できるのみで、火床面は検出されなかった。

[柱穴] 7個確認した。

[遺物] 土器の出土総重量は12,516 g。床面直上から大木9式、大木10式を主体とする深鉢が出土し、埋土中からは縄文時代中期末葉の土器片の他、早期中葉の土器片も出土した。いずれも流れ込みによるものであると判断される。石器は剥片1点、磨製石斧1点、石皿3点、台石1点、敲磨器類7点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI04 竪穴住居跡（第 10 図、写真図版 6）

[位置・検出状況] 調査区西側北東部 4e・4f・5e・5f グリッド、Ⅲ層上面で確認した。削平により壁面は失われており、石囲炉とその周辺に広がる床面の一部を検出した。

[重複関係] 北東で SI20、SI31 と重複する。本住居跡炉の設置位置が SI31 の外周上とみられること、SI20 の堆積土が本遺構内部に伸びることから、SI20 に切れ、SI31 を切ると判断した。ただしいずれも柱穴配置と壁溝からプランを推定したものであり新旧関係の根拠は弱い。

[長軸方向] 軸方向は不明である。

[平面形・規模] 炉から約 2.5 m の北西部にある柱穴、溝の配置から円形に近い住居プランを推定している。

[壁・床面] 前述のように壁面は未確認。床面は炉の周辺に硬化面の広がりが見られるが平面実測記録を欠く。

[堆積土] 床面上に薄く残存する黒褐色土で火山灰ブロックが含まれる。5層に分層したうち、SI20 にかけて分布する。

[炉形態] 垂角礫を用いて亀甲形に組まれた石囲炉である。内部の焼成は比較的強く炉石の一部も被熱する。焼成面上面には層厚 3～4 cm 程度の炭化物層が堆積する。

[柱穴] 推定プラン内に 7 個の柱穴を確認しているが、うち P 1～5 の 5 個が周溝と炉の位置から本住居跡に伴うと判断した。

[遺物] 土器出土総重量 114 g。石器は石皿 1 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期

SI05 竪穴住居跡（第 11 図、写真図版 7・8）

[位置・検出状況] 調査区北西部北側調査課境、2e・2f・3e・3f グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。住居の南側は掘削により床面まで露呈している状態で検出され、炉石も一部露出していた。

[重複関係] 掘削により、住居の南側は推定範囲にとどまるが、東に立地する SI27 と重複し、これを切る。

[長軸方向] N - 65° - W

[平面形・規模] 開口部 5.5 × 4.9 m、深さ 20 cm である。

[壁・床面] 床面積 13.5 m² である。床面は一部硬化している。炉の長軸方向左側に焼土を確認した。

[堆積土] 2層に分層した。遺構北側は To-Cu 面で検出し、比較的埋土と明確な差が確認できた。南側は開田時の削平により火山灰が消失し、Ⅲ（9）層黒褐色土に到達している。

[炉形態] 複式炉。前庭部には石組みされていた痕跡がある。掘削時に破壊されたと想定される石材が多数散乱していた。炉埋土は 4層に分層され、5層目は掘り方埋土と判断した。

[柱穴] 6個確認した。いずれも黒色土を主とする埋土であり、住居南側では柱穴を確認することはできなかった。

[遺物] 土器の出土総重量は 2,929 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。また、P 4 からは土器（第 35 図 3）が出土した。石器は敲磨器類 1 点出土している。炉前庭部右側壁立ち上がりの床直上で多数の材石が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI06 竪穴住居跡（第 12 図、写真図版 9・10）

[位置・検出状況] 調査区北東部北側 4c・4d・5c・5d グリッド、Ⅳ（8）層上面で確認した。

[重複関係] SI19 に切られる。

[長軸方向] N - 16° - E

[平面形・規模] 開口部 (5.6) × (4.6) m、深さ 26 cm である。

[壁・床面] 壁は開田時の掘削により大半が消失している。床面はⅢ (9) 層黒色土に到達しており、床面積 17.0 m² である。炉の長軸方向に材石の一部が残存している。炉の北東部床面に焼土を確認した。

[堆積土] SI19 と連続する断面 A-A' 7～11 層が本遺構の堆積土である。埋土全体に炭化物と焼土ブロックが混入し、炉周辺の床面は特に顕著である。また、7 層には礫が多く混入している。

[炉形態] 住居の南壁に接し、石組み部は平扁な石によって 2 ヶ所に仕切られ、炉石の内側に被熱痕が確認できた一方、炉内に被熱面は見られない。炉内と周辺に焼土ブロックが多量に混入していることから、住居の廃絶の際に掻き出ししている可能性もある。また、長軸方向に配石を思わせる石の並びが伸びる。これら材石も被熱してるものが確認された。炉周辺と炉の上部には特に礫の集中を確認した。

[柱穴] 8 個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 24,169 g。大木 10 式を主体とする深鉢が出土している。床面から貝殻腹縁圧痕文を施した早期中葉の土器片が出土している。土器の出土は炉と住居中軸線上周辺に集中している。石器は剥片 2 点 (使用痕有 1)、磨製石斧 2 点、敲磨器類 12 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後～末葉

SI07 竪穴住居跡 (第 13 図、写真図版 11)

[位置・検出状況] 調査区東側北部 3k・3l・4k・4l グリッド、Ⅲ (9) 層上面で焼土を確認した。当初、焼土のみの確認だったが炉であると判断し、住居の検出となった。開田時壁面の北東部は削平され、床面が一部露出していた。試掘トレンチと攪乱によって消失している部分が多く、住居北東側は炉と柱穴の確認範囲からの推定線である。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 18° - W

[平面形・規模] 残存部から円形と推測した。開口部 (6.1) × 5.8 m、深さ 10 cm である。

[壁・床面] 前述の通り、壁面は消失しているため、立ち上がりは不明。北東部に壁溝を確認した。床面積 36 m²。

[堆積土] 2 層に分層したが、実際の住居内堆積土は 1 層のみでわずかに炭化物を含み、2 層目は P 5 の埋土である。基本層序Ⅲ (8) 層由来の To-Cu 火山灰を床面に確認した。

[炉形態] 地床炉と掘り込み部の境に仕切り石が 1 基ある複式炉である。

[柱穴] 6 個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 1,510 g。石器は剥片 1 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI08 竪穴住居跡 (第 14 図、写真図版 12・13)

[位置・検出状況] 調査区東側北部 3k・3l・4k・4l グリッド、Ⅲ (8) (9) 層上面で確認した。当初、複式炉の石組み部のみの検出であったが、炉の存在と柱穴から住居であると判断した。遺構北側は To-Cu 面で検出し、比較的埋土との明確な差がうかがえた。南側は開田時の削平により壁面が消失している。

2 遺構

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 18° - W

[平面形・規模] 検出された柱穴配置から消失した南側壁面を推定した。全体形は楕円形である。開口部 (6.1) × 5.8 m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 南側壁面は消失している。残存する北側の壁立ち上がりは緩やかに外傾する。推定床面積 24.0 m² である。

[堆積土] 2層に分層した。確認できた部分の層厚は 1～5 cm 程度である。

[炉形態] 地床炉と石組み前庭部からなる複式炉である。長軸方向に燃焼部を確認した。前庭部の中央には平石が長軸方向と平行に設置されていた。炉埋土は 3層に分層した。

[柱穴] 7個確認した。うち P 1～P 5が支柱穴であり、調査時には確認できなかったが炉を挟んだ対角上に P 6と対になる柱穴があったものと推定される。

[遺物] 土器出土総重量 1,510 g。炉埋土を含め大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は剥片 1 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI09 竪穴住居跡 (第 15 図、写真図版 14)

[位置・検出状況] 調査区中央南側 8i・8j グリッド、Ⅲ (9) 層上面調査区境で確認した。当初、焼土のみの検出であったが、焼土南側にわずかにプランと柱穴を確認したことから住居と判断した。住居壁面は開田時の掘削によりすべて消失している。東側は試掘トレンチと攪乱により消失している。

[重複関係] なし。

[長軸方向] N - 3° - W

[平面形・規模] 開口部 (4.9) × (4.1) m。

[壁・床面] 削平により、壁と床面は不明。炉と柱穴、住居掘り方の位置から住居範囲を推定した。

[堆積土] 削平により堆積土は残存しない。

[炉形態] 地床炉の南に前庭部の掘り込みを伴う複式炉である。調査区境断面に炉石が見られることから、本来は燃焼部と石組部の複式炉であった可能性もある。

[柱穴] 1個確認した。

[遺物] 土器出土総重量は 1,210 g。大木 10 式を主体とした縄文中期後葉の土器が出土している。石器は剥片 1 点 (使用痕有) が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI10 竪穴住居跡 (第 15 図、写真図版 15)

[位置・検出状況] 調査区中央西側 5f・5g・6f・6g グリッド、Ⅲ (9) 層上面で確認した。焼土範囲の確認と遺物の出土量から住居と判断したと南西を除くすべてが開田時の削平試掘トレンチによって消失している。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 85° - E

[平面形・規模] 開口部 (4.5) × (4.0) m、深さ 12 cm である。

[壁・床面] 壁面は前述の通り大半が消失している。床面積 (12.6) m² である。床面は一部硬化している。

[堆積土] 1層確認し、炭化物をわずかに含む。

[炉形態] 地床炉である。

[柱穴] 7個確認した。うち主柱穴はP 1～5と推定される。

[遺物] 土器出土総重量 787 g。大木 10 式を主体とする縄文時代中期後葉の土器が出土している。石器は剥片 2 点（使用痕有）、両極剥片 1 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI11 竪穴住居跡（第 16 図、写真図版 16・17）

[位置・検出状況] 調査区東側中央部 3n・3o・4n・4o グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。

[重複関係] SI12 を切る。

[長軸方向] N - 10° - W

[平面形・規模] 開口部 4.7 × 4.5 m、深さ 38 cm である。

[壁・床面] 壁面は一部崩落しており全体に外形する。床面積 13.2 m² である。

[堆積土] 6 層に分層した。6 層は炭化物と焼土ブロックを多量に含む。特に壁際にその傾向が顕著である。焼失住居である可能性が高い。

[炉形態] 方形の石囲炉である。炉の上部に平石が集中して出土した。また、石囲部外南東にわずかに 2 箇所、焼土を確認した。

[柱穴] 5 個確認した。いずれも主柱穴と見られる。P 3 は正位で出土した土器（第 16 図、第 37 図 68）の下部に開口している。

[遺物] 土器出土総重量は 25,819 g。住居の北西側からは深鉢（上記同）が正位で出土し、内部から白色粘土が出土した。土器の上部には平石が蓋をする状態でのせられており、出土した白粘土が乾燥していなかったことから、乾燥防止の蓋であった可能性がある。また、出土した位置は P 3 柱穴掘方にわずかに重なり、さらに柱穴と壁の立ち上がりとの間の位置に存在することから収納されていた可能性もある。全体を通して大木 9 式を主体とした縄文時代中期後葉の深鉢、鉢、壺が出土している。ほか、大木 8b 式も出土している。石器は石匙 1 点、石篋 1 点、スクレイパー 2 点、不定形石器 1 点、剥片 7 点（使用痕有 3）、両極剥片 1 点、磨製石斧 5 点、礫器 1 点、石皿 2 点、敲磨器類 8 点、垂飾 1 点が出土している。また、黒曜石剥片が 1 層下位より出土している（V 章 1 節試料 No. 3）。これは本遺跡中最多の出土量である。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI12 竪穴住居跡（第 17 図、写真図版 18）

[位置・検出状況] 調査区東側中央部 4o グリッド、Ⅲ（9）層上面調査区境で確認した。

[重複関係] SI11 に切られる。また、風倒木により南側が切られる。

[長軸方向] N - 63° - W

[平面形・規模] 国道 45 号線にかかる調査区境にあるため、正確な平面形規模は不明である。深さ 23 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落によりやや外傾する。床面積は 7.9 m² である。

[堆積土] 2 層に分層した。1 層の混入物は不明だが、2 層には To-Cu 火山灰をわずかに確認した。

[炉形態] 炉が調査区境にかかるため形態は不明だが、断面とわずかに残る炉石の出土状況から石囲炉であった可能性が高い。

[柱穴] 柱穴は確認できなかった。

[遺物] 出土土器総量 1,194 g。大木9式を主体とする深鉢が出土した。石器は出土していない。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI13 竪穴住居跡（第 17 図、写真図版 19）

[位置・検出状況] 調査区中央部南側 6i・7i グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。南東側は試掘トレンチにより消失している。開田により大きく削平されている。西側は床面が露出していた。

[重複関係] なし。

[長軸方向] N - 46° - W

[平面形・規模] 住居の壁面は消失しており、正確な規模は不明であるため、掘方から破線の範囲と推定した。開口部 (4.8) × (4.4) m、深さ 10 cm である。

[壁・床面] 壁はわずかに西側に立ち上がりが残るのみである。

[堆積土] 3層に分層した。3層は地床炉の焼土である。

[炉形態] 地床炉の南東側に掘り込みの前庭を伴う複式炉である。

[柱穴] 4個確認した。

[遺物] 出土土器総重量 965g。石器は剥片 1 点、敲磨器類 2 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI14 竪穴住居跡（第 18・19 図、写真図版 20・21）

[位置・検出状況] 調査区西側南西部 6i・7i グリッドで確認した。この区域はⅢ層が開田によって削平を受けており、検出面はⅣ（10）（11）層上面となった。

[重複関係] SI15 に切られる。

[長軸方向] N - 60° - W

[平面形・規模] 楕円形で開口部 8.6 × 7.4 m、深さ 50 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落し、丸味を帯びて外傾する。床面積 25.3 m² である。SI15 に接する北西壁際からは、埋土中に焼土 2 基が確認された。被熱はやや弱いものの、現地性のものであると判断した。

[堆積土] 6層に分層した。埋土中央からは礫が多量に出土した。当初、投げ込み等の可能性を想定したが、層位中間中央部に焼土面（1c 層）を確認し、また、前述した SI15 に接する焼土 1、焼土 2、及び焼土 3（第 18 図）が存在することを考慮すると、堆積後あった可能性が高い。なお、1c 層とした住居中央部検出焼土は調査時 A-A' 断面にかかり平面記録を残すことはできなかったため断面でのみの確認となる。

[炉形態] 石組み部 3 の複式炉である。3層に分層した。1・2層に炭化物と焼土粒がわずかに混入するが、燃焼部は検出されなかった。前庭部壁際に深さ 40 cm の特殊ピットを伴う。

[柱穴] 12 個確認した。うち、配置から P 1～7 が主柱穴と判断した。

[遺物] 出土土器総重量 1,535 g。大木 9 式を主体とし大木 10 式を含む深鉢が出土している。また、大洞 C₂ 式がみられる。出土状況から流れ込みによるものと判断される。石器はスクレイパー 1 点、不定形石器 1 点、敲磨器類 4 点である。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI15 竪穴住居跡（第 20 図、写真図版 22）

[位置・検出状況] 調査区西側南西部 5d・5e・6d・6e グリッドで確認した。この区域はⅢ層が開田によっ

て削平を受けており、IV (10) 層上面での検出となった。

[重複関係] SI14 を切る。

[長軸方向] 不明。

[平面形・規模] 重複の為、正確な規模は不明だが開口部は東西方向で 4.8 m 以上、深さ 15 cm である。

[壁・床面] 壁は崩落により緩やかに外傾する。床面は掘削により露出している部分があった。住居北側は SI14 方向に床面の礫層が露出している。

[堆積土] 2 層に分層した。1 層には炭化物がわずかに含まれる。

[炉形態] 未確認

[柱穴] なし。

[遺物] 出土土器総重量 3,135 g。大木 9 式を主体とする石錐 1 点、不定形石器 1 点、剥片 1 点、磨製石斧 2 点、敲磨器類 6 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI16 新・旧竪穴住居跡 (第 20・21 図、写真図版 23・24)

[位置・検出状況] 調査区北西部 4b・4c・5b・5c グリッド、Ⅲ (9) 層上面で確認した。削平により床面が一部露出しており、当初、炉の材石のみの検出であった。炉石と土器の出土量が顕著であることから、住居跡と判断した。

[重複関係] 当初ベッド状遺構を伴う、同一住居と認識していたが、壁面内に壁溝が存在し、炉石の検出レベルと前庭部の掘り込み位置、主軸のわずかな誤差から同住居での建て替えがあったと判断した。以下、旧住居、新住居と記述する。

[長軸方向] 新旧ともに N - 61° - W

[平面形・規模] 新住居は円形、旧住居は方形である。住居南側床面は残っているものの壁面は完全に消失しているため、正確なプランは把握できない。炉と柱穴の配置から推定して、新住居は開口部 6.1 × (5.4) m、深さ 2 cm、旧住居は北側壁の残存状況から開口部 6.1 × (5.4) m、深さ 13 cm と推定される。

[壁・床面] 開田時の掘削により壁の立ち上がりは不明である。床面には、複式炉の主軸方向に焼土が確認された。新住居床面積 19.6 m²、旧住居面積 28.3 m² である。

[堆積土] 3 層に分層した。1・2 層とも炭化物をわずかに含む。2 層下部底面が新住居の床面である。また 3 層は建て替え前の旧住居の埋土である。

[炉形態] 炉の前庭部中央は攪乱を受けていた。新住居は石組み部 2 の複式炉、旧住居も同じく石組み部 2 の複式炉である。旧住居の複式炉前庭部には壁際にピットが設けられている。

[柱穴] ほぼ同位置に建て替えられていること、また、住居内埋土がほとんど消失していることから、新旧合わせての検出となった。確認された柱穴は 20 個である。その内、配置から新住居の支柱穴は P 1 ~ P 7、旧住居 P 8 ~ 13、P 15、P 16 と判断した。

[遺物] 土器出土総重量 2,031 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土している。石器は剥片 1 点、敲磨器類 2 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI17 竪穴住居跡 (第 21 図、写真図版 25)

[位置・検出状況] 調査区中央 4i・4j・5i・5j グリッドで検出した。この区域はⅢ層が開田によって削平を受けており IV (11) 層上面での確認となった。確認トレンチにより南側は消失している。当初、

2 遺構

平面では明確なプランは確認できず、トレンチ断面からも立ち上がりの確認はできなかったが、混入物に炭化物が含まれていること、遺物の出土が顕著なことから住居跡と判断した。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 11° - W

[平面形・規模] 円形である。開口部 5.2 × 4.9 m、深さ 27 cm である。

[壁・床面] 壁は崩落により外傾する。礫層からの検出であり、床面も礫が散在する。貼り床の痕跡は確認できなかった。床面積 15.3 m² である。

[堆積土] 8層に分層した。全体に炭化物が混入する。

[炉形態] 円形の石囲炉である。炉内では扁平気味の長隋円礫 2個が覆い被さるように出土した。

[柱穴] 6個確認した。うち、配置から主柱穴は P 1～4 であると判断した。

[遺物] 土器出土総重量 8,289 g。縄文中期後葉の土器片が出土している。石器はスクレイパー 1点、不定形石器 1点、剥片 3点（使用痕有 1）、磨製石斧 1点、敲磨器類 5点、垂飾 3点が出土した。垂飾の出土量は本遺跡最多である。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI18 竪穴住居跡（第 22 図、写真図版 26）

[位置・検出状況] 調査区西側西端部 5d・5e・6d・6e グリッドⅢ（9）層上面で確認した。当初、プランは確認出来なかったが、炉石の一部が露出していたため住居跡と判断した。

[重複関係] SD01 に切られる。

[長軸方向] N - 88° - W

[平面形・規模] 削平により正確な規模は不明だが、住居掘り方から楕円気味の隅丸方形と推定した。開口部 4.2 × 3.4 m、深さ 5 cm である。

[壁・床面] 削平の為、床面積は不明である。

[堆積土] 3層に分層した。埋土中にはⅢ（7）層由来土が混入している。

[炉形態] 不整形の石囲炉である。

[柱穴] 2個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 230 g。石器は不定形石器 1点、敲磨器類 2点が出土している。

[時期] 縄文時代中期

SI19 竪穴住居跡（第 22 図、写真図版 27）

[位置・検出状況] 調査区北西側北部 3d・3e グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。住居跡南側は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI06 を切る。

[長軸方向] N - 10° - E

[平面形・規模] 開口部 (3.7) × 0.03 m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落し、緩やかに外傾する。床面には焼土範囲が確認された。炭化材と焼土ブロックが床面から出土しており、焼失住居と見られる。削平により住居の南側は消失しているが北側の残存状況と断面から床面積 (6.9) m² であったと推定される。

[堆積土] 5層に分層した。全体に炭化物が混入し、1・4層には焼土ブロックが多量に含まれる。

[炉形態] 方形の小型石囲炉である。炉の周辺からは炭化物が多量に出土した。

[柱穴] 確認した柱穴は6個である。なお、炉の南側に位置する床面の焼土1・2は配置から見て下に柱穴があった可能性が考えられるが、焼成面の裁ち割りによる下位の確認を行っていないため確証はない。

[遺物] 土器出土総重量 7,881 g。大木9・10式を主体とした深鉢、壺が出土した。貝殻腹縁圧痕文を持つ早期中葉の土器も出土している。石器はスクレイパー1点、不定形石器1点、両極剥片1点、石皿3点、敲磨器類1点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI20 竪穴住居跡（第23図、写真図版28）

[位置・検出状況] 調査区北西側北部 3f・3g・(4f・4g) グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。当初は焼土範囲と柱穴の確認にとどまったが、柱穴の位置関係から、住居跡とした。

[重複関係] SI04・05・27・31を切る。

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 東側の壁溝を本住居跡に伴うものと捉え、炉を中心とした円形のプランを想定している。

[壁・床面] 開田時の削平により大部分が消失している。

[堆積土] 削平により、住居の壁が失われているため、堆積土は確認できなかった。

[炉形態] 地床炉を確認した。

[柱穴] 重複が著しいため、SI20 竪穴住居跡の柱穴であると断定はできないが、配置から主柱穴となるものは4個と判断した。

[遺物] 土器出土総重量 2,060 g。大木9式を主体とした深鉢が出土した。石器は敲磨器類3点、垂飾1点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI21 竪穴住居跡（第24図、写真図版29）

[位置・検出状況] 調査区東側中央部 4m・4n・5n グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。平面ではプランが確認できなかったため、試掘トレンチ断面での検出となった。上部は開田時の削平により消失している。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 80° - E

[平面形・規模] 試掘トレンチにより西側が消失しているため正確な規模は不明だが、南北方向では3.9mの開口部、深さ14cmと推定される。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。

[堆積土] 3層に分層した。

[炉形態] 燃焼面周辺に被熱した石がまとまって確認されたことから、開田時の削平によって破壊された石囲炉と判断した。

[柱穴] 不明

[遺物] 土器出土総重量 3,807 g。大木9式を主体とした深鉢が出土している。前期前葉の深鉢片が出土した。石器は両極剥片1点、剥片1点、敲磨器類2点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI22 竪穴住居跡（第 24 図、写真図版 30）

[位置・検出状況] 調査区東側中央部 4n・4o・5n・5o グリッド、IV（11）層上面調査区境で確認した。北東側は風倒木により消失している。

[重複関係] なし

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 国道 45 号線側調査区境からの検出となり全体の規模は確認できなかったが、開口部 4.8 × (3.1) m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落し外傾する。

[堆積土] 4 層に分層した。1・2 層の混入物は不明だが、3・4 層は壁の崩落土と判断した。

[炉形態] 調査区境に方形の石囲炉の一部を検出した。全体の把握ができないため形態は不明である。燃焼部中央に礫が設置されている。

[柱穴] 不明

[遺物] 土器出土総重量 1,591 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は出土していない。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI23 竪穴住居跡（第 25 図、写真図版 31・32）

[位置・検出状況] 調査区南西側中央 6f・6g・7f・7g グリッド、IV（11）層上面で確認した。当初、プランは全く確認できなかったが、土層ベルトを設定し面的に掘り下げた結果、石囲炉を確認したため、住居と判断した。

[重複関係] SI24 に切られる。

[平面形・規模] 楕円形で、開口部 4.8 × 4.1 m、深さ 17 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは外傾している。床面には黄褐色粘土により一部貼り床がされている。床面積 11.2 m²以上である。

[堆積土] 3 層に分層した。1 層にのみ炭化物の混入が確認された。

[炉形態] 北側は材石が消失しているが石囲炉であったと判断した。石囲炉の西側には地床炉も存在する。

[柱穴] 6 個確認した。位置関係からいずれも支柱穴であると判断した。

[遺物] 土器出土総重量 3,079 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は磨製石斧 2 点、敲磨器類 4 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI24 竪穴住居跡（第 25 図、写真図版 33）

[位置・検出状況] 調査区南西側中央部 6g・6h・7g・7h グリッド、IV（11）層上面で確認した。検出過程は SI23 竪穴住居跡と同様である。北側は試掘トレンチにより消失している。

[重複関係] SI23・26 を切る。

[長軸方向] N - 81° - E

[平面形・規模] 円形を呈し、開口部 4.3 × 3.8 m、深さ 40 cm である。

[壁・床面] 壁面は外傾する。SI23 竪穴住居跡同様、床面には貼り床が施されている。複式炉長軸方向延長上に焼土を確認した。また、北西、南東側に壁溝を検出した。床面積 10.3 m²以上である。

[堆積土] 5 層に分層した。図中 6 層は SI23 竪穴住居跡の掘方である。1 層と 3 層境に礫が集中して

出土した。

[炉形態] 石囲部の燃焼部に接して石組み前庭部を伴う複式炉である。

[柱穴] 7個確認した。うち、六角形に配置されるP 1～6が主柱穴と判断した。

[遺物] 土器出土総重量 8,675 g。大木 10 式を主体とする深鉢、壺が出土している。石器は磨製石斧 2 点、敲磨器類 8 点、垂飾 1 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI25 竪穴住居跡（第 26 図、写真図版 34）

[位置・検出状況] 調査区南西側西部 6c・6d・7c・7d グリッド、Ⅲ（9）層上面で確認した。開田時の削平により床面以外は消失しており、検出段階では炉の焼土が露出していた。柱穴の確認により住居と判断した。

[重複関係] なし。

[長軸方向] N - 61° - W

[平面形・規模] 壁は全て消失しているため正確な平面形、規模は不明。柱穴と住居掘り方から、推定で開口部 4.2 × 3.7 m である。

[壁・床面] 壁は消失しており、立ち上がりは不明である。

[堆積土] 堆積土は確認できなかった。掘方埋土は炭化物を含む。

[炉形態] 地床炉である。

[柱穴] 検出した P 1～5 が主柱穴を構成すると見られる。

[遺物] 土器出土総重量 458 g。大木 9 式を主体とする深鉢が出土した。石器は敲磨器類 2 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI26 竪穴住居跡（第 26 図、写真図版 35）

[位置・検出状況] 調査区南西側東部（6g・6h・7g・7h）グリッド、Ⅳ（11）層上面で確認した。当初、プランは全く確認できなかったが、土層ベルトを設定し面的に掘り下げた結果、石囲炉を確認したため住居と判断した。

[重複関係] SI24 に切られる。

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 本遺構は検出された炉と柱穴配置、壁溝からの推定であり、平面形・規模ともに不明である。

[壁・床面] 検出された柱穴と炉の配置からの推定範囲となった。よって床面積も不明である。

[堆積土] 当初は 5 層に分層したが、住居範囲が広がると判断したため、正確には不明である。A-A' 断面の 5 層は本来の壁をとらえていると想定されるが、B-B' 断面は南北ともに広がる。

[炉形態] 半円形の南東に石囲を持つ炉と判断した。

[柱穴] 7個確認した。その内、配置から P 1～5 が主柱穴であると判断した。

[遺物] 土器出土総重量 1,109 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI27 竪穴住居跡（第 27 図、写真図版 36）

[位置・検出状況] 調査区北西側北端 2f・3f グリッド、Ⅲ（8）層上面調査区境で確認した。南東側

2 遺構

は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI20 に切られる。

[長軸方向] 不明である。

[平面形・規模] 南東側が消失していること、北側は調査区外にのびていることから本来の規模は確認できない。開口部 5.3 m 以上の規模を持つ。深さ 30 cm である。

[壁・床面] 西側の立ち上がりのみ確認となるが、壁立ち上がりは崩落により外傾する。床面は検出面と同様のⅢ（8）層中で To-Cu テフラ中に構築されている。

[堆積土] 4 層に分層した。1～4 層とも炭化物と To-Cu ブロックが混入する。

[炉形態] 掘り込みに石組みを伴う石囲炉である。炉内から焼成面は検出されなかった。

[柱穴] 確認できなかった。

[遺物] なし。

[時期] 縄文時代中期

SI28 竪穴住居跡（第 27・28 図、写真図版 37・38）

[位置・検出状況] 調査区中央北部 2g・2h・3g・3h グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面で確認した。南側は開田時の削平により消失している。

[重複関係] SI37 に切られる。

[長軸方向] N - 40° - W

[平面形・規模] 円形気味である。開口部 4.8 × 3.8 m、深さ 25 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。床は階段状に炉の周辺が方形気味に掘り込まれ、1 段低くなっている所謂、ベッド状遺構を呈する。北側が調査区外にのびており、また南側が消失しているため正確には不明だが床面積（27.7）㎡と推定される。

[堆積土] 9 層に分層した。1～4 層、7・9 層に炭化物が混入する。To-Cu ブロックが全層に混入する。

[炉形態] 石組み部は斜位の土器埋設部、石囲燃焼部、石囲を伴う掘り込み前庭部からなる複式炉である。住居の規模に対して炉は小規模である。また、土器内部に現地性焼土が確認される。

[柱穴] 4 個確認した。配置から 4 基とも支柱穴であると判断した。位置関係から炉の北東側にも柱穴があった可能性がある。

[遺物] 土器出土総重量 13,034 g。大木 9・10 式を主体とする深鉢が出土している。前期前葉の土器も出土している。石器は石鏃 1 点、剥片 6 点（うち使用痕有 1）が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI29 竪穴住居跡（第 28 図、写真図版 39）

[位置・検出状況] 調査区中央北端 3i・3j・3k グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面調査区境で確認した。当初、土坑と認識していたが、精査中に埋土から多量の礫が出土し、再検討したところ複式炉であると判断したため、住居跡とした。

[重複関係] SI38 を切り、SI30・33 に切られる。

[長軸方向] N - 5° - W

[平面形・規模] 多角形と想定される。南東側が消失しているため正確な平面規模は不明である。柱穴と壁溝の配置から、開口部 7.6 m 以上、深さ 35 cm と推定される。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により、大きく外傾する。南側は開田時の削平によりⅢ（8）層

To-Cu が消失し、Ⅲ（9）層に到達している。南東部の壁立ち上がりが消失しているため、正確な面積は不明だが、柱穴配置と壁溝から床面積（16.9）㎡と推定される。

[堆積土] SI30 と合わせて7層に分層した。1層に礫を多量に含み、2～7層には炭化物が混入する。基本層序Ⅲ（8）層由来土が全体に広がり、5層には炉燃焼部由来の焼土塊が混入する。

[炉形態] 石組み部2の複式炉であると推定されるが、当初、土坑と判断し東側一部構築材を破壊してしまった。炉内に燃焼部は確認できなかった。

[柱穴] 7個確認した。配置からP 1～4を主柱穴と判断した。

[遺物] 土器出土総重量 197 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。石器は剥片 1 点、敲磨器類 2 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI30 竪穴住居跡（第 28 図、写真図版 39）

[位置・検出状況] 調査区中央北端 3j グリッド、Ⅲ（8）層上面調査区境で確認した。SI29 精査中、調査区境北側に焼土を確認し、SI30 竪穴住居内複式炉から不自然にのびる掘り込みと柱穴を確認したことから重複する住居と判断した。

[重複関係] SK05 に切られ、SI29 を切る。

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 開田時の削平により、床面が露出しているため開口部（4.4）×（1.6）m、深さ 32 cmである。

[壁・床面] 壁立ち上がりは消失しているため断面のみでの確認となるが、崩落により緩やかに外傾する。

[堆積土] 2層に分層した。炭化物がわずかに混入する。

[炉形態] 炉と判断した焼土は調査区境にかかり、全体を把握することはできなかった。しかし、平面と断面に材石等構築材は確認できなかったため、地床炉と判断した。

[柱穴] 4個確認した。P 1～4が主柱穴であると判断した。

[遺物] 遺物の出土は床面レベルが同一であることから、SI29 竪穴住居跡として取り上げたものが含まれる。また、柱穴や炉以外からの出土遺物は SI30 竪穴住居跡からの出土であるとは断定できない。

[時期] 重複する SI29 竪穴住居跡と遺跡内の検出遺構の時期、遺構の形態から縄文時代中期後葉とした。

SI31 竪穴住居跡（第 29 図、写真図版 40）

[位置・検出状況] 調査区北西側東部（3e・3f・3g・4e・4f・4g）グリッド、SI20 竪穴住居跡床面で不明瞭なプランを検出し、ベルトの設定を行い掘削したところ、炉石が検出されたため住居跡と判断した。開田時の削平により上部は消失している。

[重複関係] SI03・04・20 竪穴住居跡に切られる。

[長軸方向] 不明

[平面形・規模] 円形を呈する。

[壁・床面] 壁立ち上がりは消失しているため不明だが、炉周辺は掘り込みがされ、一段低く床面が設けられている。炉周辺の壁立ち上がりは崩落し、外傾する。SI03 竪穴住居跡に重複するため、正確な面積は不明である。

[堆積土] 単層である。わずかに炭化物が混入する。

[炉形態] 方形の石囲炉である。

2 遺構

[柱穴] 4個確認したが、重複が激しいため、他遺構の柱穴の可能性も想定される。炉と柱穴の位置関係からSI31 竪穴住居跡に属する可能性が高いと判断したが断定はできない。

[遺物] 土器出土総重量 191 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土した。石器は敲磨器類 4 点が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI32 竪穴住居跡（第 29 図、写真図版 3）

[位置・検出状況] 調査区中央北側 4i グリッド、Ⅲ（9）層、Ⅳ（10）上面で確認した。当初、明確なプランが検出できなかったため、ベルトを設定し掘削を行った。炉石を確認したことから住居跡と判断した。

[重複関係] SI02 竪穴住居跡を切る。

[長軸方向] 不明 [平面形・規模] 円形気味の隅丸

方形である。開口部 2.3 × 2.1 m、深さ 13 m。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により緩やかに外傾する。床面はⅣ（10）礫層中に到達しており、本来は貼り床が敷かれていたと想定されるが、精査では確認できなかった。

[堆積土] 2層に分層した。埋土には炭化物と礫が多く混入している。

[炉形態] 当初、SI02 竪穴住居跡の炉と同一の複式炉の一部であると推測していたが、石囲い部内に燃焼部を確認したこと、SI02 竪穴住居跡の燃焼部を切り、構築材を破壊していることから、SI32 竪穴住居跡単独の石囲炉であると判断した。

[柱穴] 不明

[遺物] なし

[時期] 縄文時代中期

SI33 竪穴住居跡（第 30 図、写真図版 41）

[位置・検出状況] 調査区東側北西部 3i・3j・4i・4j グリッド、Ⅲ（8）（9）層上面、SI01 竪穴住居跡床面で確認した。SI01 竪穴住居跡完掘後、北東部に掘り残しのよう暗褐色土のプランを確認し、再検討を行ったところ、床面から後に石囲炉と判断した炉石が一部不自然に露出しており、ベルトを設定して掘削したところ、床面と炉跡を検出したため、住居跡とした。

[重複関係] SI01 竪穴住居跡に切られる。

[長軸方向] N - 38° - W

[平面形・規模] 円形を呈する。南側は SI01 竪穴住居跡により消失している。開口部 2.8 × 2.7 m、深さ 13 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。床面積 5.3 m² である。

[堆積土] 2層に分層した。いずれも炭化物と焼土塊を含む。

[炉形態] 南西部は炉石が一部消失しているが、他方 3 面の配石から石囲炉と判断した。炉内燃焼部上面には炭化物層が存在し、約 3 cm の厚さで堆積していた。

[柱穴] SI01 竪穴住居跡と重複するため、SI33 竪穴住居跡に属する本来の柱穴の断定は困難だが、重複関係から SI01 竪穴住居跡 P 4 に切られる 1 個は确实であり、これを P 1 とした。他の柱穴は検出できなかった。

[遺物] 土器出土総重量 696 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI34 竪穴住居跡 (第 30 図、写真図版 42)

[位置・検出状況] 調査区東側東部 2o・3o グリッド、Ⅲ (8) (9) 層上面で確認した。西側は開田時の削平によって、北側は試掘トレンチにより消失している。プランが不明瞭であったため、トレンチ壁での断面確認により住居跡と判断した。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 21° - W

[平面形・規模] 開口部 2.8 × (2.2) m、深さ 12 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。消失ににより正確な床面は不明だが、炉と柱穴、住居掘方の位置関係から破線のように推定した。

[堆積土] 掘方埋土を含め 3 層に分層した。1 層には小礫が混入し、2・3 層は To-Cu 火山灰が混入する。

[炉形態] 石囲部下部に To-Cu 火山灰による貼り床が敷かれた石囲炉と判断した。燃焼部は検出されなかったが、炉内部 1 層上面からは深鉢 (第 46 図 218) が出土している。2 層は掘り方裏込め土である。

[柱穴] 2 個確認したがいずれも掘り込みが浅く、住居を支えるには困難である。

[遺物] 土器出土総重量 1,395 g。縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI35 竪穴住居跡 (第 30 図、写真図版 43)

[位置・検出状況] 調査区北東側北部 3m グリッド、Ⅲ (9) 層上面、試掘トレンチ断面で確認した。試掘トレンチにより東側は消失しているが、断面に焼土を確認し掘り下げたところ住居跡と判断した。また、南側は開田時の削平により消失している。

[重複関係] なし

[長軸方向] N - 24° - W

[平面形・規模] 消失により正確な規模は不明だが、残存状況から開口部 (2.8) × (1.4) m、深さ 35 cm とされる。

[壁・床面] 壁立ち上がりは外形する。北西部の残存状況から南側は推定である。

[堆積土] 単層である。混入物は不明である。

[炉形態] 平石で構成された方形の石囲炉である。3 層に分層した。1 層は燃焼面、2 層は埋戻し埋土、3 層は掘方裏込め土である。

[柱穴] 不明

[遺物] 土器出土総重量 614 g。大木 9 式を含む縄文時代中期後葉の深鉢が出土している。石器は敲磨器類 2 点が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI36 竪穴住居跡 (第 31 図、写真図版 44)

[位置・検出状況] 調査区中央北端部 3h・3i グリッド、Ⅲ (8) 層上面で確認した。当初、土坑として掘削していたが、のちに検出された柱穴と溝状の掘り方から複式炉であった可能性が濃厚になり、住居跡と判断した。上部は掘削により消失している。

[重複関係] SI28 竪穴住居跡に切られる。また、SI38 竪穴住居跡とは床面レベルが同一の為、新旧不

2 遺構

明である。

[長軸方向] N - 79° - W

[平面形・規模] 上部が完全に消失しているため不明である。

[壁・床面] 壁立ち上がり、床面積ともに消失により不明。

[堆積土] 住居内堆積土は不明だが壁溝を4層に分層した。1～4層にかけて炭化物と To-Cu 火山灰を確認した。2～4層には焼土塊が混入する。

[炉形態] 掘り込み前庭部、燃焼部の複式炉である。前庭部東側にわずかに変色した土を確認したが被熱が弱かったため、当初燃焼部と認識できなかった。平面記録はされていない。

[柱穴] SI38 竪穴住居跡と重複している為、SI36 竪穴住居跡に属する正確な柱穴は不明だが15個確認した。

[遺物] 土器出土総重量 88 g。

[時期] 縄文時代中期

SI37 竪穴住居跡 (第 31 図、写真図版 45)

[位置・検出状況] 調査区中央北端部 2g・2h・3g・3h グリッド、Ⅲ (7) 層上面と SI28 竪穴住居跡床面、調査区境で検出した。SI28 竪穴住居跡精査中、住居内北西部に暗褐色土のプランを確認した。当初は、平面でプランを確認できず、南北にベルトを設定し掘削したところ、炉と土器の出土、調査区境断面を再検討してⅢ (7) 層から掘り込みを確認したため住居跡と判断した。

[重複関係] SI28 竪穴住居跡を切る。

[長軸方向] N - 67° - W

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。調査区境での検出の為、全体を把握することはできないが開口部 4.4 × (1.6) m、深さ 75 cm である。

[壁・床面] 壁立ち上がりは崩落により外傾する。

[堆積土] 5層に分層した。1～5層に炭化物が混入し、5層は焼土塊を含む。3～5層にかけ、土器が多量に出土している。

[炉形態] 調査区境に方形を想定させる平石で構成された石囲炉が検出された。炉内に燃焼部を確認した。

[柱穴] 不明

[遺物] 土器出土総重量 3,328 g。大木 9 式、縄文時代中期後葉の壺、深鉢が床面から出土している。このうち、把手付壺形土器 (第 47 図 218) は石囲炉の南側からほぼ完形で出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

SI38 竪穴住居跡 (第 31 図、写真図版 46)

[位置・検出状況] 調査区中央北端部 3i グリッド、Ⅲ (8) 層上面、試掘トレンチ断面で確認した。

[重複関係] SI36 竪穴住居跡と重複する。上部が消失していること、床面レベルが SI36 竪穴住居跡と同一であることから新旧関係は不明。

[長軸方向] N - 8° - W

[平面形・規模] 消失により正確な規模は不明である。開口部 (3.4) × (3.0) m である。

[壁・床面] 壁面は消失により不明である。床面は柱穴配置から推定となるため、正確には不明である。

[堆積土] 上部消失の為、確認できなかった。

[炉形態] 入れ子状に土器が埋設されていた。燃焼部は確認できなかったが、柱穴の配置から埋設土

器炉と判断した。北側が試掘トレンチにより消失している。大半は消失、破壊されているが土器を囲むように石が設置されていた痕跡を確認した。

[遺物] 土器出土総重量 2,112 g。大木 9 式を主体とする深鉢、壺が出土している。

[時期] 縄文時代中期後葉

(2) 溝 跡

SD01 溝跡 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区西側 6b・6c・6d グリッド、Ⅲ (9) 層上面で確認した。

[重複関係] SI14・15・18 竪穴住居跡を切る。

[平面形・規模] 風倒木により一部消失している。北東から南西に 4.5 m、そこから南東側に 8.5 m のびる。

[堆積土] 単層である。炭化物、焼土がわずかに混入する。

[遺物] 出土遺物なし。

[時期] 不明

(3) 焼 土 遺 構

SN01 焼土遺構 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区西側 4i グリッド、Ⅲ (9) 層上面で確認した。検出時点で焼土が露出していた。

[重複関係] なし

[平面形・規模] 不整楕円形で長軸 0.65 × 短軸 0.56 m である。焼土の厚さは 5 cm である。

[遺物] なし

[時期] 不明

(4) 土 坑 跡

SK04 土坑 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区中央部北側 3i 側グリッド、Ⅲ (8) (9) 層上面で確認した。

[重複関係] なし

[平面形・規模] 隅丸方形を呈し、長軸方向 1.1 × 1.0 m、深さ 20 cm である。

[堆積土] 2 層に分層した。礫の出土が著しい。

[遺物] なし

[時期] 周辺に柱穴は確認できなかったが、礫の出土状況と周辺遺構から、複式炉であった可能性が高い。そのため、縄文時代中期と想定される。

SK05 土坑 (第 32 図、写真図版 47)

[位置・検出状況] 調査区中央部北側 3j・3k グリッド、Ⅲ (8) 層上面調査区境で確認した。

[重複関係] SI29 竪穴住居跡と重複する。上部は開田時の削平により消失している。

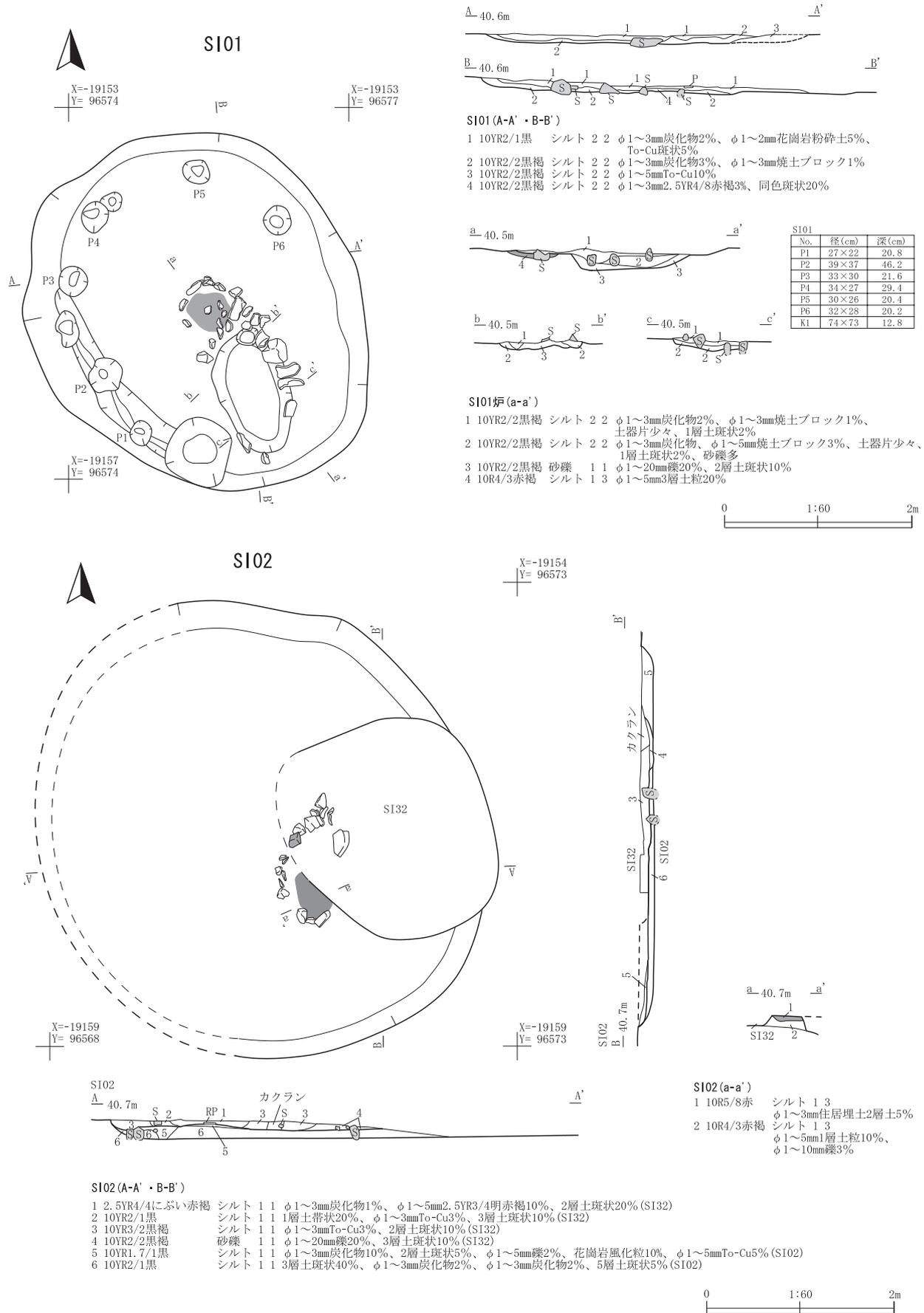
[平面形・規模] 不整楕円形である。長軸 1.1 × (0.7) m、深さ 25 cm である。

[堆積土] 4 層に分層した。混入物に焼土、炭化物は確認できなかった。

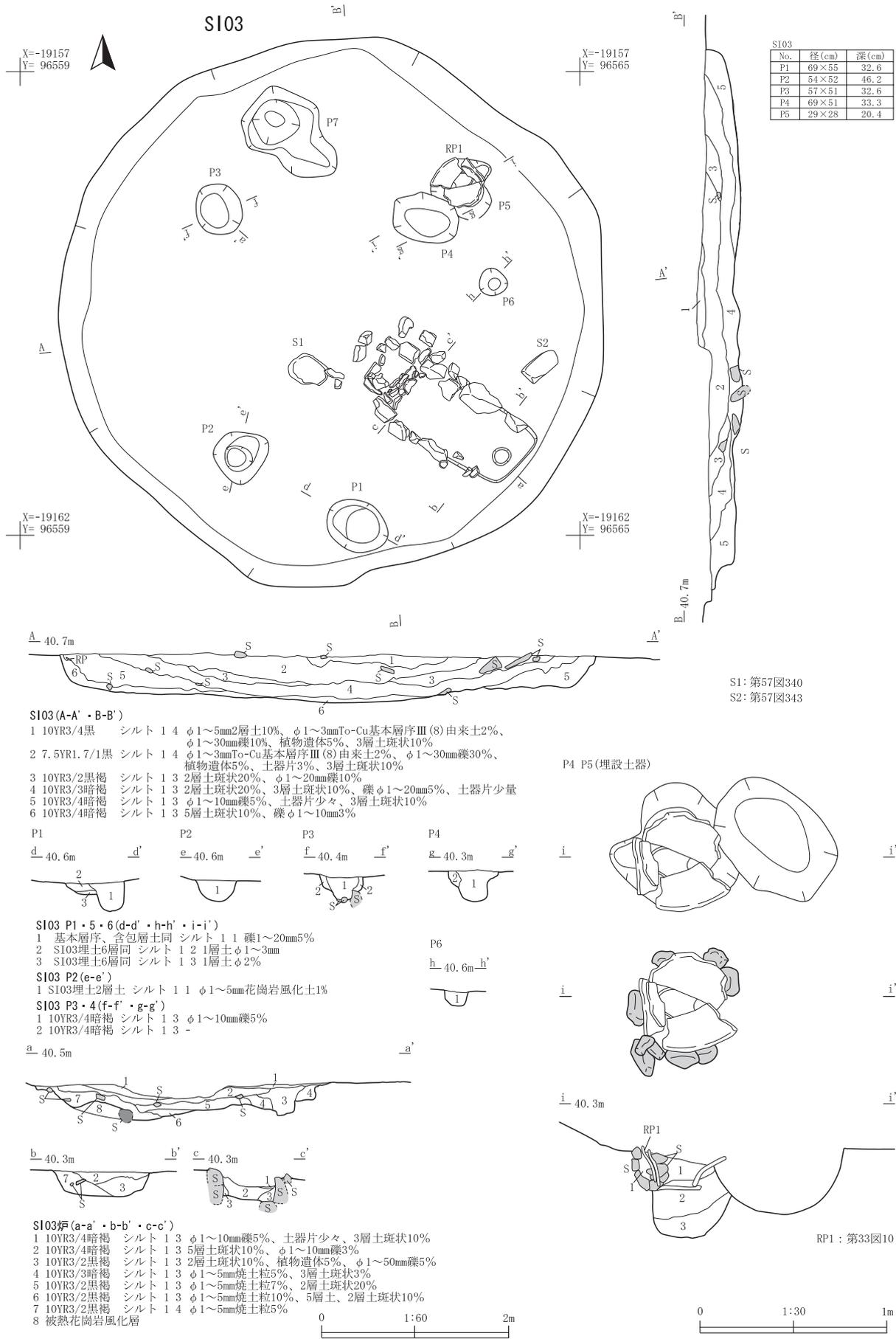
[遺物] 土器出土総重量 257 g。大木 8 b 式の略完形深鉢 (第 49 図 226・227)、中期後葉の鉢 (第 49 図 228) が出土した。

[時期] 縄文時代中期後葉

2 遺構

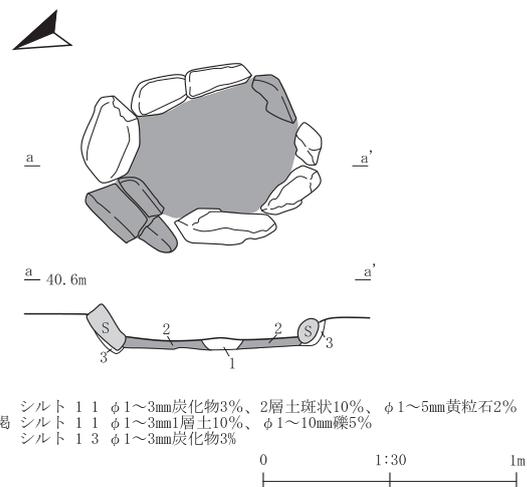
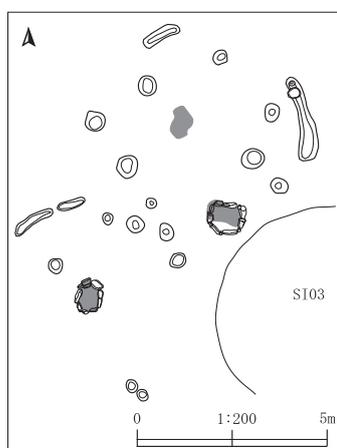
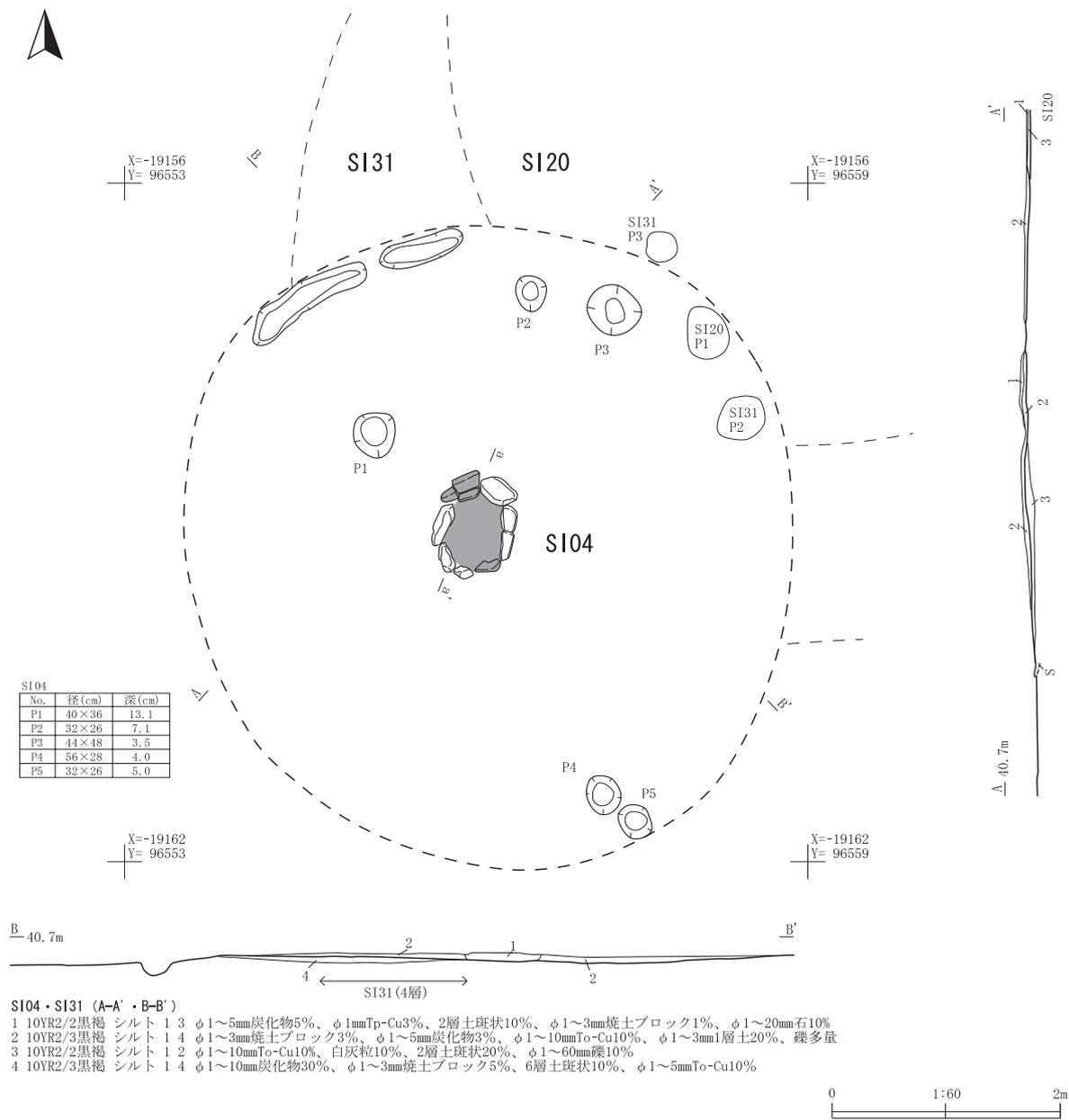


第8図 SI01・02・32 竪穴住居跡

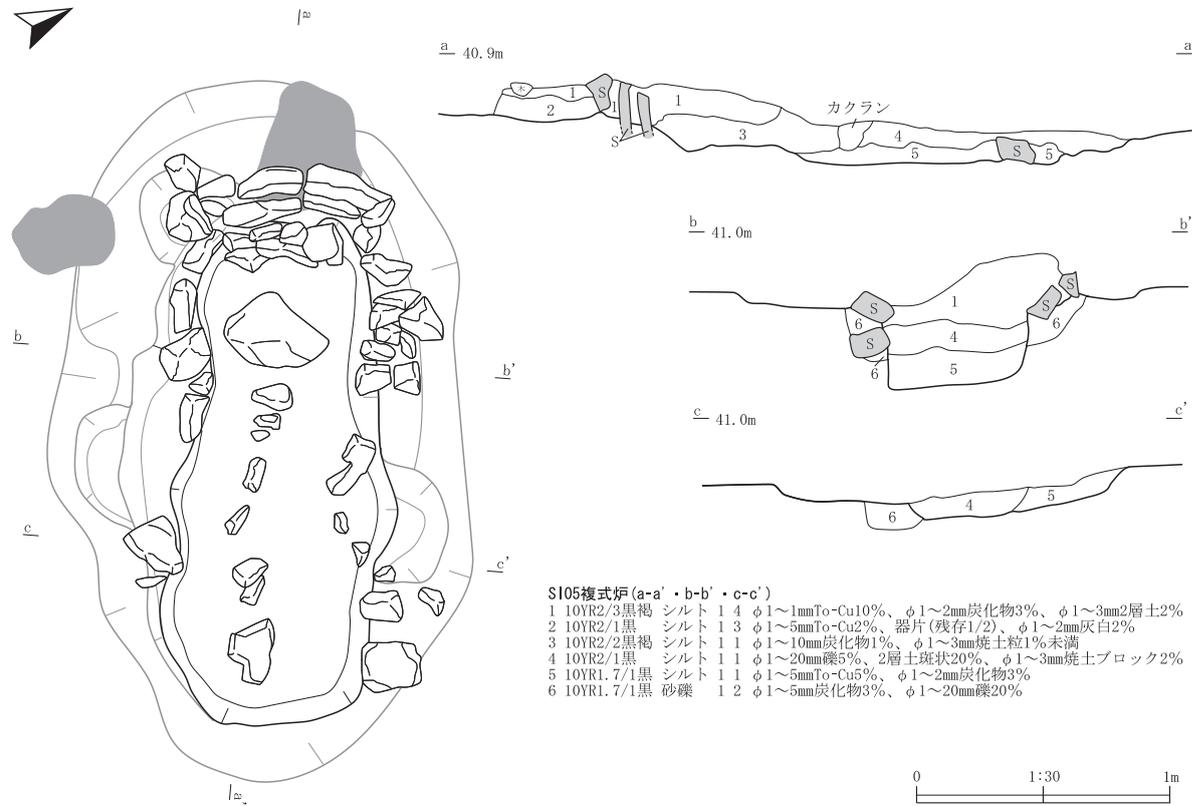
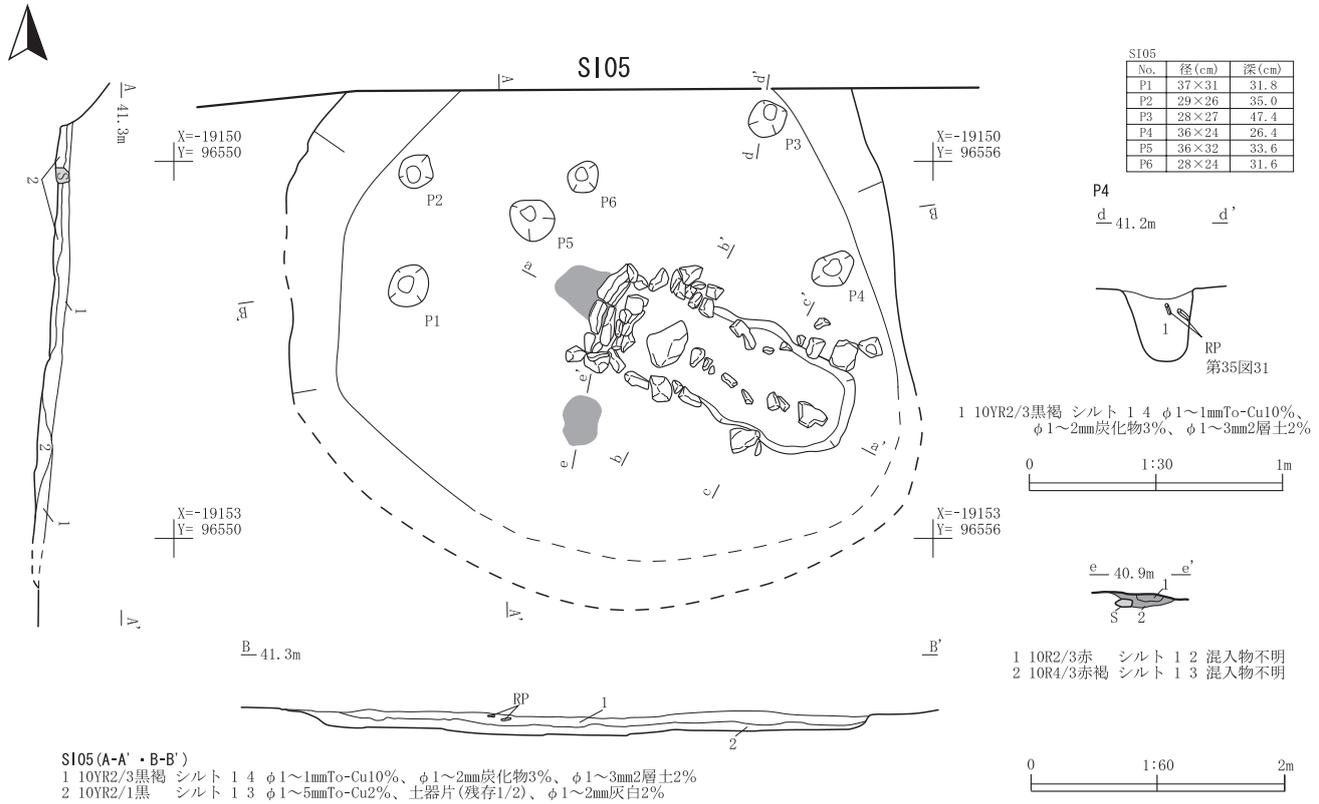


第9図 SI03 竪穴住居跡

2 遺構

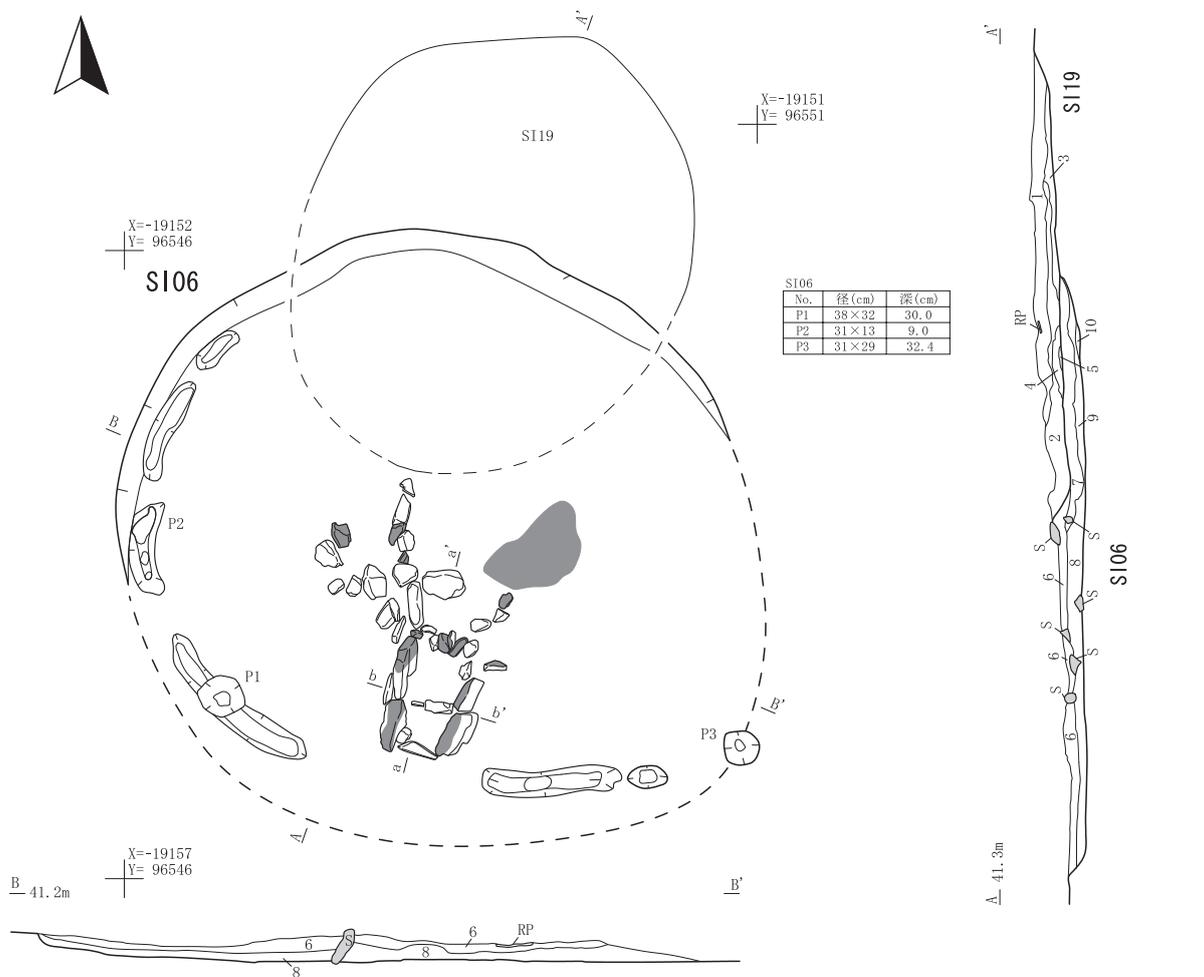


第10図 SI04 竪穴住居跡



第11図 S105 竪穴住居跡

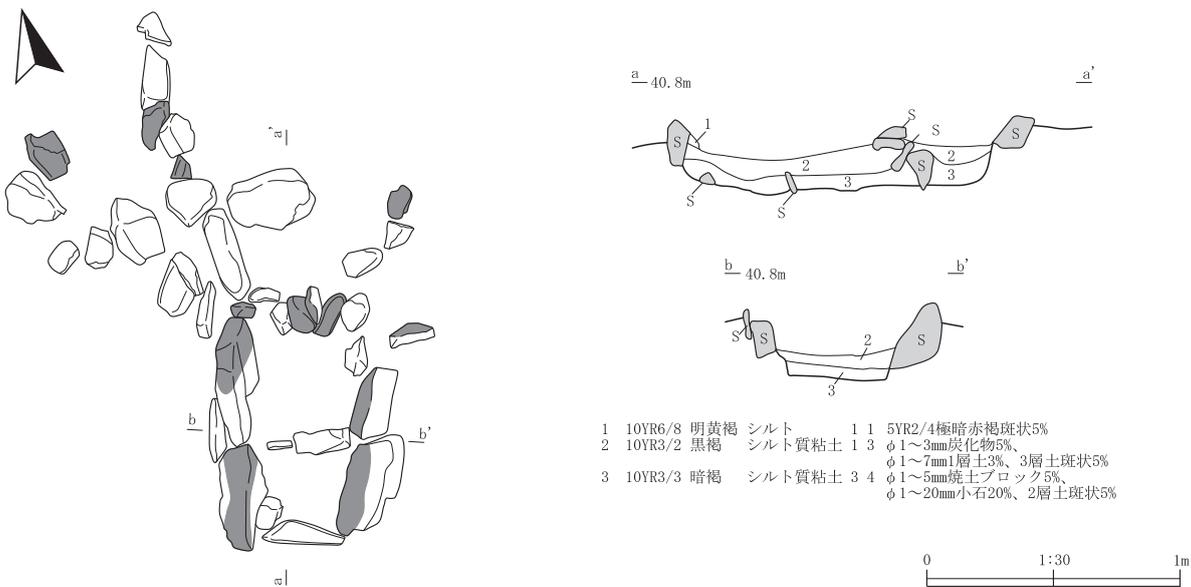
2 遺構



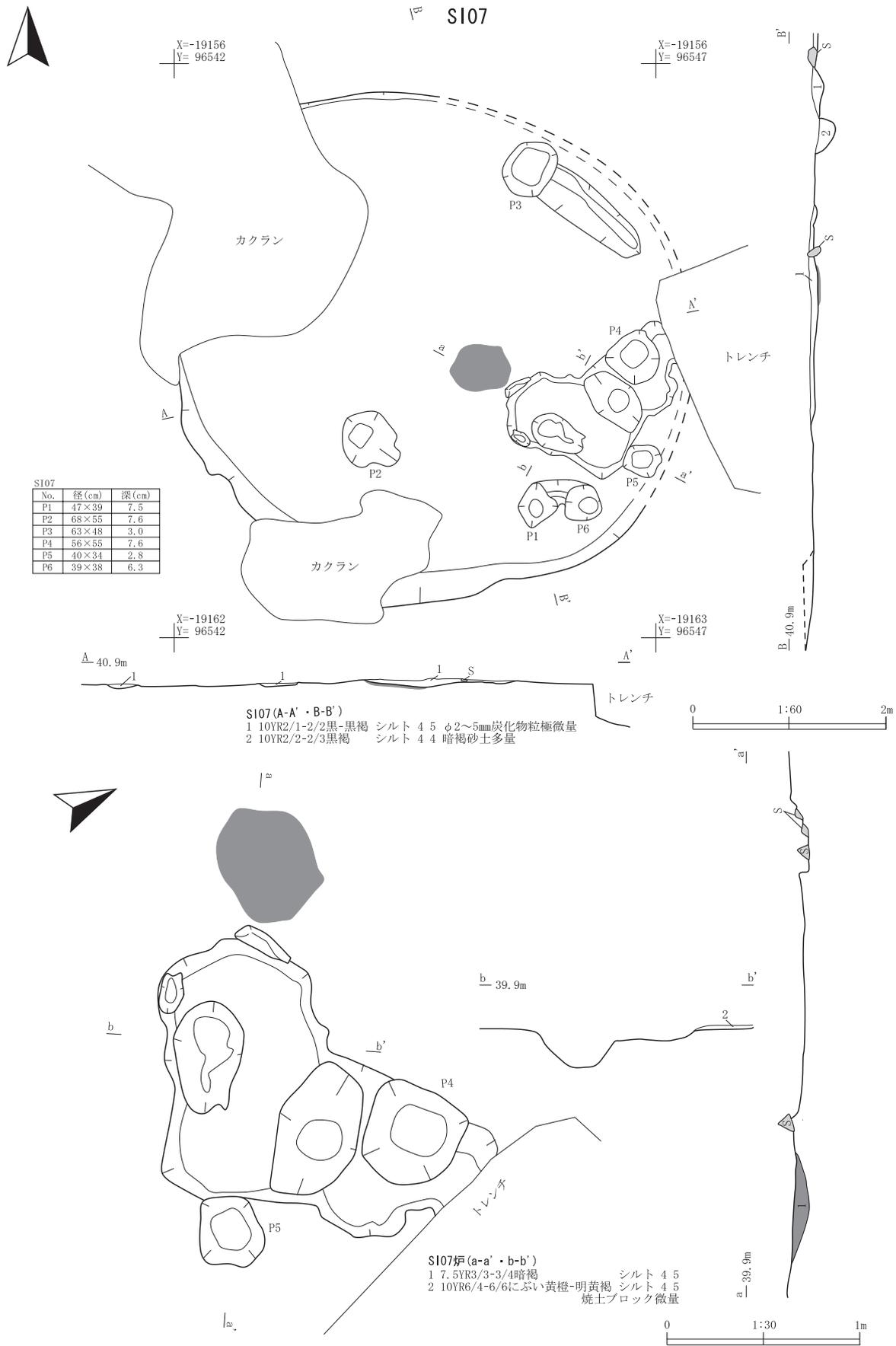
SI06・19 (A-A'・B-B')

- | | | | | |
|----|-------------|-----|-----|---|
| 1 | 10YR3/2 黒褐 | シルト | 1 1 | φ1~15mm炭化物2% (大きい物は焼土上が多い)、φ1~7mmTo-Cu10% |
| 2 | 10YR2/2 黒褐 | シルト | 1 1 | φ1~5mmTo-Cu5%、筋状1~5mm、炭化物7%、φ1~3mm白色粒1%未満 |
| 3 | 10YR2/1 黒 | シルト | 1 1 | 1層土筋状10%、土器片数点、φ1~3mm焼土粒1%未、φ1~5mmTo-Cu10% |
| 4 | 5YR2/2 黒褐 | シルト | 1 1 | φ1~5mm焼土塊10%、φ1~3mm炭化物5% |
| 5 | 5YR4/6 赤褐 | シルト | 1 1 | φ1~5mm炭化物5%、φ1~3mmTo-Cu1%未満 |
| 6 | 10YR2/3 黒褐 | シルト | 1 1 | 9層土斑状20%土器片・礫大量 φ1~3mmTo-Cu10% |
| 7 | 10YR2/3 黒褐 | シルト | 1 1 | φ1~10mm焼土ブロック70%、φ1~10mm炭化物5%、φ1~2mmシルト白灰2%、φ1~2mmTo-Cu1%、10層土斑状10% |
| 8 | 10YR2/1 黒 | シルト | 1 1 | φ1~10mm火To-Cu10%、7層土斑状10%、φ1~5mm炭化物2%、φ1~40mm礫50% |
| 9 | 10YR1.7/1 黒 | シルト | 1 1 | φ1~20mm焼土ブロック5%、φ1~3mm炭化物5%、φ1~2mmTo-Cu3%、8層土斑状5% |
| 10 | 10YR2/3 黒褐 | シルト | 1 1 | φ1~3mm焼土ブロック2%、φ1~2mmTo-Cu粒3% |

0 1:60 2m

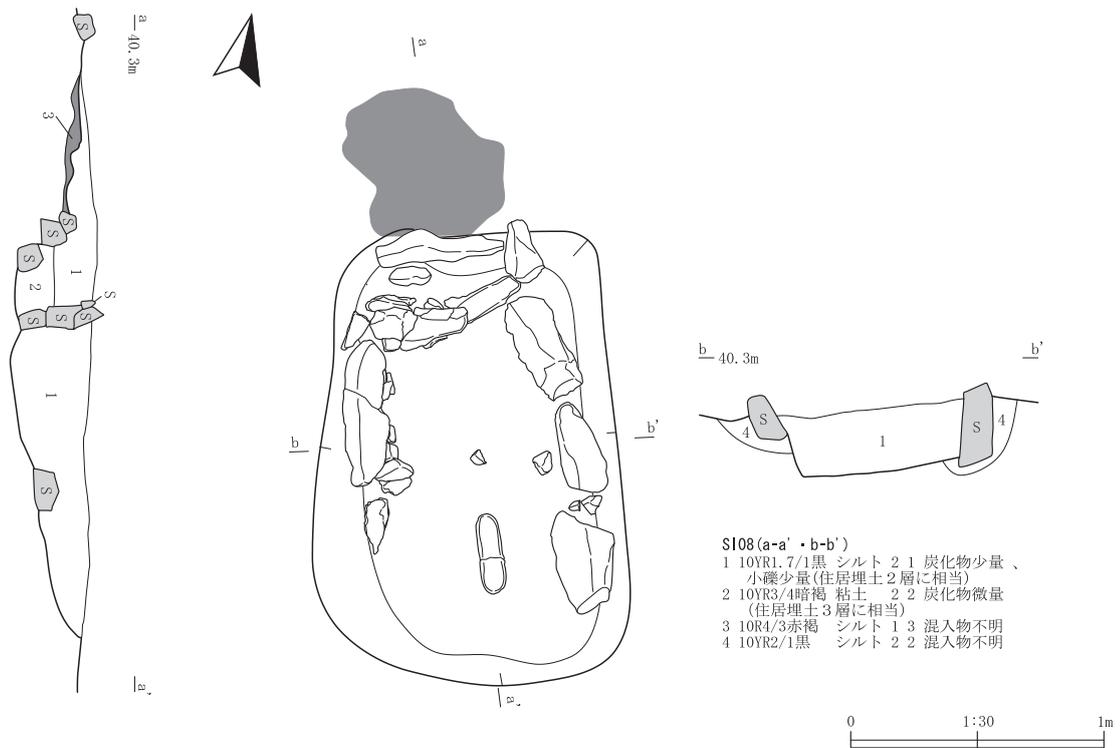
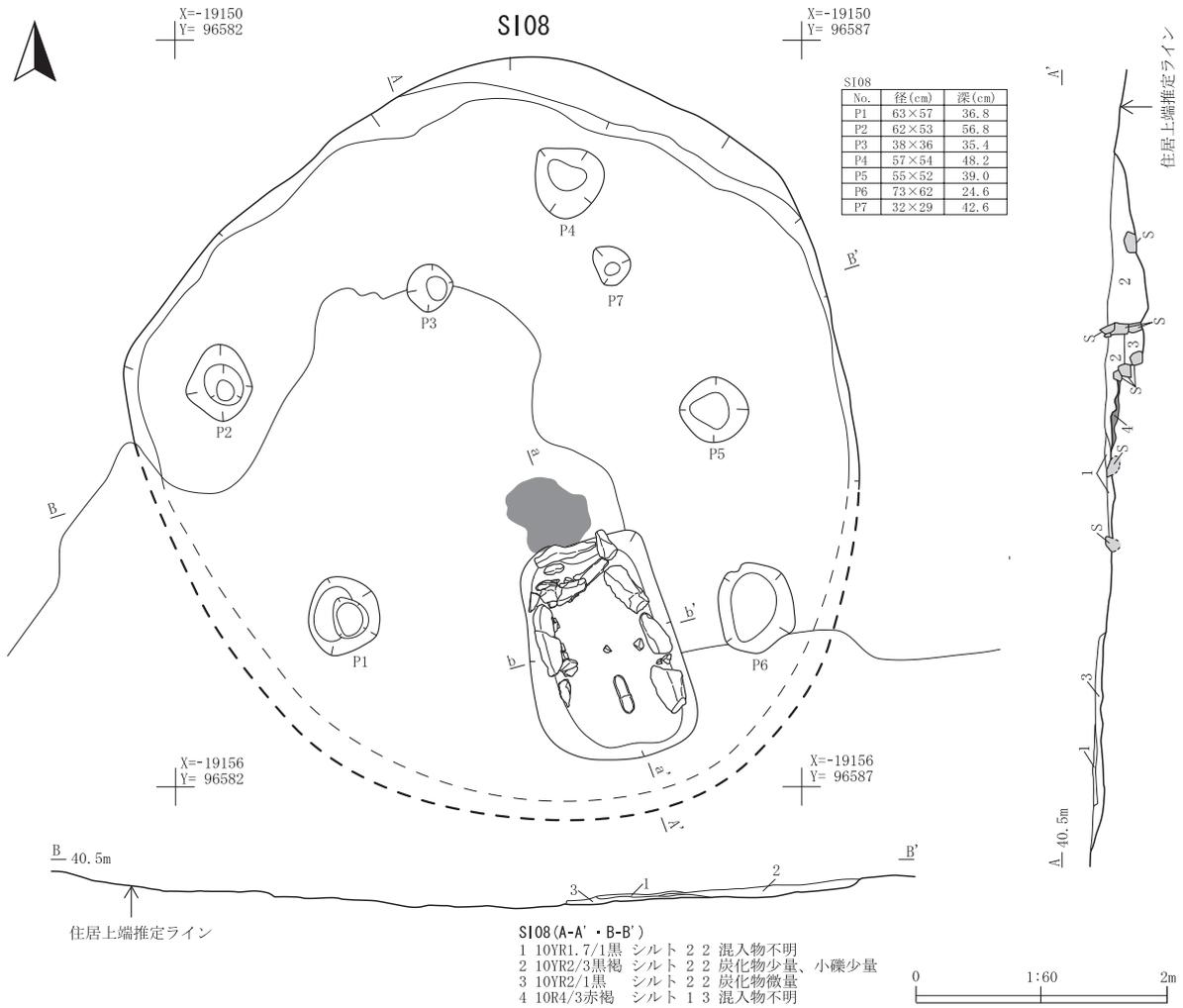


第12図 SI06・19 竪穴住居跡



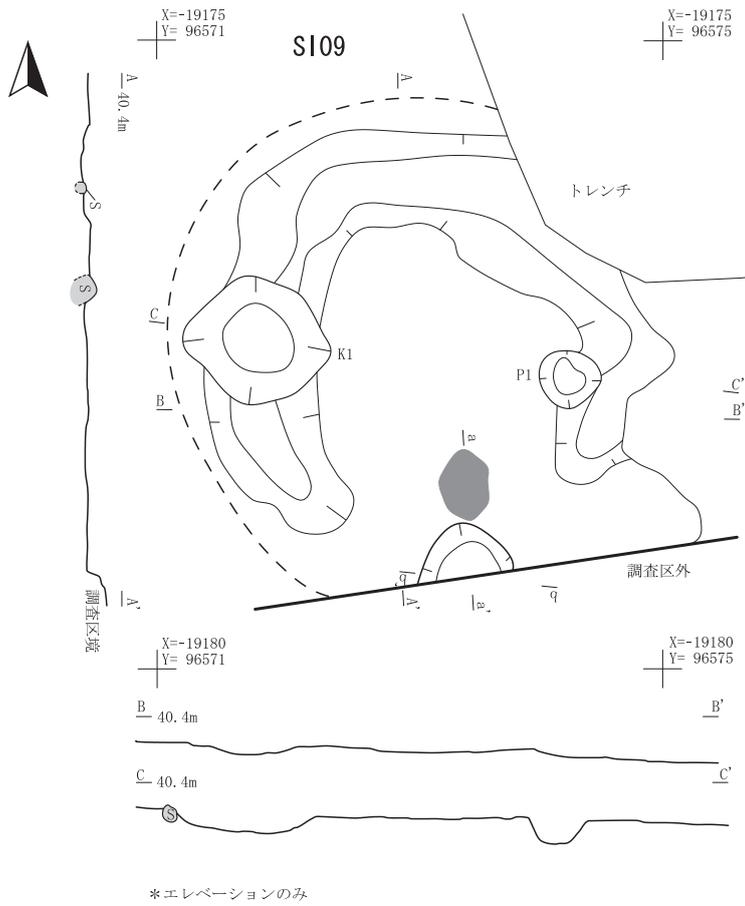
第13図 SI07 竪穴住居跡

2 遺構



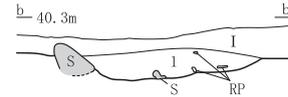
第14図 S108 竪穴住居跡

IV 検出遺構と遺物



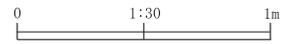
SI09 坑 (a-a')

1 10YR2/2黒褐 シルト 4 4 炭粒極微量、土器片少量

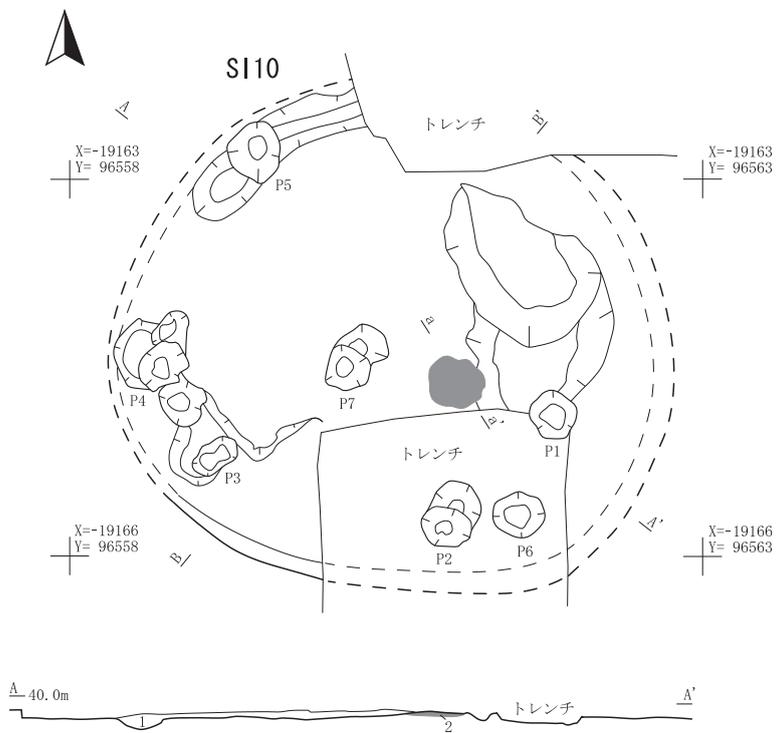
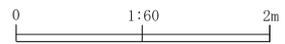


SI09 坑 (b-b')

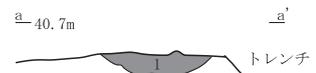
1 7.5YR5/6-5/8明褐 シルト 2 5 焼土少量



SI09		
No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	45×39	20.4
K1	120×100	25.6



SI10		
No.	径 (cm)	深 (cm)
P1	38×38	13.1
P2	40×32	7.1
P3	39×22	3.5
P4	40×33	4.0
P5	49×41	5.0
P6	41×36	2.9
P7	38×36	3.2



SI10 (a-a')

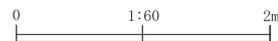
1 7.5YR4/4褐 シルト 4 5 混入物不明



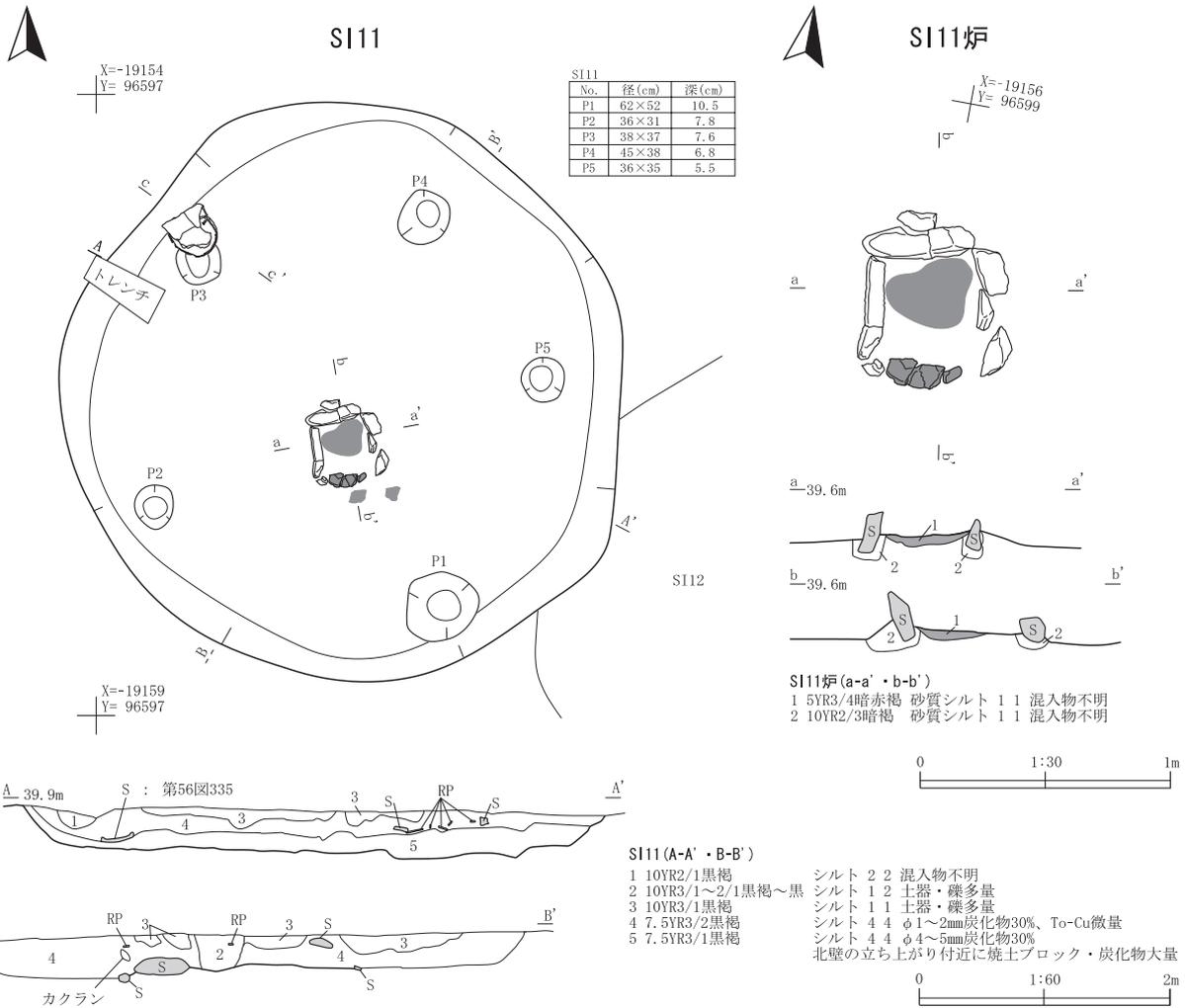
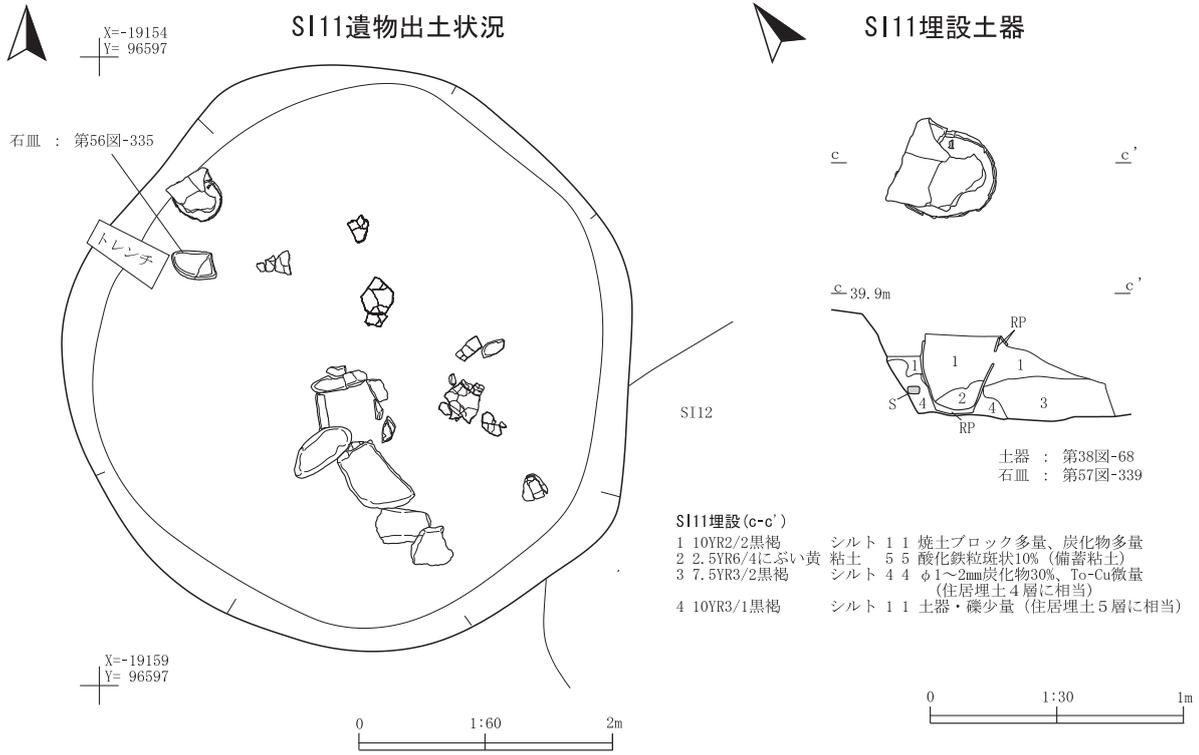
SI10 (A-A'・B-B')

1 10YR2/2黒褐 シルト 4 5 φ5mm炭粒極微量、同溝状又は小ピット部ではやや黒味増し、小礫少量

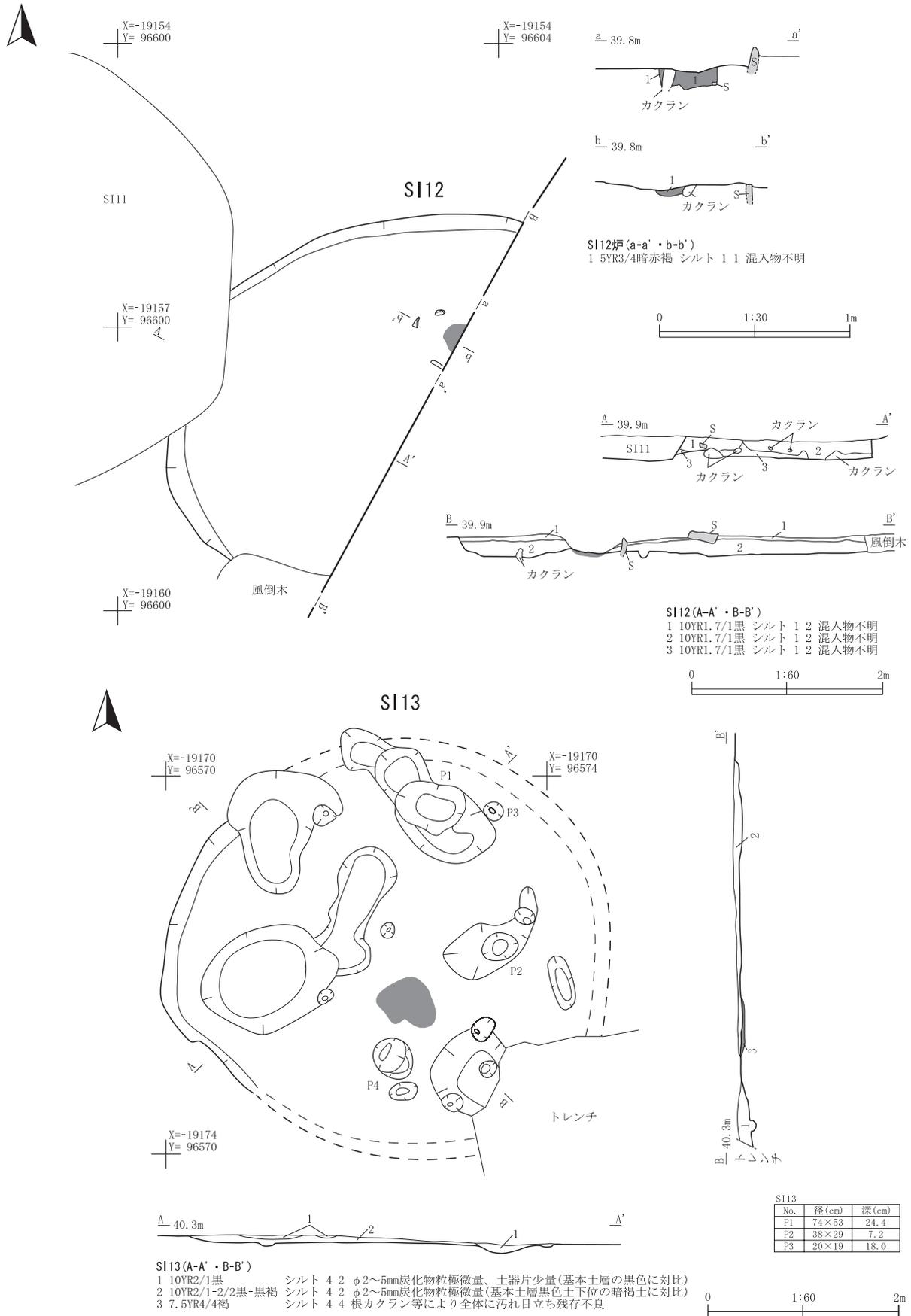
2 7.5YR4/4褐 シルト 4 5 混入物不明



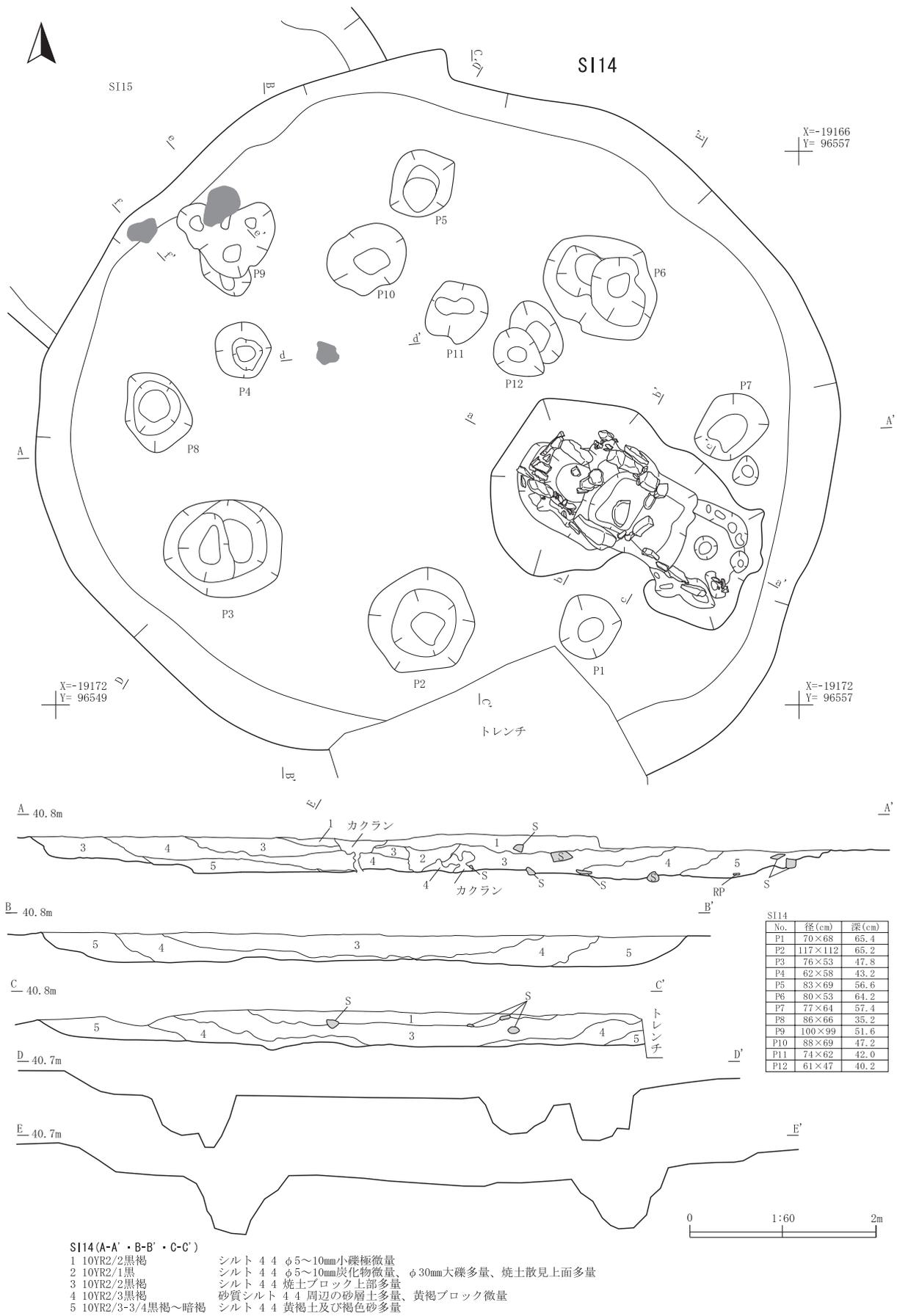
第15図 SI09・10 竪穴住居跡



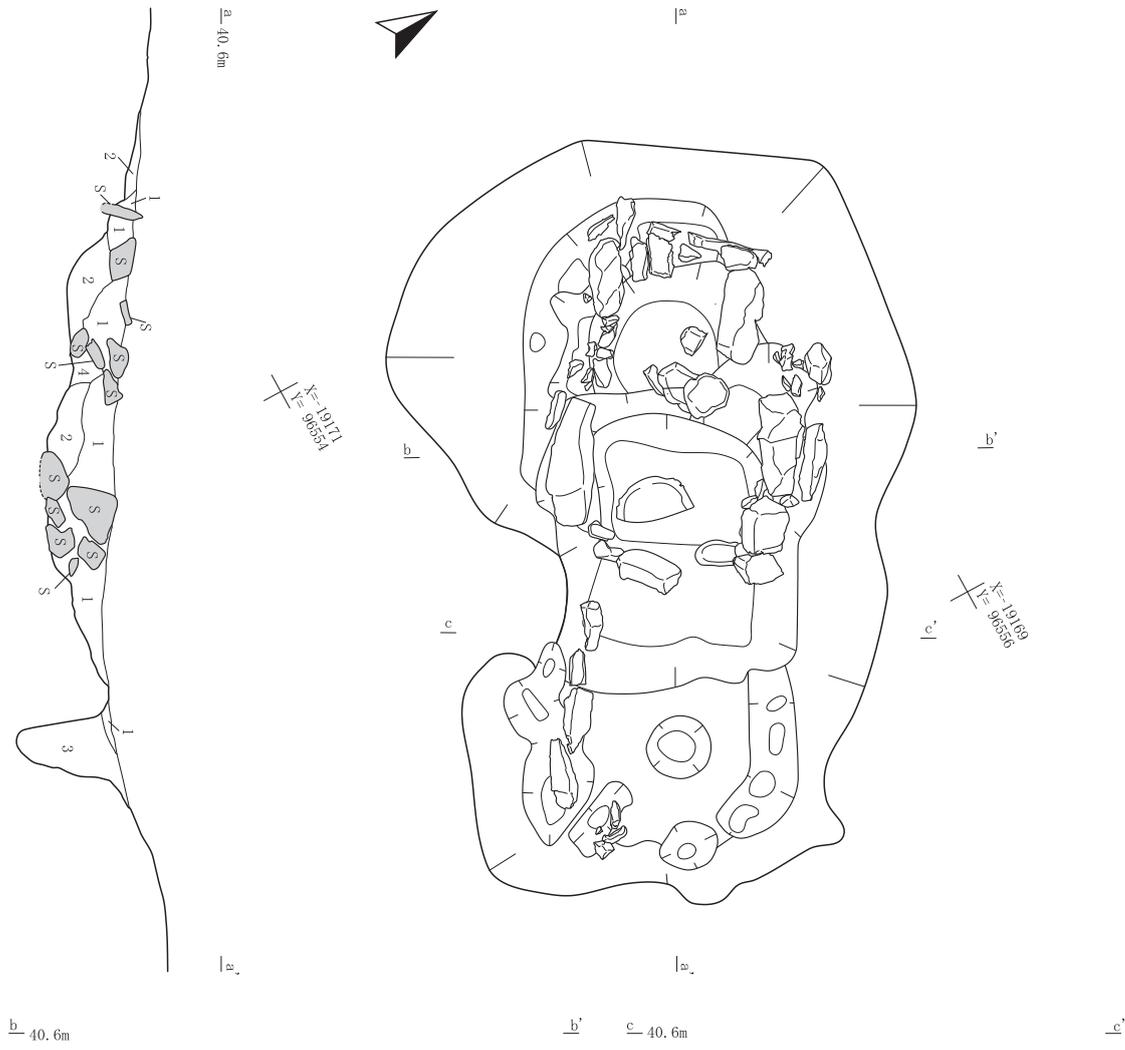
第16図 SI11 竪穴住居跡



第17図 SI12・13 竪穴住居跡



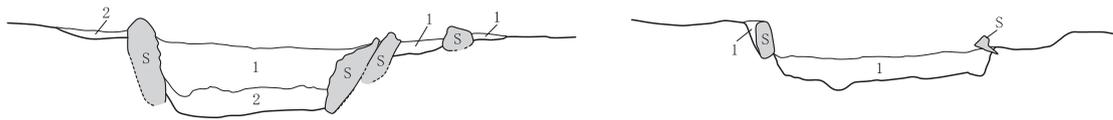
第18図 SI14 竪穴住居跡 (1)



b 40.6m

b' c 40.6m

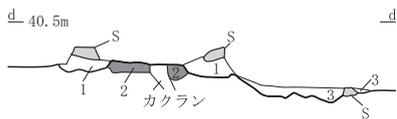
c'



SI14複式炉 (a-a'・b-b'・c-c')

- 1 10VR2/1-2/2黒-黒褐 シルト 5 4 φ5mm炭化物極微量、焼土粒極微量
- 2 10VR2/2-2/3黒褐 シルト 5 4 φ5mm炭化物極微量、焼土粒極微量
- 3 10VR2/3-2/3黒褐 シルト 5 4 黄褐砂ブロック状多量
- 4 10VR2/3-4/4黒褐-褐 シルト 5 5 地山褐色土微量

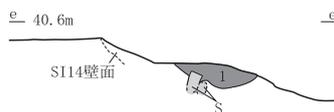
SI14 主軸上焼土



SI14主軸上焼土 (d-d')

- 1 10YR3/3暗褐 シルト 4 4 混入物不明
- 2 5YR4/6赤褐 シルト 1 5 混入物不明
- 3 10YR3/3暗褐 シルト 5 4 混入物不明

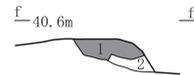
SI14 焼土1



SI14焼土1 (e-e')

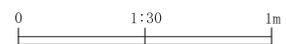
- 1 7.5YR4/4褐 シルト 4 4 混入物不明

SI14 焼土2



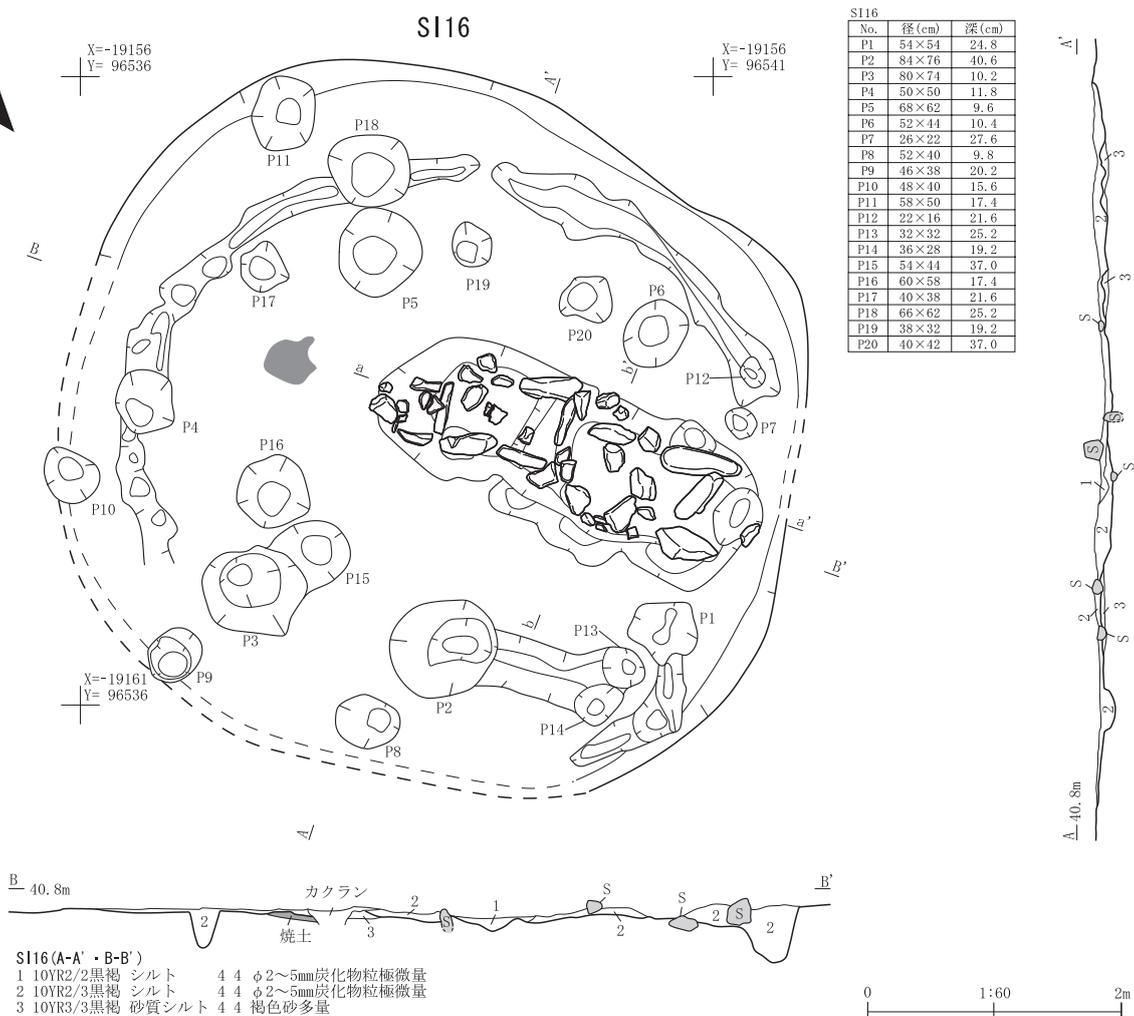
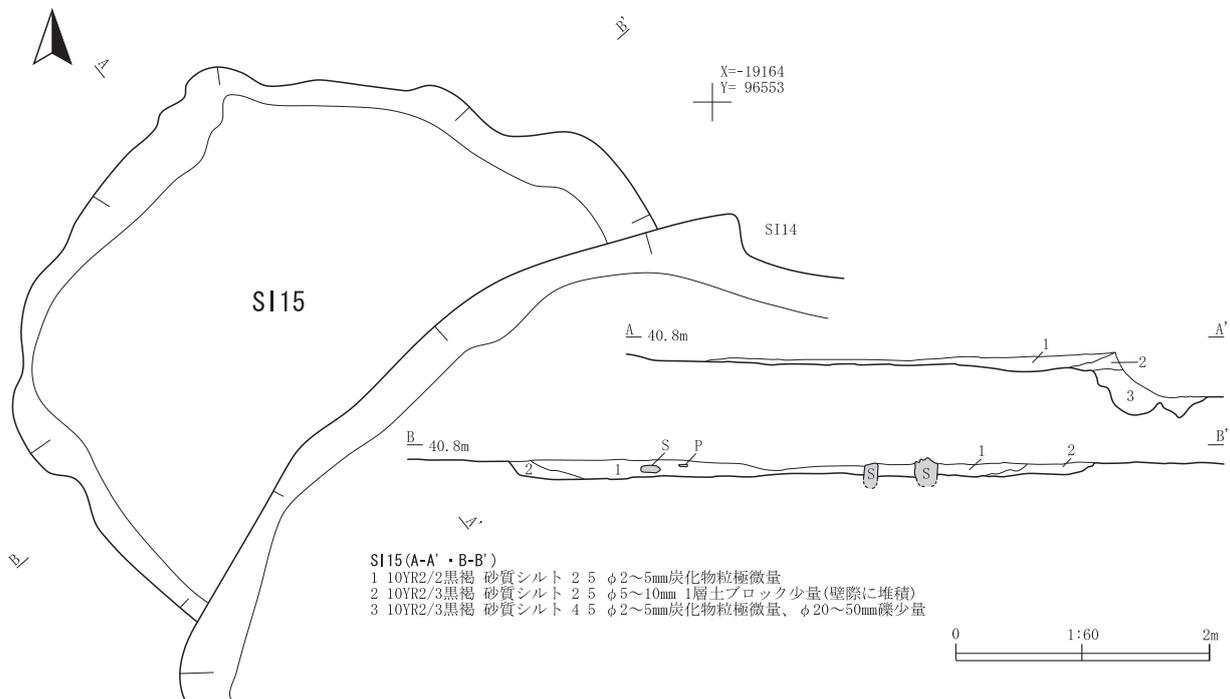
SI14焼土2 (f-f')

- 1 7.5YR4/4褐 シルト 4 4 混入物不明
- 2 10YR4/4褐 シルト 2 4 地山砂極微量

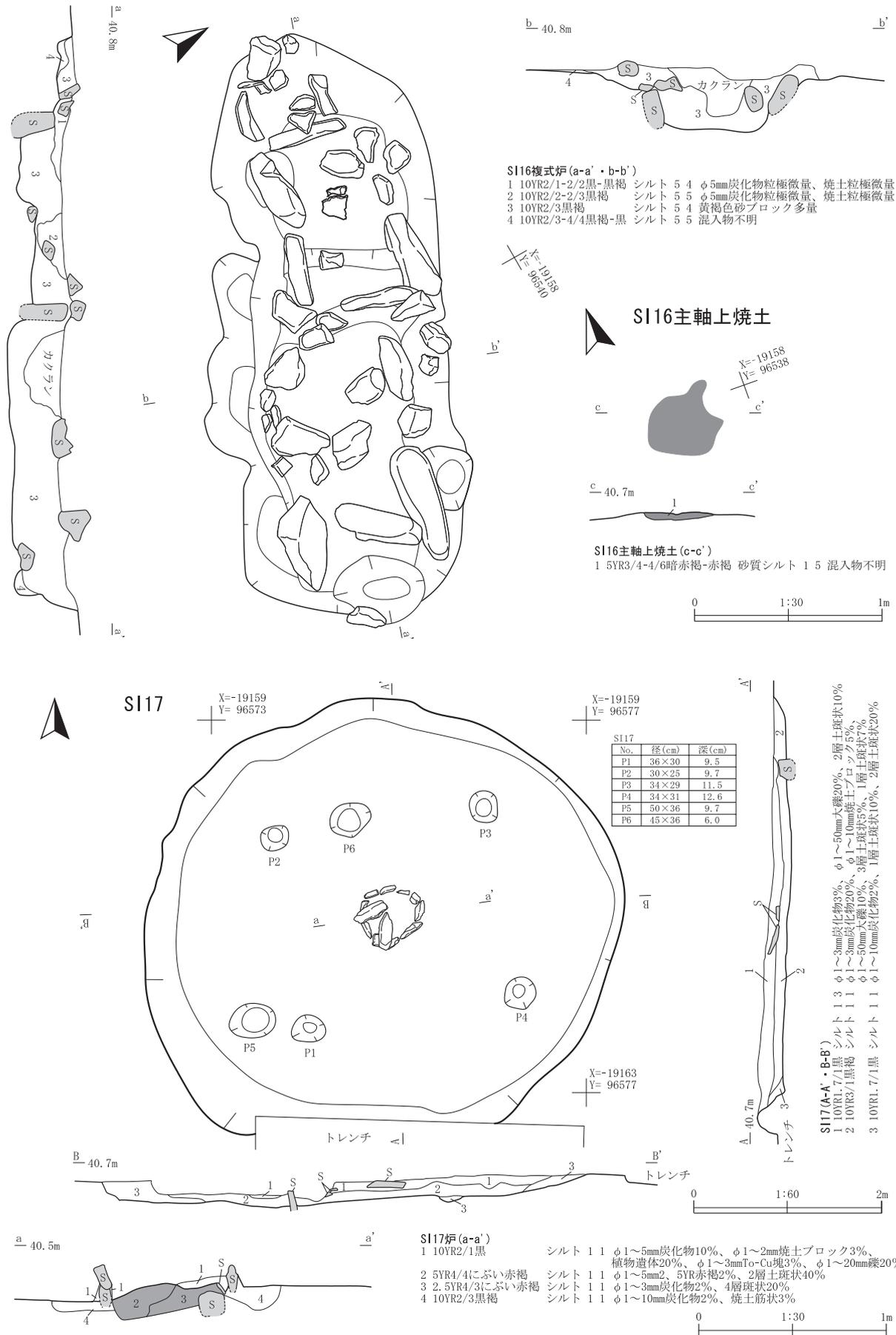


第19図 SI14 竪穴住居跡 (2)

2 遺構

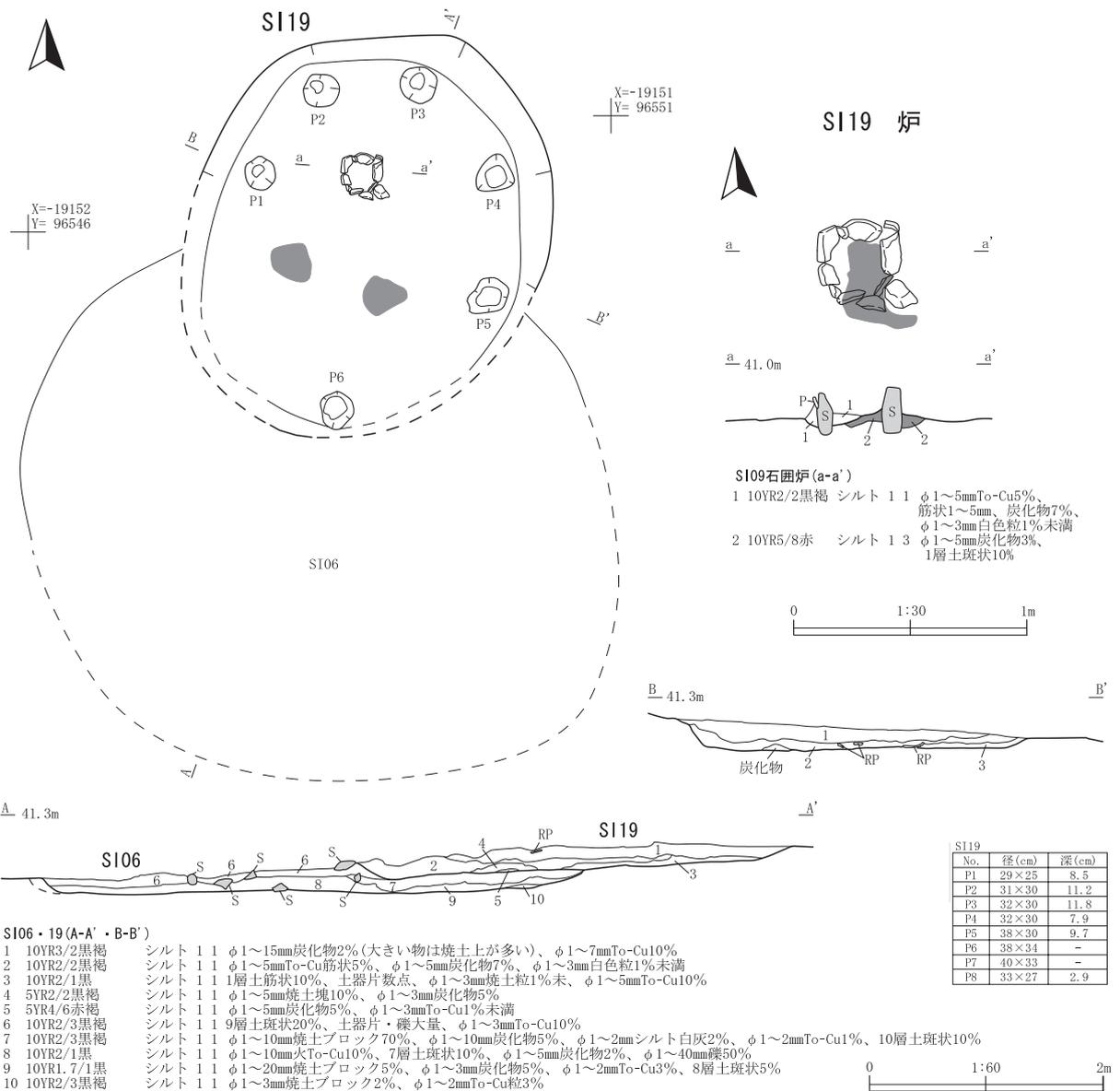
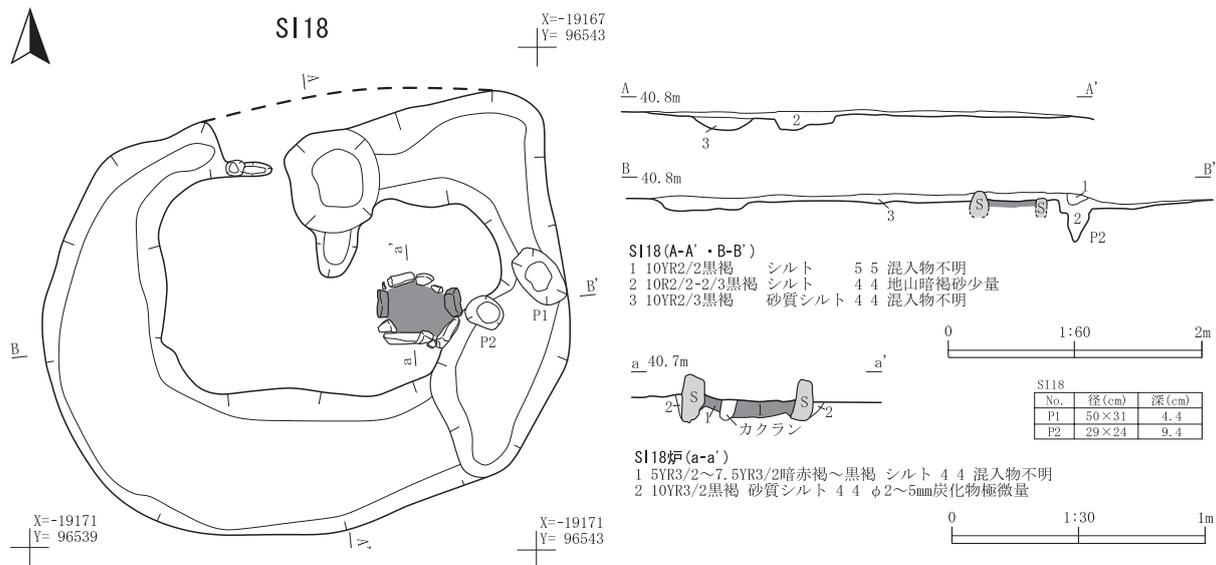


第20図 SI15・16 竪穴住居跡(1)

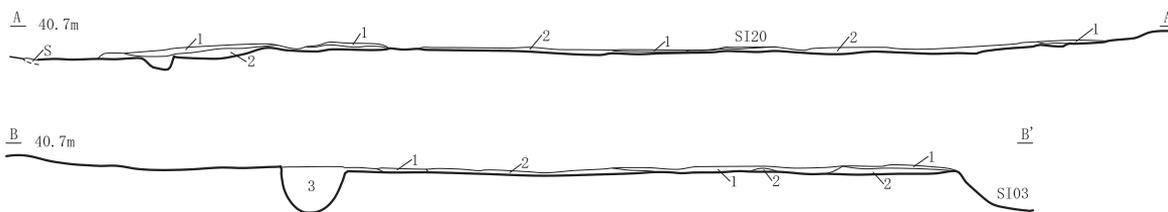
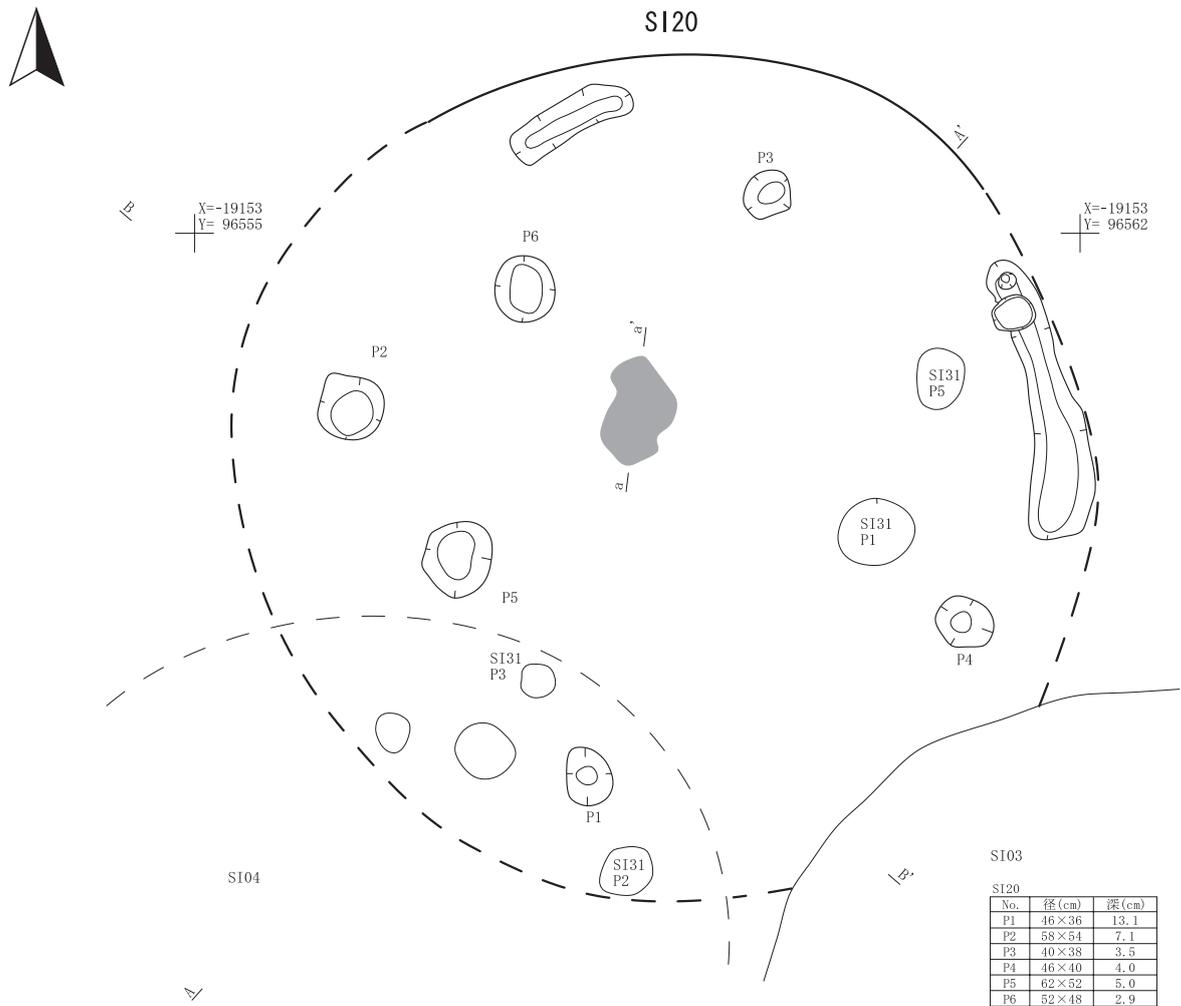


第21図 SI16 竪穴住居跡 (2)・SI17 竪穴住居跡

2 遺構

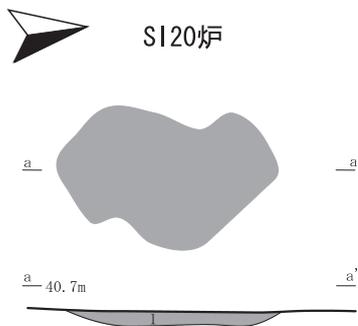


第22図 S118・19 竪穴住居跡



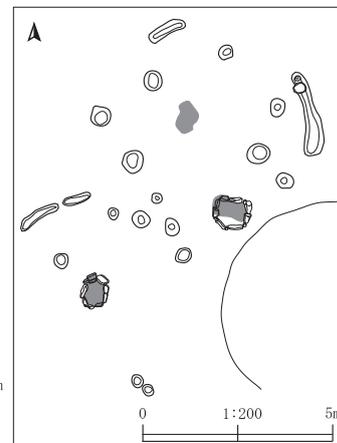
SI04・20 (A-A')

- 1 10YR2/2黒褐 シルト 1 3 φ1~5mm炭化物5%、φ1mmTo-Cu3%、2層土斑状10%、φ1~3mm焼土ブロック1%、φ1~200mm石10%
- 2 10YR2/3黒褐 シルト 1 4 φ1~3mm焼土ブロック3%、φ1~5mm炭化物3%、φ1~10mmTo-Cu10%、φ1~3mm1層土20%、礫多量(地山)
- 3 10YR2/2黒褐 シルト 1 1 φ1~3mm焼土5%、φ1~30mm炭化物5%



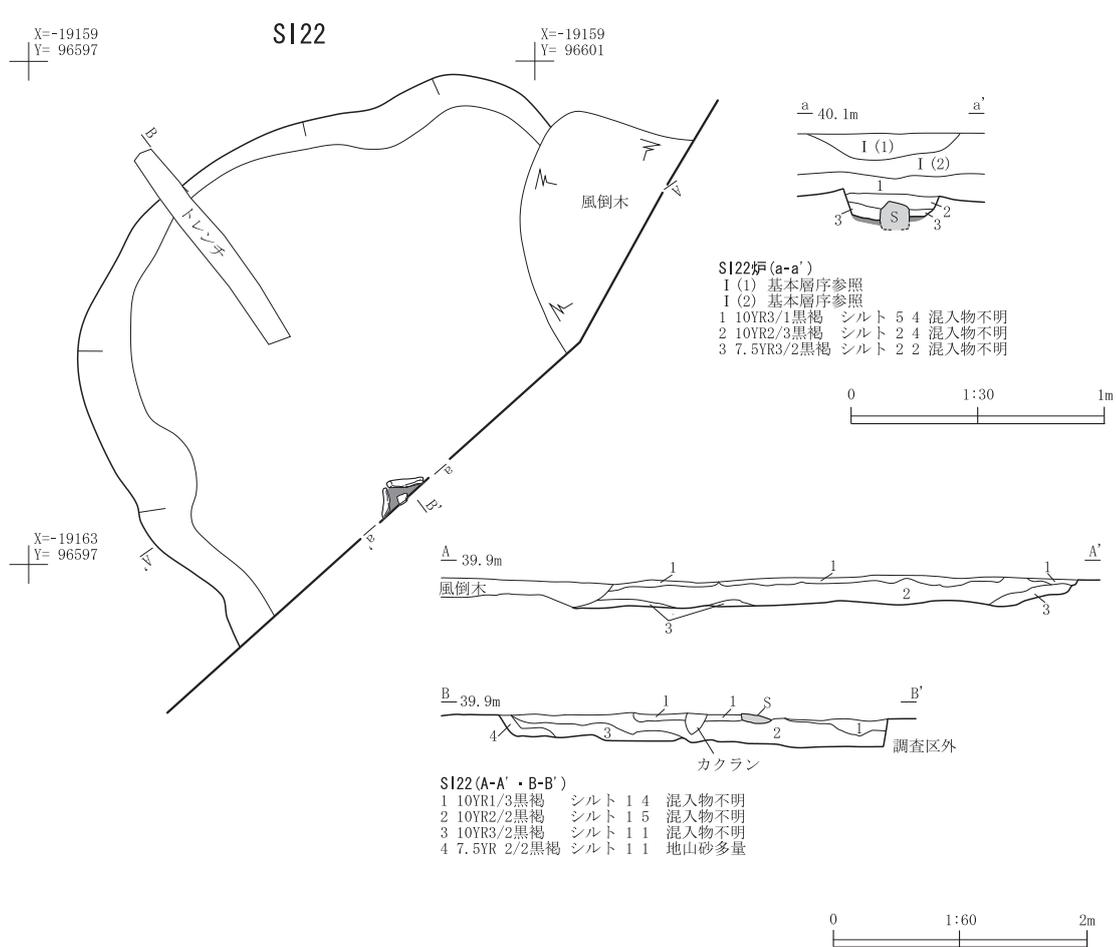
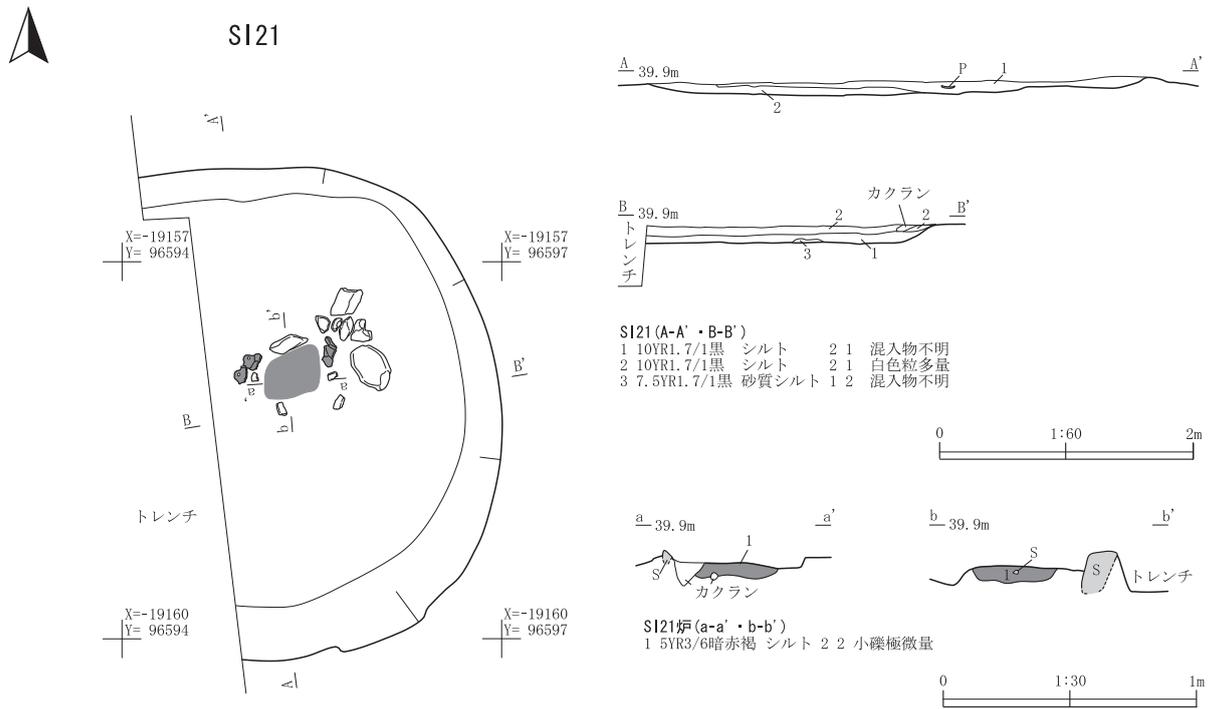
SI20炉 (a-a')

- 1 2.5YR5/8明赤褐 シルト 1 1 φ1~10mm炭化物5%

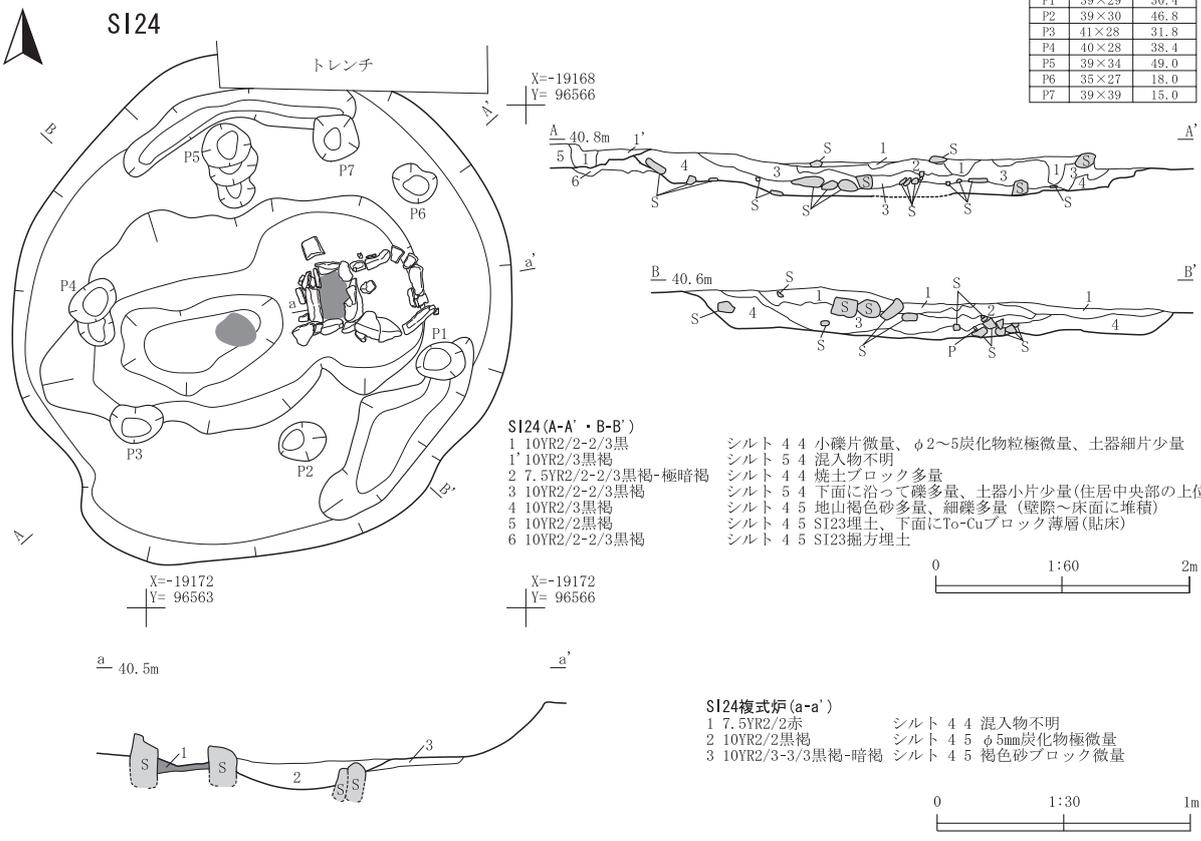
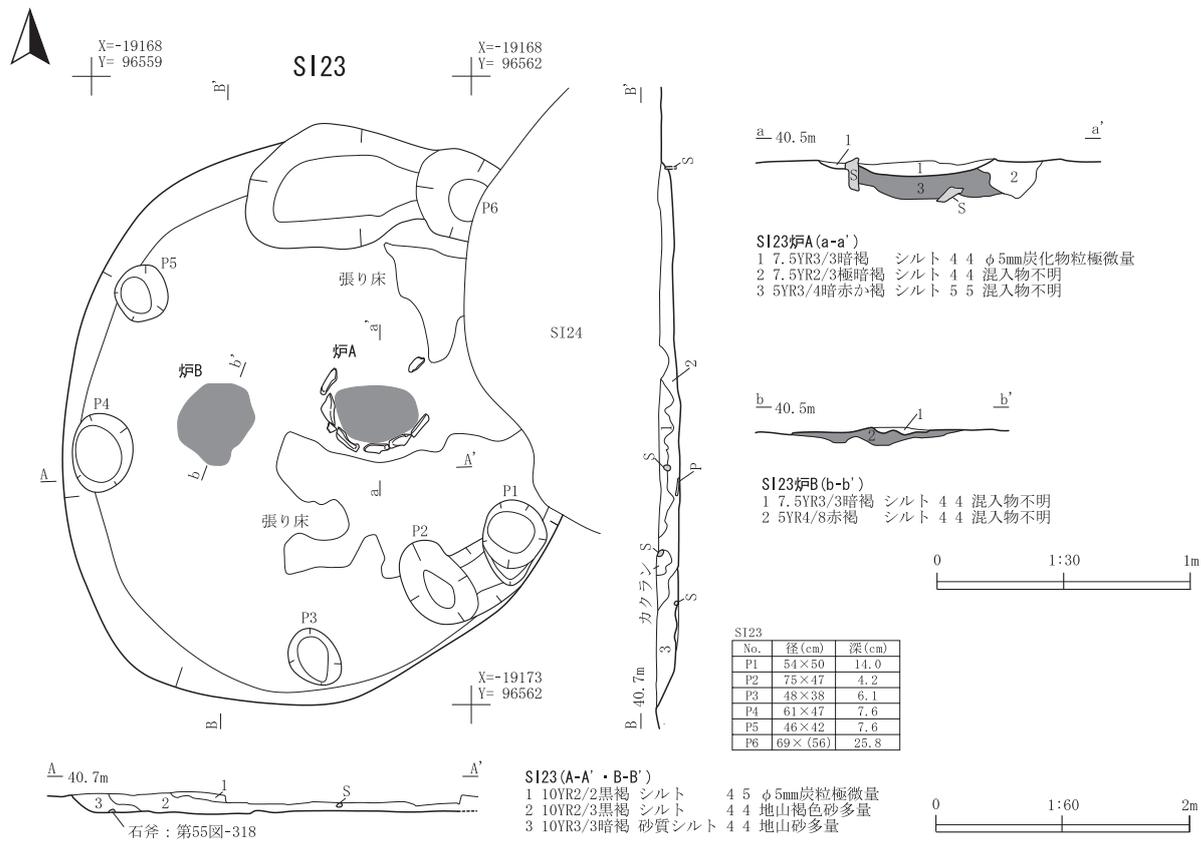


第23図 SI20 竪穴住居跡

2 遺構

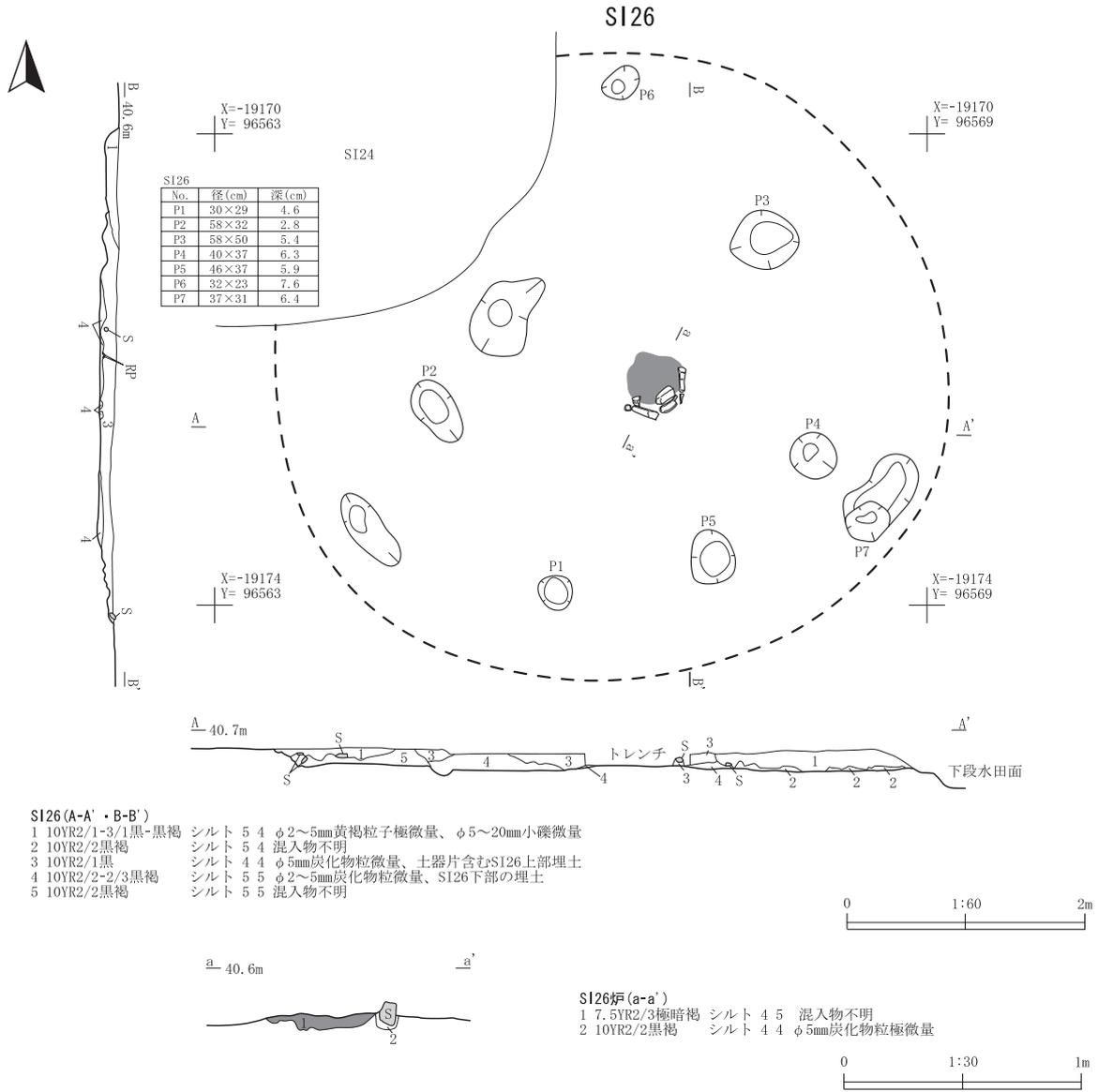
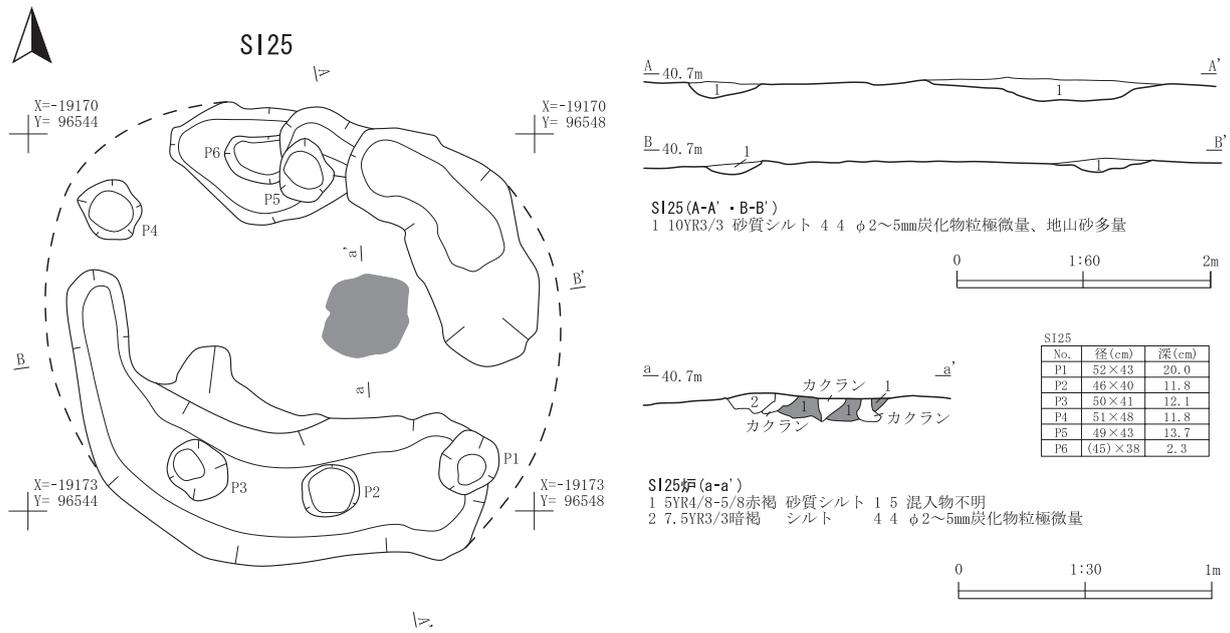


第24図 SI21・22 竪穴住居跡

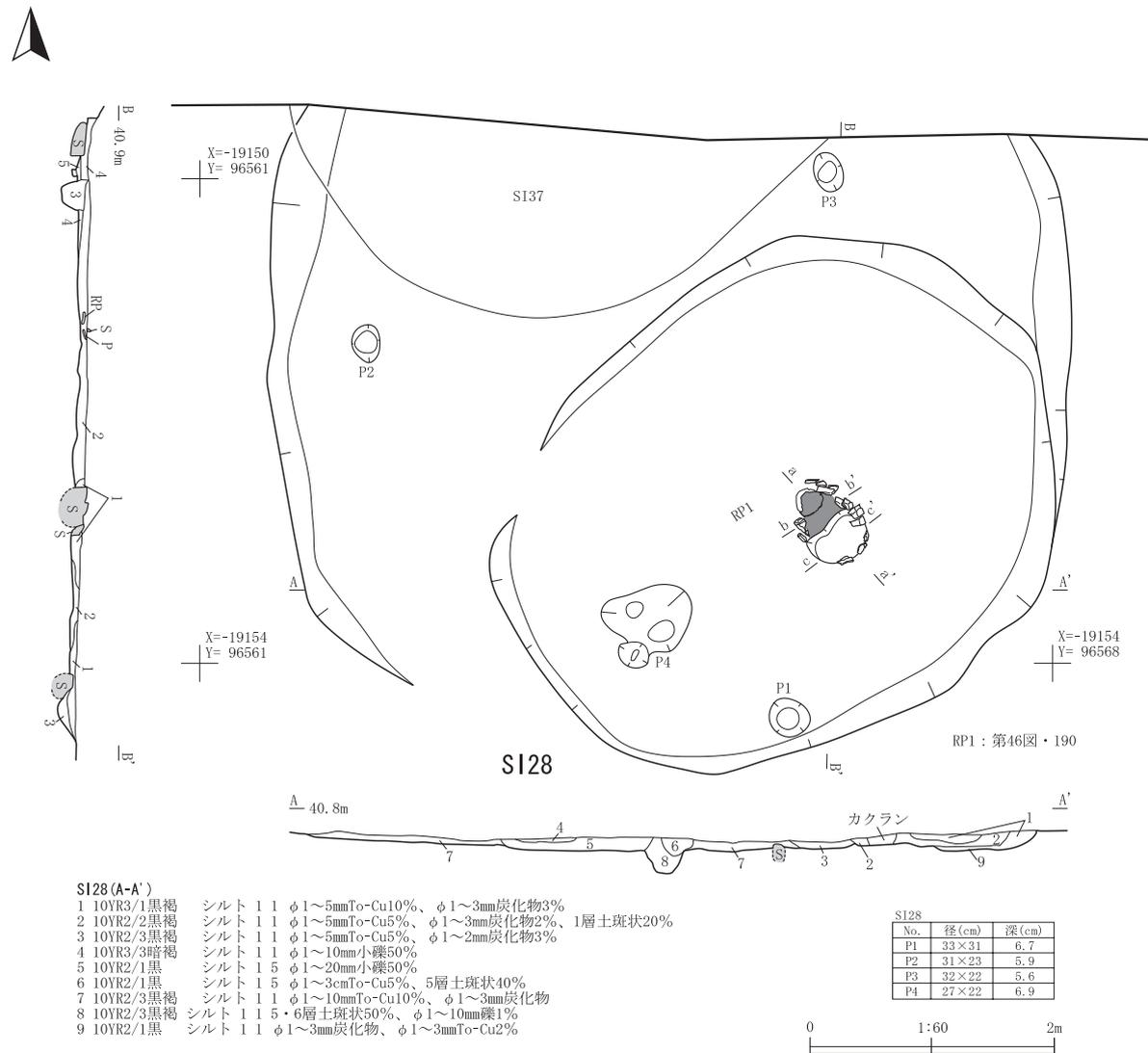
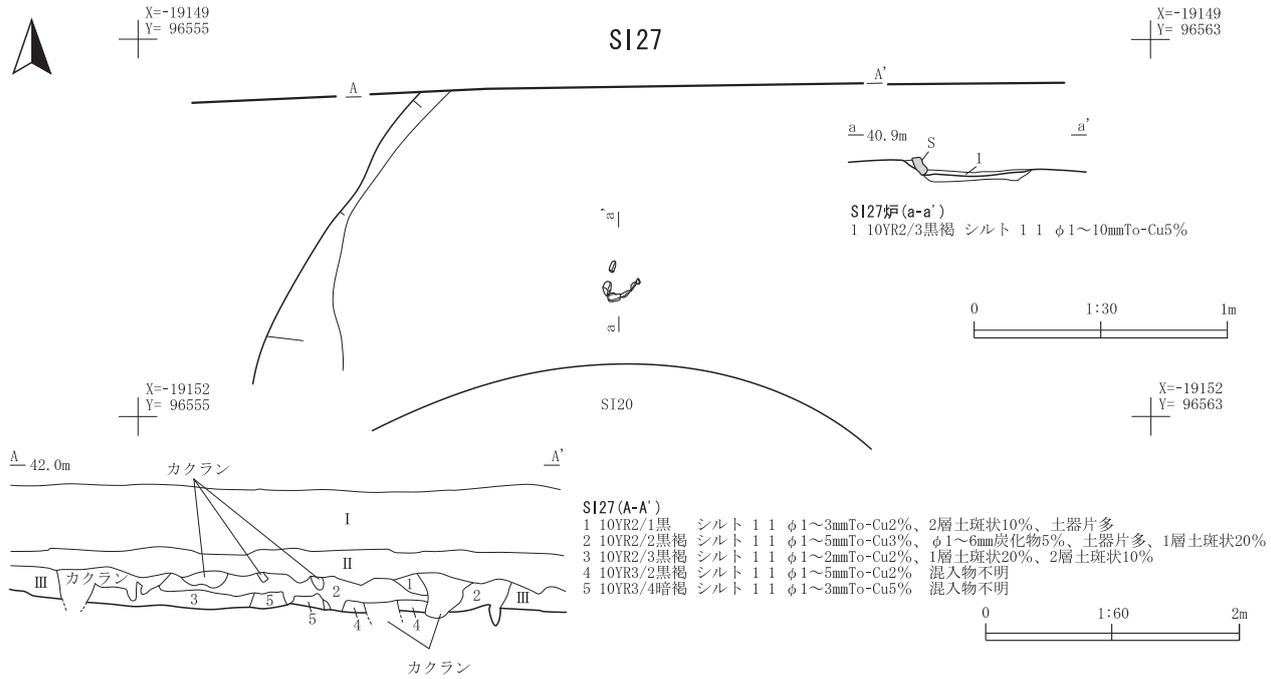


第25図 SI23・24 竪穴住居跡

2 遺構

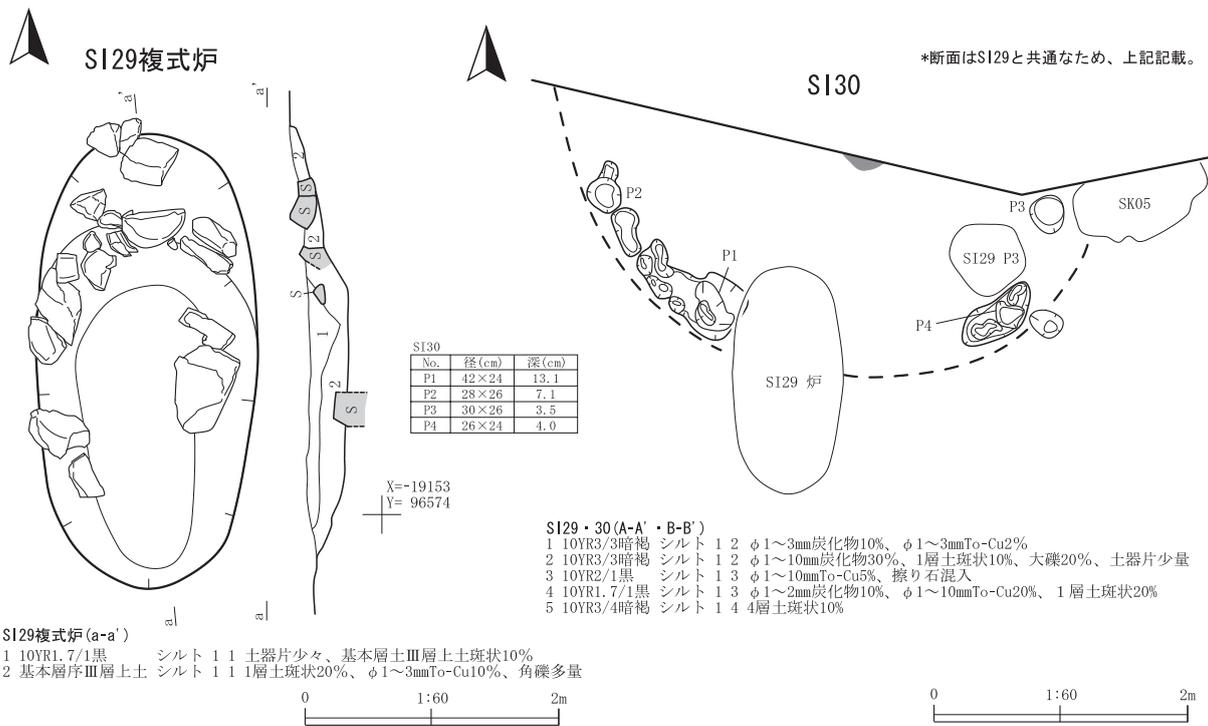
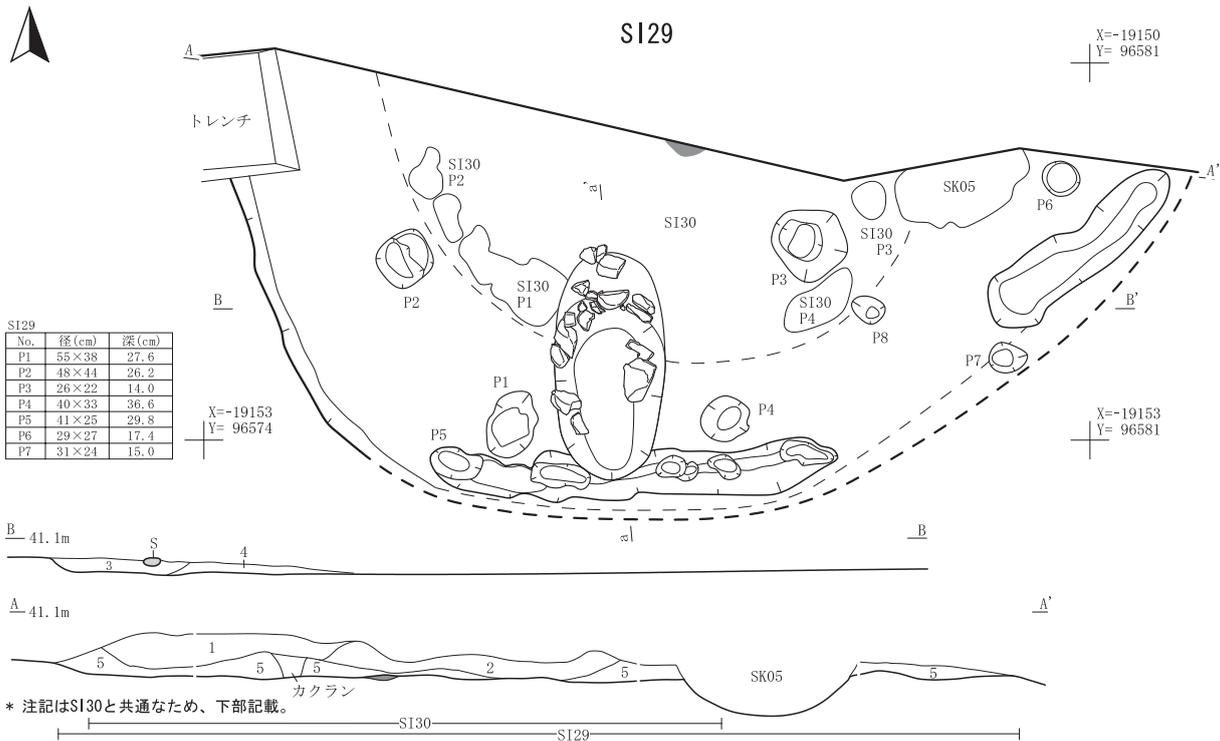
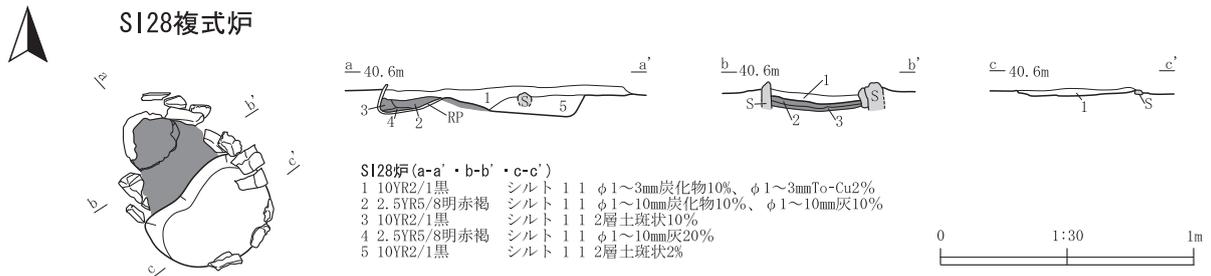


第26図 SI25・26 竪穴住居跡

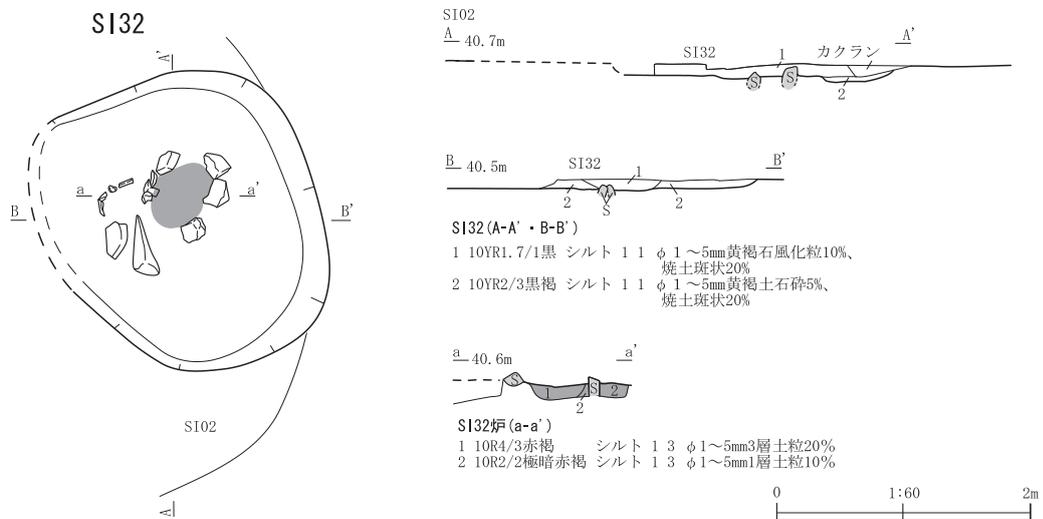
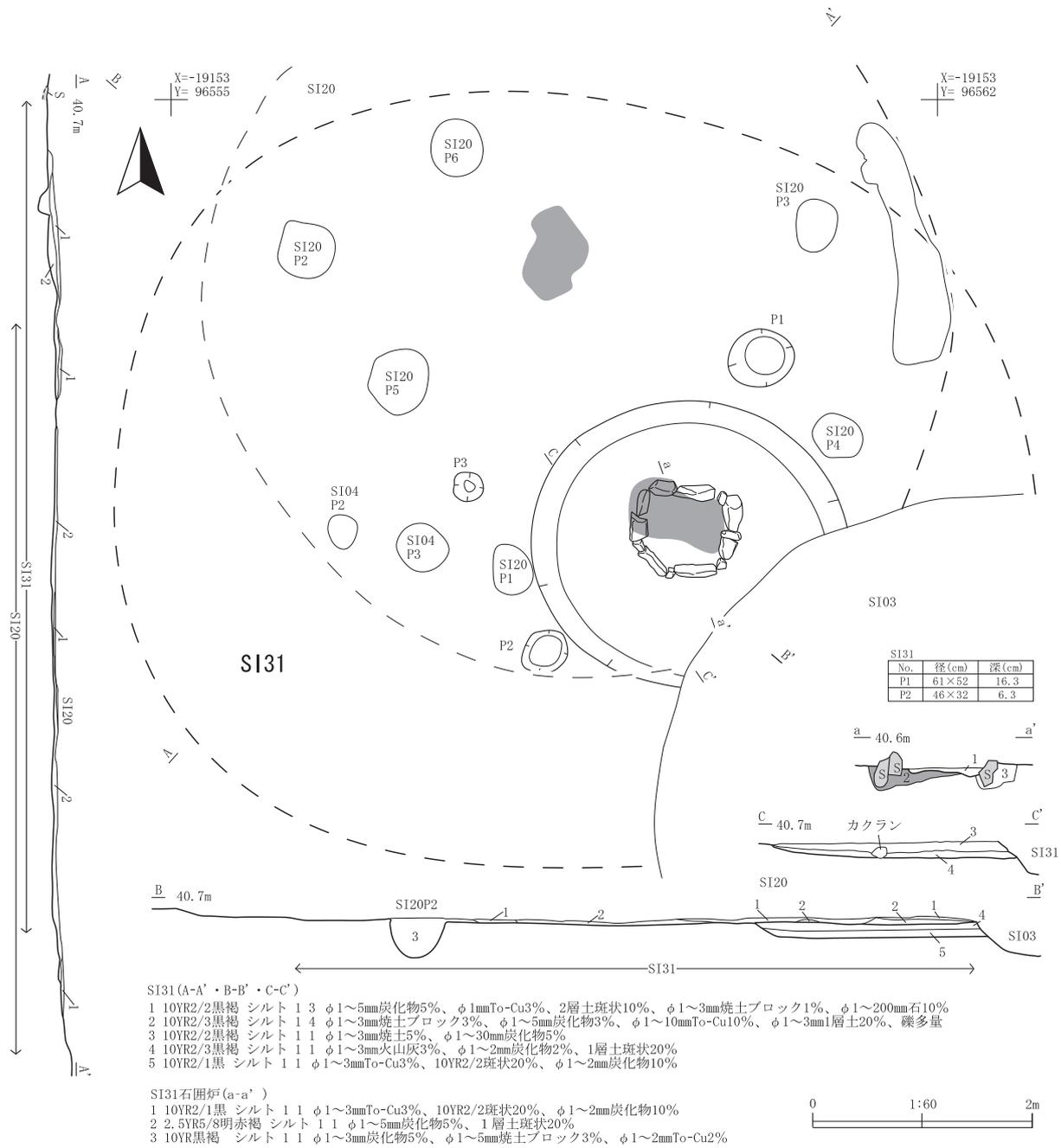


第27図 SI27・28 竪穴住居跡 (1)

2 遺構

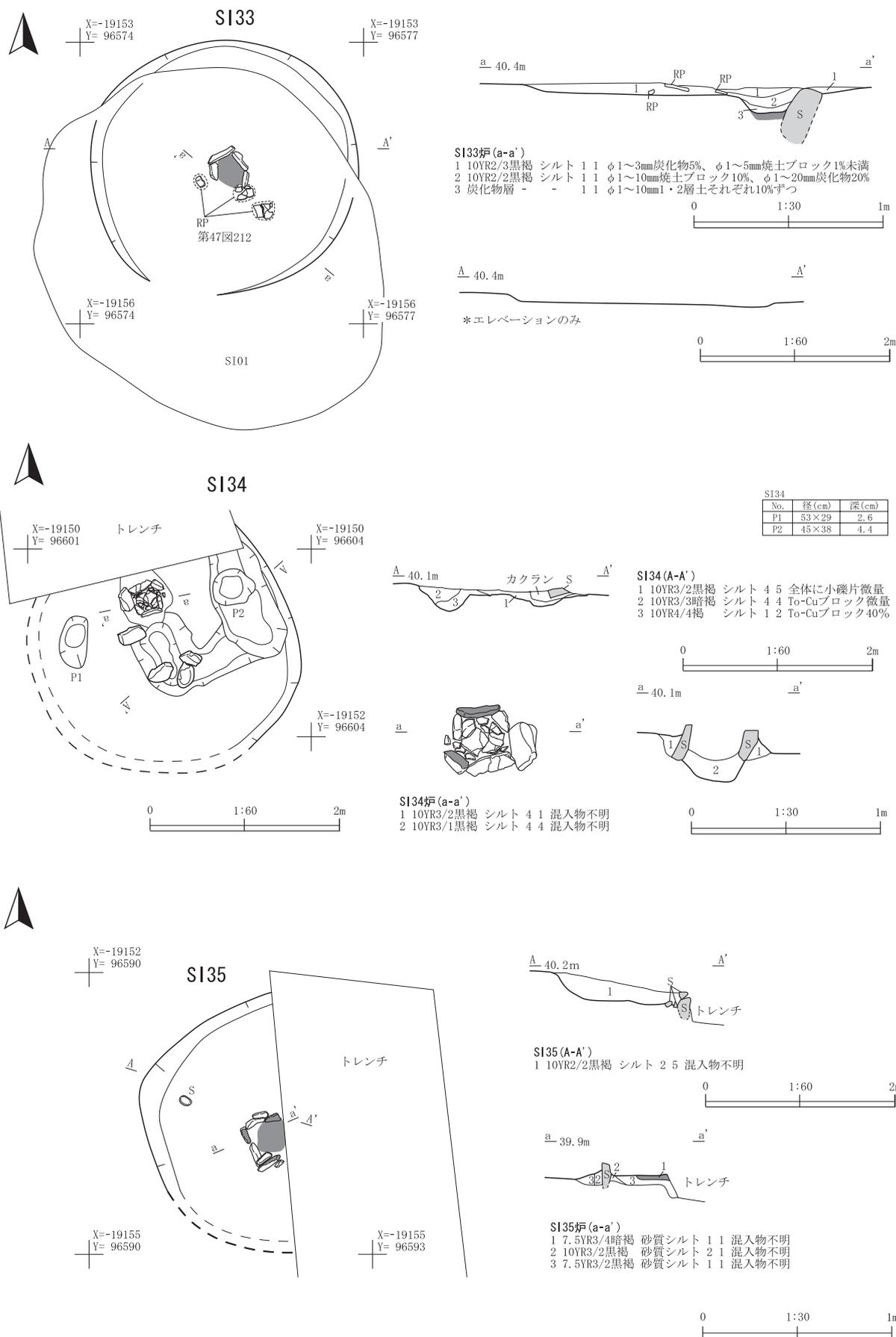


第28図 S128 (2)・29・30 竪穴住居跡

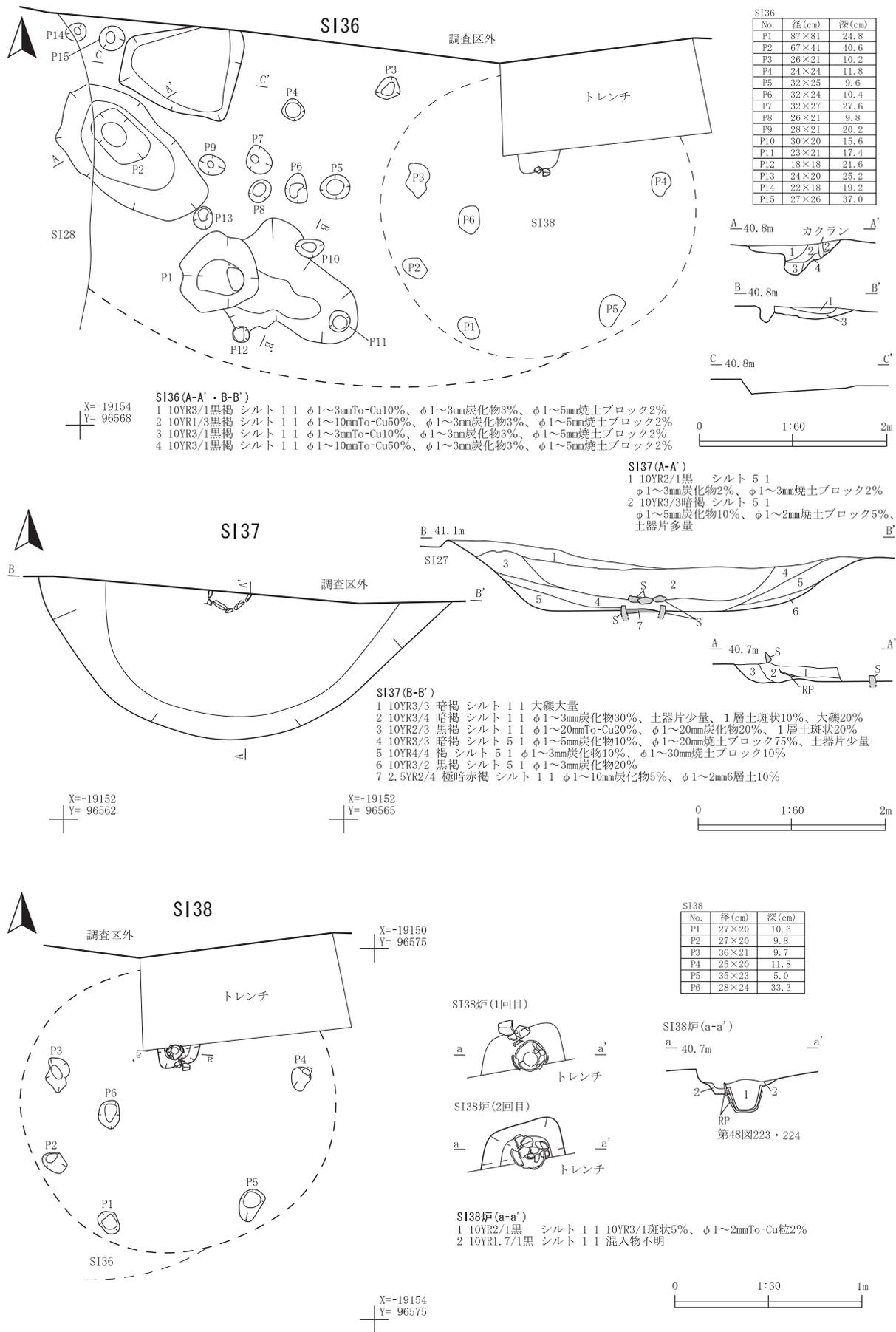


第29図 SI31・32 竪穴住居跡

2 遺構

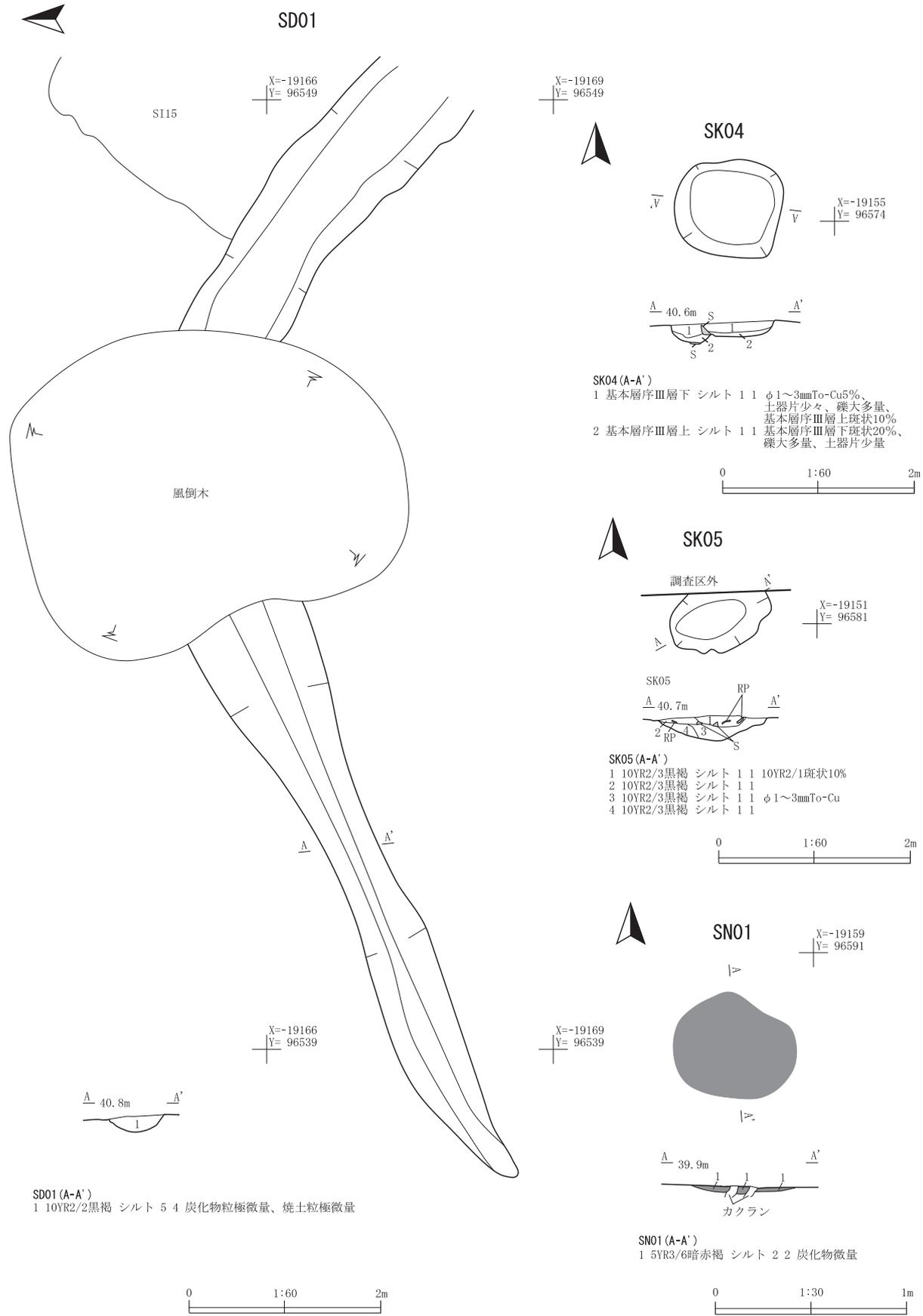


第30図 SI33・34・35 竪穴住居跡



第31図 SI36・37・38 竪穴住居跡

2 遺構



第32図 SK04・05土坑・SD01溝跡・SN01焼土

第2表 遺構観察表

遺構名	図版	写真 図版	位置・検出	重複関係	長軸方向	平面形	床面積 (㎡)	開口部 (m)	深さ (cm)	埋土	炉形態	付属施設	出土遺物	遺物総重量 (g)	時期	備考
SI01 竪穴住居跡	第7図	2	3i・3j・4i・4j	SI33を切る	-	円	7.9	4.0 × 3.5	10		複式炉		垂飾(紵紋岩)、大木9式	4049	縄文時代中期後葉	
SI02 竪穴住居跡	第7図	3	3h・3i・4h・4i	SI32を切る	N-22°-W	円	15.4	5.1 × (4.6)	25		石囲炉		磨製石斧・敲磨器類2	1963	縄文時代中期後葉	
SI03 竪穴住居跡	第8図	4・5	4f・4g・4h・5f・5g・5h	SI31を切る	N-51°-W	円	20.5	5.9 × 3.6	50		複式炉埋設 土器		敲磨器類3・磨製石斧・多面体敲石・石皿2・台石、大木9・10式	12516	縄文時代中期後葉	
SI04 竪穴住居跡	第9図	6	(4e・4f・5e・5f)	SI20に切られ、SI31を切る	N-8°-W	円	-	(6.0) × (5.7)	5		石囲炉		石皿	114	縄文時代中期後葉	
SI05 竪穴住居跡	第10図	7・8	2e・2f・3e・3f	SI20に切られる	N-65°-W	楕円	(13.5)	5.5 × (4.9)	20		複式炉		敲磨器類、大木9・10式	2929	縄文時代中期後葉	
SI06 竪穴住居跡	第11図	9・10	3d・3e・4d・4e	SI19を切る	N-16°-E	円	(17.0)	(5.6) × (4.6)	26		複式炉		磨製石斧2・敲磨器類5、大木9・大木9式	24169	縄文時代中期後～未葉	
SI07 竪穴住居跡	第12図	11	4c・4d・5c・5d		N-62°-W	円	(20.8)	5.5 × (5.2)	10		複式炉		大木9式	665	縄文時代中期後葉	
SI08 竪穴住居跡	第13図	12・13	3k・3l・4k・4l		N-18°-W	楕円	24.0	(6.1) × 5.8	25		複式炉		大木9式	1510	縄文時代中期後～未葉	
SI09 竪穴住居跡	第14図	14	8i・8j		N-3°-W	円	-	(4.9) × (4.1)	13		複式炉		大木10式	1210	縄文時代中期後～未葉	
SI10 竪穴住居跡	第14図	15	5f・5g・6f・6g		N-85°-E	円	(12.6)	(4.5) × (4.0)	12		地床炉		大木10式	787	縄文時代中期後葉	
SI11 竪穴住居跡	第15図	16・17	3n・3o・4n・4o	SI12を切る	N-10°-W	円	13.2	4.7 × 4.5	38		石囲炉		石匙・石筥・スクレイパー2・磨製石斧5・敲磨器類2・垂飾(紵紋岩)・石皿2、大木8b、9式	25819	縄文時代中期後葉	
SI12 竪穴住居跡	第16図	18	4o	SI11に切られる	N-63°-W	楕円	7.9	4.2 × (2.3)	23		複式炉		敲磨器類、大木9・10式	1194	縄文時代中期後葉	
SI13 竪穴住居跡	第16図	19	6i・7i		N-46°-W	円	(14.1)	(4.8) × (4.4)	10		複式炉		スクレイパー・磨製石斧2・敲磨器類2、大木9式	965	縄文時代中期後葉	
SI14 竪穴住居跡	第17・18図	20・21	6d・6e・6f・7d・7e・7f	SI15を切る	N-60°-W	円	25.3	8.6 × 7.4	50		複式炉		石筥・多面体磨石・敲磨器類、大木9式	1535	縄文時代中期後葉	
SI15 竪穴住居跡	第19図	22	5d・5e・6d・6e	SI14に切られる	-	円?	(8.8)	4.8 × (2.6)	15				スクレイパー・磨製石斧2・敲磨器類2、大木9式	3135	縄文時代中期後葉	
SI16 竪穴住居跡	第19図	23・24	4b・4c・5b・5c		N-61°-W	円	(28.3)	6.1 × (5.4)	13		複式炉		敲磨器類、大木9・10式	2031	縄文時代中期後葉	
SI17 竪穴住居跡	第20図	25	4i・4j・5i・5j		N-11°-W	円	15.3	5.2 × 4.9	27		石囲炉		スクレイパー・磨製石斧・敲磨器類・垂飾3(紵紋岩)、大木10式	8289	縄文時代中期後葉	
SI18 竪穴住居跡	第21図	26	6b・6c・7b・7c		N-88°-W	円	-	4.2 × 3.4	5				不定形石器	230	縄文時代中期後葉	
SI19 竪穴住居跡	第21図	27	3d・3e	SI06に切られる	N-10°-E	楕円	(6.9)	(3.7) × 3.0	25		石囲炉		スクレイパー・多面体敲石・石皿3、異形石器・多面体磨石・敲磨器類2、大木9式	7881	縄文時代中期後葉	
SI20 竪穴住居跡	第22図	28	3f・3g・(4f・4g)	SI04・05・27・31を切る	-	楕円?	-	-	15		地床炉		大木9式	2060	縄文時代中期後葉	
SI21 竪穴住居跡	第23図	29	4m・4n・5n		N-80°-E	円	(5.6)	3.9 × (2.3)	14				大木9式	3807	縄文時代中期後葉	
SI22 竪穴住居跡	第23図	30	4n・4o・5n・5o		N-0°	円?	(9.4)	4.8 × (3.1)	25				大木9式	1591	縄文時代中期後葉	
SI23 竪穴住居跡	第24図	31・32	6f・6g・7f・7g	SI24に切られる	N-82°-E	楕円	(11.2)	4.8 × 4.1	17		石囲炉		多面体敲石・磨製石斧2・敲磨器類2、大木9式	3079	縄文時代中期後葉	
SI24 竪穴住居跡	第24図	33	6g・6h・7g・7h	SI23・26を切る	N-81°-E	円	(10.3)	4.3 × 3.8	40				磨製石斧2・敲磨器類4・垂飾(紵紋岩)、大木9・10式	8675	縄文時代中期後～未葉	
SI25 竪穴住居跡	第25図	34	6c・6d・7c・7d		N-61°-W	円	-	(4.2) × 3.7	15				敲磨器類、大木9式	458	縄文時代中期後葉	
SI26 竪穴住居跡	第25図	35	(6g・6h・7g・7h)	SI24に切られる	-	円	-	(5.8) × (5.3)	20				大木9式	1109	縄文時代中期後葉	
SI27 竪穴住居跡	第26図	36	2f・3f	SI20に切られる	-	円	-	(5.3) × (2.3)	30		石囲炉			-	縄文時代中期後葉	
SI28 竪穴住居跡	第26・27図	37・38	2g・2h・3g・3h	SI36に切られる	N-40°-W	円	(27.7)	4.8 × 3.8	25		複式炉横位埋設土器炉		石筥、大木9・10式	13004	縄文時代中期後葉	
SI29 竪穴住居跡	第27図	39	3i・3j・3k	SI27を切る	N-5°-W	楕円	(16.9)	(7.6) × (3.0)	35		複式炉		敲磨器類2、大木9・10式	1152	縄文時代中期後葉	
SI30 竪穴住居跡	第27図	39	3j	SI29と重複関係 不明	-	楕円	-	(4.4) × (1.6)	32		(石囲炉)			1143	縄文時代中期後葉	
SI31 竪穴住居跡	第28図	40	(3e・3f・3g・4e・4f・4g)	SI03.04.20に切られる	-	円?	-	-	24		石囲炉		敲磨器類	191	縄文時代中期後葉	
SI32 竪穴住居跡	第28図	3	4f	SI02に切られる	-	円	3.3	2.3 × 2.1	13		石囲炉			-	縄文時代中期後葉	
SI33 竪穴住居跡	第29図	41	3i.3j.4i.4j	SI01に切られる	N-38°-W	円	5.3	2.8 × 2.7	13		石囲炉			696	縄文時代中期後葉	
SI34 竪穴住居跡	第29図	42	2o・3o	SI01に切られる	N-21°-W	円	4.6	2.8 × (2.2)	12					1395	縄文時代中期後葉	
SI35 竪穴住居跡	第29図	43	3m		N-24°-W	円	2.5	(2.8) × (1.4)	35				大木9式	614	縄文時代中期後葉	
SI36 竪穴住居跡	第30図	44	3h・3i	SI28と新旧不明	N-79°-W	楕円	-	(6.6) × (3.8)	15		複式炉			88	縄文時代中期後葉	
SI37 竪穴住居跡	第30図	45	2g・2h・3g・3h	SI28を切る	N-67°-W	円	(3.2)	4.4 × (1.6)	75		石囲炉		大木9式	164	縄文時代中期後葉	
SI38 竪穴住居跡	第30図	46	3i	SI29に切られる	N-8°-W	円	-	(3.4) × (3.0)	(0)		土器埋設炉		大木9式	2112	縄文時代中期後葉	
SD01 溝跡	第32図	47	6b・6c・6d	SI14・15・18を切る	N-38°-W N-66°-E	-	-	-	20							
SN01 焼土遺構	第32図	47	4i		N-82°-E	-	-	0.6 × 0.5								
SK04 土坑	第32図	47	3i		N-83°-W	隅丸方形	-	1.1 × 1.0	25							
SK05 土坑	第32図	47	3j・3k		N-61°-E	不整形	-	1.1 × 0.7	25				大木8b式			

3 出土遺物

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ 19 箱、内訳は中期後半の大木 8 b～10 式段階のものが主体で、他に縄文早期、前期、後期、晩期の土器がごく少量出土している。石器は中コンテナ 14 箱程の出土量がある。石鏃等の定型的な剥片石器の量は少なく、河川礫を素材とした敲磨器類が過半数を占める。また磨製石斧が 18 点含まれる。この他、黒曜石剥片 2 点、未加工の琥珀原石片 9 点出土している。

本節では縄文土器、土製品、石器についてそれぞれ遺構内出土遺物、遺構外出土遺物に分けて記載する。個々の特徴等については第 3 表以下遺物観察表に記載した。

(1) 縄文土器 (第 33～57 図 写真図版 48～66)

< SI01 住居跡出土土器 >

No. 1～8 を掲載した。No. 1 は弧状沈線を含む無文の口縁部片で口唇内面側が面取りされる。No. 3 は小型薄手の大木 9 式後半段階破片で、胴部上半が内湾するキャリパー形を呈する。No. 3 a～c の 3 片は同一個体だが、全体形状を推定図示するにはやや不足する。No. 4・5・6 は地文のみの深鉢破片。

No. 7・8 は胎土に繊維を含む前期初頭段階に相当する破片。No. 7 は口縁部無文部に単節縄文原体を押圧し弧状のモチーフを作り出している。No. 8 は非結束羽状縄文を施す小片で、器面の一部が剥落しておりその内部にも縄文施文が観察される。製作時の粘土紐積み上げ毎に縄文回転施文を行っているものと考えられる。

< SI02 住居跡出土土器 >

No. 9 の 1 個体を掲載した。複節 RLR 縄文を縦位回転する深鉢胴部片である。

< SI03 住居跡出土土器 >

第 33 図 No. 10～第 35 図 No. 30 を掲載した。No. 10 は上半が緩く外反する平縁の深鉢。埋設土器の No. 11 は上半が大きく外反する深鉢で外面口縁部に横方向のミガキ調整が施される。No. 12 の上半大きく内湾する深鉢は口縁端部が短く屈曲外反する。No. 13 は頸部屈曲部に横長の刺突列点が施される。小型深鉢口縁部の No. 14 は頸部隆帯に連続した刻目が加えられる。

No. 15～20 は沈線区画内に縄文充填の文様を持つ深鉢破片。大木 9 式後半段階から大木 10 式前半段階と考えられる。No. 21 は幅広の隆線上面に縄文が加えられ帯縄文風となっている。No. 22 は頸部に橋状突起を持つ壺口縁部片。

No. 25～28 は地文のみの深鉢口縁部片。No. 29 は小型深鉢の底部破片である。No. 30 は細かい矢羽根状の列点が連続する押し引き沈線が施される破片で、中央の鋸歯文も同一工具を使用している。早期中葉の貝殻文土器に伴うものと考えられる。

< SI05 住居跡出土土器 >

No. 31～No. 35 を掲載した。No. 31 は中型の深鉢下部欠損個体。推定 4 単位の緩い波状口縁頂部に刻目を持ち、その下に円形の凹みと半裁竹管先端による刺突列点が施される。胴部文様は沈線区画内縄文充填による横長の S 字状モチーフが入り組む。No. 32 は胴上半が直立に近い地文のみの深鉢。No. 34 は頸部に 2 段の刺突列が巡り胴部に縦位区画文が施される。

< SI06 住居跡出土土器 >

第 35 図 No. 36～第 37 図 No. 54 を掲載した。No. 36 の小型深鉢は J 字状の無文部が展開する。No. 37 も類似した文様だが無文部が下半で接続するモチーフと見られる。No. 38 は頂部に刻みを持つ波状口縁

の小型深鉢で、円形の凹みと半裁竹管によるD字形の刺突列が口縁部に展開する。No. 39は口縁部を欠損する大型深鉢。上半に展開するJ字形の無文部内に楕円形刺突列が巡る。沈線は細く鋭い。No. 40は3単位の波状口縁で頸部に沈線と円形刺突列を持つ。No. 50は上半が外反する大型の略完形深鉢。底面に2枚以上の木葉痕が重複している。No. 54は沈線区画の内部に貝殻腹縁圧痕を持つ早期中葉の土器片である。

< SI07 住居跡出土土器 >

No. 55・56の2片を掲載した。両者とも縦長楕円形区画内に充填縄文を施す大木9式深鉢の胴部片である。

< SI08 住居跡出土土器 >

No. 57～No. 63を掲載した。No. 57は地文のみの小型壺型土器。胴部中央がくの字形に張り出す。炉埋土からはNo. 58の大木9式土器片が出土している。No. 59・60は口縁部外反する地文のみの深鉢口縁部片。No. 61の内湾する口縁部片は地文を口縁部のみ横位回転する。No. 63は小型深鉢底部で残存部分は無文である。

< SI09 住居跡出土土器 >

No. 64・65の2点を掲載した。No. 64は直立気味の深鉢上半で、口縁部内削ぎで短く外反する。

< SI10 住居跡出土土器 >

No. 66・67の2片を掲載した。No. 66は小径の円形刺突列点文を持つ。

< SI11 住居跡出土土器 >

床面から埋土中、検出面にかけて比較的多数の土器が出土している。第38図No. 68～第40図No. 99までの33点を掲載した。No. 68は略完形の大木9式深鉢で平坦な口縁直下が小さく外反し、胴部には並列する逆U字状の文様が展開する。No. 69は薄手小型の深鉢で内外面に焼け弾けの痕跡が顕著に残る。No. 70～72は波状口縁頂部に隆線による大柄な渦巻文が配置される一群。No. 72は突起によって文様構成に差があるものと考えられる。No. 73は単純な文様構成の破片で平縁の可能性が高い。No. 74の隆線は上面が平坦になり断面形台形を呈する。大木8b式段階に比定される。No. 76～78は突起頂部から垂下する隆線以外は胴部に沈線文が展開する。

No. 79～81は沈線による楕円形区画文様を持つ土器片。No. 87は紡錘形の器形と見られる壺胴部～底部破片で、2本平行する隆線を繋ぐ橋状突起を持つ。No. 91は大型の粗製深鉢上半。平縁で器面内外面に焼け弾けの痕跡が残る。No. 96は小型の鉢形土器。No. 99は中型の略完形深鉢で口縁部に補修孔が開けられる。

< SI12 住居跡出土土器 >

第40図No. 100、第41図No. 101の2点を掲載した。No. 100は頸部に立体的な突起が展開する球胴形の深鉢大部破片で、胴部に縦長の区画文が展開する。No. 101は中型の略完形深鉢。口縁直下が小さく外反する。

< SI14 住居跡出土土器 >

No. 102～No. 112を掲載した。No. 102～104は曲線的な文様を持つ外反する口縁部片。No. 111は縄文の上に斜行する平行沈線が加えられる。全体の文様構成は不明で時期も特定できない。No. 112は縄文晩期後葉の台付鉢破片。住居埋土中から出土している。

< SI15 住居跡出土土器 >

No. 113～No. 123の11点を掲載した。No. 114は立体的な隆線による渦巻文が施文された突起部分破片。No. 116・117は縦位楕円形文が並列する。No. 121は小型の鉢胴部で頸部に刺突列点文が施される。

< SI16 住居跡出土土器 >

No. 124 ~ No. 127 の 4 点を掲載した。いずれも沈線区画に充填縄文文様を持つ破片である。No. 127 は無文部が盛り上がる隆沈線が用いられる。

< SI17 住居跡出土土器 >

No. 128・129 の 2 点を掲載した。No. 128 は曲線的な無文部からなる文様が施される。

< SI19 住居跡出土土器 >

第 42 図 No. 130 ~ 第 43 図 No. 143 を掲載した。No. 130 は幅広の隆線で縁取られた文様が展開し頸部に刺突列点が巡る。No. 131 はほぼ完形に復元された深鉢。無文の口縁が急角度で外反する。底面には笹の葉の圧痕が見られる。No. 132 は大型深鉢上半で、縄文原体末端の回転圧痕が顕著に縦走する。No. 133 は折り返しにより一定の幅で口縁部に無文部が巡る。No. 138 は屈曲する壺形土器の肩部破片と判断した。鋭い突起状の隆線を持つ。No. 143 は口縁部に山形突起を持つ貝殻文土器。沈線と貝殻腹縁圧痕による文様構成で物見台式に比定される。

< SI20 住居跡出土土器 >

No. 144 ~ No. 151 の 8 点を掲載した。No. 144 は小型の開く深鉢破片で波状口縁頂部から隆線渦巻文が垂下し間に縦長の楕円形区画文が配置される。No. 150 は大きく内湾する深鉢上半。平縁で口唇部は角張る。なお、No. 151 の底部破片と同一個体と判断したが図上復元が困難なため別個に掲載した。

< SI21 住居跡出土土器 >

No. 152 ~ No. 160 の 9 点 11 片を掲載した。No. 155 は頸部が屈曲し 2 段に内湾する器形の大型深鉢。口縁突起部に配置される大柄な渦巻文中央に貫通孔を持つ。口縁部文様は隆線区画楕円形文の中間に沈線区画が配置される。No. 158 の小型深鉢体部片は 2 段の刺突列点文が巡り、下部に縦位沈線文が垂下する。No. 160 は縄文原体圧痕による波状、菱形の文様が展開する口縁部破片。胎土には繊維を含む前期前葉段階の土器と判断される。

< SI22 住居跡出土土器 >

No. 161 ~ No. 164 の 4 点を掲載した。隆線、沈線文を持つ中期後半段階の破片である。

< SI23 住居跡出土土器 >

第 44 図 No. 165 ~ 第 45 図 No. 170 の 6 点を掲載した。No. 167 ~ 169 は縦位長楕円形区画文の一部が見える体部破片。No. 170 は大型の粗製深鉢体部破片である。

< SI24 住居跡出土土器 >

No. 171 ~ No. 183 の 13 点を掲載した。No. 171 は器面の摩滅が進み胴部の文様構成が判別しがたいが、隆線文様が展開すると見られる。No. 175 は橋状突起を持つ壺胴部破片である。No. 180 は小型で直線的に開く深鉢破片。No. 183 はミニチュア土器の底部である。

< SI25 住居跡出土土器 >

No. 184 の 1 点を掲載した。沈線文様を持つ胴部破片である。

< SI26 住居跡出土土器 >

No. 185・186 の 2 点を掲載した。No. 185 は半裁竹管による円形刺突列点が施される口縁部片。No. 186 は幅広の隆線文が施文される。

< SI28 住居跡出土土器 >

床面および埋土中から比較的多量の土器が出土している。第 45 図 No. 187 ~ 第 47 図 No. 208 を掲載した。No. 187 は推定 6 単位の突起を持つ波状口縁深鉢上半で、縦位に区画された沈線文が配置される。No. 190 は炉埋設土器に設置された大型深鉢下半。底面に敷物圧痕を持つが一部はナデ消されている。No.

204 は口縁部が急に窄まる器形の深鉢。頸部は内面に大きく屈曲する。No. 206 は SI21 住居跡出土 No. 160 と同一個体の前期初頭破片。内面に横方向の条痕を持つ。No. 207 は繊維を含む非結束羽状縄文が施された前期初頭破片である。

< SI29 住居跡出土土器 >

No. 209・210 の 2 点を掲載した。No. 210 は横位に取り付く橋状突起を持つ胴部破片。縦方向の沈線文が施文される。

< SI31 住居跡出土土器 >

No. 211 の 1 点を掲載した。口縁部が緩く外反する粗製深鉢口縁部片である。

< SI33 住居跡出土土器 >

No. 212 の 1 点を掲載した。中型の粗製深鉢で胴部上半はわずかに外反して立ち上がる。地文には原体末端の結節部圧痕が等間隔に並ぶ。

< SI34 住居跡出土土器 >

No. 213・214 の 2 点を掲載した。No. 213 は直線的に開く粗製深鉢口縁部片。No. 214 は比較的大型の粗製深鉢胴部片である。

< SI35 住居跡出土土器 >

No. 215～No. 217 の 3 点を掲載した。No. 215 は口縁部文様の隆線が緩く外反する突起部に連続している。No. 216・217 は薄手小型の口縁部でいずれも複節縄文のみが施される。

< SI37 住居跡出土土器 >

第 47 図 No. 218～第 48 図 No. 221 の 4 点を掲載した。No. 218 は略完形の壺形土器。胴部側面に上下 2 対の橋状突起が 2 単位施される。中間には上下 2 段にわたり楕円形モチーフを中心とした文様が展開する。No. 219 は完形の小型深鉢。単純に内湾して開く器形で底面に敷物圧痕が残る。No. 220 は口縁部が短く外反する大型の深鉢片。No. 221 は深鉢胴部片である。

< SI38 住居跡出土土器 >

No. 222～No. 225 の 4 点を掲載した。No. 222 は緩く外反して立ち上がる口縁部片。No. 223 の底部破片は底面に敷物圧痕が残る。No. 224 は炉埋設土器に使用されていた深鉢下半で、底面に敷物圧痕を持つ。

< SK05 土坑出土土器 >

No. 226～No. 228 の略完形個体 3 点が出土している。No. 226 はキャリパー形の中型深鉢で、口縁部に横位のクランク状モチーフとなる隆線文様が展開し、胴部には縦位回転の地文が施される。No. 227 も中型のキャリパー形に近い器形の深鉢で、屈曲気味に内湾する口縁部に立体的な突起がつく。突起上部は欠損により形状不明だが中央に貫通孔を持つ。胴部地文は上部横位回転、下部縦位回転となっている。No. 228 は大きく単純に開く鉢型土器。

< 遺構外出土土器 >

遺構外では 6 g グリッド付近を中心に黒褐色土層等からの土器片出土が見られる。小破片が主体となっているが凡その時期判定が可能なものを中心に選抜し図示している。掲載は出土地点、層位とは別に型式学的な配列とした。

No. 229～236 は口縁部に施される隆線文や楕円形の沈線文が施文される大木 9 式土器片。No. 237～245 は横位に展開する磨消縄文文様が主体となり刺突列も加えられる大木 10 式前半段階の土器片。No. 246 の壺型土器頸部片は幅広に調整された隆帯が巡る。No. 247 は小型の鉢型土器で胴部に波頭状の磨消縄文と頸部に突起を持つ。No. 248～255 は縄文中期後葉に比定される地文のみ施文される粗製土器片。口縁部の無文部が外反するものが主体である。No. 259 は外面に撚糸文が施され内面に縦横の条

痕を持つ縄文前期初頭の土器片。No.260は縄文後期前葉の外反する口縁部片。沈線間に縄文が充填される施文手法が取られる。No.261・262は縄文中期後葉に比定されるミニチュア土器。器形は異なるが両者とも安定した底部を持ち地文のみ施される。

(2) 土製品 (第50図 写真図版57)

No.261は縄文時代中期後葉土器片を利用した円盤状土製品。側縁は研磨され円形に仕上げられる。今回の調査で出土した土製品はこの1点のみである。

(3) 石器 (第51～57図 写真図版67～73)

石器は器種ごとの掲載とした。

< SI01 住居跡出土石器 >

No.331の垂飾を掲載した。縦長で上部に孔を穿った痕跡が残るが、未貫通である。表裏両方向から穿孔され、孔径は約5mmである。孔は擦痕が円を描くように残り、穿孔具の回転によって穿孔されている。中央部で最大厚となり、上下端部に向かって緩やかに薄くなる。全面を磨き、表面は滑らかである。石質は蛇紋岩である。他、敲磨器類が1点出土している。

< SI02 住居跡出土石器 >

No.285、297の敲磨器類、No.312の磨製石斧を掲載した。No.285、297はともに多面に磨面、敲打痕がみられる。No.312の磨製石斧は全面を磨いている。

< SI03 住居跡出土石器 >

No.287、296、302、307、311、337、340、343を掲載した。No.287、296は側面に使用痕のある磨石である。また、わずかに上下側面に敲打痕がみられる。No.302は全面に敲打痕がある多面体敲石である。No.307は側面に敲打痕がみられる。No.311は石斧である。自然面を残し、打点に使用痕がみられる。No.337は床面直上から出土し、皿状磨面を下にした状態で出土した(第9図)。表裏両面に磨面が認められ、出土した状態では溝状磨面が上になって出土した。側面の一部を除き敲打痕がほぼ全面にみられる。No.340も石皿である。床面から磨面が上向きで出土した。No.343は台石である。床面の複式炉脇から出土した。

< SI04 住居跡出土石器 >

No.336、339を掲載した。いずれも石皿で同一個体である。両者とも被熱しており、表裏両面に磨面が認められる。No.336は裏面に溝状磨面を持つ。

< SI05 住居跡出土石器 >

No.310の敲磨器類1点を掲載した。側面に敲打痕がみられる。

< SI06 住居跡出土石器 >

No.286、288、293、298、305、324を掲載した。No.286、288、293、298は側面に磨面を持つ。No.305は表に敲打痕がみられる。No.314、324は磨製石斧である。No.319は最大厚を下部にもち、使用による剥離の痕跡がある。No.324は最大厚を上部にもち、下部は欠損している。

< SI11 住居跡出土石器 >

No.267、268、270、282、284、290、309、313、314、316、321、322、334、335、339を掲載した。No.267は石匙である。摘み部のくびれは浅い。先端は欠損している。No.268は石篋である。No.270はスクレイパーである。No.282はほぼ全面に磨面を持つが、表裏は滑らかであり、側面はざらざらとした磨面である。No.290は表裏両面に敲打痕をもち、側面に磨面がみられる。No.309は礫器である。

No.313、314、316、321、322 は磨製石斧である。No.313 は最大厚を中央に持ち、使用痕が認められる。No.314 は最大厚を下部に持つ。No.316、322 は下部を欠損している。No.321 は上部を欠損している。No.334 は垂飾である。楕円形で上部に貫通孔がある。裏面は剥離により欠損しているため不明である。孔径約 7mm である。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。石質は蛇紋岩である。No.335 は石皿である。上面全面に磨面が認められ、裏面は溝状磨面がみられる。No.339 は石皿である。両面に磨面があり、土器 No.68 (第 38 図) 上部に乗った状態で出土した。

< SI12 住居跡出土石器 >

No.306 の敲磨器類 1 点を掲載した。表裏両面と側面に敲打痕がみられる。

< SI14 住居跡出土石器 >

No.273、280、291、325、327 を掲載した。No.273 はスクレイパーである。No.280 は表面に敲打痕、全面に磨面をもつ。痕 No.291 は側面に磨面と敲打痕がみられる。No.325、327 は磨製石斧である。No.325 は使用痕が認められる。また、上部が欠損している。No.327 は上部のみであるが、下部に二次調整がみられる。

< SI15 住居跡出土石器 >

No.266、299、310 の 3 点を掲載した。No.266 は石錐である。No.299 は扁平気味の円形多面体磨石である。No.310 は石斧で、下部が欠損している。

< SI16 住居跡出土石器 >

No.292、312 の 2 点を掲載した。No.292 は側面に使用痕のある磨石である。

< SI17 住居跡出土石器 >

No.269、278、315、329、330、332 の 6 点を掲載した。No.269 は上部が欠損しているが、2 次加工の痕跡がある。No.278 は全面に磨面、裏面を除いて敲打痕のある敲磨器類である。No.315 は上部を敲打によって整形した石斧である。最大厚を下部に持つ。No.329 は方形の垂飾である。一部欠損している。表裏に擦痕が横位、斜位に残り、上下の中央よりやや片側に 2 つ穿孔されている。孔径約 3mm である。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。下部の孔には紐を通した痕跡がみられる。No.330 は貫通孔のない未加工の垂飾である。全面に擦痕がみとめられる。一部欠損している。No.332 は三角形の垂飾である。表裏両面から穿孔されているが、裏面には穿孔の失敗と推定される未貫通の穿孔痕が 1 か所みられる。No.329、332 とともに石質は蛇紋岩である。垂飾の出土量は本遺跡中、最多の 3 点である。

< SI18 住居跡出土石器 >

No.265 の不定形石器 1 点の掲載である。

< SI19 住居跡出土石器 >

No.272、301、338、341、342 の 5 点を掲載した。No.272 はスクレイパーである。No.301 は扁平気味の円形敲磨器類である。側面に敲打痕がみられる。No.338 は側面の一部が敲打整形された石皿である。表裏両面に溝状磨面をもつ。大部分が欠損している。No.341、342 は両面に磨面のある石皿片である。

< SI20 住居跡出土石器 >

No.264、271、279、283、300 の 5 点を掲載した。No.264 は異形石器で、一部欠損している。No.271 はスクレイパーである。No.279 は円形で全面に磨面がみられ、側面に敲打痕を残す。No.283 は側面に一部敲打痕が見られる。No.300 は当初 3 f グリッドでの出土であったが、遺構精査結果、位置と層位から本遺構のものであると判断した。扁平気味の円形多面体磨石である。

< SI23 住居跡出土石器 >

No.275、277、303、318、320 の 5 点を掲載した。No.275、277 は表裏両面と側面に磨面をもつ。また No.275 は裏面に敲打痕も見られる。No.303 は表裏、側面に敲打痕を持つ多面体敲石である。No.318 は本遺跡最大の磨製石斧である。縦位、横位、斜位と擦痕が前面に認められる。住居の壁際から出土した（写真図版 32）。使用痕は認められない。No.320 は上部を欠損した磨製石斧である。

< SI24 住居跡出土石器 >

No. 276、289、294、308、326、328、333 の 7 点を掲載した。No.276 は表裏、側面に磨面をもち、裏面に敲打痕のある敲磨器類である。No.289、294 は側面片面に磨面のある磨石である。No.308 は表面に 2 か所敲打痕がみられる。No.326 は使用痕の認められる磨製石斧である。上部は欠損している。No.328 は本遺跡では唯一の出土であるミニチュアの磨製石斧である。下部が欠損している。実測図は原寸である。No.333 は蛇紋岩の垂飾である。縦位に擦痕が認められる。楕円形で上部に貫通孔がある。孔径約 7 mm である。孔は、穿孔具の回転によって穿孔されている。

< SI25 住居跡出土石器 >

No. 304 の 1 点を掲載した。側面に敲打痕が認められる。

< SI28 住居跡出土石器 >

No.263 の石鏃 1 点のみの掲載である。

< SI29・30 住居跡出土石器 >

No. 274、295 の 2 点を掲載した。SI29、30 は重複の為、当初、遺構ごとに取り上げることができなかったため、出土遺構は両遺構のどちらかのもので掲載することとした。No.274 は表裏両面と片側面に磨面があり、また裏面に敲打痕が認められる。No.295 は側面に磨面をもつ磨石である。

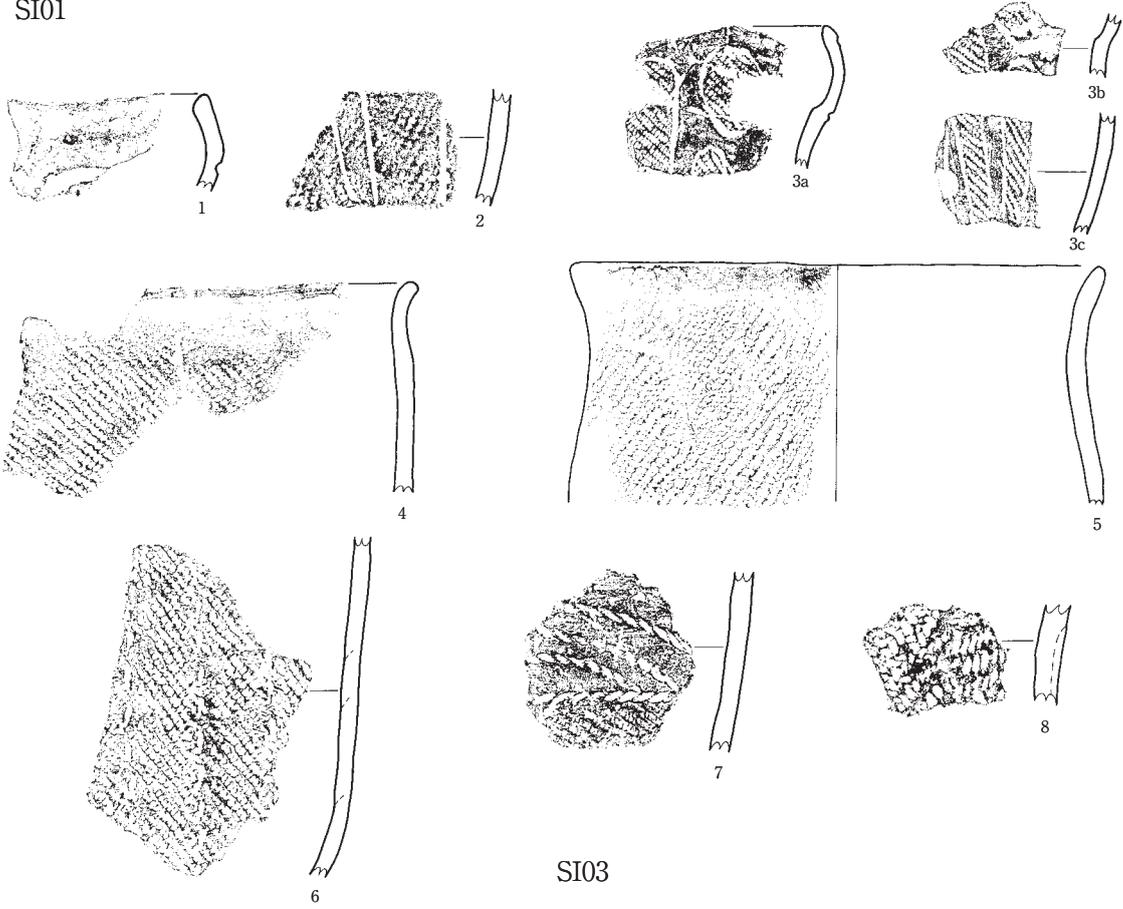
< SI31 住居跡出土石器 >

No. 281 の 1 点を掲載した。全面に磨面があり裏面に敲打痕がみられる。

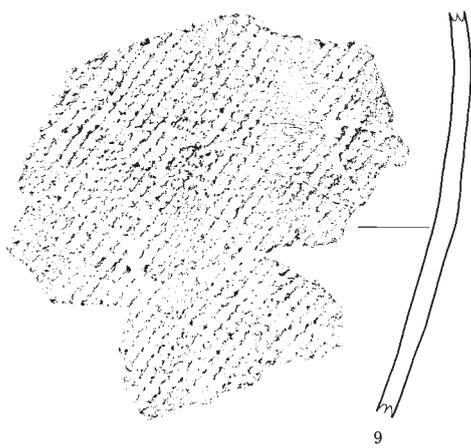
< 遺構外出土石器 >

No.262、317 の 2 点を掲載した。No.262 は石鏃である。No.317 は使用痕跡の残る磨製石斧である。上部を欠損している。

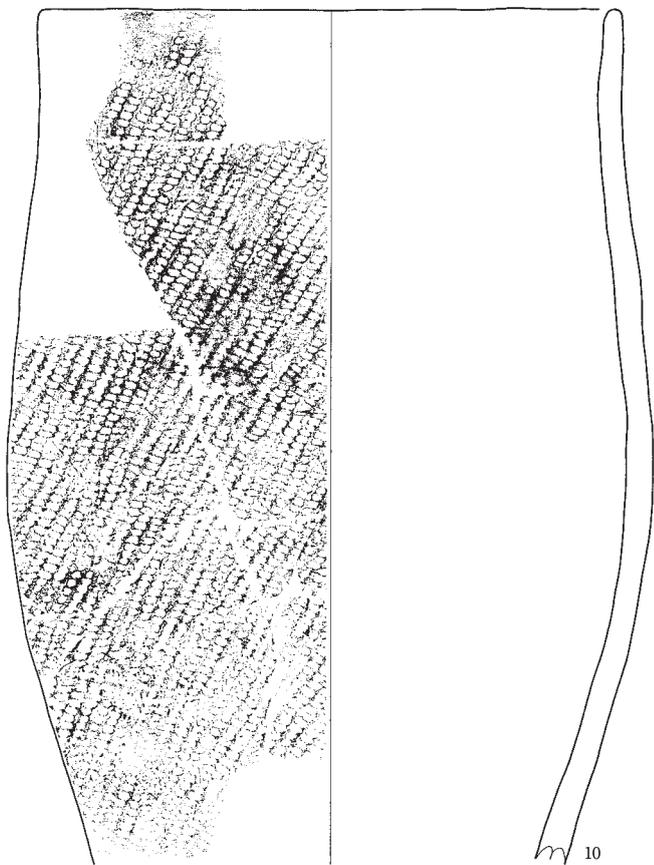
SI01



SI02

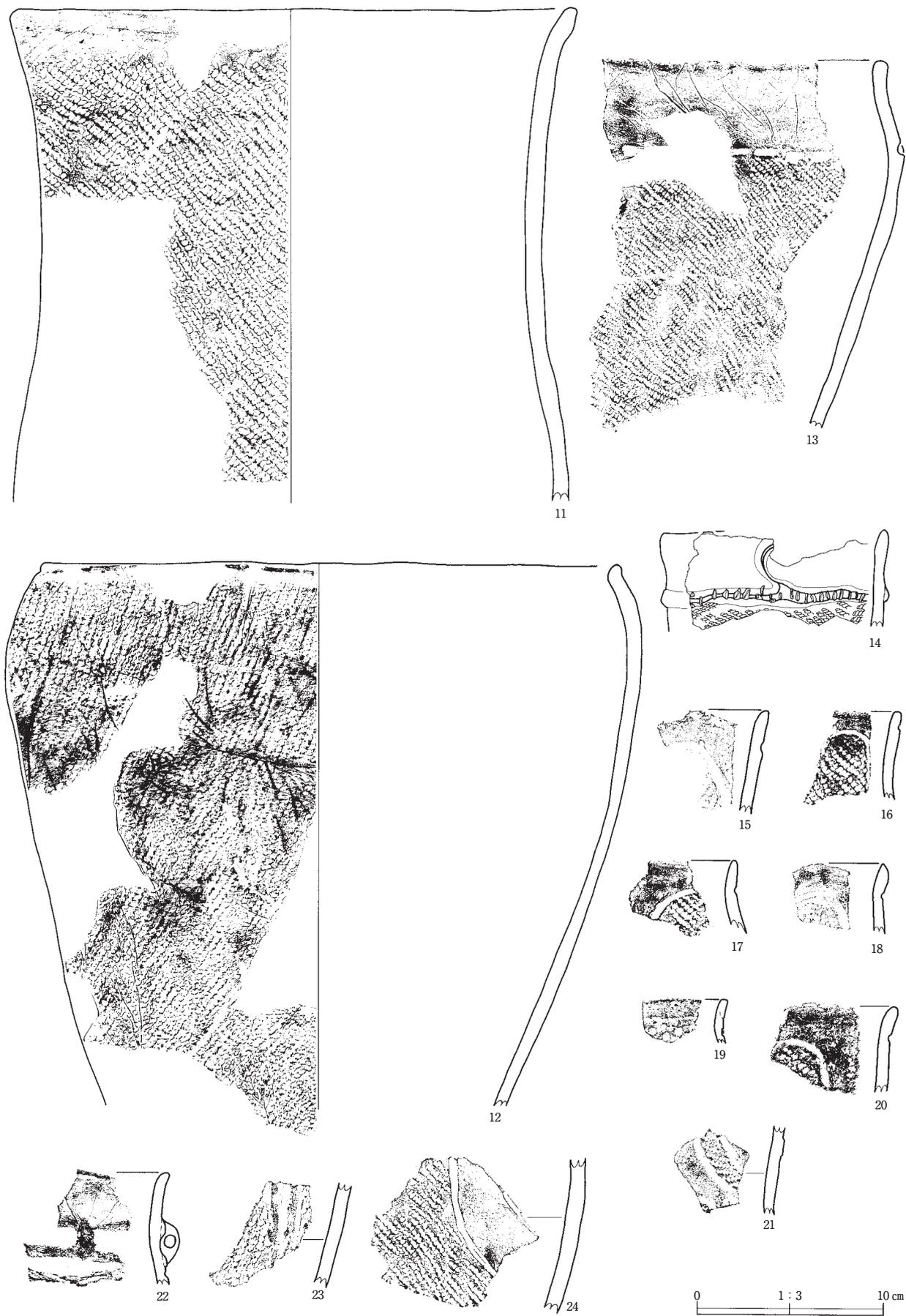


SI03

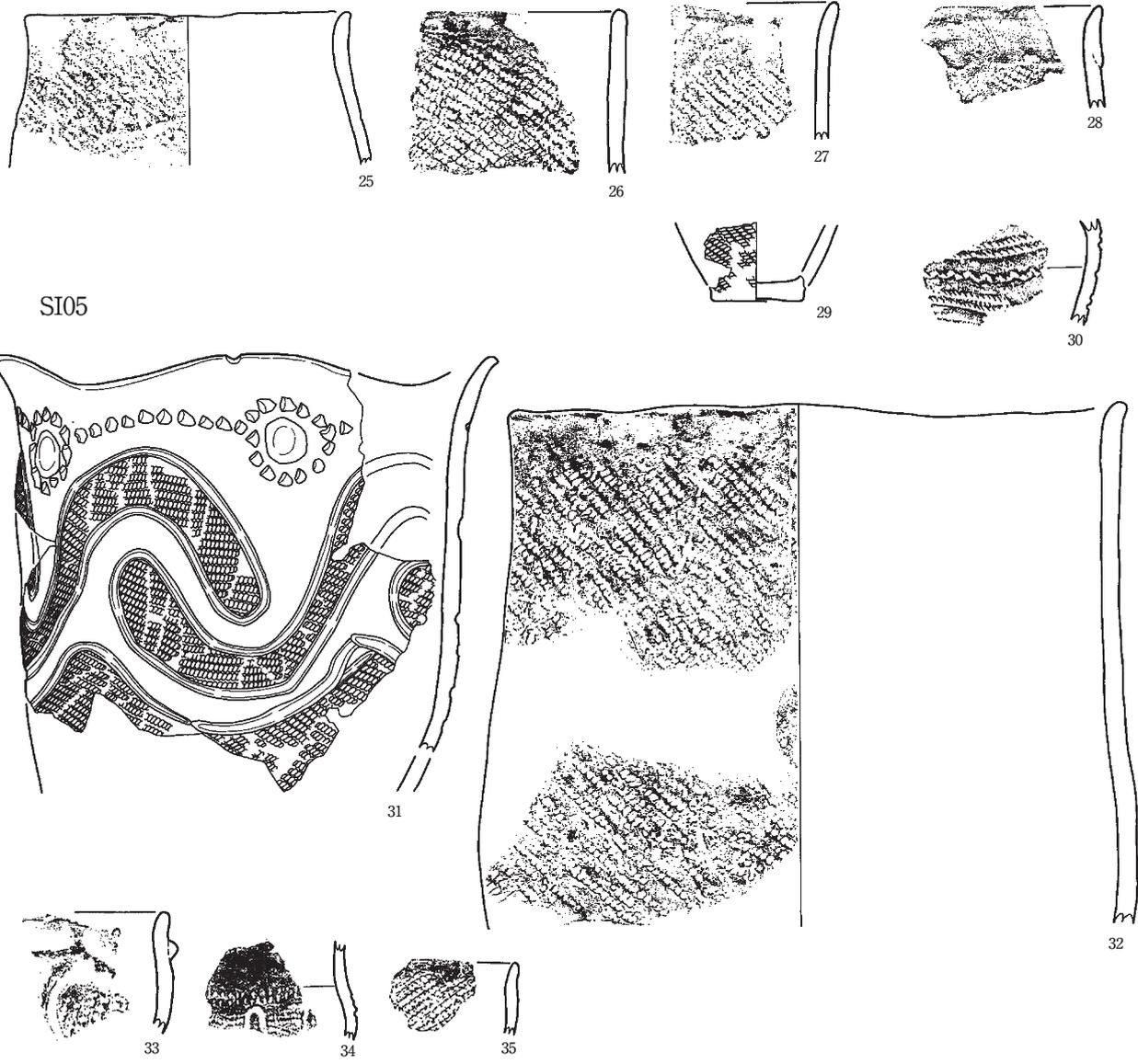


0 1 : 3 10 cm

第33図 出土遺物 縄文土器 (1)

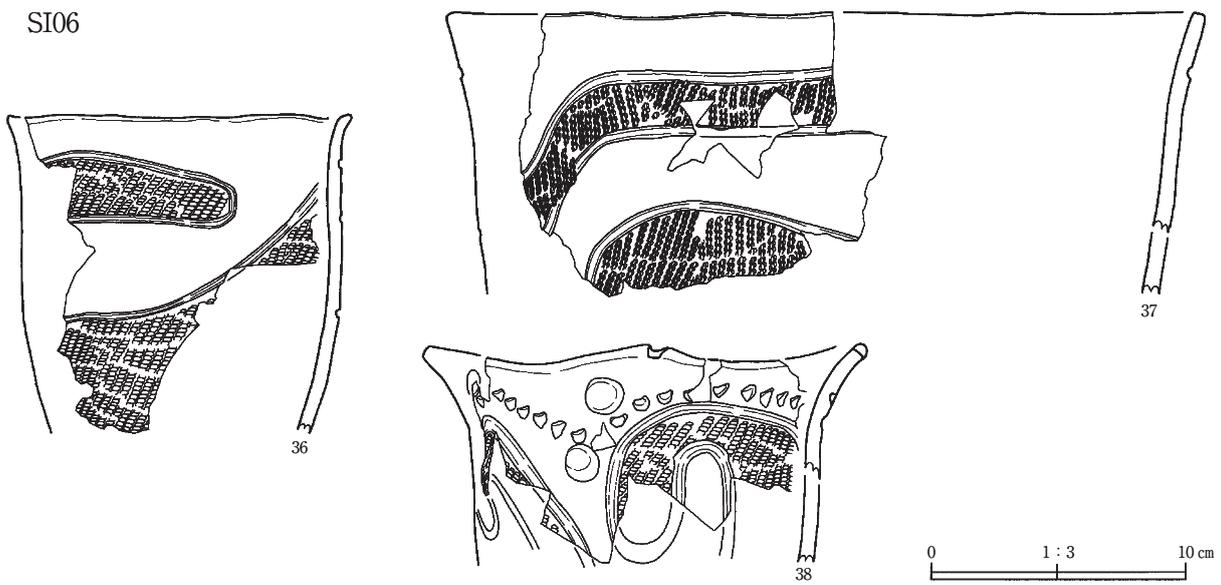


第34図 出土遺物 縄文土器 (2)

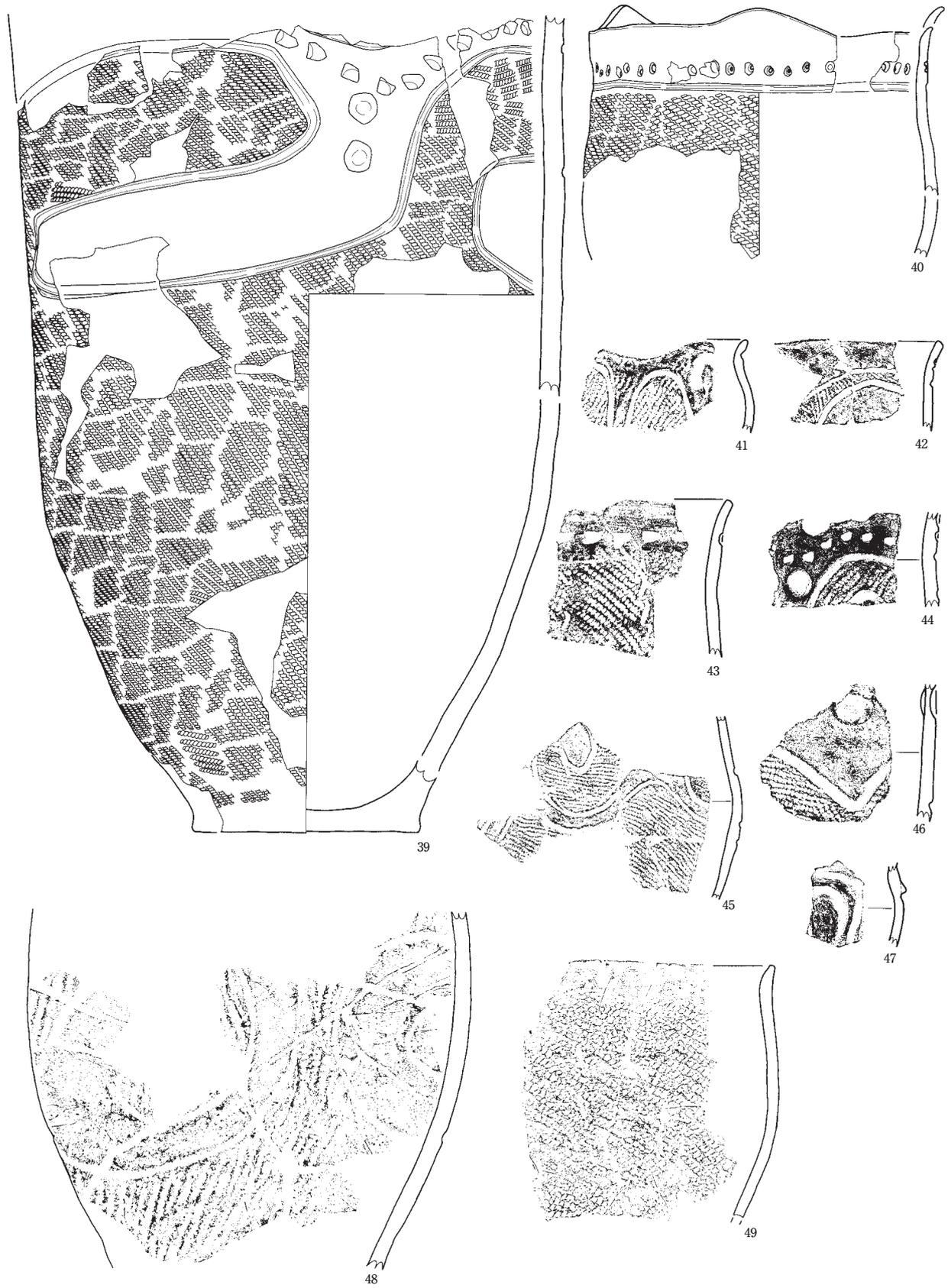


SI05

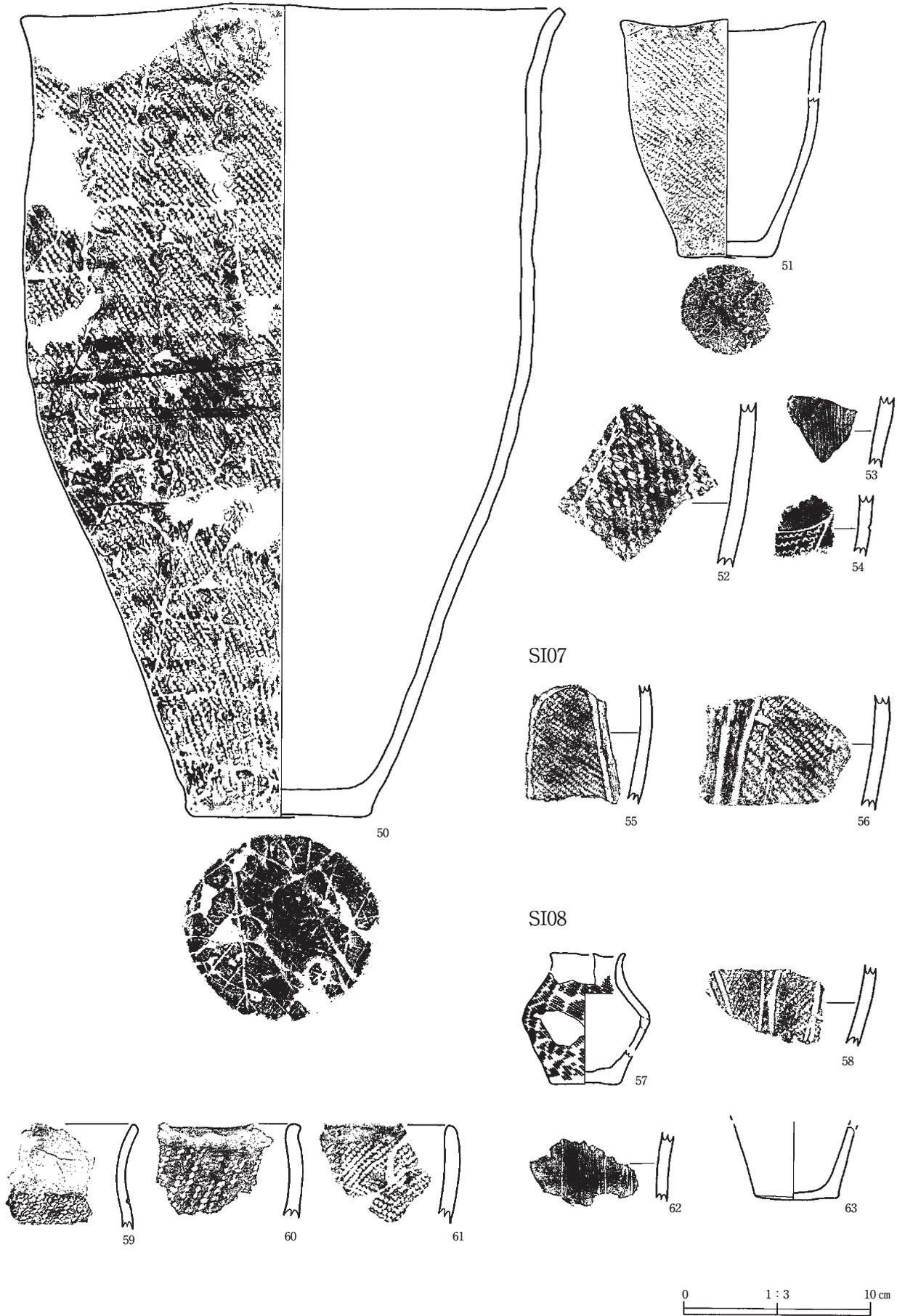
SI06



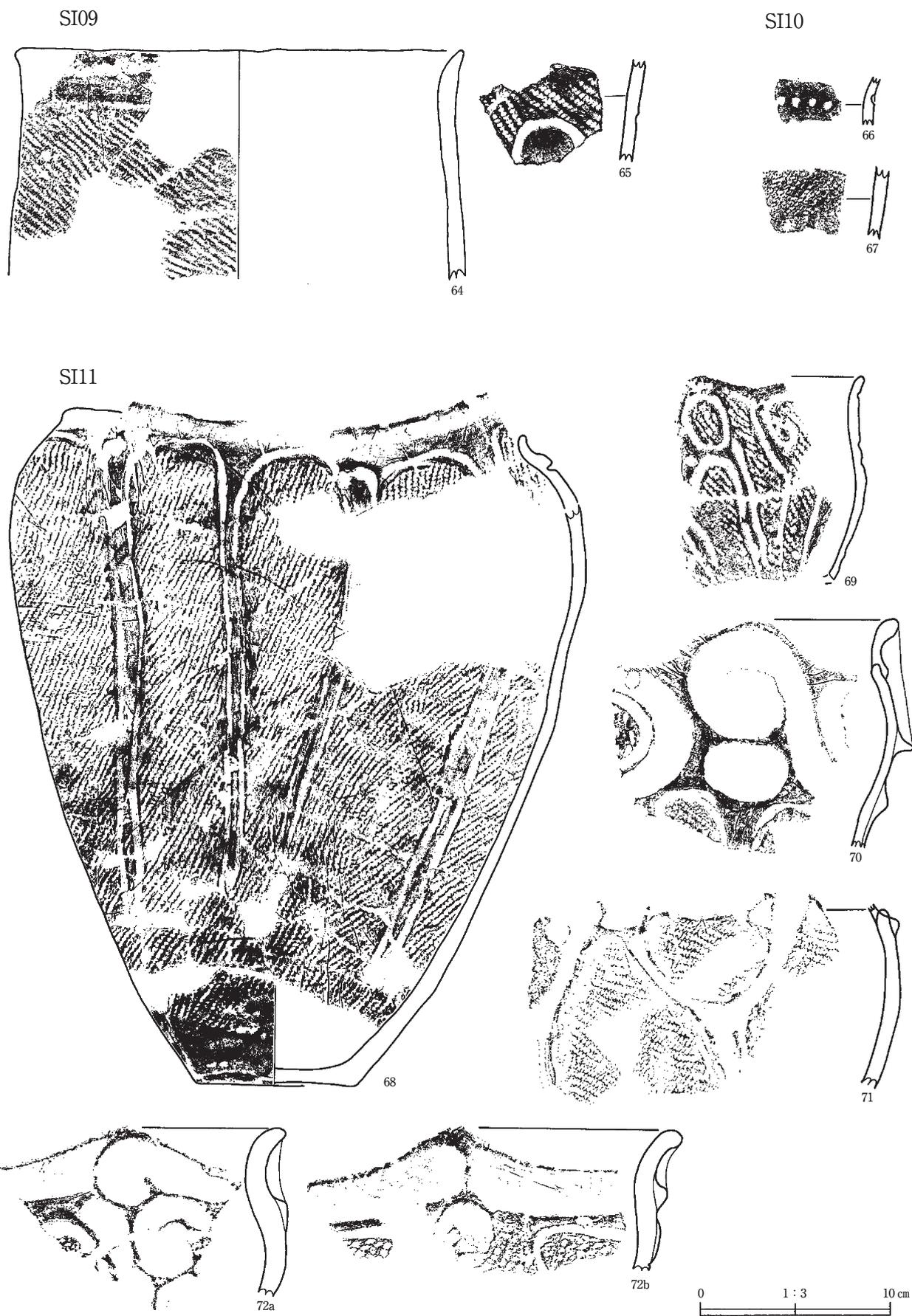
第35図 出土遺物 縄文土器 (3)



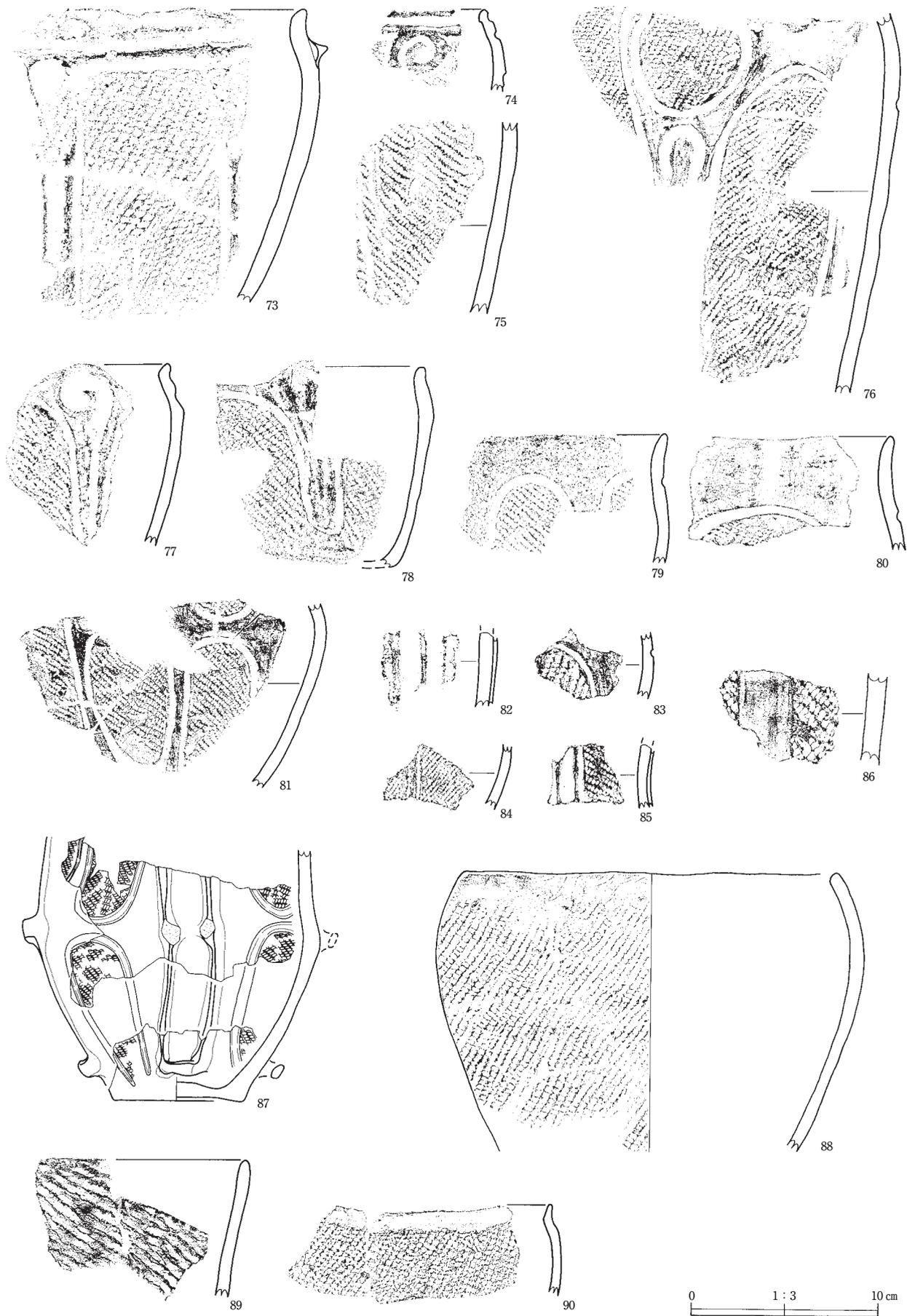
第36図 出土遺物 縄文土器 (4)



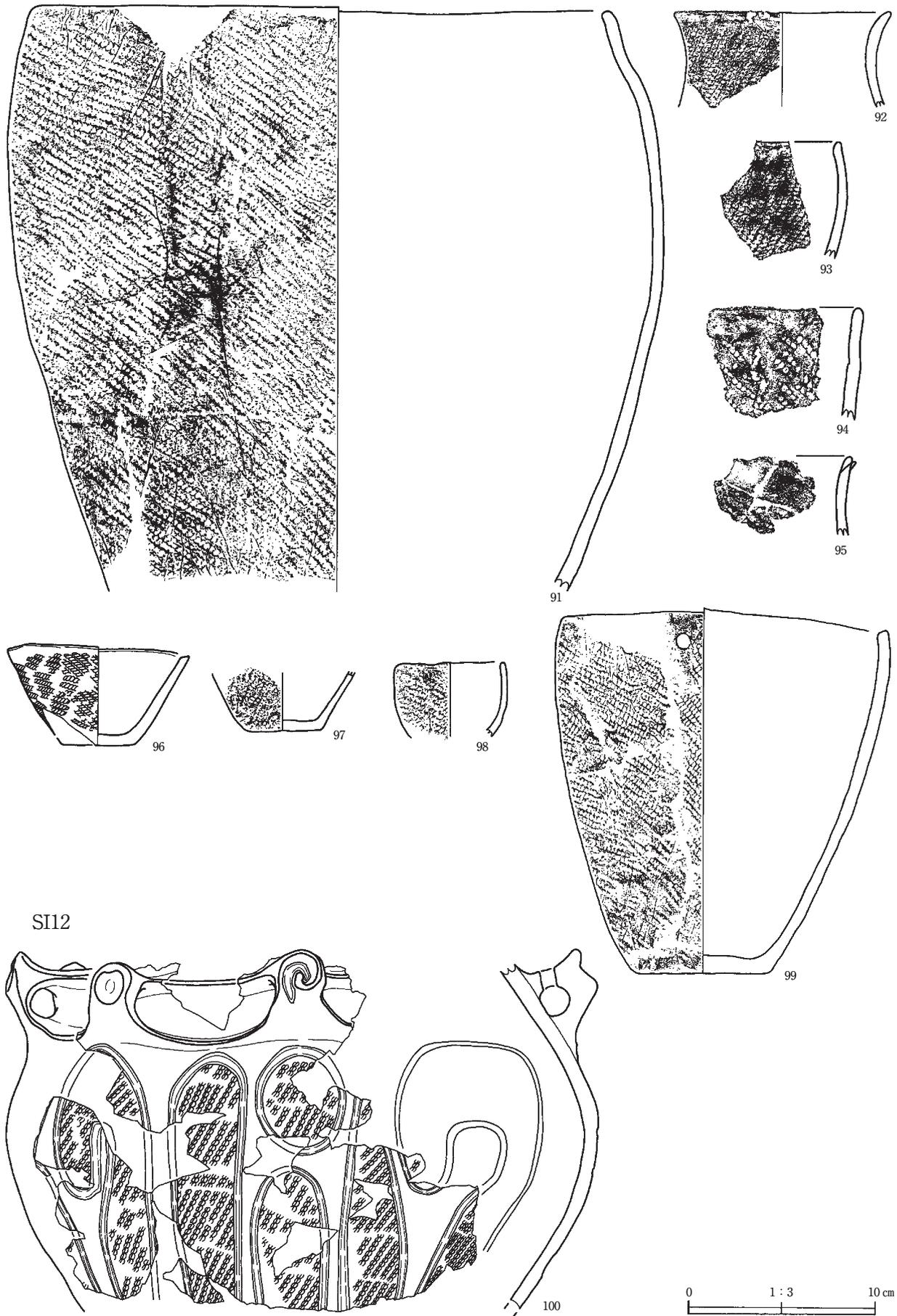
第37図 出土遺物 縄文土器 (5)



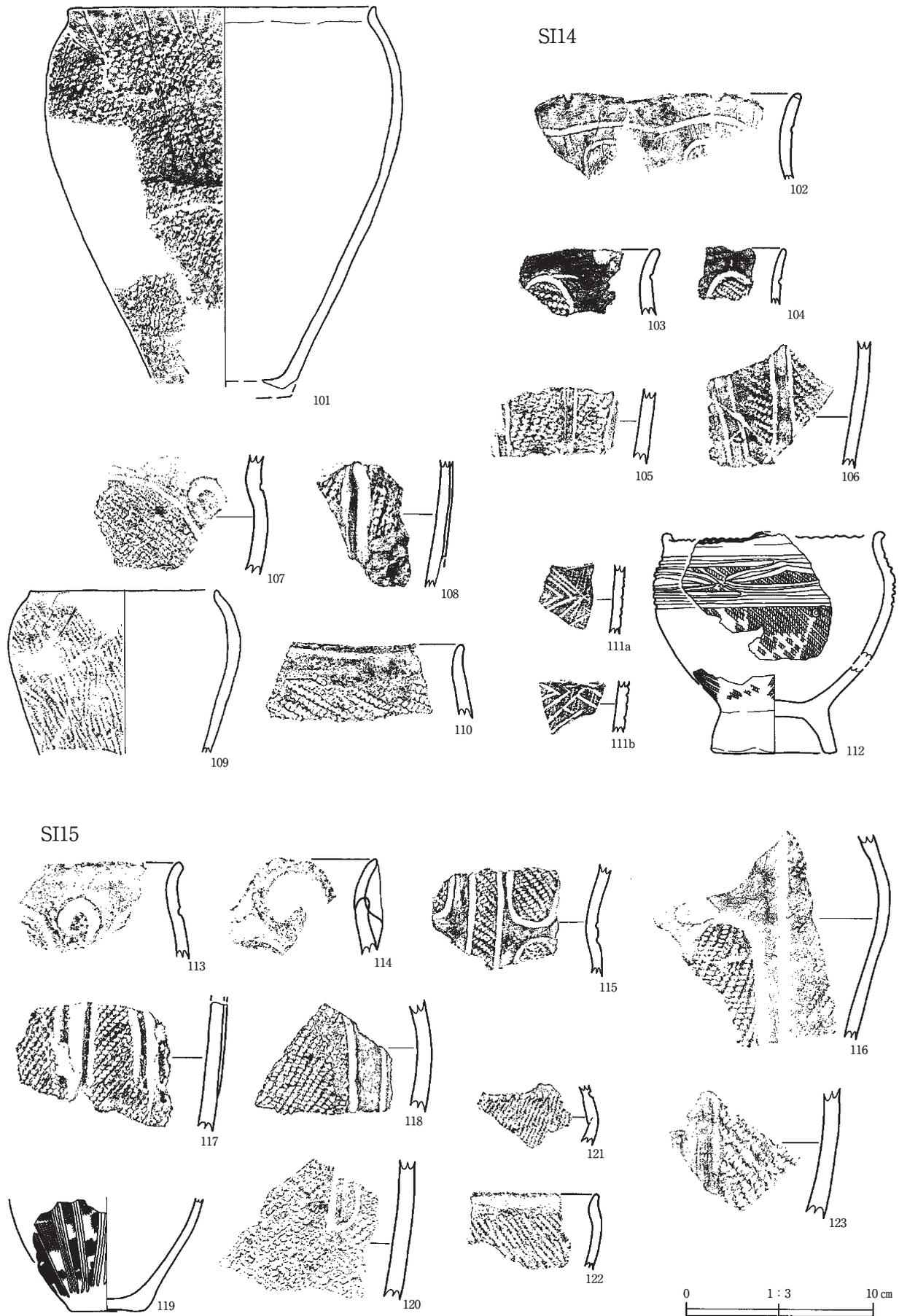
第38図 出土遺物 縄文土器 (6)



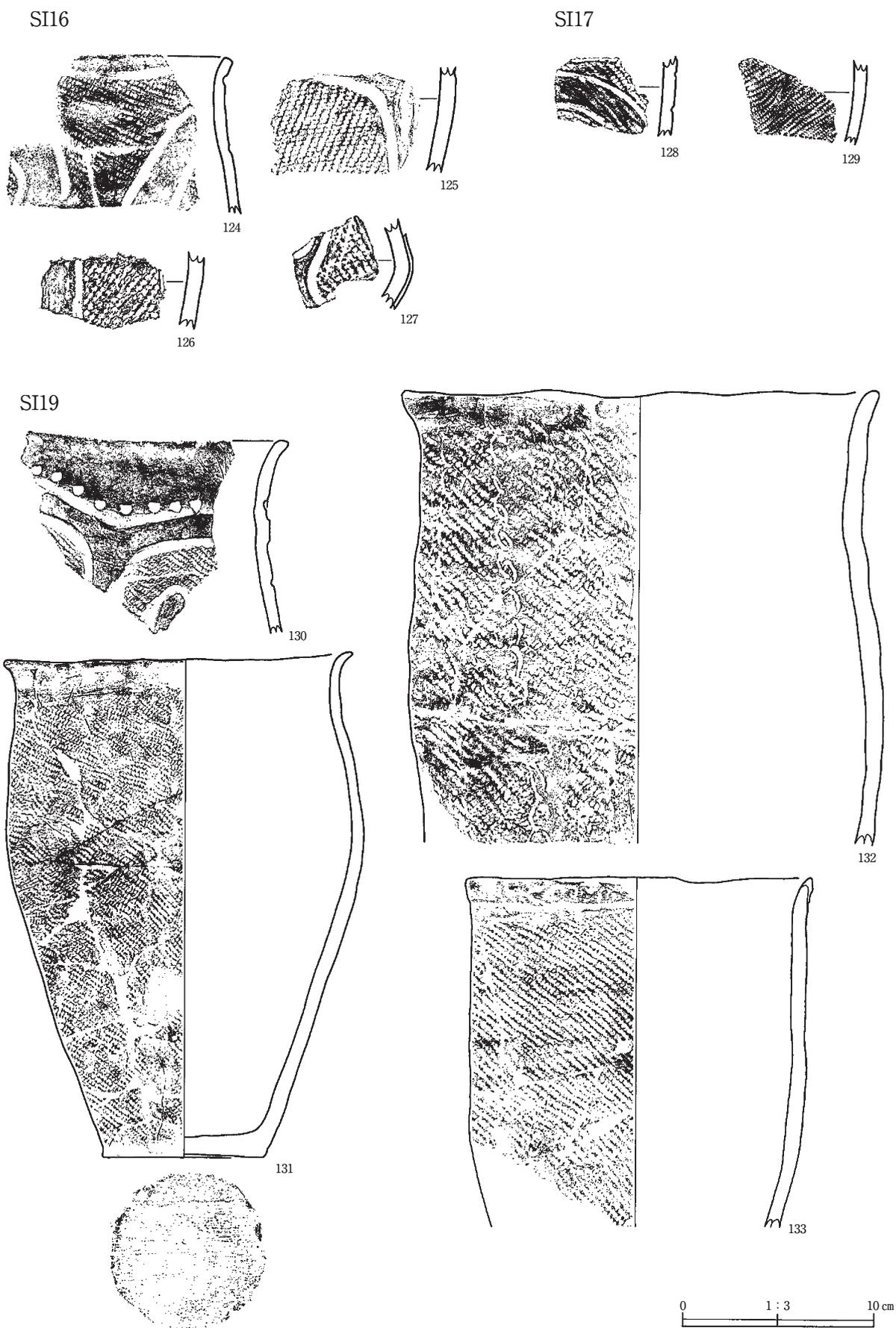
第39図 出土遺物 縄文土器 (7)



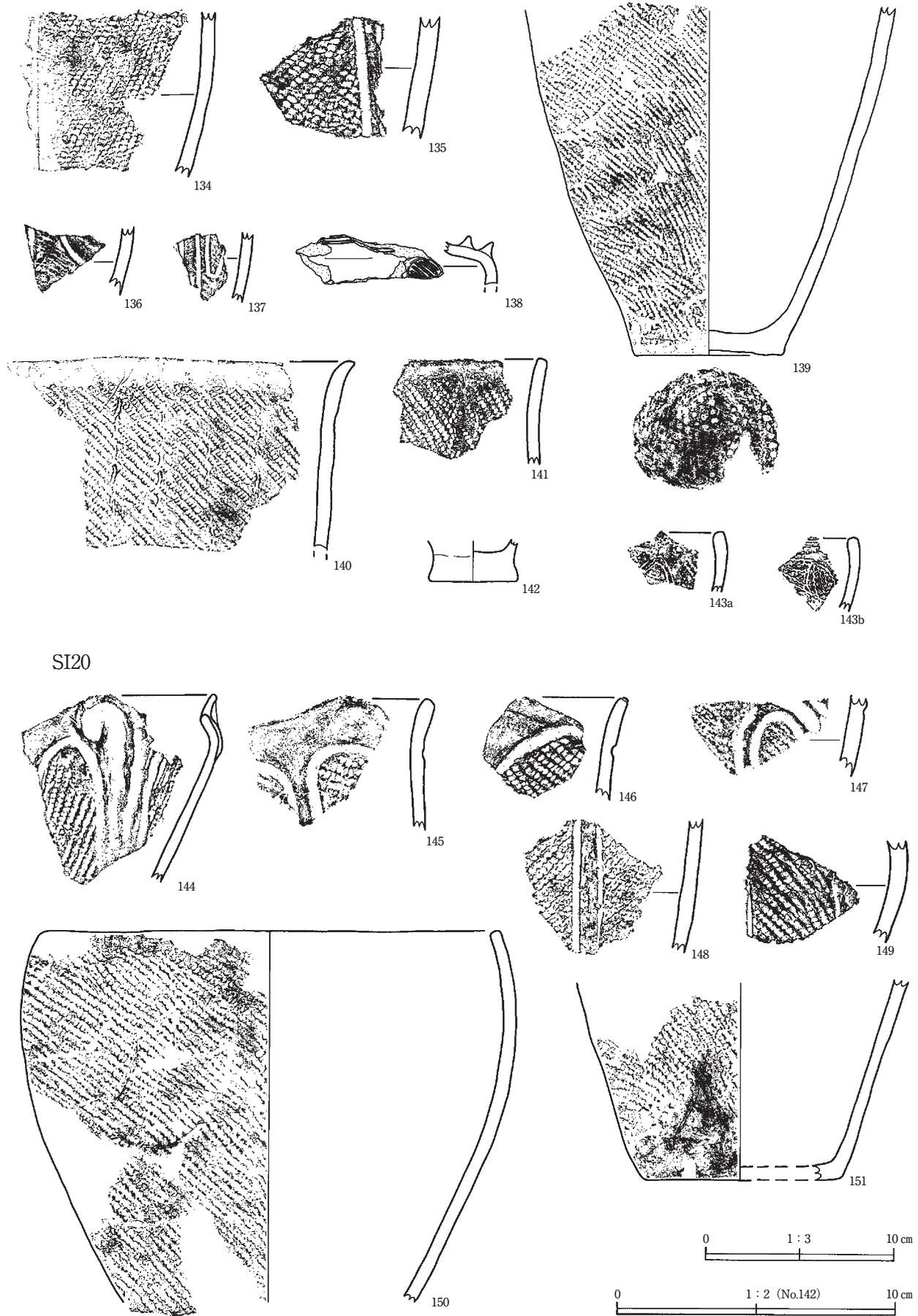
第40図 出土遺物 縄文土器 (8)



第41図 出土遺物 縄文土器 (9)



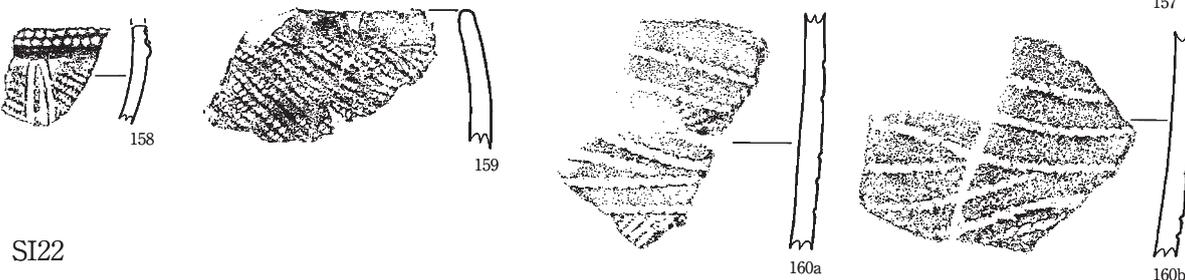
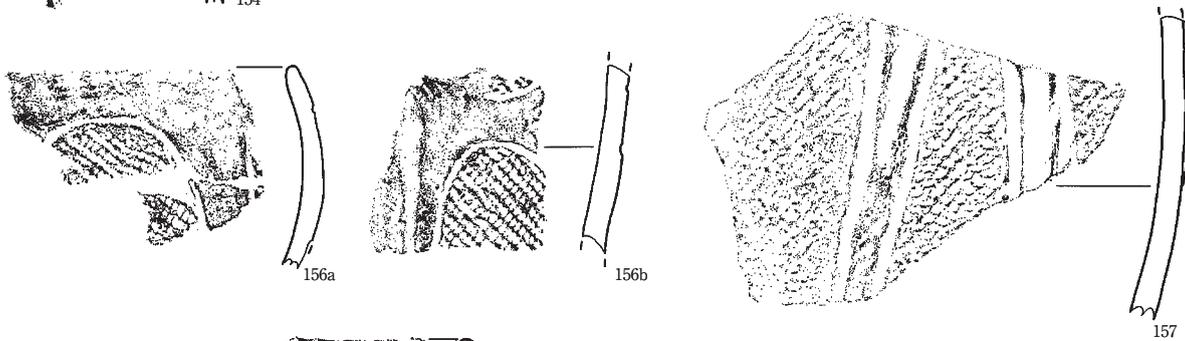
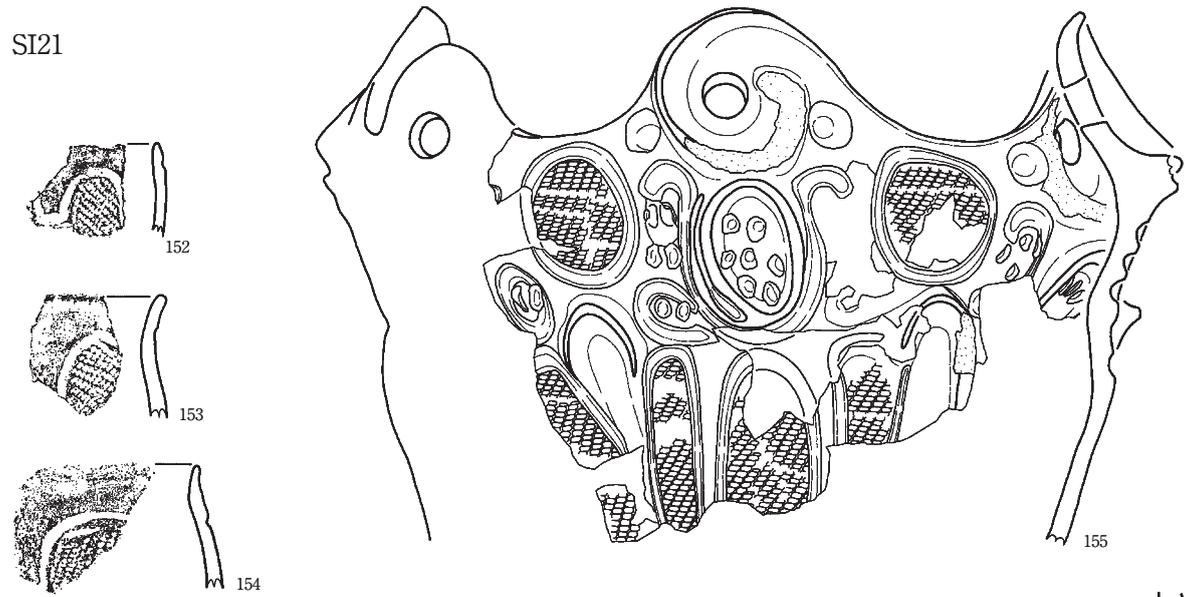
第42図 出土遺物 縄文土器 (10)



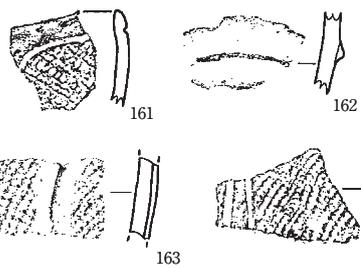
SI20

第43図 出土遺物 縄文土器 (11)

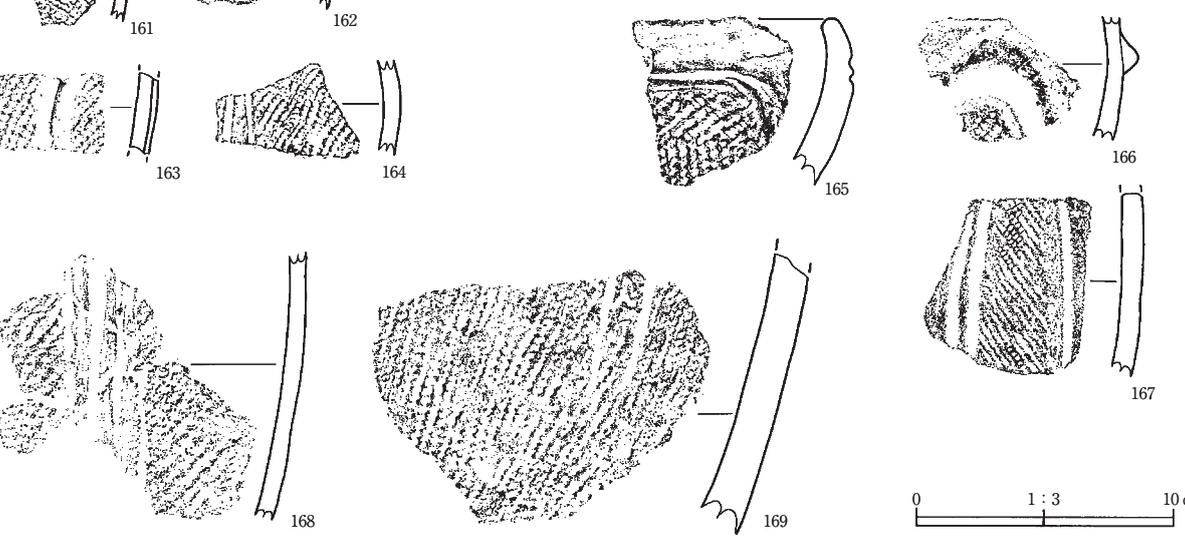
SI21



SI22



SI23



0 1:3 10 cm

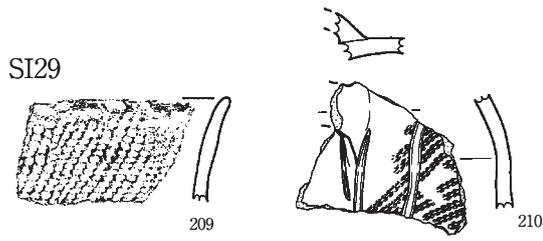
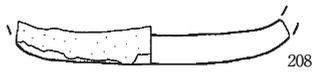
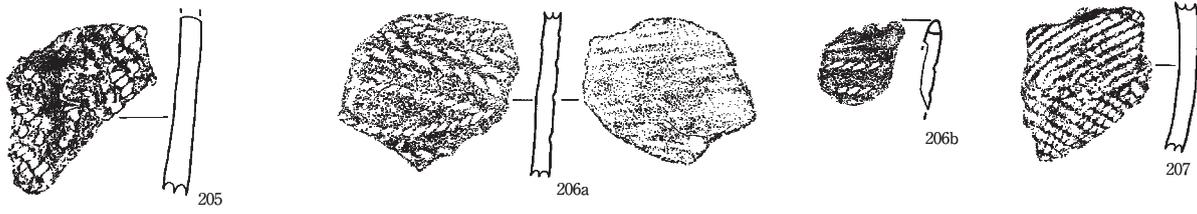
第44図 出土遺物 縄文土器 (12)



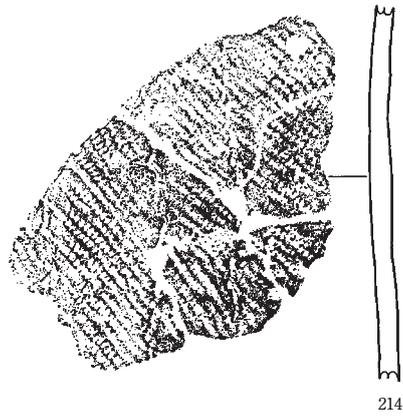
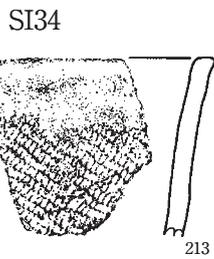
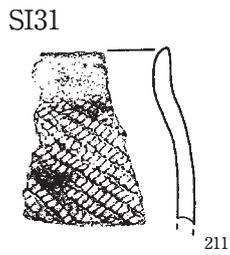
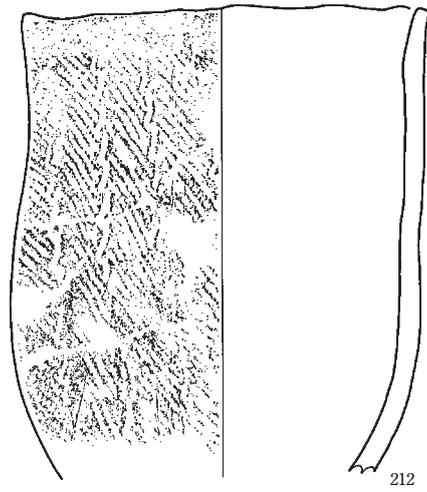
第45図 出土遺物 縄文土器 (13)



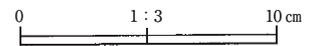
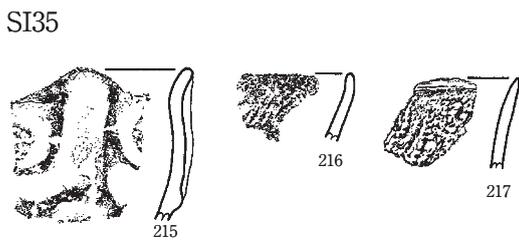
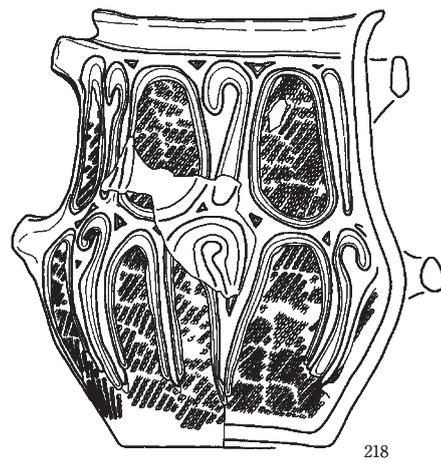
第46図 出土遺物 縄文土器 (14)



SI33



SI37

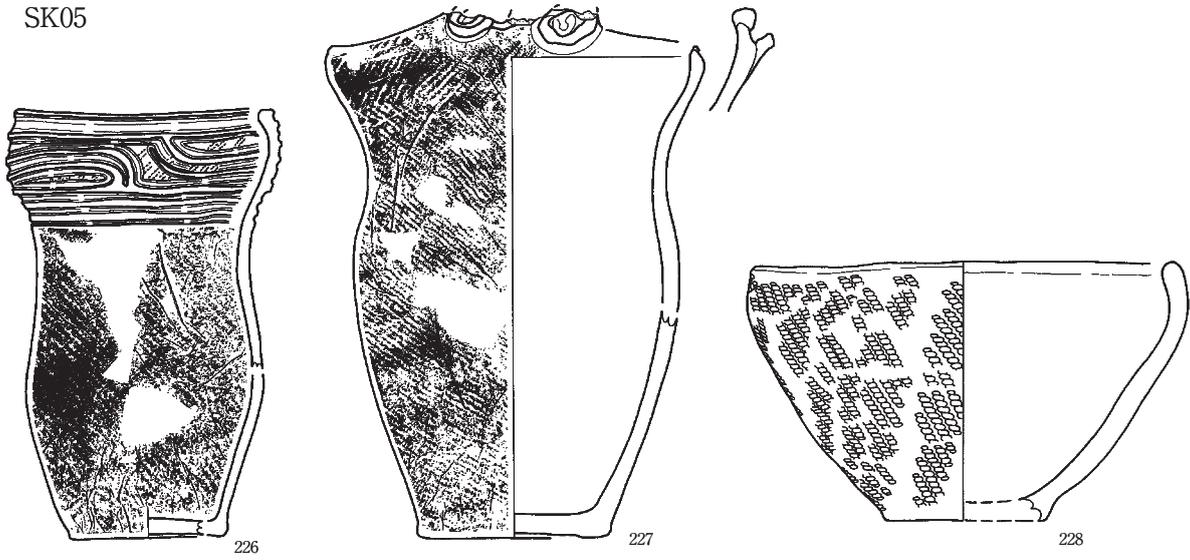


第47図 出土遺物 縄文土器 (15)

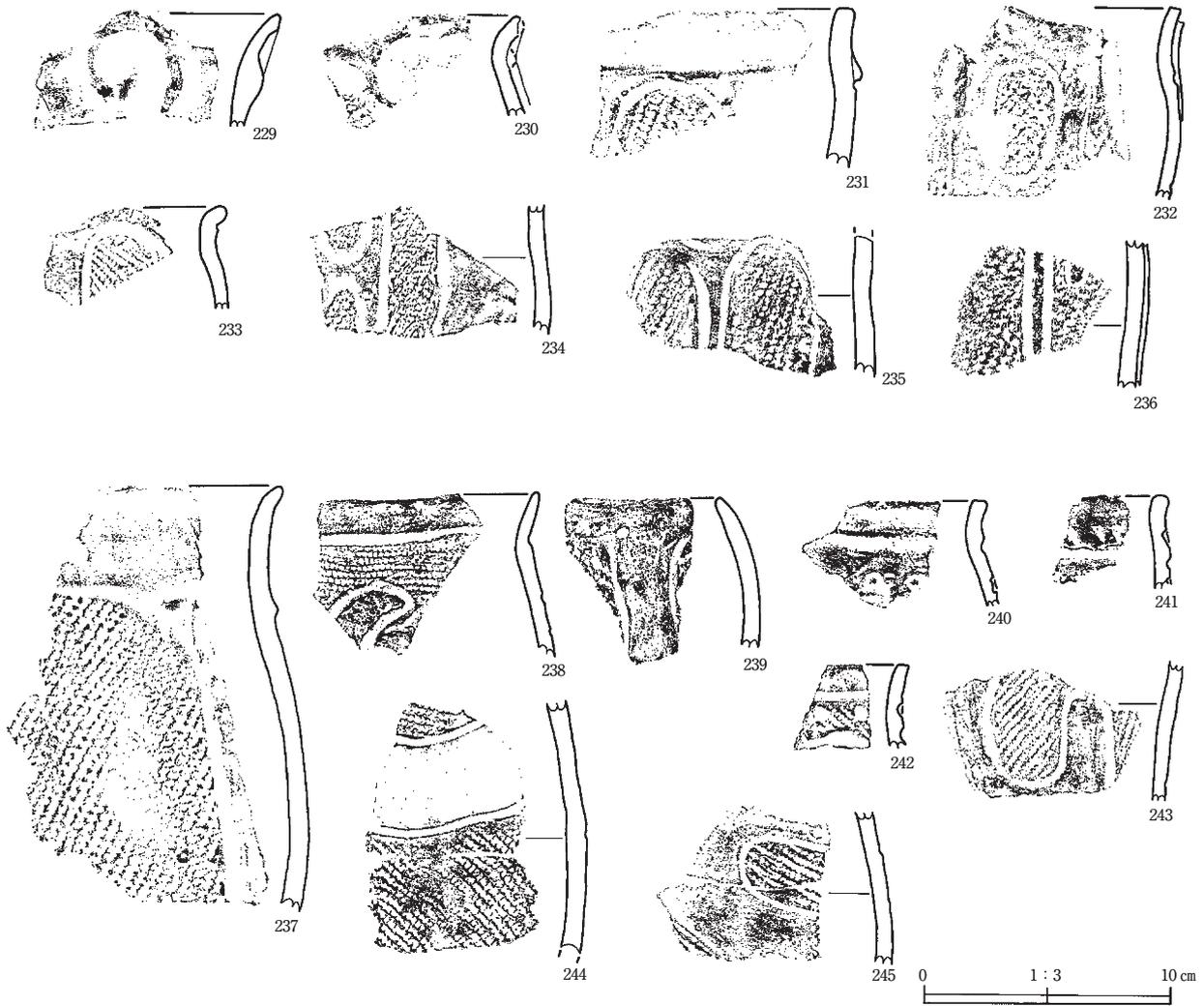


第48図 出土遺物 縄文土器 (16)

SK05

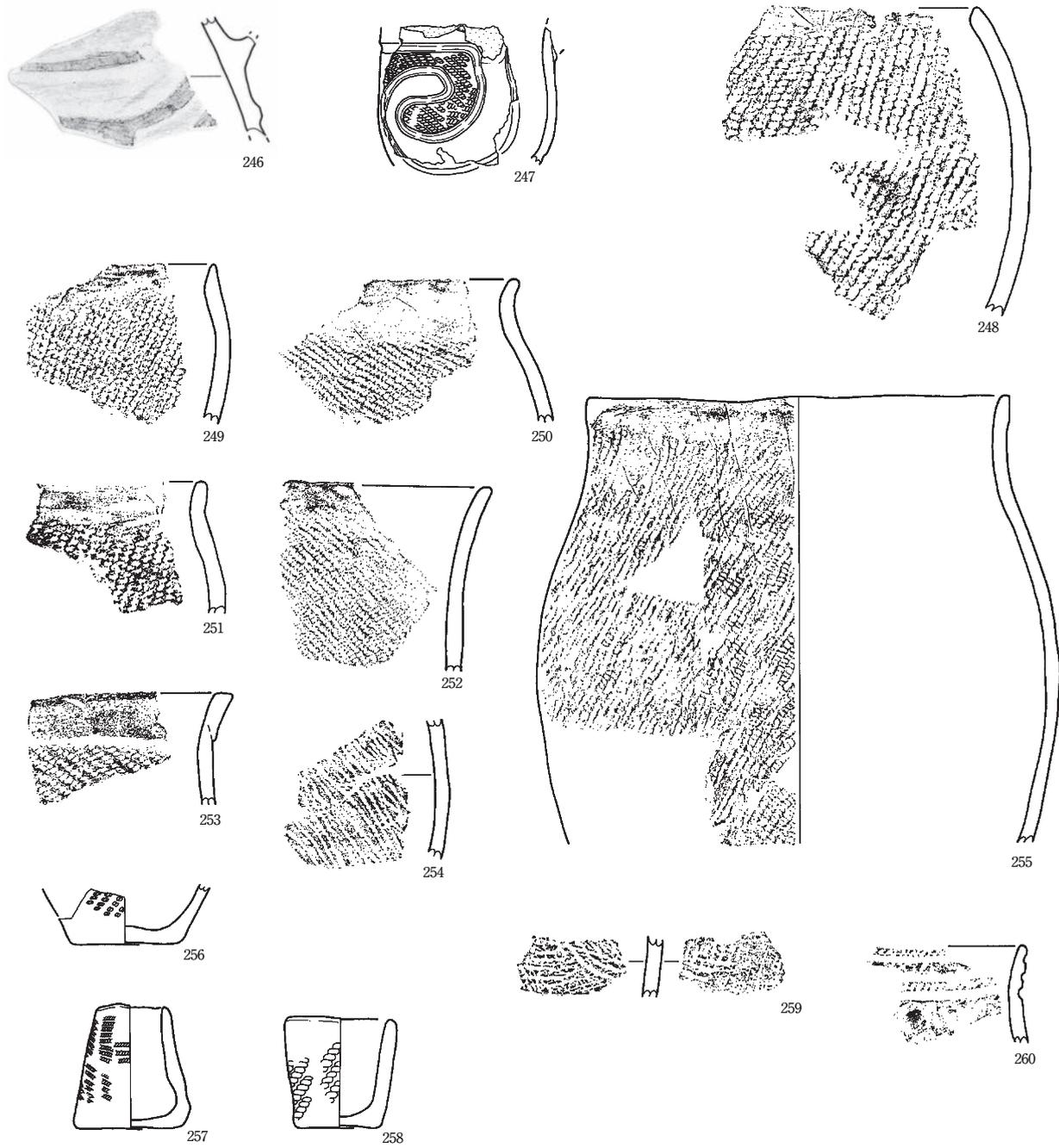


遺構外

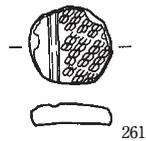


第49図 出土遺物 縄文土器 (17)

3 出土遺物



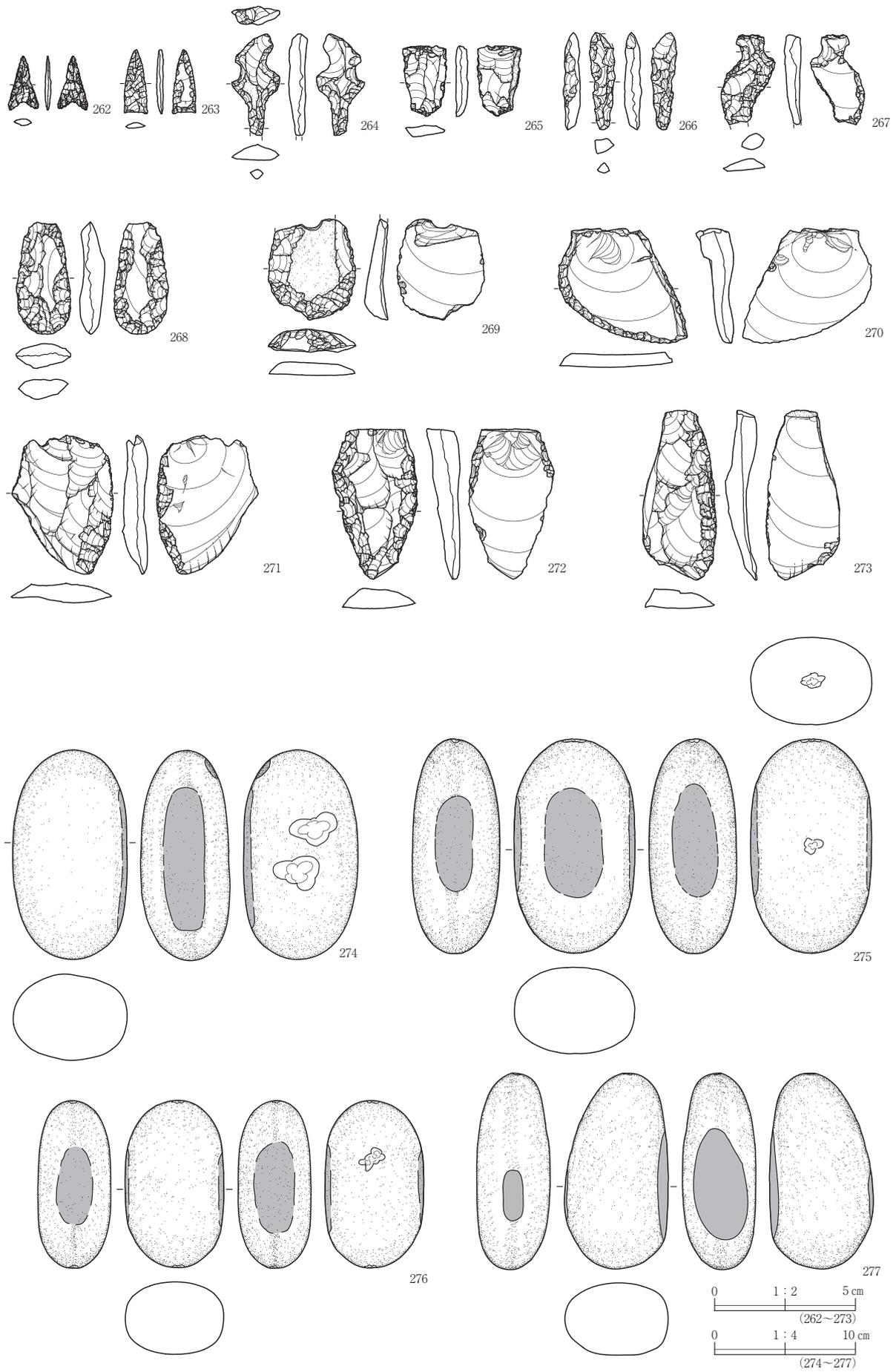
土製品



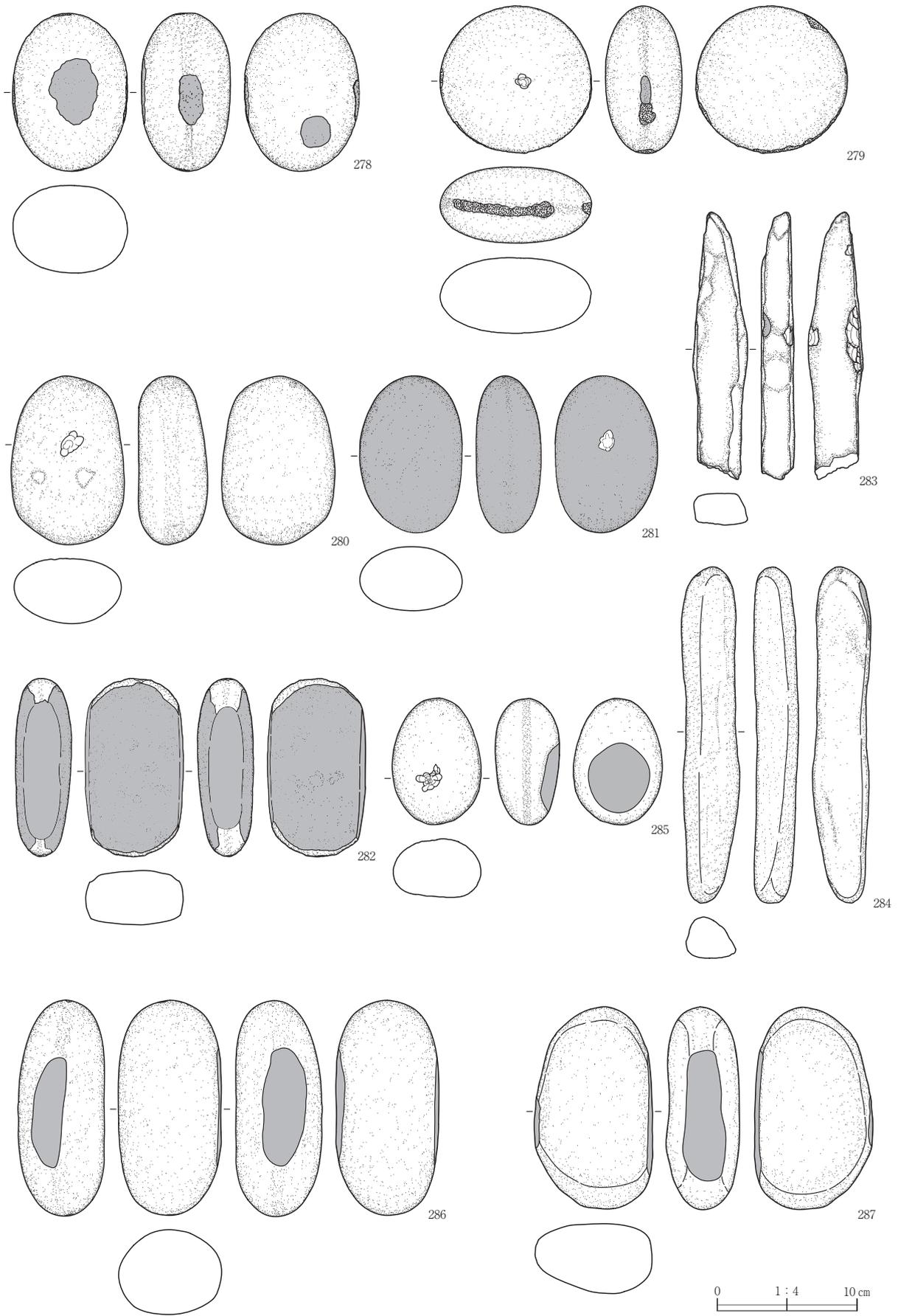
0 1 : 3 10 cm

0 1 : 2 (No.257 · 258 · 261) 10 cm

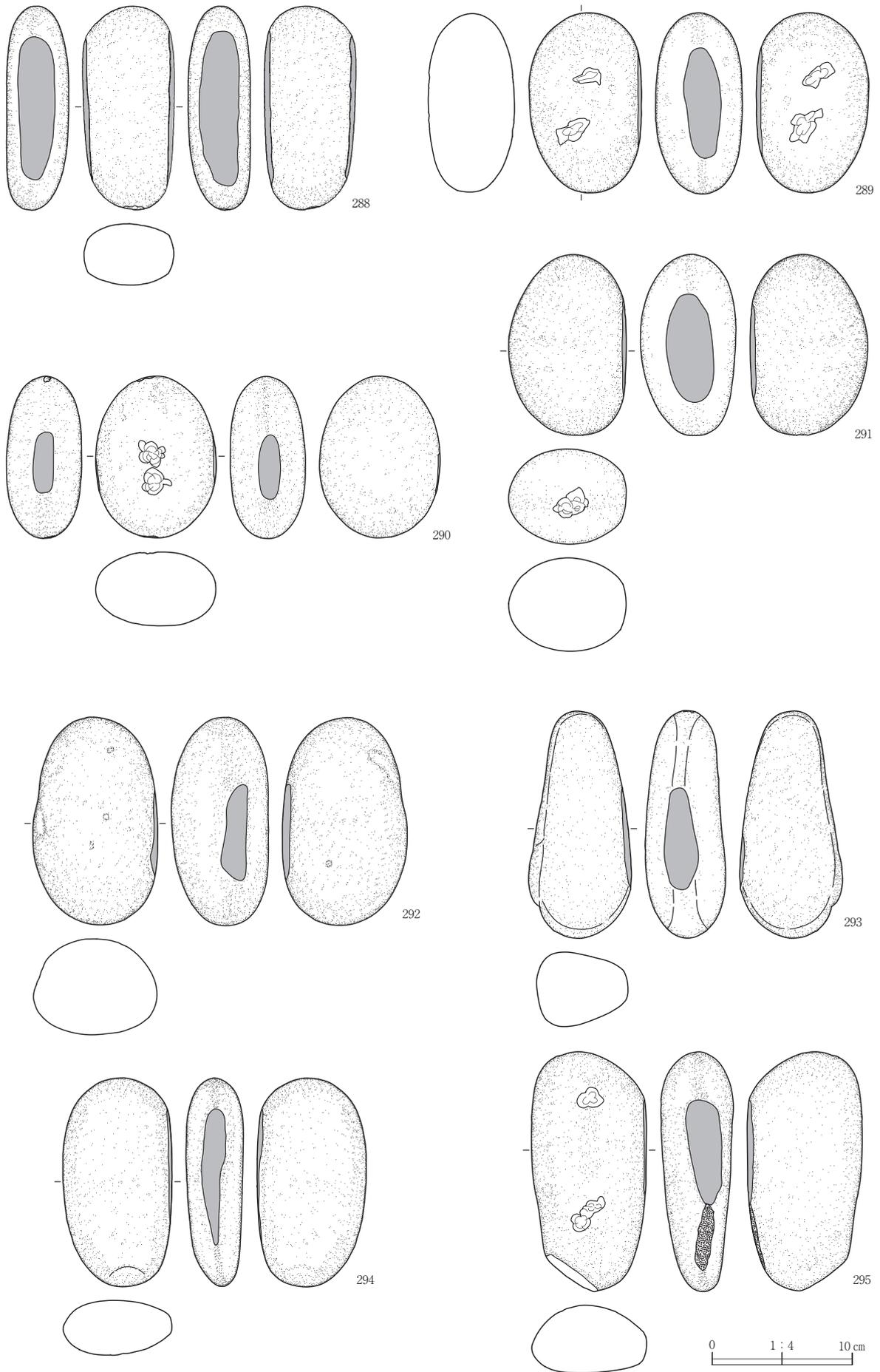
第50図 出土遺物 縄文土器 (18) · 土製品



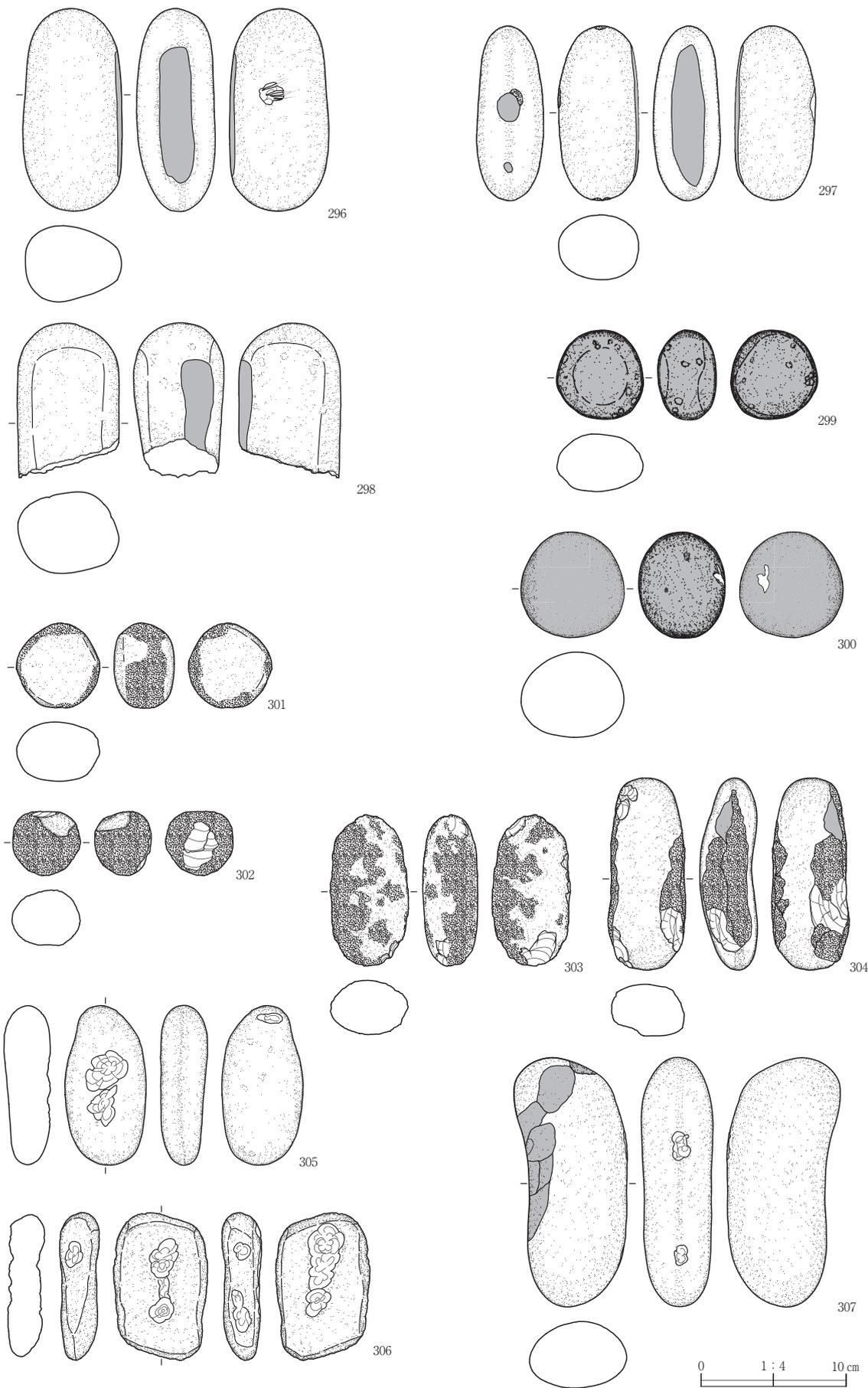
第51図 出土遺物 剥片石器・敲磨器類(1)



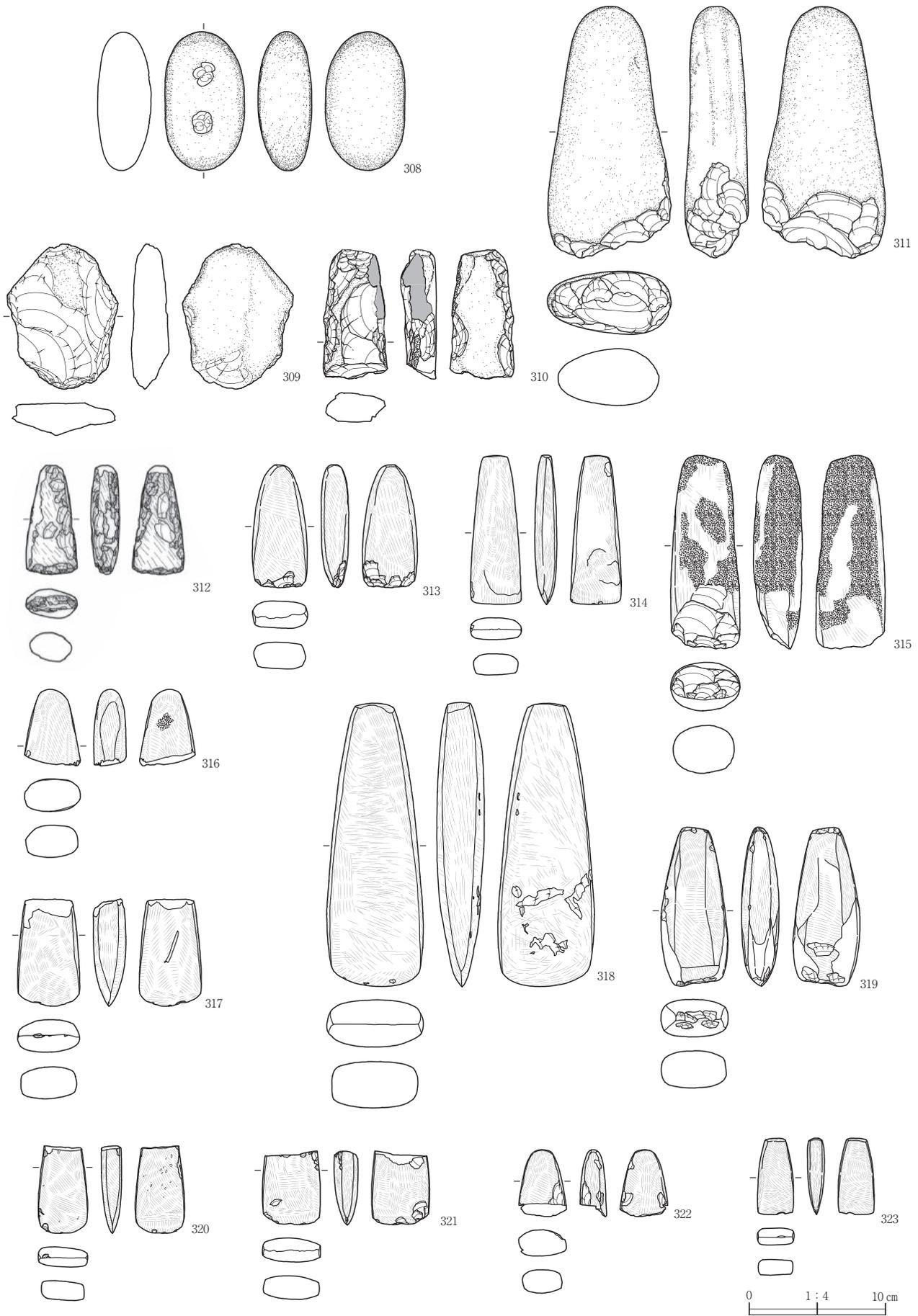
第52図 出土遺物 敲磨器類 (2)



第53図 出土遺物 敲磨器類 (3)

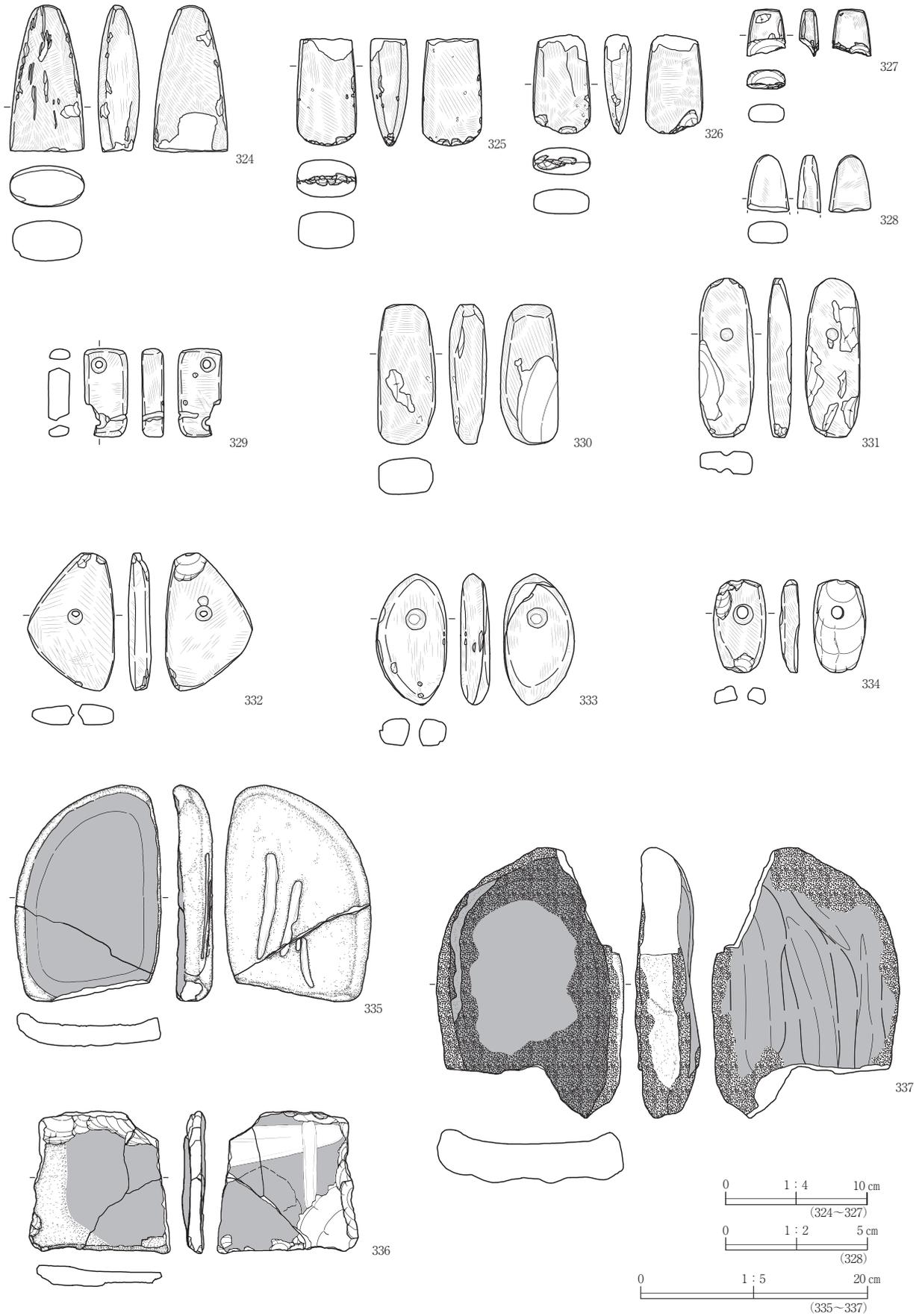


第54図 出土遺物 敲磨器類 (4)

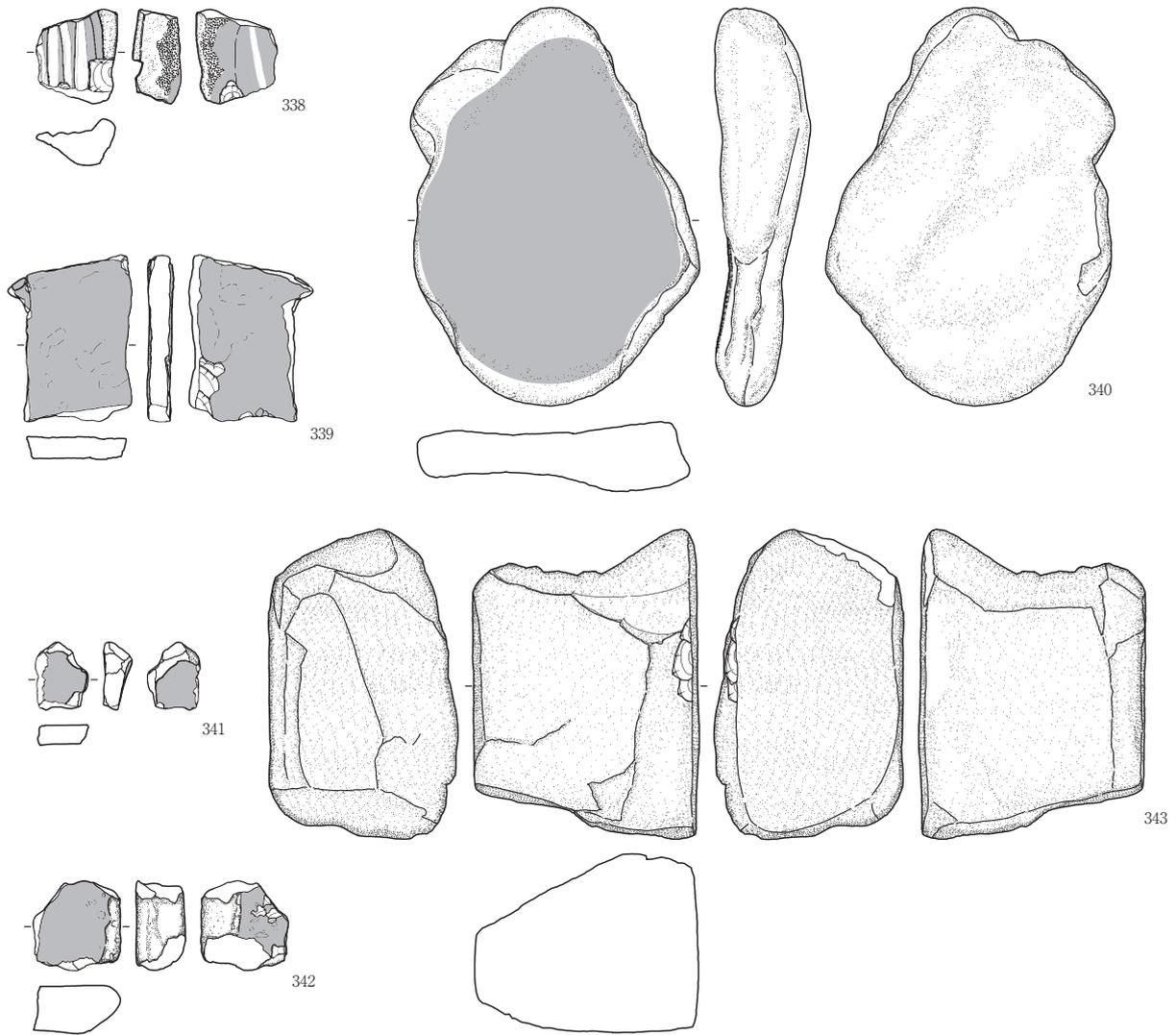


第55図 出土遺物 敲磨器類(5)・磨製石斧(1)

3 出土遺物



第56図 出土遺物 磨製石斧（2）・垂飾・石皿（1）



第57図 出土遺物 石皿(2)

第3表 土器観察表(1)

図No	出土遺物	地点	器種・部位	計測値(cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	付着物	胎土	時期	備考
1	S101	炉内焼土上	深鉢,口縁	-	波状か	沈線	RL充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
2	S101	炉内焼土上	深鉢,胴部	-	-	沈線	RLR充填	-	ミガキ横	-	砂粒多	大木9	
3a	S101	検出面、埋土	深鉢,口縁	-	波状	沈線	LR充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
3b	S101	埋土	深鉢,胴部	-	-	沈線	LR充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
3c	S101	埋土	深鉢,胴部	-	-	沈線	LR充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
4	S101	検出面、埋土	深鉢,口縁	-	平縁	-	LR縦	-	ナテ横	-	-	中期後葉	
5	S101	検出面、埋土	深鉢,口縁	口径21	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
6	S101	床面	深鉢,胴部	-	-	-	LR縦未端付	-	ナテ横	-	砂粒多	中期後葉	
7	S101	炉内焼土上	深鉢,胴部	-	-	-	RL横	-	ナテ横	-	繊維含	前期前葉	
8	S101	埋土	深鉢,胴部	-	-	-	非結束羽状(LR・RL)	-	粗	-	繊維含	前期前葉	剥落下細文あり
9	S102	炉直上	深鉢,胴部	-	-	-	RLR縦	-	ナテ縦	-	-	中期後葉	
10	S103	RP3、(床直)	深鉢,口縁	口径22.5	平縁	-	RL縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	
11	S103	埋設土器	深鉢,口縁	口径29.5	平縁	-	LR縦	-	ミガキ横	-	砂粒多	中期後葉	
12	S103	埋土、堆土、床直土器1、RP1、RP2(床直)	深鉢,口縁-胴部	口径31.5	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	口縁部わずかに外反
13	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	刺突	LR縦	-	ナテ横	-	-	大木9	
14	S103	埋土	深鉢,口縁	口径12	波状か	隆線,刺突	LR縦	-	ミガキ縦	外面炭化物	-	大木10	
15	S103	炉脇	深鉢,口縁	-	波状	沈線	RL充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
16	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	沈線	RL充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
17	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	沈線	LR充填	-	ミガキ横	-	-	中期未	
18	S103	埋土	深鉢,口縁	-	波状	沈線	RL充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
19	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	口縁折り返し,刺突	-	-	ミガキ横	-	-	中期未	
20	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	沈線	LR充填	-	ミガキ横	-	-	中期未	
21	S103	埋土	深鉢,胴部	-	-	幅広隆線	LR充填	-	ナテ横	-	-	大木10	
22	S103	埋土	壺,口縁	-	平縁	隆線+橋状突起,沈線	RL縦か	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
23	S103	埋土	深鉢,胴部	-	-	沈線	LR縦	-	ナテ縦・斜	-	-	大木10	
24	S103	埋土	深鉢,胴部	-	-	隆線	RLR縦	-	ナテ縦	-	-	大木9	
25	S103	埋土	深鉢,口縁	口径14	平縁	-	LR縦	-	ミガキ横	内外面炭化物	-	中期後葉	
26	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	-	LR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
27	S103	埋土	深鉢,口縁	-	波状	-	LR縦	-	ミガキ横	-	-	中期未	
28	S103	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	口縁折り返し	LR縦	-	ミガキ横	-	-	中期未	
29	S103	埋土、炉脇	深鉢,底部	底径4	-	-	LR縦	ミガキ	ナテ横	-	-	中期後葉	
30	S103	埋土	深鉢,胴部	-	-	押引沈線,同一工具による鋸歯文	-	-	ミガキ横	-	-	早期中葉	
31	S105	埋土、P6	深鉢,口縁-胴部	口径21	波状	沈線,刺突,突起頂部刻目	LR充填	-	ミガキ縦	-	-	大木10	
32	S105	埋土、2層RP2	深鉢,口縁-胴部	口径26	平縁	-	LR縦	-	ナテ横	-	-	中期後葉	
33	S105	埋土	深鉢,口縁	-	波状	隆沈線	RLR充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
34	S105	埋土	深鉢,胴部	-	-	沈線,刺突	LR縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
35	S105	埋土	深鉢,口縁	-	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
36	S106	埋土	深鉢,口縁-胴部	口径13.5	平縁	沈線	RLR充填	-	ミガキ縦	-	-	大木10	

第4表 土器観察表(2)

図No	出土遺構	地点	器種・部位	計測値(cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
37	SI06	検出埋土上位、埋土	深鉢、口縁	口径30	平縁	沈線	RLR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木10	
38	SI06	炉そば	深鉢、口縁-胴部	口径17	波状	沈線、刺突、突起頂部刻目	RL充墳	-	ナデ縦	-	-	大木10	
39	SI06	検出埋土上位、埋土、RP1、RP3(炉内)、炉そば	深鉢、胴部-底部	底径11.5	-	沈線、刺突	LR充墳	木葉真(中ナ)	ミガキ縦	-	-	大木10	
40	SI06	RP4(炉内)、床、炉内	深鉢、口縁-胴部	口径17.5	平縁+突起	沈線、刺突	LR縦	-	ミガキ横	-	-	大木10	
41	SI06	RP2	深鉢、口縁	-	波状	沈線	RLR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
42	SI06	炉内	深鉢、口縁	-	平縁	沈線、刺突	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木10	
43	SI06	埋土	深鉢、口縁	-	平縁	刺突	LR縦、結節部付	-	ミガキ横	-	-	大木10	
44	SI06	埋土	深鉢、胴部	-	-	沈線、刺突	RL充墳	-	ミガキ縦	-	-	大木10	
45	SI06	埋土、炉内	深鉢、胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木10	
46	SI06	RP2	深鉢、胴部	-	-	沈線、刺突	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木10	刺突内面に凸部
47	SI06	そば	深鉢、胴部	-	-	隆沈線	-	-	ミガキ横	-	-	大木9	
48	SI06	RP5(炉内)	深鉢、胴部	-	-	沈線	RL充墳	-	ナデ横	-	-	大木10	
49	SI06	炉内RP2	深鉢、口縁	-	平縁	-	LR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
50	SI06	検出埋土上位、炉内、RP3(炉内)	深鉢、略定形	口径30.5底径9.8器高44.5	平縁	-	LR縦、結節部付	木葉真	ナデ横	-	-	中期後葉	
51	SI06	埋土	深鉢、略定形	口径11底径5器高13	平縁	-	LR縦	木葉真	ナデ横	-	-	中期後葉	
52	SI06	検出、埋土上位	深鉢、胴部	-	-	-	L縦、結節部付	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
53	SI06	RP2	深鉢、胴部	-	-	-	ハケム状擦痕	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
54	SI06	床面	深鉢、胴部	-	-	沈線	貝殻腹縁正痕	-	ミガキ横	-	-	早期中葉	
55	SI07	埋土	深鉢、胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
56	SI07	炉燃焼面直上	深鉢、胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木9	
57	SI08	蓋(小型)、略定形	口径4底径3.8器高7.2	平縁	-	-	LR縦	ミガキ	ナデ横	-	-	中期後葉	
58	SI08	炉埋土	深鉢、胴部	-	-	沈線	RLR充墳	-	ミガキ縦	-	-	大木9	
59	SI08	検出面	深鉢、口縁	-	平縁	刺突	RL縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
60	SI08	検出面	深鉢、口縁	-	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
61	SI08	埋土	深鉢、口縁	-	平縁	-	LR横-縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
62	SI08	検出面	深鉢、胴部	-	-	-	ハケム状擦痕	-	ミガキ横	-	砂粒多	大木9	
63	SI08	炉埋土	深鉢、底部	底径4.5	-	-	-	ミガキ	ミガキ横	内外面炭化物	-	中期後葉	
64	SI09	検出面、炉付近(前庭部?)	深鉢、口縁	口径23.5	平縁	-	LR(0段多糸)縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
65	SI09	検出面	深鉢、胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木10	
66	SI10	周溝状落ちこみ、小ピット	深鉢、胴部	-	-	刺突	-	-	ナデ横	-	-	大木10	
67	SI10	周溝状落ちこみ、小ピット	深鉢、胴部	-	-	-	RLR縦	-	ミガキ横	内面炭化物	-	中期後葉	
68	SI11	埋土一括、埋設土器	深鉢、略定形	口径25底径8.5器高36.5	平縁	沈線、隆線	RLR充墳	ミガキ	ミガキ縦	外面炭化物	-	大木9	
69	SI11	埋土一括、ベルト埋土	深鉢、口縁-底部	器高11.5	波状	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	内外面焼け弾け
70	SI11	検出面、ベルト埋土、RP13、RP14、RP15	深鉢、口縁	-	波状	隆線、沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	補修孔
71	SI11	埋土(ベルト)	深鉢、口縁	-	波状	隆線、口縁裝飾的突起	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
72a	SI11	RP16の上	深鉢、口縁	-	波状	隆線、沈線	RLR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
72b	SI11	RP16の上	深鉢、口縁	-	波状	隆線、沈線	RLR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	

第5表 土器観察表 (3)

図No	出土遺物	地点	器種・部位	計測値 (cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
73	SI11	1層下位	深鉢, 口縁	-	平縁か	隆線, 沈線	RLR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
74	SI11	埋土 (べルト)	深鉢, 口縁	-	平縁	隆沈線	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	大木8b	
75	SI11	埋土 (べルト)	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	LR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
76	SI11	RP13, RP14, RP15	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL充墳	-	ナデ横	-	-	大木9	
77	SI11	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	隆線, 沈線	RL充墳	-	ナデ横	-	砂粒多	大木9	
78	SI11	埋土	深鉢, 口縁~底部	-	波状	沈線	LR縦	-	ナデ横	外面炭化物	-	大木9	
79	SI11	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	砂粒多	大木9	
80	SI11	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	RL充墳	-	ミガキ横	-	砂粒多	大木9	
81	SI11	埋土一括, 埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
82	SI11	埋土 (べルト)	深鉢, 胴部	-	-	隆線	LR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
83	SI11	埋土 (べルト)	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
84	SI11	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
85	SI11	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆線	LR縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
86	SI11	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
87	SI11	埋土一括, 埋土	蓋, 胴部~底部	底径7	-	沈線, 隆線, 橋状突起	LR充墳	ミガキ	上半ミガキ横, 下半ナデ横	-	-	大木9	
88	SI11	埋土一括, RP12, RP12の下	深鉢, 口縁, 胴部	口径20	平縁	-	RL縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	
89	SI11	検出面, 1層下位	深鉢, 口縁	-	平縁	-	L縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
90	SI11	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
91	SI11	埋土ほか	深鉢, 口縁, 胴部	口径31	平縁	-	LR縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	内外面焼け弾け
92	SI11	埋土 (べルト)	深鉢, 口縁	口径11.5	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
93	SI11	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
94	SI11	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR縦, 結節部付	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
95	SI11	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	口唇刻目	LR縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
96	SI11	埋土一括, 埋土	鉢, 略定形	口径9.5底径3.8器高5.5	平縁	-	LR縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期末	口縁やや歪み
97	SI11	埋土	深鉢, 底部	底径4	-	-	RLR縦	ナデ	ナデ	-	-	中期後葉	
98	SI11	埋土	鉢 (小型), 口縁~胴部	口径6	平縁	-	LR縦	-	ナデ縦	内外面炭化物	-	中期後葉	
99	SI11	RP2, RP16の上, RP16, RP17, RP18, 1層下位	深鉢, 略定形	口径17.5底径7器高20	平縁	-	LR縦	ナデ	ナデ横	外面炭化物	-	中期後葉	補修孔
100	SI12	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線, 隆線, 橋状突起	RLR充墳	-	ナデ横	-	-	大木9	
101	SI12	埋土	深鉢, 口縁~底部	口径16.5底径7器高21	平縁	-	RLR縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	
102	SI14	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線, 突起頂部刻目	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木10	
103	SI14	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
104	SI14	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR充墳	-	ミガキ横	-	-	大木9	
105	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR充墳	-	ミガキ縦	内面炭化物	-	大木9	
106	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木9	
107	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR充墳	-	ナデ横	-	-	大木9	
108	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR充墳	-	ミガキ縦	-	-	大木9	

第6表 土器観察表(4)

図No	出土遺構	地点	器種・部位	計測値(cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
109	SI14	埋土	深鉢, 口縁	口径10	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	
110	SI14	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
111a	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL 縦	-	ミガキ横	-	-	不明	
111b	SI14	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL 縦	-	ミガキ横	-	-	不明	
112	SI14	埋土	台付鉢, 口縁~台部	口径12 底径6.6 器高12	平縁+突起	沈線, 口唇刻目	RL 横	-	ナデ横	外面炭化物	-	大洞C ₂	未貫通補修孔あり, 図上復元
113	SI15	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
114	SI15	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	隆沈線	-	-	ミガキ横	-	-	大木9	
115	SI15	SI15重複部	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
116	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
117	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
118	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	砂粒多	大木9	
119	SI15	埋土一括RP2	深鉢, 底部	底径4	-	沈線	RL 斜	ミガキ	ミガキ横	-	-	大木9	
120	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ミガキ縦	-	-	大木9	
121	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	刺突	RL 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
122	SI15	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
123	SI15	埋土	深鉢, 胴部	-	-	無文帯	LR 縦	-	ミガキ斜	-	-	大木9	
124	SI16	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ナデ横	外面炭化物	-	大木10	
125	SI16	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
126	SI16	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ斜	-	-	大木9	
127	SI16	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	LR 充填	-	ミガキ横	外面炭化物	-	大木9	
128	SI17	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木10	
129	SI17	埋土	深鉢, 胴部	-	-	-	RL 縦	-	ミガキ縦	-	-	中期後葉	
130	SI19	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	幅広隆線, 沈線, 刺突	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木10	
131	SI19	RP5	深鉢, 略完形	口径18 底径8.5 器高27	平縁	-	LR 縦	木葉痕(中ナ)	ナデ横	-	砂粒多	中期後葉	
132	SI19	埋土RP2	深鉢, 口縁~胴部	口径25	平縁	-	LR 縦, 結節部付	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	内面黒斑顕著
133	SI19	埋土, RP4	深鉢, 口縁	口径18	平縁	口縁折り返し	LR 縦	-	ナデ横	-	砂粒多	中期後葉	
134	SI19	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
135	SI19	RP4	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
136	SI19	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	外面赤色顔料	-	大木10	
137	SI19	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
138	SI19	埋土	壺, 胴部	-	-	沈線, 隆線	LR 充填	-	ナデ横	外面赤色顔料	-	大木10	
139	SI19	RP1	深鉢, 胴部~底部	底径8	-	-	LR 縦	敷物圧痕一部 ナデ消し	ナデ横	-	砂粒多	中期後葉	
140	SI19	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR(0段3条)縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
141	SI19	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦, 結節部付	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
142	SI19	埋土	鉢(小型), 底部	底径3	-	-	ナデ	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
143a	SI19	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線, 刺突, 貝殻腹縁圧痕	-	-	ミガキ横	-	-	早期中葉	
143b	SI19	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線, 貝殻腹縁圧痕	-	-	ミガキ横	-	-	早期中葉	

第7表 土器観察表 (5)

図No	出土遺構	地点	器種・部位	計測値 (cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
144	SI20		深鉢, 口縁	-	波状	隆線, 沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	内外面炭化物	-	大木9	
145	SI20	床面	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
146	SI20	埋土	深鉢, 口縁	-	不明	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
147	SI20	床面	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
148	SI20	Pit1	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
149	SI20	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
150	SI20	Pit1	深鉢, 口縁-胴部	口径20	平縁	-	LR 縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期後葉	
151	SI20	深鉢, 胴部-底部	底部11	-	-	-	LR 縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期後葉	
152	SI21	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
153	SI21	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
154	SI21	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
155	SI21	埋土一括, 1層中位, RP1	深鉢, 口縁-胴部	口径26	波状	沈線, 隆線, 刺突	RL 充填	-	ナデ横	内外面炭化物	-	大木9	口縁突起6単位
156a	SI21	1層, 中位	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
156b	SI21	1層, 中位	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
157	SI21	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	砂粒多	-	大木9	
158	SI21	埋土	深鉢, 胴部	-	-	刺突, 隆線, 沈線	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
159	SI21	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
160a	SI21	1層, 中位	深鉢, 胴部	-	-	原体正直 (LR, RL)	LR 横	-	粗いナデ横	-	繊維含	前期前葉	
160b	SI21	1層, 中位	深鉢, 胴部	-	-	原体正直 (LR, RL)	LR 横	-	粗いナデ横	-	繊維含	前期前葉	
161	SI22	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
162	SI22	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆線	-	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
163	SI22	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆線	-	-	ミガキ横	-	-	大木9	
164	SI22	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	-	-	ミガキ横	-	-	大木9	
165	SI23	炉	深鉢, 口縁	-	平縁	隆沈線	LR, RLR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
166	SI23	炉	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
167	SI23	炉	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
168	SI23	炉	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
169	SI23	床直	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ナデ横	-	-	大木9	器厚15mm
170	SI23	埋土, 床直	深鉢, 胴部	-	-	-	RLR 縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	内面焼け弾け
171	SI24	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	隆線 (剥着)	RLR 縦	-	ナデ横	-	-	大木9	器面風化顕著
172	SI24	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木10	
173	SI24	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆線, 沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
174	SI24	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 刺突	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
175	SI24	埋土 (ベルト)	壺, 胴部	-	-	沈線, 隆線, 橋状突起	-	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
176	SI24	埋土 (ベルト)	深鉢, 胴部	-	-	幅広隆線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
177	SI24	埋土	深鉢, 胴部	-	-	幅広隆線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
178	SI24	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 縦	-	ナデ横	内外面炭化物	-	大木10	
179	SI24	埋土 (ベルト)	深鉢, 口縁	-	平縁	口縁折り返し	LR 縦	-	ミガキ縦	-	-	中期後葉	
180	SI24	埋土	深鉢, 口縁	口径9 底径5 器高9.5	平縁	-	LR 横・斜	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	小型
181	SI24	埋土 (ベルト)	深鉢, 底部	底径6.5	-	-	RL 縦	敷物正直	ナデ縦	内外面炭化物	-	中期後葉	

第8表 土器観察表(6)

図No	出土遺構	地点	器種・部位	計測値(cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	付着物	胎土	時期	備考
182	SI24	埋土	深鉢, 底部	底径 8.5	-	-	LR 縦	敷物圧痕一部 ナデ消し	ナデ横	-	-	中期後葉	
183	SI24	埋土	鉢 (小型), 底部	底径 2.5	-	-	LR 縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期後葉	
184	SI25	炉周辺床直	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
185	SI26	埋土 (バルト)	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 刺突	-	-	ミガキ横	-	-	大木9	
186	SI26	埋土 (バルト)	深鉢, 胴部	-	-	幅広隆線	LR 充填	-	ナデ横	外面炭化物	-	中期後葉	
187	SI28	床面	深鉢, 口縁	口径 22	波状	沈線	RL 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
188	SI28	床面	深鉢, 口縁	-	波状	隆線, 沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
189	SI28	床面	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	RL 充填	-	ナデ横	内外面炭化物	-	大木9	器面風化顕著
190	SI28	炉埋設, 複式炉	深鉢, 胴部~底部	底径 10	-	-	RL 縦	敷物圧痕一部 ミガキ消し	ナデ縦	外面炭化物	-	中期後葉	
191	SI28	床面	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	口唇内削ぎ
192	SI28	床面	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木10	
193	SI28	複式炉	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
194	SI28	複式炉	深鉢, 胴部	-	-	隆線, 沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
195	SI28	埋土	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
196	SI28	埋土	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木10	
197a	SI28	床面	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR(0段4条) 縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	大木9	
197b	SI28	床面	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR(0段4条) 縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	大木9	
198	SI28	床面	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 縦	-	ナデ縦	-	砂粒多	大木9	
199	SI28	複式炉	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木9	
200	SI28	複式炉	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木9	
201	SI28	複式炉	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR(0段3条) 縦	-	ナデ横	-	-	大木9	
202	SI28	床直	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
203	SI28	床直	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
204	SI28	床直	深鉢, 口縁~胴部	口径 18.5	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	
205	SI28	埋土	深鉢, 胴部	-	-	-	LR 縦, 結節部付	-	ナデ横	内外面炭化物	-	中期後葉	
206a	SI28	埋土	深鉢, 胴部	-	-	原体圧痕(RL)	-	-	条痕→ナデ 横	-	繊維含	前期前葉 160と同一個体	
206b	SI28	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	口唇刻目, 縄文原体圧痕 (RL)	-	-	-	-	繊維含	前期前葉 160と同一個体	
207	SI28	埋土	深鉢, 胴部	-	-	-	非結束羽状(LR・RL)	-	ナデ横	-	繊維含	前期前葉	
208	SI28	埋土	深鉢, 底部	底径 8	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	中期後葉	底面緩く湾曲
209	SI29	Pit1	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	内外面炭化物	-	中期後葉	
210	SI29,30		深鉢, 胴部	-	-	沈線, 橋状突起	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木9	
211	SI31		深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
212	SI33	(SI30とSI01を含む) 検出面、 Pit1壁溝、床直上、床直	深鉢, 口縁	口径 18.5	平縁	-	LR 縦, 結節部付	-	ナデ横	外面炭化物	-	中期後葉	
213	SI34	RP4	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
214	SI34	RP4	深鉢, 胴部	-	-	-	LR 縦, 結節部付	-	ナデ斜	-	砂粒多	中期後葉	器面風化顕著

第9表 土器観察表 (7)

図No	出土遺物	地点	器種・部位	計測値 (cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
215	SI35	埋土	深鉢, 口縁	-	波状	隆線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
216	SI35	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	小型土器
217	SI35	埋土	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
218	SI37	RP1、床	壺, 略空形	口径 11.5 底径 8 器高 17.3	平縁	隆沈線, 桶状突起	RLR 充填	ミガキ	ミガキ横	-	-	大木 9	
219	SI37	埋土	深鉢, 略空形	口径 15 底径 7.5 器高 17.5	平縁	-	LR 縦	敷物圧痕一部 ナデ消し	ミガキ縦	-	-	中期後葉	
220	SI37	土器	深鉢, 口縁	-	-	-	RLR 縦	-	ミガキ横	外面炭化物	-	中期後葉	内面焼け弾け
221	SI37	土器	深鉢, 胴部	-	-	-	LR 縦	-	ナデ横	-	砂粒多	中期後葉	
222	SI38	RP2、炉	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RL(0段多糸)縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
223	SI38	土器、RP2	深鉢, 胴部~底部	底径 11	-	-	RLR 縦	敷物圧痕一部 ナデ消し	ナデ横	-	-	中期後葉	内面焼け弾け
224	SI38	RP2、炉埋設土器	深鉢, 胴部~底部	底径 11	-	-	LR 縦	敷物圧痕一部 ナデ消し	ナデ横	-	-	中期後葉	内面焼け弾け
225	SI38	炉	壺, 口縁	-	平縁	隆沈線	-	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
226	SK05	RP1	深鉢, 略空形	口径 10 底径 6 器高 17	平縁	隆沈線	LR 縦, 口縁施文前 LR 横	ミガキ	ミガキ横	内外面炭化物	-	大木 8b	
227	SK05	RP1	深鉢, 略空形	口径 24.5 底径 7.5 器高 21	平縁 + 突起	立体的な突起	LR 縦, 口縁 LR 横	ナデ	ミガキ横	-	-	大木 8b	
228	SK05	RP1、2	鉢, 略空形	口径 16.5 底径 6.5 器高 10.5	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
229	5j グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	波状	隆線	-	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
230	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	波状	隆線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
231		検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	隆沈線	RL 充填	-	ミガキ横	-	砂粒多	大木 9	
232	5j グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	波状	沈線, 隆線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
233	3P グリッド	中央東IV層上	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
234	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
235	4m グリッド	検出面	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RLR 充填	-	ミガキ横	内外面炭化物	-	大木 9	
236	7g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	隆沈線	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	大木 9	
237	3h (SI02 付近)	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 隆線	RLR 充填	-	ナデ横	-	砂粒多	大木 10	
238		出土地点不明	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR 縦	-	ミガキ横	内外面炭化物	-	大木 10	
239	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木 10	
240	5j グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 刺突	-	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
241	7h グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 刺突	-	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
242	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	沈線, 刺突	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
243	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	沈線	RL 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
244	3h (SI02 付近)	検出面	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木 10	
245	7h グリッド (SI26 炉周辺)	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	沈線	LR 充填	-	ナデ横	-	-	大木 10	
246	6d グリッド付近	風倒木	壺, 胴部	-	-	隆線, 突起	-	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
247		黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	沈線, 桶状突起	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	大木 10	
248	6g グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
249	7h グリッド	黒褐色土層	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	-	砂粒多	中期後葉	

第10表 土器観察表 (8)

図No	出土遺構	地点	器種・部位	計測値 (cm)	口縁正面	文様	地文原体	底面	内面	附着物	胎土	時期	備考
250	3h (S102 付近)	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
251	3h (S102 付近)	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	-	RLR 縦	-	ミガキ横	-	-	中期後葉	
252	5h グリット	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	-	LR 縦	-	ナデ斜	外面炭化物	-	中期未	
253	5h グリット	検出面	深鉢, 口縁	-	平縁	口縁折り返し	LR 縦	-	ナデ横	-	-	大木 10	
254	7h グリット	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	-	単軸絡糸体 1 類 (R)	-	ナデ縦	-	-	中期後葉	
255	6g グリット	黒褐色土層	深鉢, 口縁・胴部	口径 19	平縁	-	RL 縦	-	ナデ横	-	-	中期後葉	
256	7g グリット	黒褐色土層	深鉢, 底部	底径 46	-	-	RLR 縦	ナデ	ナデ横	内外面炭化物	-	中期後葉	
257	出土地点不明	出土地点不明	蓋 (小型), 完形	口径 3 底径 4.7 器高 5.8	平縁	-	LR 縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期後葉	
258	6g グリット	検出面	鉢 (小型), 口縁・底部	口径 3.4 底径 2.5 器高 3.5	平縁	-	RL 縦	ナデ	ナデ横	-	-	中期後葉	
259	5j グリット	黒褐色土層	深鉢, 胴部	-	-	-	単軸絡糸体 1 類 (L) 方向不定	-	糸痕縦横	-	-	前期初頭	
260	8g グリット	レキ層上層, 暗褐色土	深鉢, 口縁	-	波状	沈線	LR 充填	-	ミガキ横	-	-	後期前葉	

3 出土遺物

第11表 石器計測値一覧表

No	器種	遺構名	地点・層位	石器 (単位: mm)			石質	産地帯	形成時期	図版番号
				最大長	最大幅	最大厚				
262	石鏃	出土地点不明	-	16.2	14.2	2.6	珪質頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
263	石鏃	SI28	埋土 (ベルト内)	22.0	8.1	2.0	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
264	異形石器	SI20	埋土	35.5	16.6	5.8	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
265	不定形石器	SI18	埋土一括	24.9	15.2	4.1	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
266	石鏃	SI15	床面直上	33.9	8.3	5.9	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
267	石匙	SI11	埋土 (ベルト内)	30.9	15.8	5.8	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
268	石鏃	SI11	埋土	39.5	19.0	7.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
269	スクレイパー	SI17	-	34.5	30.6	7.1	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
270	スクレイパー	SI11	埋土	38.8	40.0	11.6	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
271	スクレイパー	SI11	埋土一括	48.0	35.5	8.3	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
272	スクレイパー	SI19	埋土	53.5	29.4	10.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
273	スクレイパー	SI14	埋土一括	59.1	25.8	7.9	頁岩	北上山地	中生代前期	第50図
274	敲磨器類	SI29・30	床面直上 (重複)	149.9	80.9	62.6	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第50図
275	敲磨器類	SI23 (7fgリッド)	埋土	153.0	85.7	61.8	砂岩	北上山地	中生代前期	第50図
276	敲磨器類	SI24	埋土	119.4	69.9	51.7	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第50図
277	敲磨器類	SI23 (7fgリッド)	埋土	139.3	73.5	51.9	砂岩	北上山地	中生代前期	第50図
278	敲磨器類	SI17	埋土 (ベルト内)	113.5	82.0	63.2	-	-	-	第51図
279	敲磨器類	SI20	床面直上	105.4	107.9	54.5	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第51図
280	敲磨器類	SI14	S5	120.8	80.7	49.2	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第51図
281	敲磨器類	SI31	床面直上	112.5	73.2	23.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図
282	敲磨器類	SI11	埋土 (ベルト内)	127.8	69.7	39.6	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第51図
283	敲磨石類	SI20	柱穴埋土	186.3	38.5	23.8	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図
284	敲磨石類	SI05	床面直上	239.9	40.1	30.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第51図
285	敲磨器類	SI02	検出面	90.6	63.4	45.7	-	-	-	第51図
286	敲磨器類	SI06	埋土	154.3	73.6	61.2	砂岩	北上山地	中生代前期	第51図
287	敲磨器類	SI03	埋土	145.2	84.1	52.2	砂岩	北上山地	中生代前期	第51図
288	敲磨器類	SI06	埋土	145.7	64.9	44.0	砂岩	北上山地	中生代前期	第52図
289	敲磨器類	SI24	埋土	129.2	80.0	61.6	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図
290	敲磨器類	SI11	埋土	115.8	85.9	53.3	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第52図
291	敲磨器類	SI14	埋土	129.1	83.8	67.9	-	-	-	第52図
292	敲磨器類	SI16	北壁際床面直上	148.2	88.7	68.9	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図
293	敲磨器類	SI06	埋土③	162.7	72.8	56.6	-	-	-	第52図
294	敲磨器類	SI24	埋土 (ベルト内)	149.3	77.5	40.7	-	-	-	第52図
295	敲磨器類	SI29・30	床面直上 (重複)	170.2	81.9	51.3	-	-	-	第52図
296	敲磨器類	SI03	RS02	140.3	68.2	53.3	砂岩	北上山地	中生代前期	第52図
297	敲磨器類	SI02	検出面	120.7	55.1	45.7	砂岩	北上山地	中生代前期	第52図
298	敲磨器類	SI06	埋土	100.9	69.8	61.9	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第52図
299	多面体磨石	SI15	重複部 SP01	61.7	59.6	40.0	アイサイト	北上山地	中生代白亜紀	第52図
300	多面体磨石	SI20(3f)	検出面	72.9	71.0	32.7	砂岩	北上山地	中生代前期	第53図
301	多面体敲石	SI19	炉埋土	58.2	57.0	41.1	-	-	-	第53図
302	多面体敲石	SI03	埋土	44.0	46.3	38.5	頁岩	北上山地	中生代前期	第53図
303	多面体敲石	SI23	埋土	104.4	53.4	37.5	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第53図
304	敲磨器類	SI25	埋土	132.8	52.7	36.5	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第53図
305	敲磨器類	SI06	炉	109.8	55.8	32.0	-	-	-	第53図
306	敲磨器類	SI12	埋土一括	98.4	64.5	26.8	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第53図
307	敲磨器類	SI03	埋土	171.1	71.2	48.7	-	-	-	第53図
308	敲磨器類	SI24	埋土 (ベルト内)	101.9	57.7	39.1	-	-	-	第54図
309	礫器	SI11	埋土	106.4	80.2	27.3	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図
310	敲磨器類	SI15	埋土一括	94.7	46.4	25.5	-	北上山地	中生代白亜紀	第54図
311	磨製石斧	SI03	埋土	179.5	90.2	46.2	砂岩	北上山地	中生代前期	第54図
312	磨製石斧	SI16	床面直上	7.9	3.7	2.1	-	-	-	第54図
313	磨製石斧	SI11	床面直上	90.3	40.2	19.8	斑縞岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図
314	磨製石斧	SI11	床面直上	109.3	36.8	15.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図
315	磨製石斧	SI17	埋土	141.0	50.1	35.5	砂岩	北上山地	中生代前期	第54図
316	磨製石斧	SI11	埋土	54.6	39.7	23.5	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図
317	磨製石斧	-	南西礫層中	78.5	45.1	23.5	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図
318	磨製石斧	SI23	西壁直下 S1	208.3	70.1	34.5	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図
319	磨製石斧	SI06	埋土	116.1	48.1	27.2	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図
320	磨製石斧	SI23	床面直上 S II	63.4	35.9	14.6	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	第54図
321	磨製石斧	SI11	埋土 (ベルト内)	52.5	42.3	17.4	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第54図
322	磨製石斧	SI11	I層下層	48.8	34.3	18.8	凝灰岩	北上山地	中生代前期	第54図
323	磨製石斧	SI02	検出面	55.8	26.6	12.2	頁岩	北上山地	中生代前期	第54図
324	磨製石斧	SI06	埋土	103.7	52.3	28.7	頁岩	北上山地	中生代前期	第55図
325	磨製石斧	SI14	埋土	75.6	41.7	26.2	斑縞岩	北上山地	中生代白亜紀	第55図
326	磨製石斧	SI24	埋土	70.1	39.9	18.7	凝灰岩	北上山地 宮古層群	中生代白亜紀	第55図
327	磨製石斧	SI14	埋土	31.1	26.5	13.0	-	-	-	第55図
328	磨製石斧	SI24	埋土下部	19.8	14.3	7.7	-	北上山地	中生代白亜紀	第55図
329	垂飾	SI11	埋土	31.1	15.1	7.5	凝灰岩	北上山地 宮古層群	中生代白亜紀	第55図
330	垂飾	SI17	埋土	49.4	20.2	12.9	-	-	-	第55図
331	垂飾	SI17	埋土	56.2	19.2	8.1	-	-	-	第55図
332	垂飾	SI17	埋土	48.2	30.2	7.6	-	-	-	第55図
333	垂飾	SI24	S1 埋土中位	45.7	24.6	10.0	蛇紋岩	北上山地 早池峰山~宮守	古生代オルドビス紀	第55図
334	垂飾	SI01	-	32.7	18.2	6.8	-	-	-	第55図
335	石皿	SI11	S3	287.8	205.2	50.0	凝灰岩	北上山地 宮古層群	中生代白亜紀	第55図
336	石皿	SI04	床面直上	197.8	197.1	30.6	-	-	-	第55図
337	石皿	SI03	床面直上 RS6	354.6	264.2	86.8	砂岩	北上山地 宮守層群	中生代白亜紀	第55図
338	石皿	SI19	RP5の上	51.5	102.1	87.0	砂岩	北上山地 宮古層群	中生代白亜紀	第56図
339	石皿	SI11	S4	176.6	135.5	28.1	-	-	-	第56図
340	石皿	SI03	床面直上 RS7	439.0	312.4	98.2	花崗閃緑岩	北上山地 小成西方 宮古岩体の一部	中生代白亜紀	第56図
341	石皿	SI19	埋土	71.2	55.2	30.2	-	-	-	第56図
342	石皿	SI19	埋土	53.7	96.6	95.1	-	-	-	第56図
343	台石	SI03	RS2	339.5	246.0	205.0	花崗閃緑岩	北上山地 小成西方 宮古岩体の一部	中生代白亜紀	第56図

第12表 出土遺構別石器数量

遺構名	石鏃	石錐	石匙	石篋	スクレイパー	不定形石器	使用痕ある剥片	両極剥片	剥片	磨製石斧	磔器	石皿台石類	敲磨器類	石製品	その他
SI01													1	1	
SI02									1	1			2		
SI03									1	1		4	7		
SI04												1			
SI05													1		
SI06							1		1	2			12		
SI07						1									
SI08									1				2		2
SI09							1								
SI10							2	1							
SI11			1	1	2	1	3	1	4	5	1	2	8	1	
SI12															
SI13									1				2		
SI14					1	1							4		1
SI15		1				1			1	2			6		
SI16									1				2		
SI17					1	1	1		2	1			5	3	
SI18						1							2		
SI19					1	1		1				3	1		
SI20													3		1
SI21								1	1				2		
SI22															
SI23										2			4		
SI24										2			8	1	
SI25													2		
SI26															
SI27															
SI28	1						1		5						1
SI29									1				2		
SI30															
SI31													4		
SI32															
SI33															
SI34															
SI35													2		
SI36															
SI37															
SI38															
遺構外									2	1	1		6		
合計	2	1	1	1	5	7	9	4	22	17	2	10	88	6	5

V 自然科学分析

1 黒曜石の産地同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県岩泉町小成Ⅱ遺跡では、縄文時代中期末葉とされる黒曜石製石器が出土している。今回の分析調査では、これらの石器について元素分析を行い、原産地の同定を行う。

1. 試料

試料は、小成Ⅱ遺跡から出土した黒曜石製石器 2 点である。試料には、試料番号 1、試料番号 2 が付されている。試料番号 1 は SI11 の 1 層下位から出土し、試料番号 2 は 6g グリッドの黒色土層から出土したものである。試料の外観を図版 1 に示す。

2. 分析方法

(1) 試料の測定

本分析調査では、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (セイコーインスツルメンツ社製 SEA2110L シリーズ卓上型蛍光 X 線分析計) を用いて元素分析を行なう。分析元素は Al、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nb の 12 元素である。試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それらを産地の特定のための指標とした。ここでは、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zr、Al/K、Si/K の値を求め、産地を区別する指標として用いる。

なお、黒曜石製遺物の蛍光 X 線分析においては、試料の表面の風化程度、試料の厚さおよび試料の形状によって分析値に影響が及ぶ。表面が曇っているほどの風化がある場合には、カリウムの分析値が大きくなるため、Ca/K、Ti/K の両軽元素比を除いて産地判定をする。試料の厚さが 1.5mm 以下の場合、重い元素は小さく測定されるため、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて産地判定をする。厚さ 0.3mm 以下の試料については補正困難なため、産地判定はできない。試料の形状については、厚さの薄い部分を含んでいたり、極端な曲面しかないものなどを測定した場合に、分析値は変動し、産地判定結果は一定しない。そのような場合には、分析場所を変えて多数の分析値により産地を判定し、最も多く判定された産地を選択する。

(2) 産地判定

a) 黒曜石原石の分析

黒曜石の原産地は、北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布している。調査を終えている原産地の一部を図 1 に示す。これら原石について、上述した測定を行い、上記の元素比を求め、分類した。ここでは分類の単位を「群」とよび、例えばその地名を付して「和田峠第 1 群」などとする。現時点では、日本および近隣国 (ロシア、北朝鮮、台湾など) の原石群と、原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると、合計 331 個の原石群・遺物群を得ている。産地判定は、試料の元素比とこれら 331 群の元素比とを比較し、必要条件と十分条件を求めて行う。

b) 産地の判定

上述した各元素比を変量とし、それらの相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T2 乗検定を、試料と 331 個の原石群・遺物群との間で行い、各群に帰属する確率を求めて産地を判定する(東村,1976;1990)。ただし、低い確率(0.1%未満)で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略する。なお本分析法では、低い確率の原産地も確認しているということが重要である。すなわち、低い確率とされた原産地の原石が使用された可能性を考える必要がないという結果でもあるからである。

次に、ホテリングの T2 乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して、遺物の原石産地を判定する。石材の成分組成以外の特徴としては、肉眼観察においてキラキラ光る鉱物が多いか少ないか、また光る鉱物は輝石か雲母か、さらに表面の光沢の状況や角礫あるいは円礫の特徴が認められるなどがあげられる。

なお本分析は、遺物材料研究所の協力を得て行ったものである。

3. 結果

各試料の元素比分析結果を表 1 に示し、ホテリングの T2 乗検定結果による原産地とその帰属確率、および検定結果に成分組成以外の特徴などを加えて判定した産地を、表 2 に示す。2 点の試料は、ともに出来島群、鶴ヶ坂群の 2 群に同定された。出来島群は、青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群である。鶴ヶ坂群は、青森市西部の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴喰地区より採取された原石による群である。原石の産状(採取のし易さや産出量)などから、今回の試料については 2 点ともに産地判定は出来島としたが、原石採取の可能性は森田村から青森市西部までの広い範囲を考慮する必要がある。

表 1. 黒曜石試料の元素比分析結果

試料番号	遺跡名	遺構名・地点名	層位	分析番号	元 素 比									
					Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K
1	KN II-13	SI11	1 層下位	120575	0.349	0.134	0.234	2.266	0.852	1.032	0.388	0.152	0.036	0.476
2	KN II-13	6gグリット	黒褐色土層	120576	0.360	0.121	0.210	2.017	0.770	1.041	0.333	0.179	0.030	0.421
JG-1					0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1 : 標準試料 -Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表 2. 黒曜石試料の産地分析結果

試料番号	遺構名・地点名	分析番号	ホテリングの T ² 検定結果	判定
1	SI11	120575	鶴ヶ坂 (94%), 出来島 (68%)	出来島
2	6gグリット	120576	出来島 (41%), 鶴ヶ坂 (41%)	出来島

引用文献

東村武信,1976,産地推定における統計的手法.考古学と自然科学,9,77-90.

東村武信,1990,考古学と物理化学.学生社,212p.

図版1 黒曜石試料



1.試料番号1 KNⅡ-13 SI11 1層下位(1)

1cm



2.試料番号1 KNⅡ-13 SI11 1層下位(2)

1cm



3.試料番号2 KNⅡ-13 6gグリット 黒褐色土層(1)

1cm



4.試料番号2 KNⅡ-13 6gグリット 黒褐色土層(2)

1cm

2 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

小成Ⅱ遺跡は、岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成 4-36 他に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡から出土した炭化物 4 点である (表 1)。

2 測定の意義

調査区内から見つかった竪穴住居跡群は、重複関係、土器編年、炉の形態から 4 時期に分けられる。これらのどの時期か明確でない住居跡もあるため、年代測定によって時期決定の手がかりを得る。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。

pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料 4 点の ^{14}C 年代は、 $4110 \pm 20\text{yrBP}$ (No.3) から $4030 \pm 30\text{yrBP}$ (No.1、4) の狭い幅に収まり、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致するものも含まれる。暦年較正年代 (1σ) は、古い方から順に No.3 が縄文時代中期中葉から後葉頃、No.2 が中期後葉から末葉頃、No.1、4 が中期末葉から後期初頭頃に相当する (小林編 2008)。

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132493	No.1	SI04 炉内 下層	炭化物	AAA	-32.72 ± 0.45	$4,030 \pm 30$	60.54 ± 0.21
IAAA-132494	No.2	SI06 炉内 中位層	炭化物	AAA	-23.96 ± 0.42	$4,050 \pm 30$	60.38 ± 0.21
IAAA-132495	No.3	SI11 床面	炭化物	AAA	-26.52 ± 0.30	$4,110 \pm 20$	59.93 ± 0.18
IAAA-132496	No.4	SI19 床面	炭化物	AAA	-27.52 ± 0.42	$4,030 \pm 30$	60.52 ± 0.19

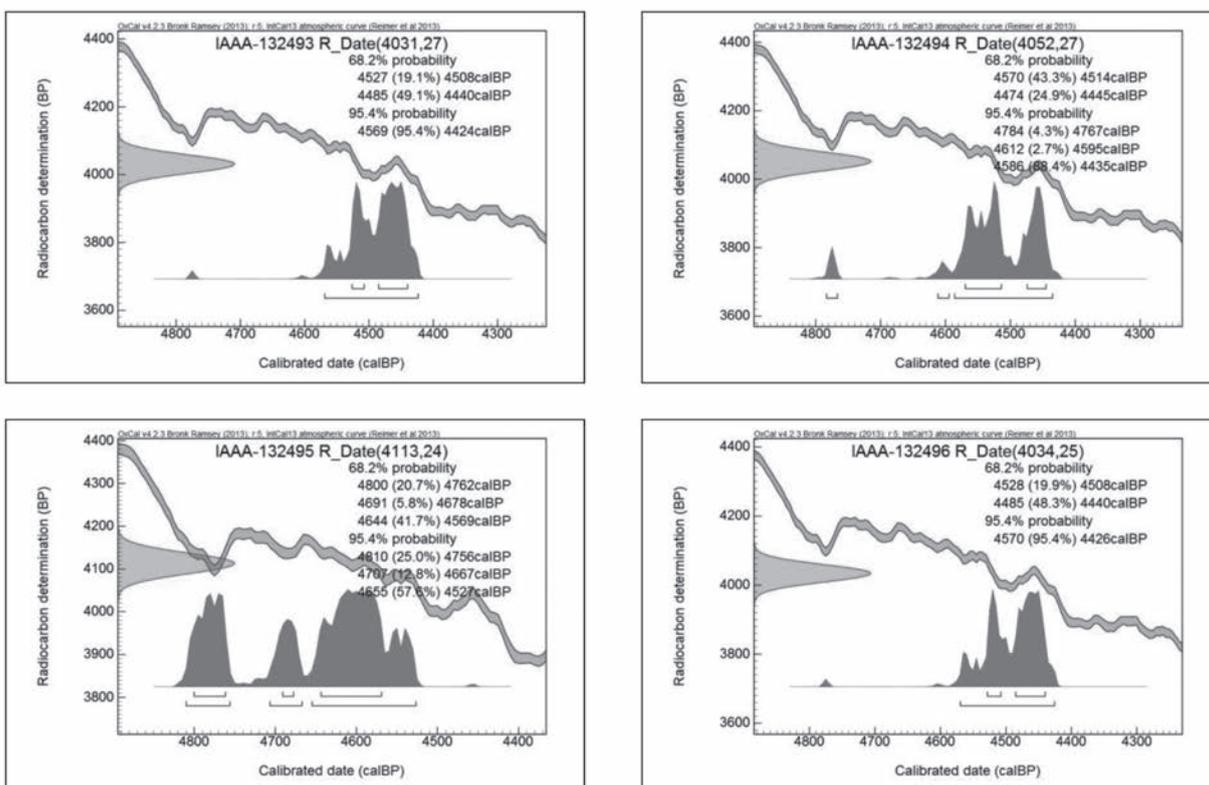
[#6260]

2 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS 測定)

表 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132493	4,160 \pm 30	59.58 \pm 0.19	4,031 \pm 27	4527calBP - 4508calBP (19.1%) 4485calBP - 4440calBP (49.1%)	4569calBP - 4424calBP (95.4%)
IAAA-132494	4,040 \pm 30	60.51 \pm 0.20	4,052 \pm 27	4570calBP - 4514calBP (43.3%) 4474calBP - 4445calBP (24.9%)	4784calBP - 4767calBP (4.3%) 4612calBP - 4595calBP (2.7%) 4586calBP - 4435calBP (88.4%)
IAAA-132495	4,140 \pm 20	59.74 \pm 0.18	4,113 \pm 24	4800calBP - 4762calBP (20.7%) 4691calBP - 4678calBP (5.8%) 4644calBP - 4569calBP (41.7%)	4810calBP - 4756calBP (25.0%) 4707calBP - 4667calBP (12.8%) 4655calBP - 4527calBP (57.6%)
IAAA-132496	4,080 \pm 20	60.20 \pm 0.18	4,034 \pm 25	4528calBP - 4508calBP (19.9%) 4485calBP - 4440calBP (48.3%)	4570calBP - 4426calBP (95.4%)

[参考値]



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

VI 総 括

今回の小成Ⅱ遺跡の調査は、「三陸沿岸道路（田老岩泉線）」事業に伴う発掘調査である。対象面積1,900㎡のうち、縄文時代中期後葉を中心とする集落跡が見つかった。

本遺跡が所在する岩手県下閉伊郡岩泉町小本字小成付近は、山側斜面南側端部に位置し、小成川によって形成された谷底平野及び氾濫平野である。調査で角礫と円礫が混在する礫層が確認され、その上部に To-Cu テフラ二次堆積層を確認した。開田時の削平により遺跡の南側は消失していた。南西から南に向かって小成川が流れ、水資源は豊富である。

1 縄 文 土 器

今回の小成Ⅱ遺跡調査で出土した遺物の大半は竪穴住居跡をはじめとする遺構に伴っている。出土土器は縄文時代中期後葉大木9式～大木10式段階が主体である。これ以外の時期に比定されるものでは縄文時代早期中葉の貝殻沈線文土器（No.30・50・143）、同前期初頭～前葉の繊維土器（No.7・8・160・206・207・259）、同中期後葉大木8b式土器（No.74・226・227）、同後期前葉の帯縄文文様を持つ土器（No.260）、同晩期中葉の大洞C₂式土器（No.112）が出土している。いずれも少量であるためこれらの時期における遺跡の内容は判然としない。ここでは縄文時代中期後葉土器群を対象に若干の検討を加える。既往の編年研究成果として主に丹羽（1981・1991）、森（2008）を参照した。

<大木9式古段階>

大木9式土器がまとまって出土している遺構としてSI01・SI11・SI12・SI15・SI20・SI21・SI28の各住居跡が挙げられる。このうち、断面三角形に調整された隆線を用いて口縁部突起直下の渦巻文を中心とした横位に展開する文様構成をとるSI11 - No.70～72・77、SI21 - No.155、SI35 - No.215等が大木9式古段階に相当すると考えられる。また、SI12 - No.100、SI21 - No.155では胴部の主文様は並列する沈線による長楕円形区画であり大木9式新段階の文様構成に近いが、口縁部から頸部に見られる立体的な突起を伴う隆線文様の要素から古段階に含まれると考えられる。これらに加えて、2本平行する隆線、あるいは隆沈線による縦長区画文が施されるSI11 - No.73・87、SI15 - No.117、SI21 - No.157、SI22 - No.168等も破片資料という制約はあるが、大木8b式から続く施文手法を継承していると見られ古段階の土器と判断される。

<大木9式新段階>

基本的には沈線文による並列する長楕円形区画が主たる文様要素となり、横位に連続する文様構成をとらないものがこの段階に相当すると判断した。このうち長楕円形区画文が並列しその隙間にステッキ状の沈線文が加えられる文様の土器はSI11 - No.68・69・76、SI20 - No.144、SI28 - No.187、SI37 - No.218等比較的多く見られる。また比較的小型で単純な器形の鉢ないし深鉢形で、波状口縁頂部から垂下する無文部に渦巻文を伴うステッキ状の文様を加えられるもの（SI11 - No.77・78、SI20 - No.144等）もこの段階に伴うものと考えられる。

<大木10式古段階>

SI05・SI06に良好なまとまりがある。充填縄文手法を用いて横位に入り組む波頭状、横長のS字状文様が展開する。SI06 - No.38・39のように口縁部の無文部や文様図形内の無文部に刺突列点加えられるものを含む。刺突は半裁竹管先端を使用したD字形のものである。無文部の交点等に比較的

大きめの浅い円形刺突が伴う例がある（SI05 - No. 31、SI06 - No. 38・39 等）。文様構成の全体が判明しない破片資料も概ねこの段階に含まれるものと考えられる。また、地文のみの深鉢のうち上半が緩く外反し縄文縦位回転が施された SI03 - No. 10・11、SI05 - No. 32、SI06 - No. 50・51、SI19 - No. 131～133、SI33 - No. 212 等は当該段階に伴う可能性が高い。

<大木 10 式新段階>

出土数は少なく頸部に刻みを加えた隆帯が巡るもの（SI03 - No. 14）、頸部沈線に沿って刺突列が巡るもの（SI06 - No. 40）等数点が見られるに過ぎない。文様の一部しか判明しない破片資料にこの段階に該当するものが含まれる可能性はあるが、絶対数から見る限り僅少であると考えられる。

以上からまとめると、大木 9 式古段階から大木 10 式古段階にかけてが遺跡の主要な時期であることは確実である。住居跡等個々の遺構に対する時期比定は、埋設土器、床面出土一括資料といった良好な出土状態に恵まれていない面はあるものの、概ね以下のように判断される。小片のみの出土で根拠が弱いものには疑問符を付している。また不明とした遺構は遺物出土がほとんどない等根拠に乏しい遺構だが、周辺状況から見る限り上記段階のいずれかに含まれる可能性が高い。

大木 9 式古段階	{SI11・SI21・SI28}
〃	? {SI12・SI24・SI35}
大木 9 式新段階	{SI01・SI15・SI37}
〃	? {SI07・SI08・SI14・SI20・SI22・SI23・SI25}
大木 10 式古段階	{SI03・SI05・SI06・SI19}
〃	? {SI09・SI10・SI16・SI17・SI26・SI33・SI38}
不明	{SI02・SI04・SI13・SI18・SI27・SI29・SI30・SI31・SI32・SI34・SI36}

引用・参考文献

丹羽茂 1981「大木式土器」『縄文文化の研究』第 4 巻 pp.43-60

丹羽茂 1991「中期大木土器様式」『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』pp.346-352

森幸彦 2008「大木 9・10 式土器」『総覧 縄文土器』pp.360-357

2 石 器

遺跡全体を見ると、剥片石器の出土量は住居数に対して極端に少なく、対して敲磨器類の出土量が異様に多い。また、遺跡内には角礫・亜角礫が広範囲にわたり分布している。にも関わらず、まとまった量の円礫が多数出土している。これら円礫は、角礫・亜角礫の多い当該遺跡において、明らかに外部から持ち込まれたものであると判断される。出土場所は住居壁際立ち上がり面が最も多く、住居内に人為的に持ち込まれたものである可能性が高い。円礫の存在は当遺跡に住む人々が小成川等円礫の形成される場所に頻繁に行き来し、居住区内に持ち込んでいたことを示している。

黒曜石の山地同定では、青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部出来島群と青森市西部の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴喰地区産との結果であった。2 点とも原石採取は森田村から青森市西部までである。小成 II 遺跡と同じく、三陸沿岸に所在する岩手県普代村力持遺跡（星 2008）では黒曜石が 11 点出土しており、産地同定から出来島産であることが確認されている。この事実は、本遺跡を含む三陸沿岸と青森県西津軽地域に交易が存在していたことを示す貴重な資料といえる。

3 遺 構

竪穴住居跡 38 棟、溝跡 1 条、焼土遺構 1 基、土坑 2 基を検出した。前々項で述べたように、遺構からはいずれも大木 8 b ～ 10 式、縄文中期中葉～中期末葉を主体とする土器が出土した。検出された住居には縄文中期中葉～後葉にかけて出現する複式炉が伴う。各住居に大きな時期差はないが、重複関係、出土土器を細かく精査すると若干の時期差が認められる。これらのことから集落は縄文時代中期中葉～後葉にかけて継続的に営まれてきたが集落の存続時期は極めて短いことが明らかとなった。中でも大木 8 b 式が出土している SK05・SI11 は共に遺跡内で最も古い時期に相当する。また、遺物を伴わない住居、もしくは年代特定の根拠に欠ける住居から出土し、且つ出土状態の良い炭化物を自然科学分析試料とした。結果、SI11 < SI06 < SI04・SI19（試料 1 =SI04 炉内、2 =SI06 炉内、3 =SI11 床面、4 =SI19 床面）の順に縄文時代中期中葉～後葉、中期後葉～末葉、中期末葉～後期初頭の結果となった。これは SI06 と SI19 の重複関係と一致するが、各々から出土した土器型式はいずれも大木 10 式古段階であり、両遺構に新旧関係はあるものの大きな時期差はないものと推測される。さらに、遺物点数が少量である SI04 も分析結果から同時期であると判断される。

全体の分布をみると調査区南東は開田時の削平による消失が著しいため、住居の検出は西側より少ない。よって、検出数の割合差が南北によって大きい。このため、分布状況で一概に把握することはできない。しかし、概ね南北グリッドライン^{ユル}1 を境に西側に複式炉の分布が多く、また同じグリッドラインを境に東側からは石囲炉をもつ住居の分布がみられる。前述の時期差を考慮すると、当初は調査区北側の比較的標高の高い位置に住居を構築し、次時期には前面に広がりを見せる。最終期になると、調査区西側にやや偏る。

検出された住居中、壁面がわずかに残存するものは 38 棟中 23 棟で、残り 15 棟は炉跡、柱穴配置、掘方、壁溝等からの推測範囲にとどまる。

住居に伴う炉形態は 38 棟のうち地床炉、石囲炉、複式炉の 3 形態である。炉形態を分類したのが第 58 ～ 61 図である。遺跡内で地床炉を持つ住居は 6 棟で全体の 16% である。石囲炉を持つ住居は 18 棟で全体の 47%、複式炉を持つ住居は 13 棟で 35% である。不明は 1 棟で 2% である。

住居炉形態では、東北地方南部に見られる石組み部底面に敷石を施す複式炉は当該遺跡では 1 基もみられず、検出されたのは東北地方北部に多いとされる縁石のみの簡素な石組み部 + 石組み部、もしくは石組み部 + 掘方前庭部（特殊ピットを有するものもある）の複式炉のみである。また、石組み部壁面に扁平礫を用い、積み石状にするもの、長方形型の石囲部を扁平礫で区画するのみの簡素なものがみられる。

複式炉長軸方向をみると風向き等、自然環境が同一状況下におかれていた場合に一定になる可能性が高く、これらを分類すると以下ようになる。

長軸方向北西向き SI03・SI05・SI07・SI13・SI14・SI16・SI28

長軸方向北北西向き SI01・SI08

長軸方向北向き SI09・SI29

うち出土した土器型式を踏まえると、SI14・SI07、SI03・SI05 はそれぞれ大木 9 式新段階、大木 10 式古段階に属し、4 棟の住居配置は位置、距離とも規格性をもつ。

また、本遺跡の北に位置する田野畑村浜岩泉Ⅰ遺跡（金子・高橋 1998）では、この時期特有の方形の石囲炉が検出されており、これは今回確認された SI11、SI19、SI22、SI31、SI35 と同様である。

4 三陸沿岸北部の縄文中期後葉集落の消長性について

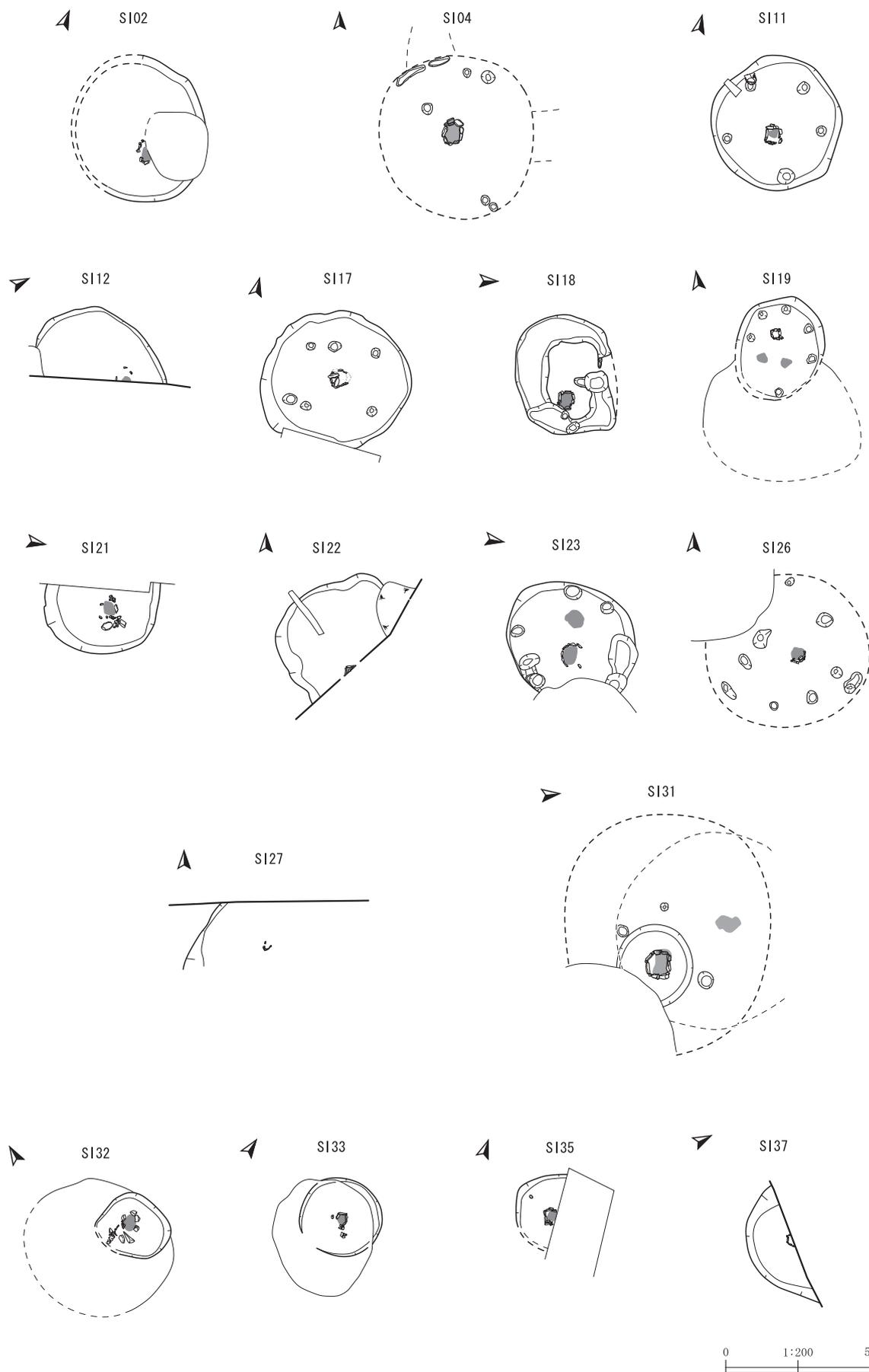
地床炉、石囲炉、複式炉を伴う竪穴住居跡 38 棟が検出され、いずれも大木 9 式古段階～10 式古段階を主体とする縄文土器が出土した小成Ⅱ遺跡は、極短時期に構築され、継続期間も極めて短期間であった。

ちょうど遺跡の西側を南流し、南東で曲折、太平洋へ流れ出る河岸段丘上に立地する当該遺跡は、遺物の出土量、見つかった住居の棟数からこの地域の拠点集落であった可能性が高い。

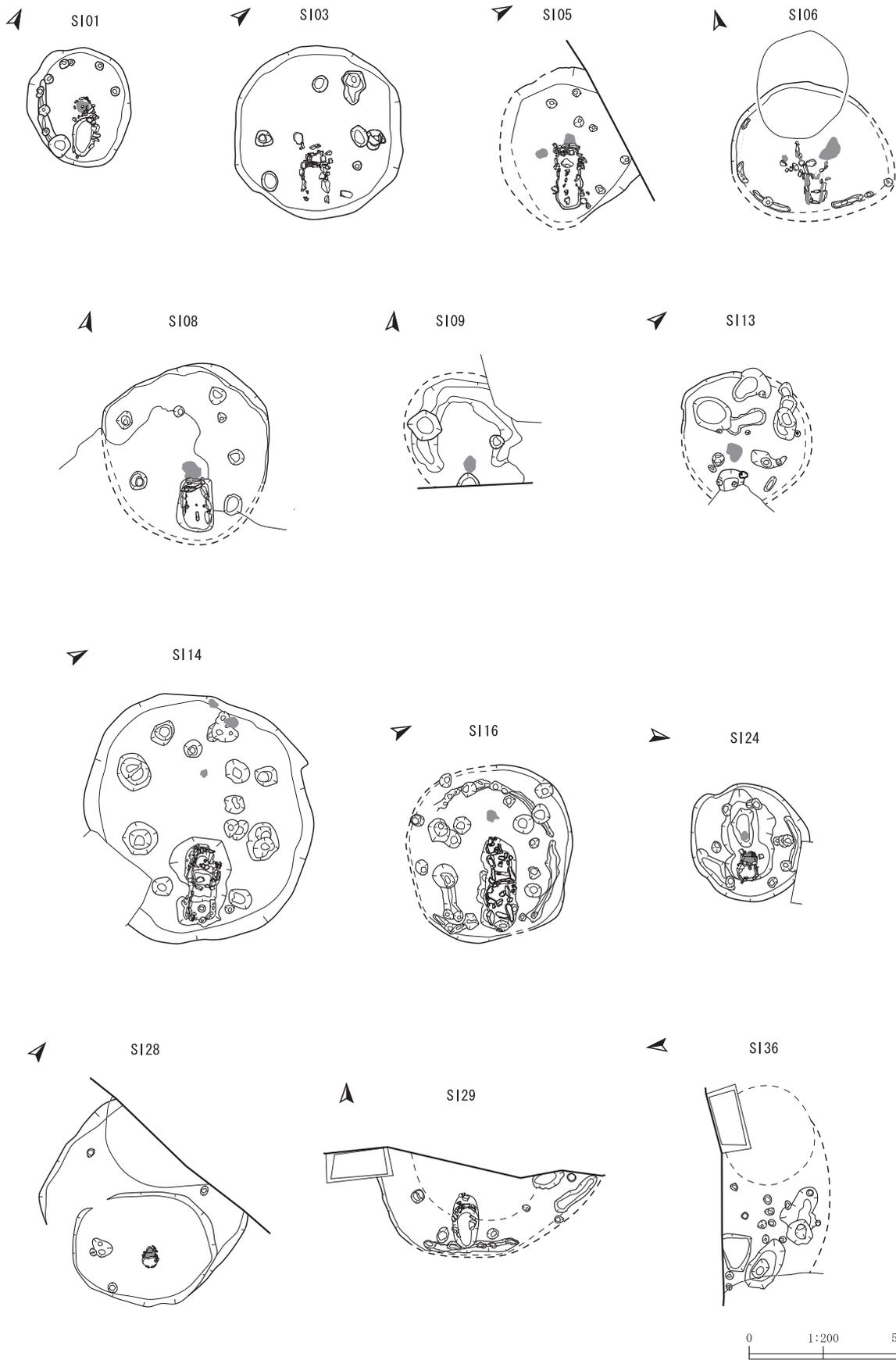
縄文時代中期になると、北緯 40° 以南はそれまで客体的に見て取れた円筒式土器文化が大木式土器文化に集約されていく。小成Ⅱ遺跡も同様の大木式土器の文化要素を持つ。また、8 b 式以降の岩手県三陸沿岸同時期集落をみると、久慈市宇部町の三崎Ⅲ遺跡（大木 8 b 式）、普代村堀内の堀内机遺跡（大木 8 式）、同じく普代村天拝板の力持遺跡（大木 2～10 式）、田野畑村島越立石野Ⅰ遺跡（大木 1～4・8 a～10 式）、同じく田野畑村浜岩泉Ⅰ遺跡（大木 8 b～9 式）、岩泉町安家の大平Ⅰ遺跡（大木 7 b～8 式）、岩泉町岩泉森の越遺跡（大木 7 b～10 式）等があげられる。

小成Ⅱ遺跡は田野畑村に位置する浜岩泉Ⅰ遺跡から直線距離で約 16Km、岩泉町森の越遺跡から約 28Km、乙茂Ⅰ遺跡から約 18Km である。力持遺跡発掘調査報告書（星 2008）内で筆者が述べているように、三陸沿岸部には縄文時代前期からの拠点集落が点在し、中には力持遺跡のように長時期にわたり集落が存続していく長期的なもの、小成Ⅱ遺跡のように短期的なもの 2 パターン存在する。各遺跡間の位置関係は 2～11Km 圏内に分布していることが指摘されているが、今回の調査で明らかになった小成Ⅱ遺跡は前述の近隣同時期遺跡からやや離れた位置に立地する。しかし、当該遺跡と浜岩泉Ⅰ遺跡はほぼ同時期の遺跡であり、間の小本川河口近辺、もしくは河岸段丘上に同様拠点集落が存在する可能性があげられる。いずれにせよ、今回の調査結果から、以前から指摘されていたこの地域の拠点集落の分布における、一部の空白部分を埋める成果を上げることができたことは確かである。

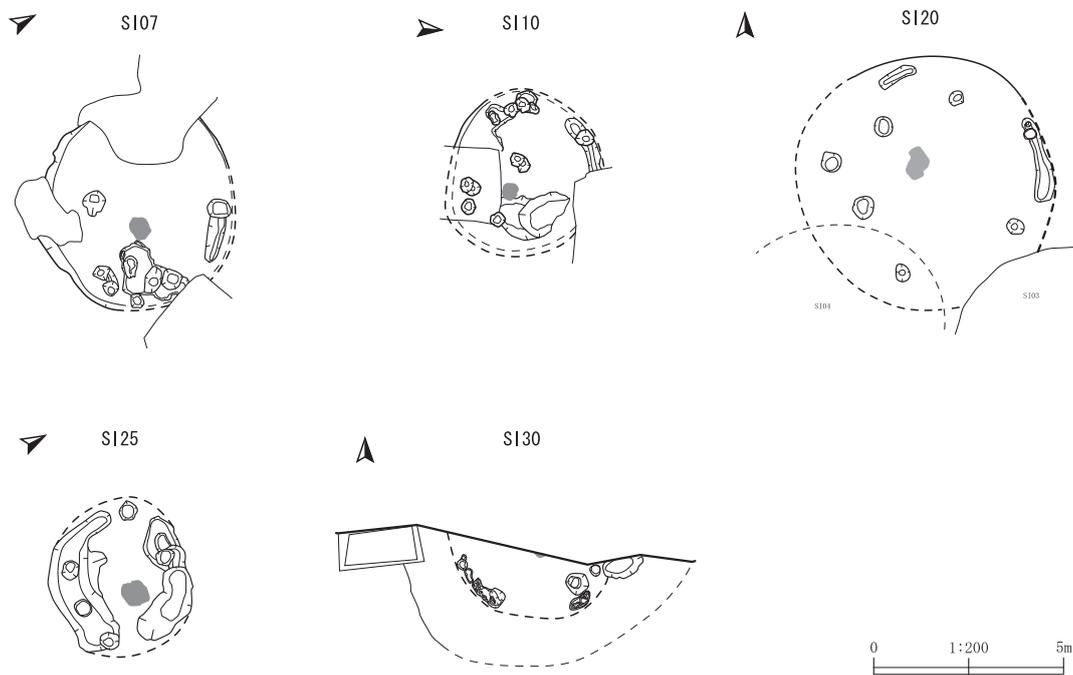
今回の小成Ⅱ遺跡調査成果を概観した。縄文時代中期後葉の集落遺跡は岩泉町内沿岸部では希少な事例だが、近隣に接する北部田野畑村と南部宮古市沿岸では近年の発掘調査により同時期集落遺跡が多数見つかっている。今後、さらに同沿岸地域の実態を解明する上で、より詳細にかつ広域に比較検討する必要がある。



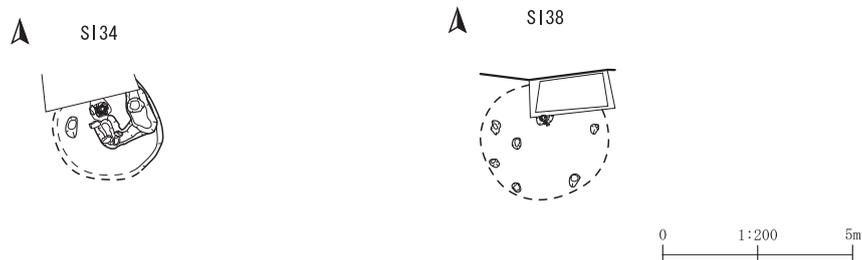
第58図 住居集成図1 (石囲炉)



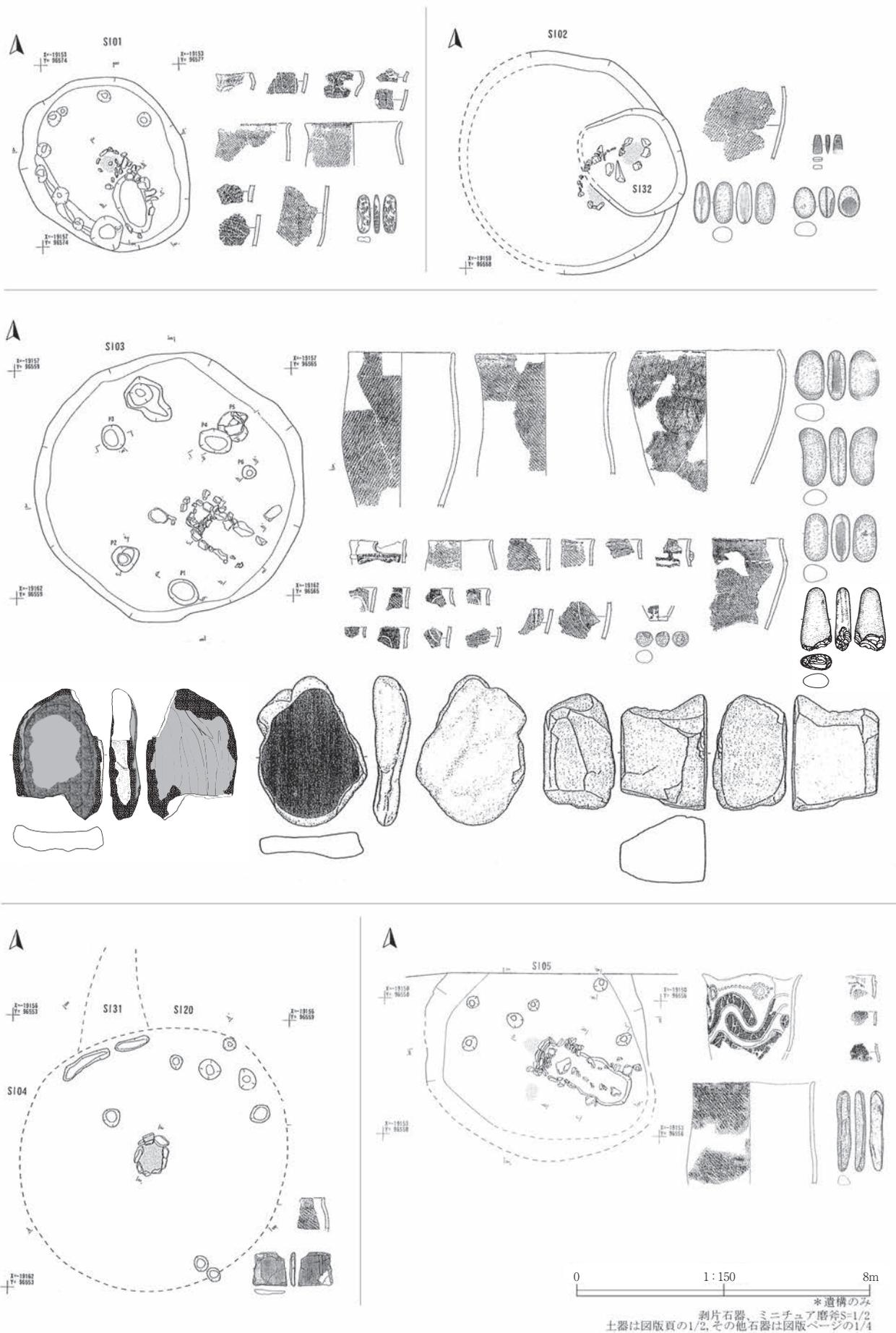
第59图 住居集成图2 (複式炉)



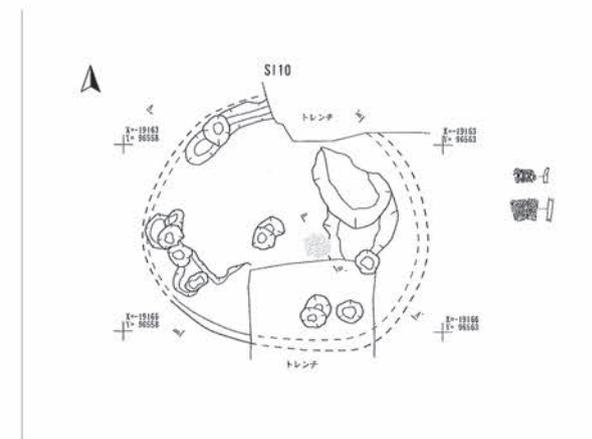
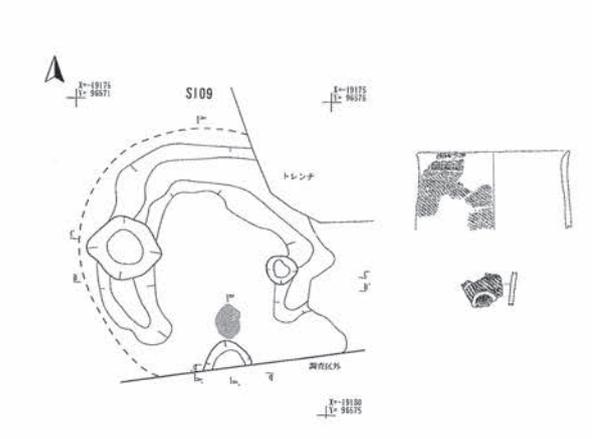
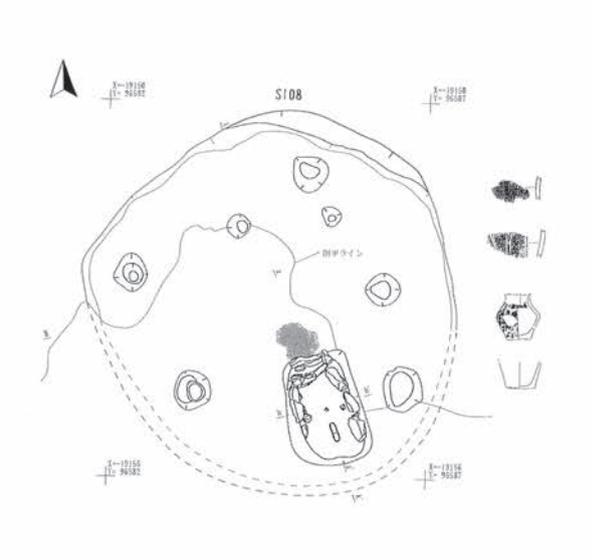
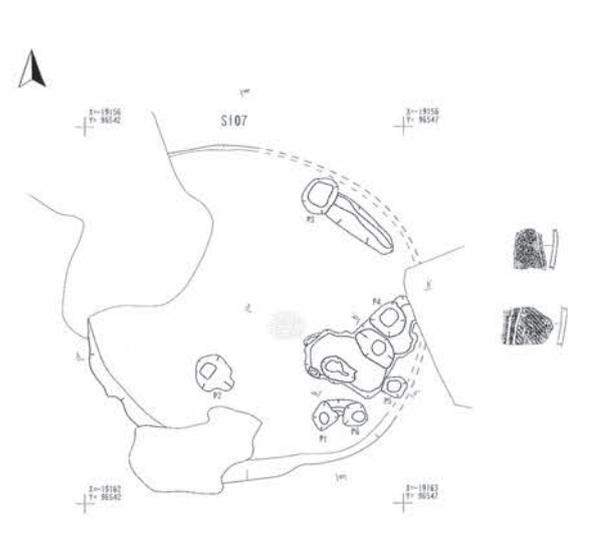
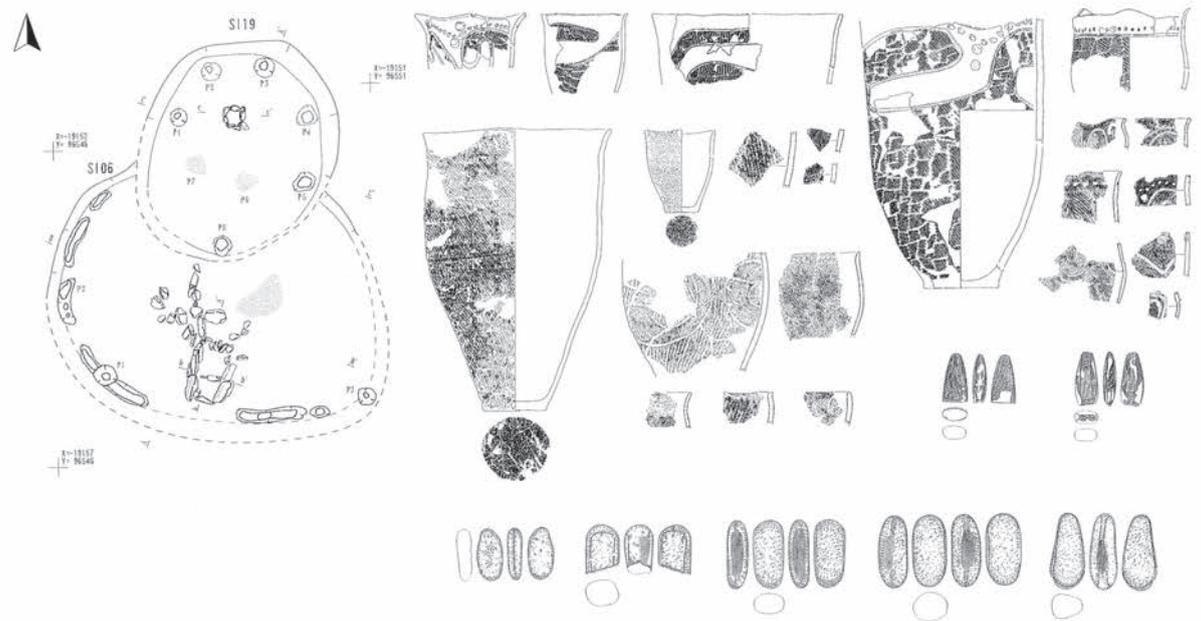
第60図 住居集成図3 (地床炉)



第61図 住居集成図4 (土器埋設)



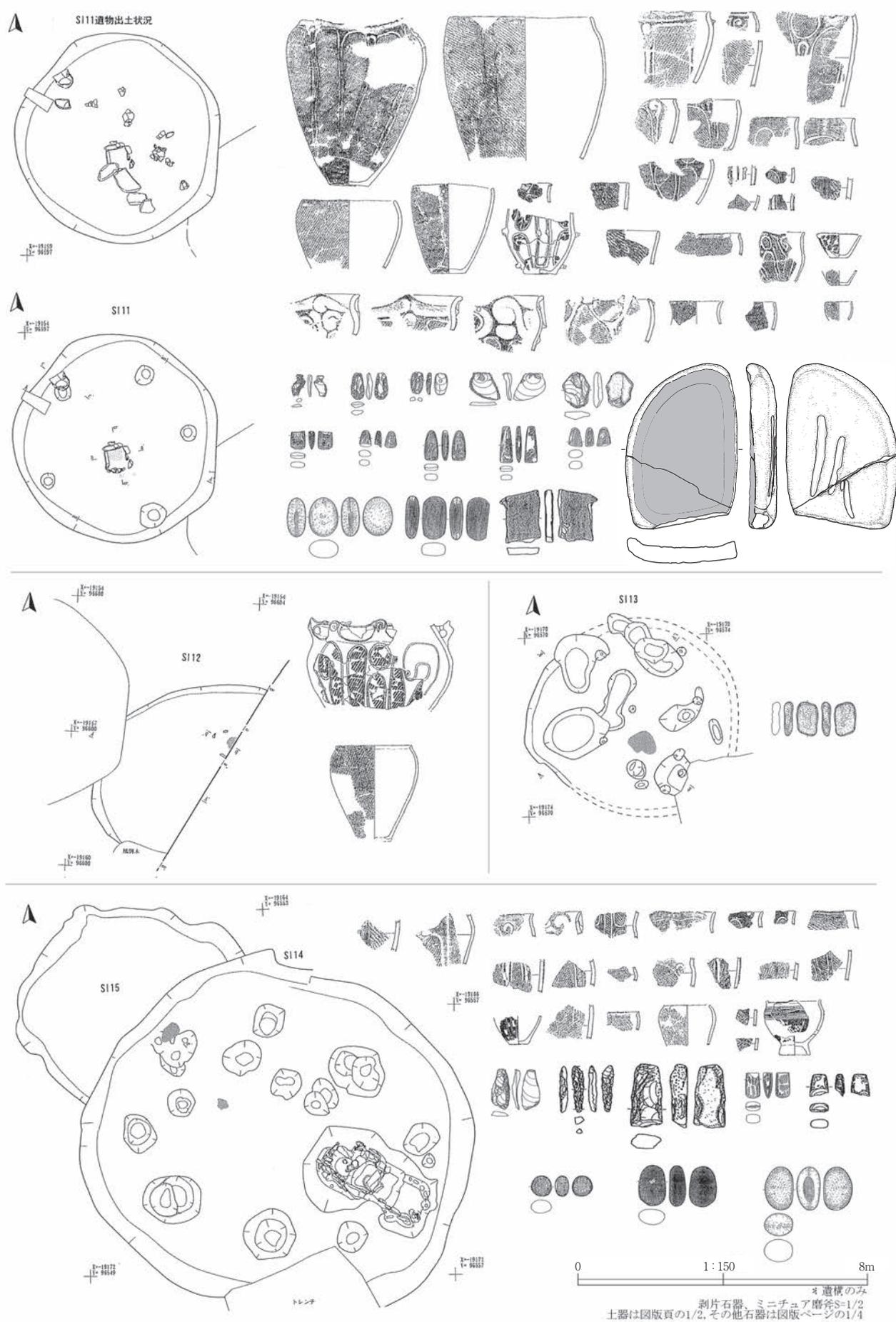
第62図 遺構内出土遺物集成 1



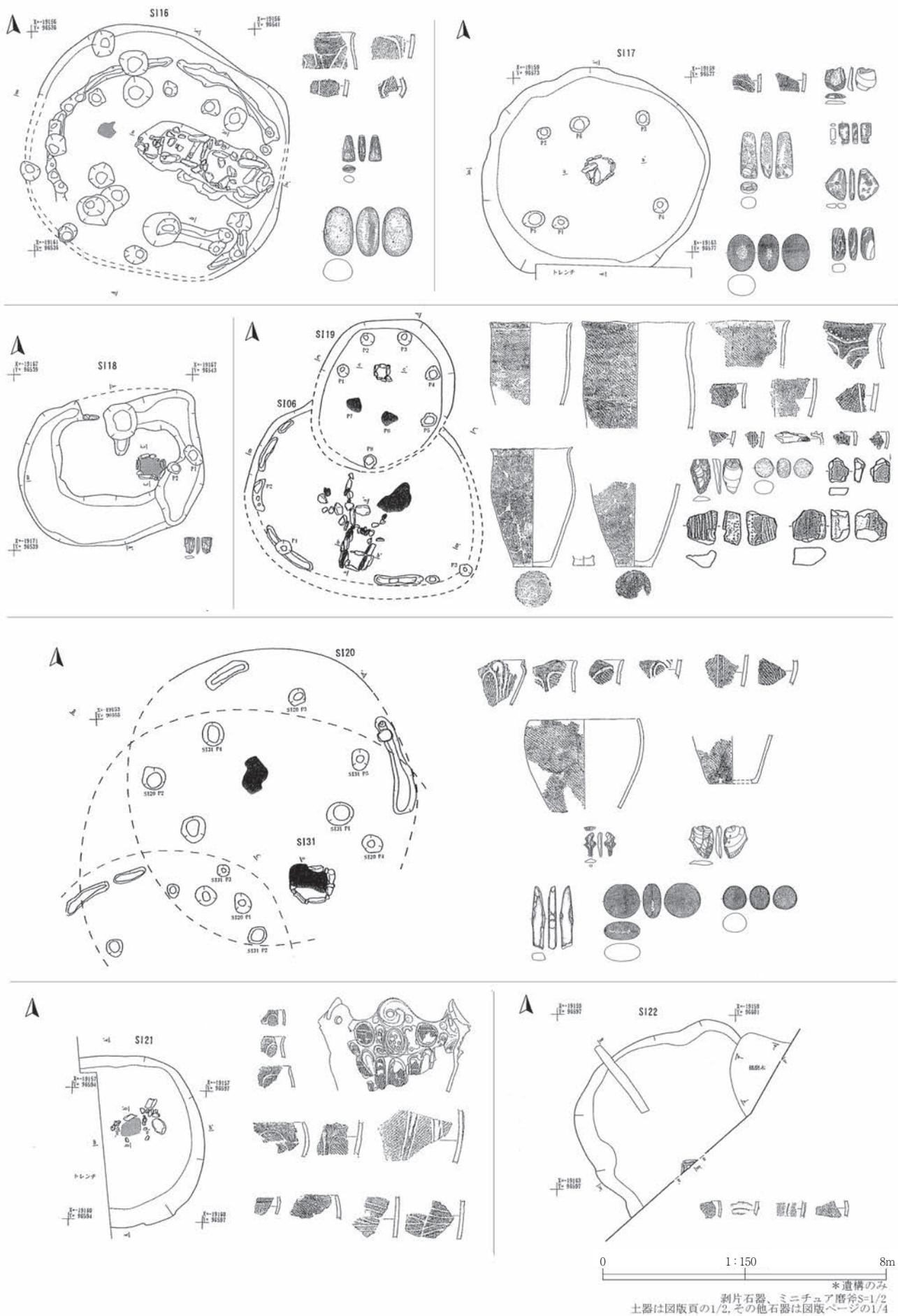
0 1:150 8m

*遺構のみ
剥片石器、ミニチュア磨斧S=1/2
土器は図版頁の1/2,その他石器は図版ページの1/4

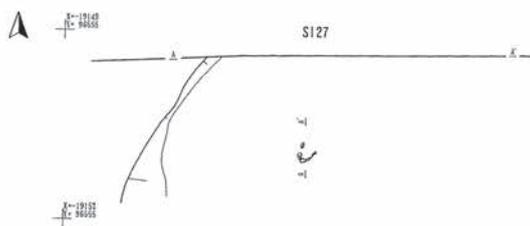
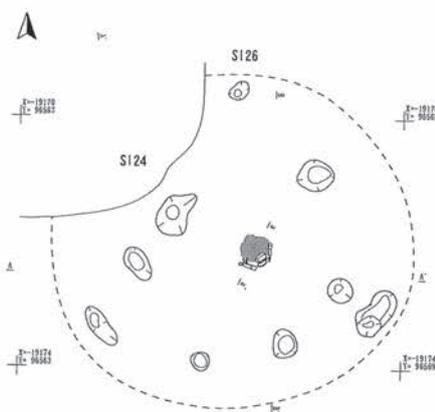
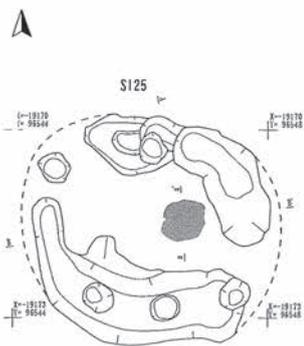
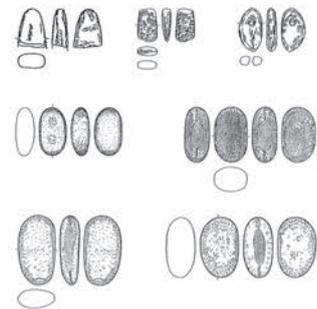
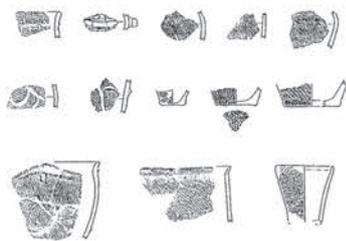
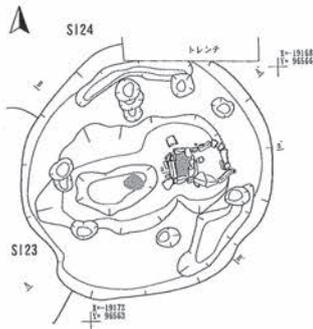
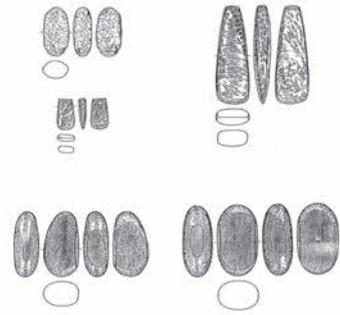
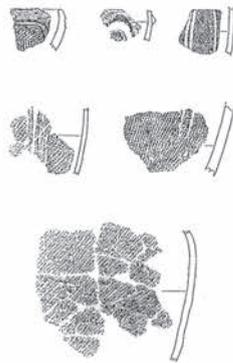
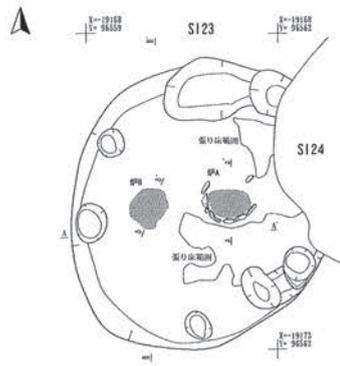
第63図 遺構内出土遺物集成2



第64図 遺構内出土遺物集成3



第65図 遺構内出土遺物集成 4

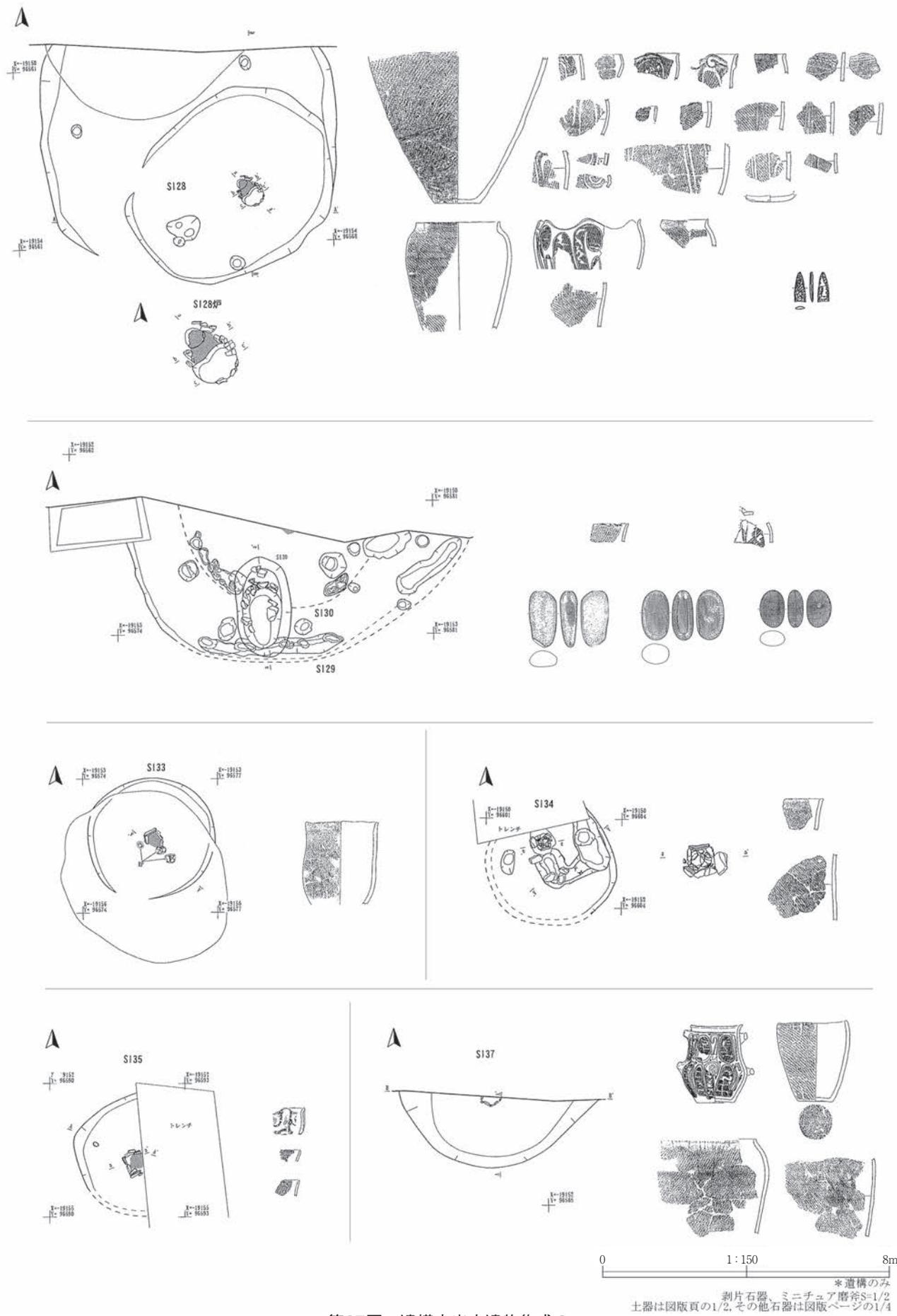


出土遺物なし

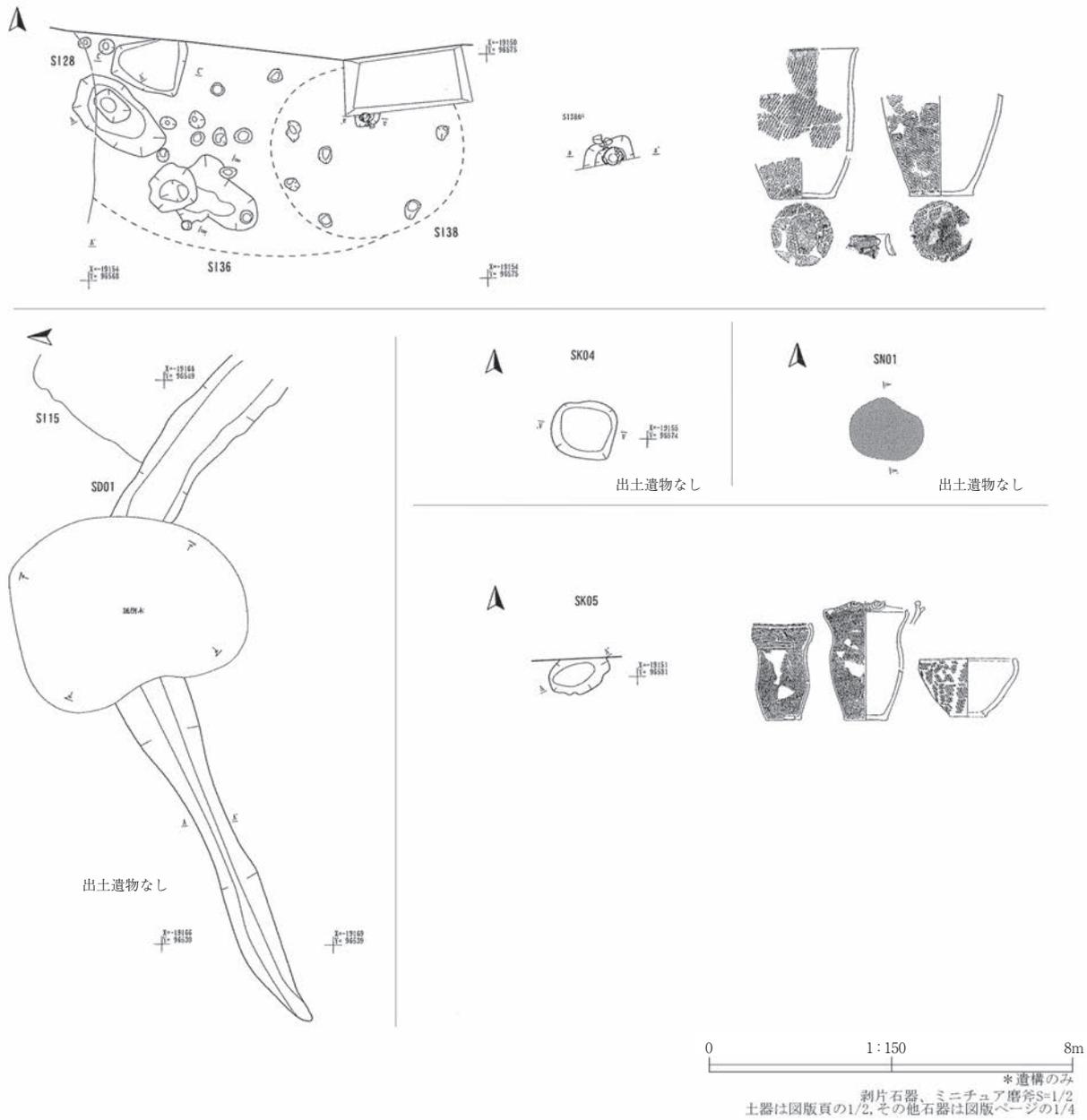
0 1:150 8m

*遺構のみ
 剥片石器、ミニチュア磨谷S=1/2
 土器は図版頁の1/2, 其他石器は図版ページの1/4

第66図 遺構内出土遺物集成5



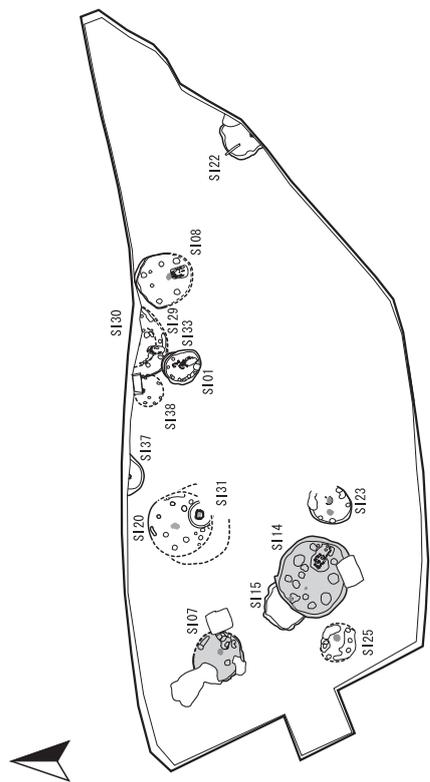
第67図 遺構内出土遺物集成6



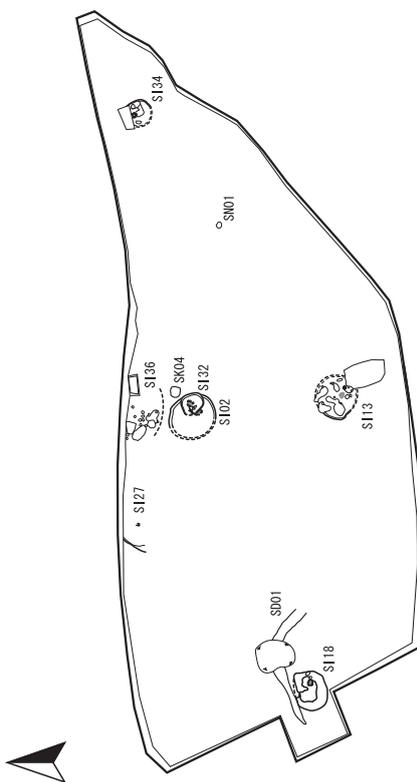
第68図 遺構内出土遺物集成7

引用・参考文献

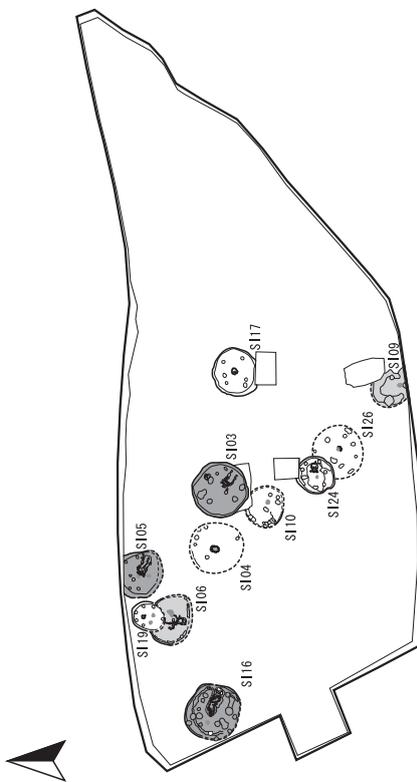
- 高木 晃 2013「Ⅵ総括」『大畑遺跡発掘調査報告書』pp148-154 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第606集
- 金子昭彦・高橋興右衛門 1998「Ⅳまとめ」『浜岩泉Ⅰ発掘調査報告書』pp173-174 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第276集
- 星 雅之 2008「Ⅶ総括」『力持遺跡発掘調査報告書』pp592-598 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第510集
- 星 雅之・須原 拓 2011「岩手県内における縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての変化について」『東北地方における中期／後期変動期：4・3ka イベントに関する考古学現象①』pp43-57
- 菅野智則 2005「複式炉を有する縄文集落の分布」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム』資料集
- 柳澤清一 1990「大木9-10式土器論（上）」『先史考古学研究』pp45-71 阿佐ヶ谷先史学研究会



大木9式新段階

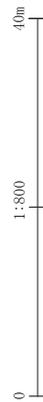


大木9式古段階

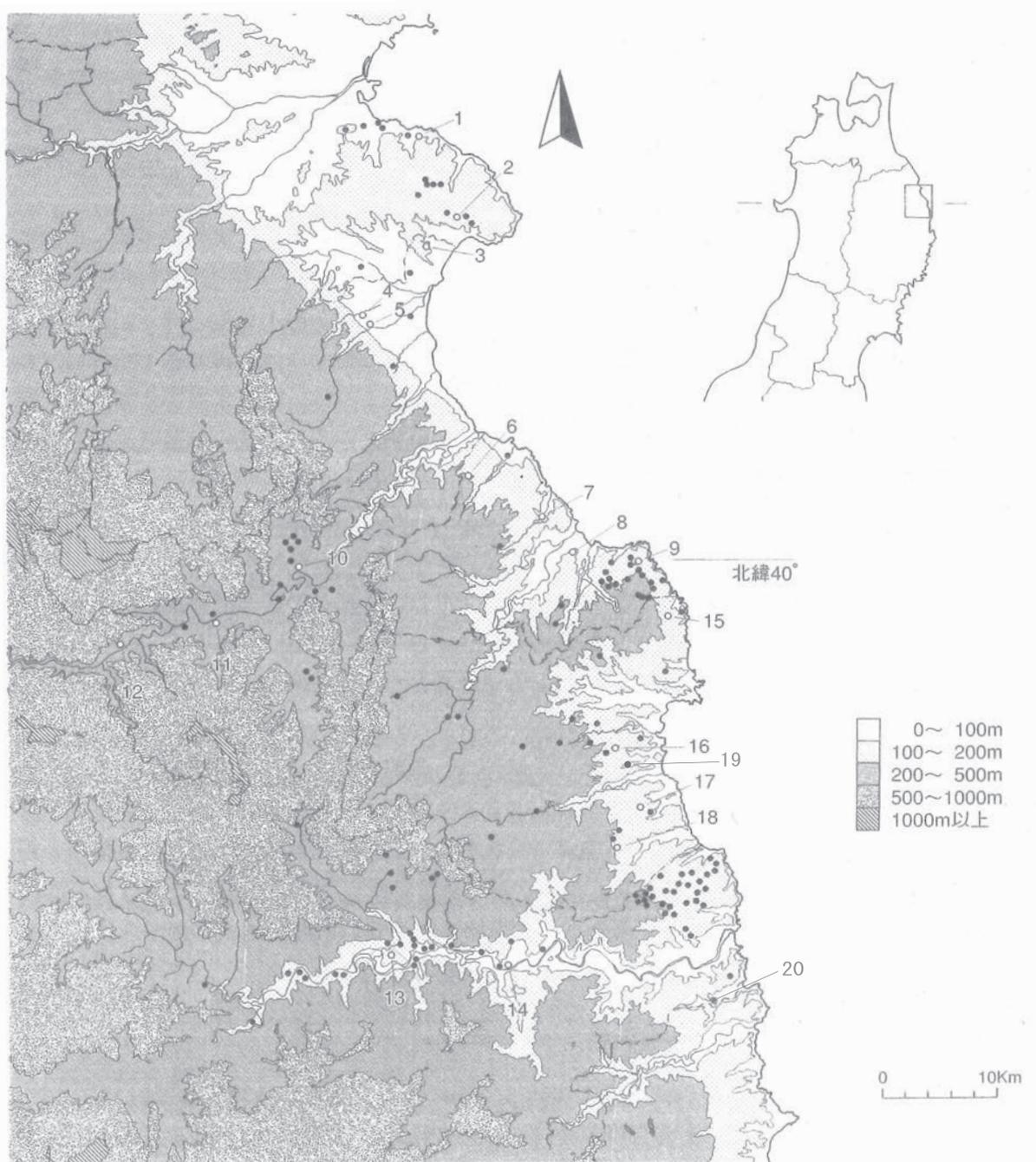


大木10式古段階

縄文時代中期後葉時期不明



第69図 時期別変遷図



『力持遺跡発掘調査報告書』より転載、一部加筆

第13表 三陸沿岸北部遺跡表

掲載No.	遺跡	所在地	種別	時代	円筒式土器大甕式土器にかかわる内容
1	大尻Ⅰ遺跡	久慈市長内町	貝塚・包含層	縄文(前・中期)	円筒下層b～上層b式、大木2・6・7式
2	三崎Ⅲ遺跡	久慈市宇部町	集落跡	縄文(中・後期)・弥生	円筒上層b～e式、大木7b～8b式
3	広内遺跡	野田村野田	城跡跡	縄文(中期)	円筒下層d式
4	平清水Ⅱ遺跡	野田村野田	散布地	縄文(前・後期)・古代	円筒下層b～上層b式
5	上宮内遺跡	野田村野田	-	縄文(前期)	円筒下層a式(*田野畑村史より)、円筒下層a・b・d式、円筒上層a式、大木式少量
6	堀内机遺跡	普代村堀内	集落跡	縄文(前・中・後期初頭)	大木2～8式、白磁式、円筒上層a式
7	力持遺跡	普代村天祥坂	集落跡	縄文(前～後期)	大木2～5・8a式、円筒下層a～上層e式、白磁式
8	太田名部遺跡	普代村太田名部	散布地	縄文(中期)	大木2～5・8a式、円筒上層式?
9	下村遺跡	普代村下村	散布地	縄文(前・中期)	大木8式
10	川口遺跡	岩泉町安家	集落跡	縄文(前・後・晩期)	円筒下層d式?、大木4～5式
11	松林Ⅲ遺跡	岩泉町安家	-	縄文	円筒下層d式と大木6～7aの折衷主体、円筒下層a式?、円筒下層b式?
12	大平Ⅰ遺跡	岩泉町安家	-	縄文	大木7b～8式
13	森の越遺跡	岩泉町岩泉	集落跡	縄文(早～晩期)・弥生	大木7b～10式、円筒上層c式
14	乙茂Ⅰ遺跡	岩泉町乙茂	散布地	縄文(中～後期)	大木式?
15	久春内Ⅰ遺跡	田野畑村久春内	散布地	縄文(前～晩期)・弥生	大木7b・8a式、円筒上層c・d式
16	和野Ⅰ遺跡	田野畑村和野	集落跡	縄文	大木2b～8a式、白磁式、円筒下層a～上層b式
17	館石野Ⅰ遺跡	田野畑村島越	祭祀跡・集落跡	縄文(前～晩期)	大木1～4・8a～10式
18	浜岩Ⅰ遺跡	田野畑村浜岩泉	集落跡	縄文	大木2b～8a式、白磁式、円筒下層a～上層b式
19	島越遺跡	田野畑村島越	集落跡	縄文(中期)・弥生	大木8・9式
20	小成Ⅱ遺跡	岩泉町小本	集落跡	縄文(中期)	大木8b～10式新段階

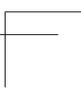
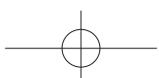
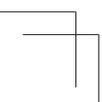
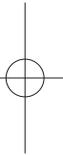
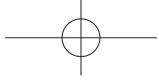
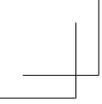
『力持遺跡発掘調査報告書』より転載、一部加筆

第70図 三陸沿岸北部遺跡

- 酒井宗孝 1987 「岩手県北部における縄文時代中期後葉から後期前葉の住居跡」『紀要Ⅶ』p. p45 ~ 70
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 岩泉町教育委員会 1983 『森の越遺跡』岩泉町文化財報告第5集
1984 『森の越遺跡』岩泉町文化財報告第7集
1985 『森の越遺跡』岩泉町文化財報告第9集
1986 『森の越遺跡』岩泉町文化財報告第11集
1987 『森の越遺跡 - 第13次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第13集
1988 『森の越遺跡 - 第14次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第15集
1988 『森の越遺跡 - 第15次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第16集
1989 『森の越遺跡 - 第16次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第17週
1989 『森の越遺跡 - 第17次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第19集
1991 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』岩泉町文化財調査報告第23集
1992 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』岩泉町文化財調査報告第24集
1993 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』岩泉町文化財調査報告第25集
1994 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅳ』岩泉町文化財調査報告第26集
1994 『森の越遺跡 - 第20次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第27集
1995 『茂師貝塚発掘調査報告書』岩泉町文化財調査報告第29集
1997 『森の越遺跡 - 第22次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第29集
1998 『森の越遺跡 - 第22・23次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第31集
1999 『森の越遺跡 - 第25次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第33集
2000 『森の越遺跡 - 第27次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第34集
2001 『森の越遺跡 - 第28次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第36集
2002 『中瀬Ⅰ遺跡』岩泉町文化財報告第39集
2003 『森の越遺跡 - 第31次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第40集
2005 『沢廻遺跡・森の越遺跡発掘調査報告書』岩泉町文化財報告第42集
2006 『豊岡Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩泉町文化財調査報告第43集
2007 『森の越遺跡 - 第33次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第44集
2007 『森の越遺跡 - 第34次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第45集
2010 『森の越遺跡 - 第35次発掘調査報告書 -』岩泉町文化財報告第46集
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1983 『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第52集
2004 『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集
2004 『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
- 田野畑村教育委員会 1990 『南大芦Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第1集
1998 『切牛Ⅱ遺跡・真木沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第3集
2000 『大芦赤空遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第5集
2001 『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』田野畑村文化財調査報告書第6集
2001 『立石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第7集
2002 『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』田野畑村文化財調査報告書第8集
2002 『立石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第9集
2007 『立石野Ⅰ遺跡 第9～14次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第14集
2008 『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第15集
2008 『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書 第4次調査の概要』田野畑村文化財報告書第16集
2010 『和野新墾神社遺跡 第2次発掘調査報告書』田野畑村文化財報告書第17集
2013 『机遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第19集
- 宮古市教育委員会 1989 『千鶏遺跡発掘調査報告書』宮古市埋蔵文化財報告書第16集

鈴木克彦・鈴木保彦 2009 『集落の変遷と地域』
長坂一雄 1982 『縄文文化の研究』
早稲田大学文学部考古学研究室 1997 『館石野 I 遺跡発掘調査報告書』

写真図版





調査前風景（西から）



基本層序 1（北西から）



基本層序 4（北西から）



基本層序 2（北西から）



基本層序 3（北西から）

写真図版 1 調査前風景・基本層序



SI01 竪穴住居全景（南から）



SI01 竪穴住居 B-B' 断面（西から）



SI01 複式炉 a-a' 断面（東から）



SI01 複式炉燃焼部 a-a' 裁ち割り（西から）

写真図版2 SI01 竪穴住居跡



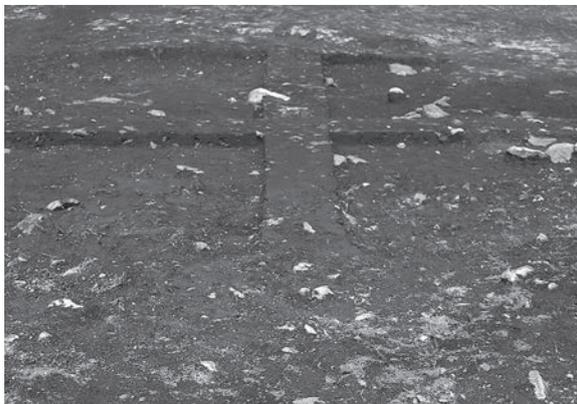
SI02 竪穴住居全景（東から）



SI02 石囲炉裁ち割り（南から）



SI02 石囲炉裁ち割り（南から）

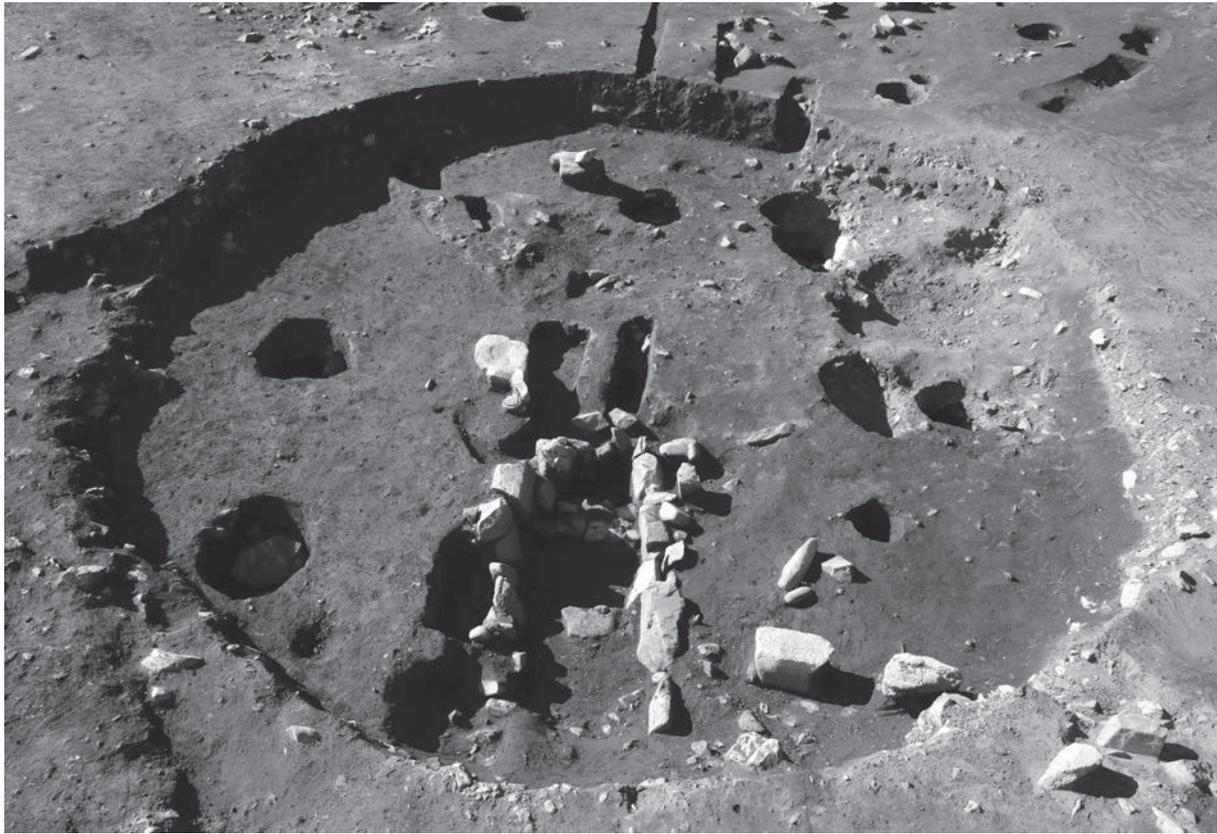


SI02 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI32 竪穴住居 A-A' 断面（北から）

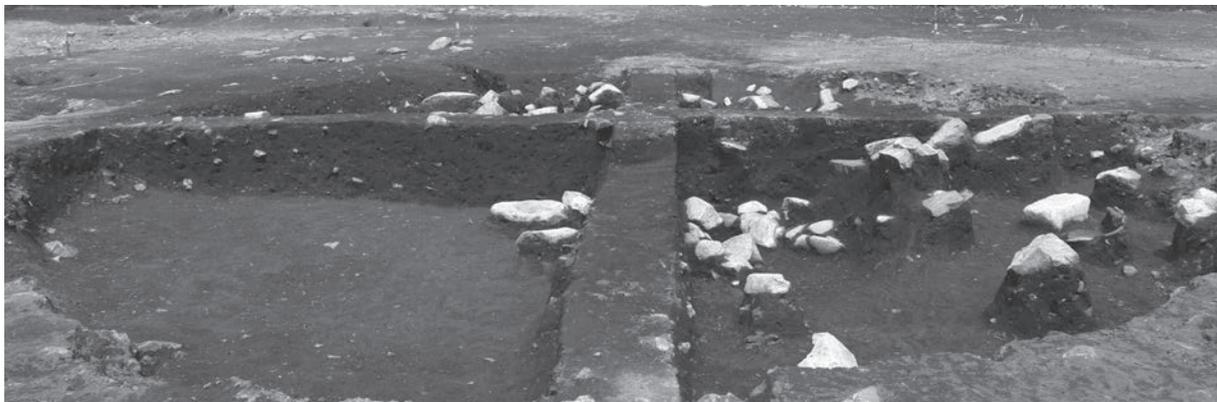
写真図版3 SI02・32 竪穴住居跡



SI03 竪穴住居全景（南東から）



SI03 竪穴住居 B-B' 断面（東から）



SI03 竪穴住居 A-A' 断面（南から）

写真図版4 SI03 竪穴住居跡（1）



SI03 複式炉断面 (東から)



SI03 柱穴 P 1 断面 (南西から)



SI03 埋設土器検出状況 (北から)



SI03 断面 (北西から)



SI03 柱穴 P 3 断面 (北西から)



SI03 柱穴 P7 断面 (北東から)

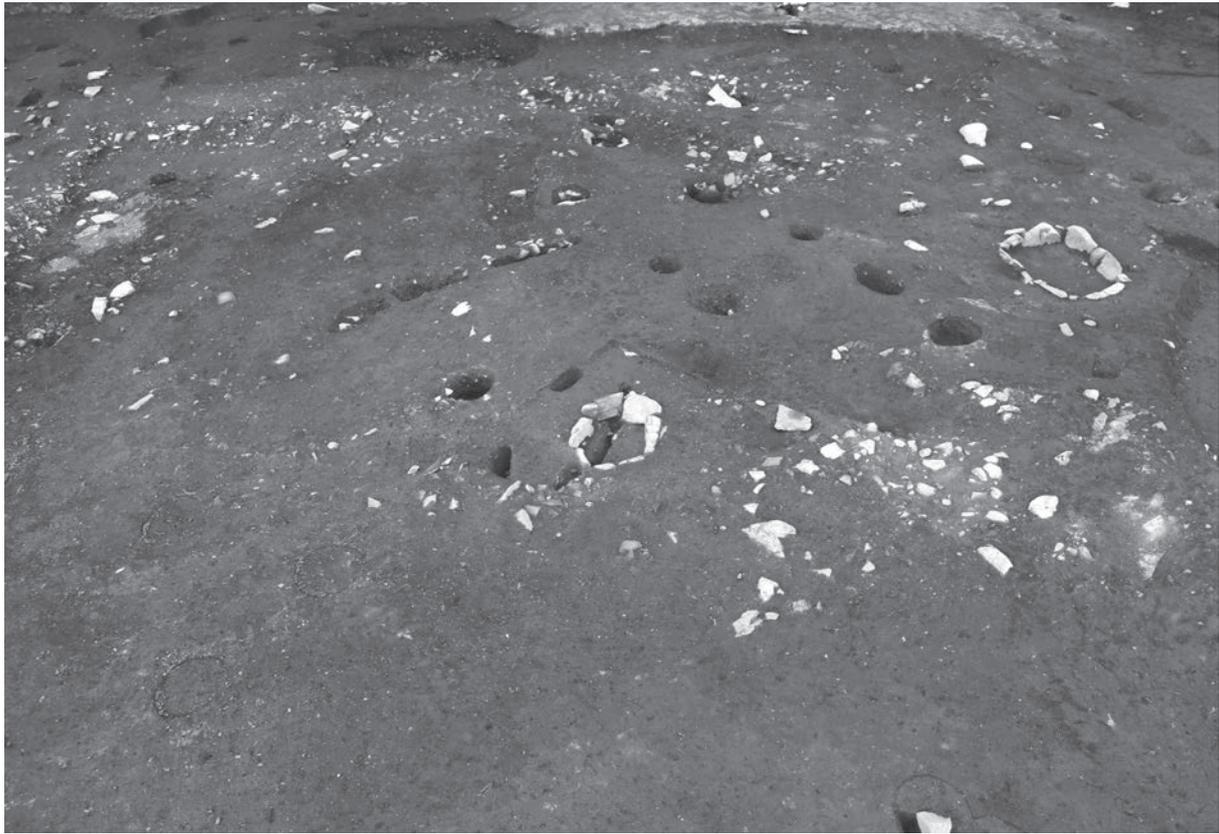


SI03 柱穴 P 2 断面 (東から)



SI03 柱穴 P 5 断面 (南東から)

写真図版5 SI03 竪穴住居跡 (2)



SI04 竪穴住居全景（南から）



SI04 竪穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI04 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI04 石囲炉断面（北西から）

写真図版6 SI04 竪穴住居跡



SI05 竪穴住居全景（南東から）



SI05 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI05 竪穴住居 B-B' 断面（北から）

写真図版7 SI05 竪穴住居跡（1）



SI05 竪穴住居複式炉崩落石あり（南東から）



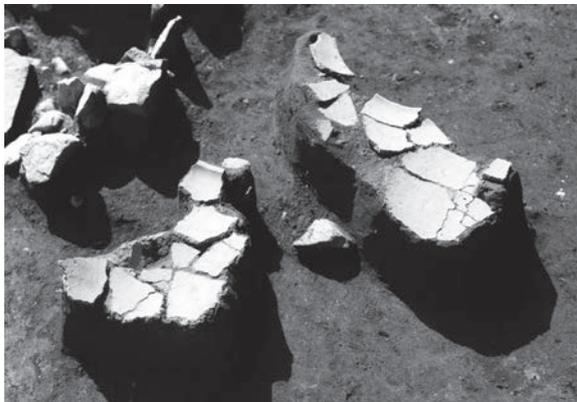
SI05 竪穴住居複式炉完掘（南東から）



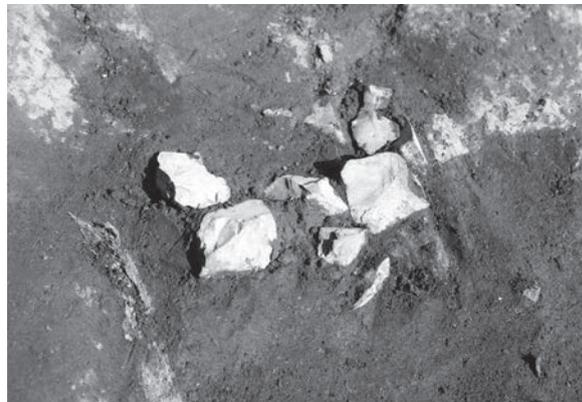
SI05 竪穴住居跡焼土検出状況（南東から）



SI05 柱穴上土器出土状況（南東から）



SI05 竪穴住居土器出土状況（東から）



SI05 壁際柱穴剥片出土状況（東から）



SI05 柱穴1断面（東から）



SI05 柱穴2断面（東から）

写真図版8 SI05 竪穴住居跡（2）



SI06・19 竪穴住居全景（南から）



SI06・19 竪穴住居 A-A' 断面（東から）



SI06・19 竪穴住居 B-B' 断面（南から）

写真図版9 SI06 竪穴住居跡（1）



SI06 複式炉全景（南から）



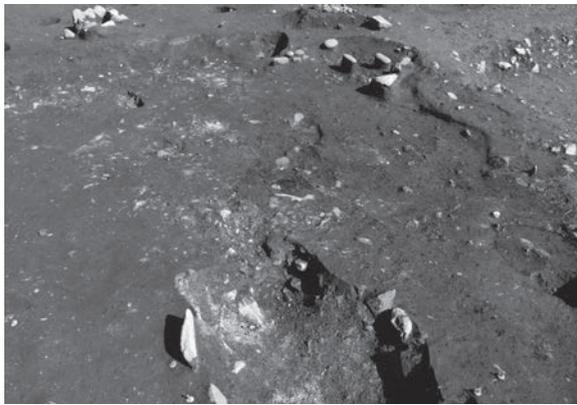
SI06 複式炉 a-a' 断面1（東から）



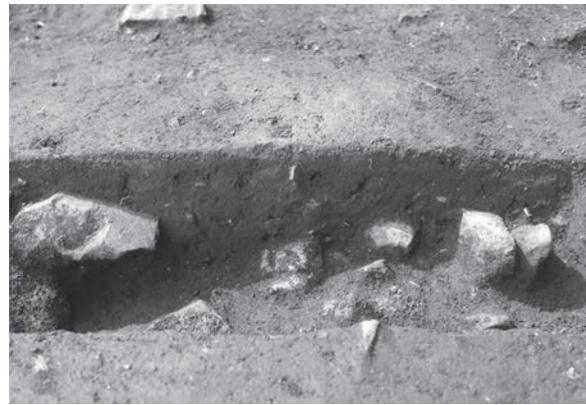
SI06 複式炉 b-b' 断面2（南から）



SI06 複式炉上遺物出土状況（南東から）



SI06 焼土検出状況（南西から）



SI06 焼土裁ち割り（南西から）



SI06 礫出土状況（南から）



SI06 竪穴住居完掘（南西から）

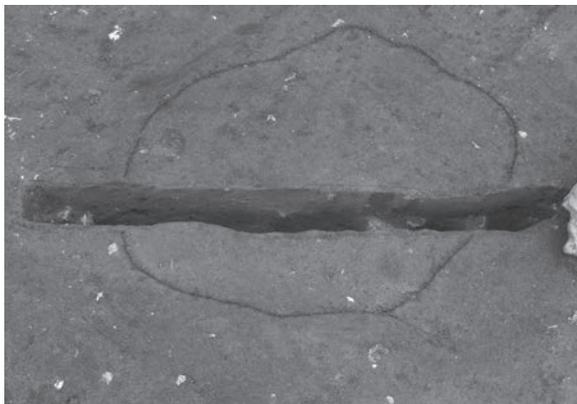
写真図版10 SI06 竪穴住居跡（2）



SI07 竪穴住居全景（南東から）



SI07 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI07 焼土裁ち割り（南西から）



SI07 複式炉完掘（南東から）

写真図版11 SI07 竪穴住居跡



SI08 竪穴住居全景（南から）



SI08 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI08 竪穴住居 B-B' 断面（南から）

写真図版12 SI08 竪穴住居跡（1）



SI08 複式炉全景 (南から)



SI08 複式炉断面 (西から)



SI08 複式炉 b-b' 断面 (南から)



SI08 複式炉焼土裁ち割り (西から)



SI08 複式炉完掘 (南から)



SI08 礫出土状況 (南から)



作業風景 (南東から)

写真図版13 SI08 竪穴住居跡 (2)



SI09 竪穴住居全景（南から）



SI09 複式炉全景（南から）

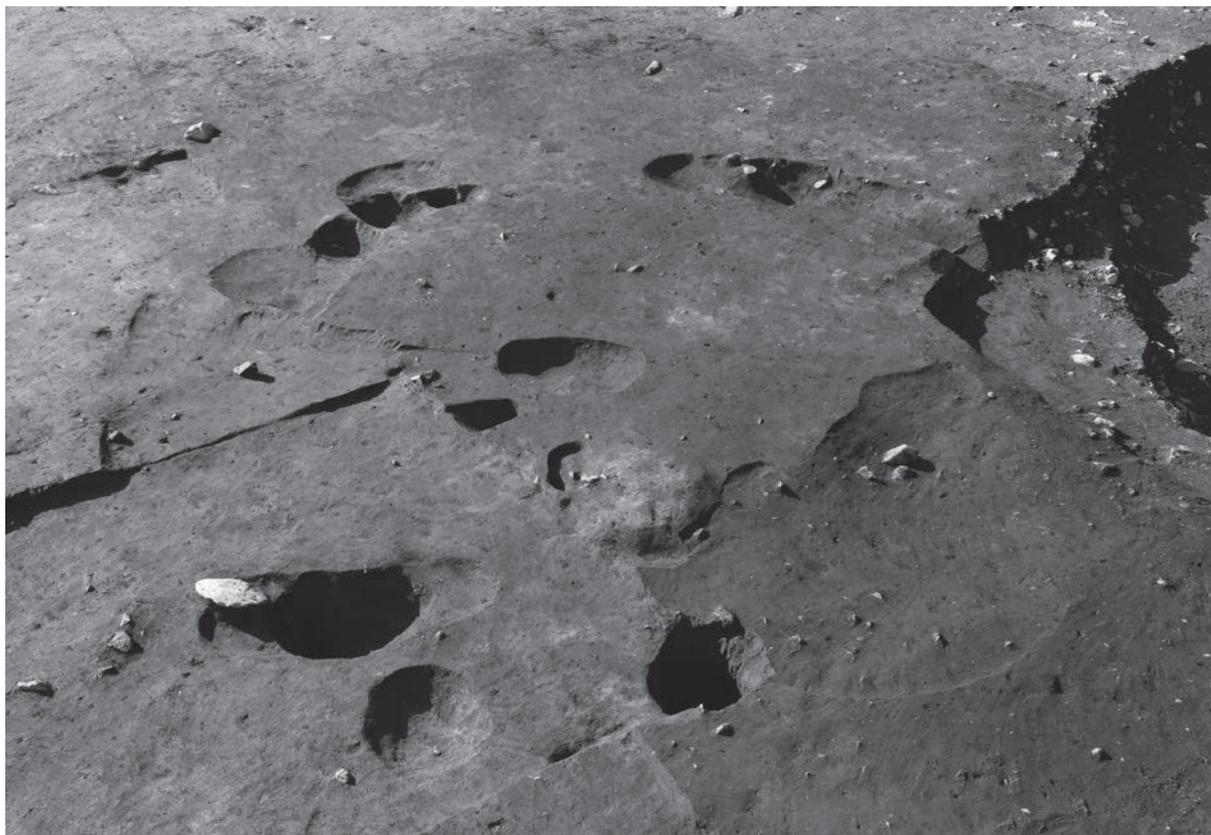


SI09 炉燃烧部裁ち割り（南西から）



SI09 炉前庭部土器出土状況（南から）

写真図版14 SI09 竪穴住居跡



SI10 竪穴住居全景（南東から）



SI10 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI10 竪穴住居 B-B' 断面（南東から）



SI10 地床炉（南東から）



SI10 地床炉 裁ち割り（南西から）

写真図版15 SI10 竪穴住居跡



SI11 竪穴住居全景（南から）



SI11 竪穴住居 A-A' 断面（南西から）



SI11 竪穴住居 B-B' 断面（南東から）

写真図版16 SI11 竪穴住居跡（1）



SI11 竪穴住居 c-c' 断面 (南西から)



SI11 石囲炉全景 (南から)



SI11 石囲炉 a-a' 裁ち割り (南から)



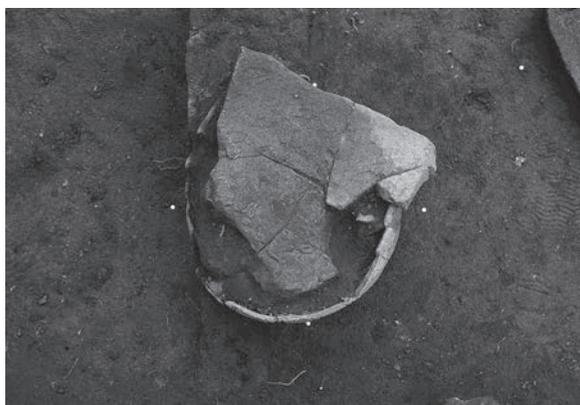
SI11 石囲炉 b-b' 裁ち割り (西から)



SI11 遺物出土状況 1 (南西から)



SI11 遺物出土状況 2 (北東から)



遺物出土状況 (北東から)



遺物出土状況 (東から)

写真図版17 SI11 竪穴住居跡 (2)



SI12 竪穴住居全景（北西から）



SI12 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI12 竪穴住居 B-B' 断面（北西から）

写真図版18 SI12 竪穴住居跡



SI13 竪穴住居全景（南東から）

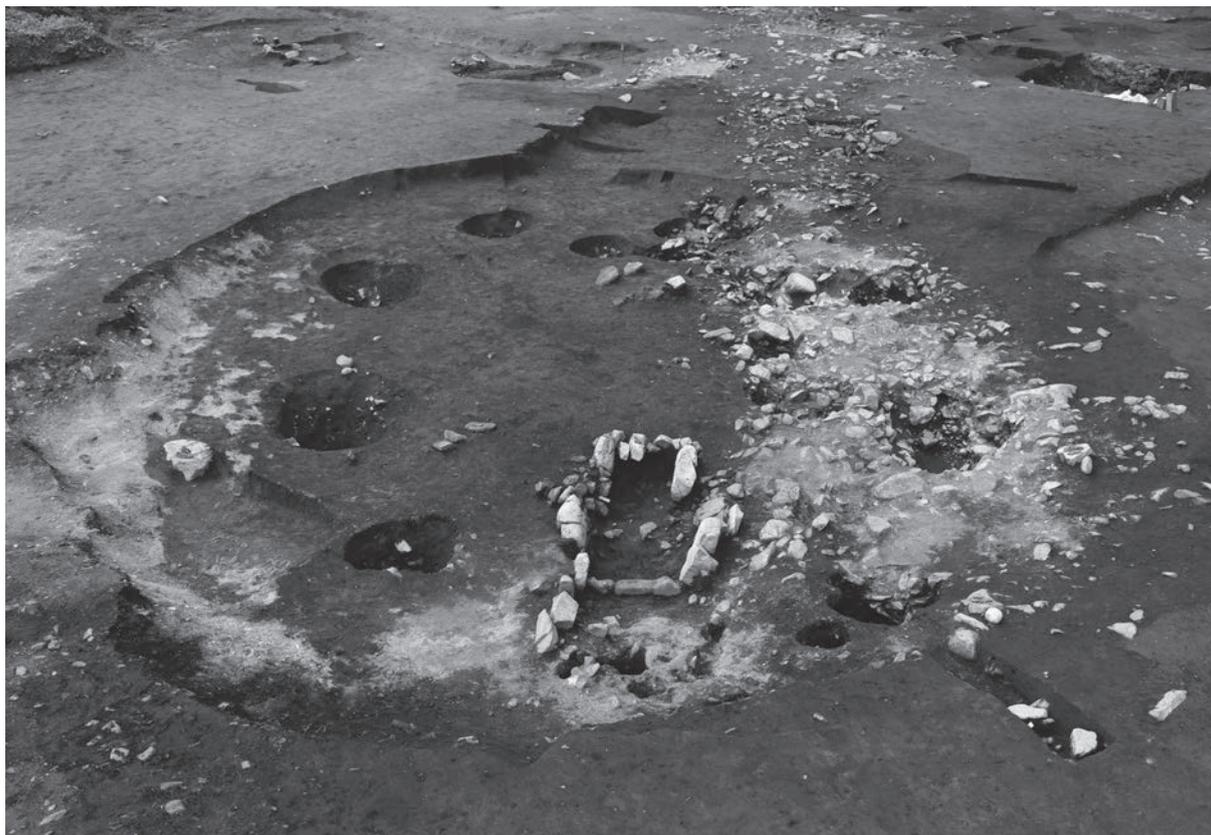


SI13 竪穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI13 竪穴住居 B-B' 断面（北東から）

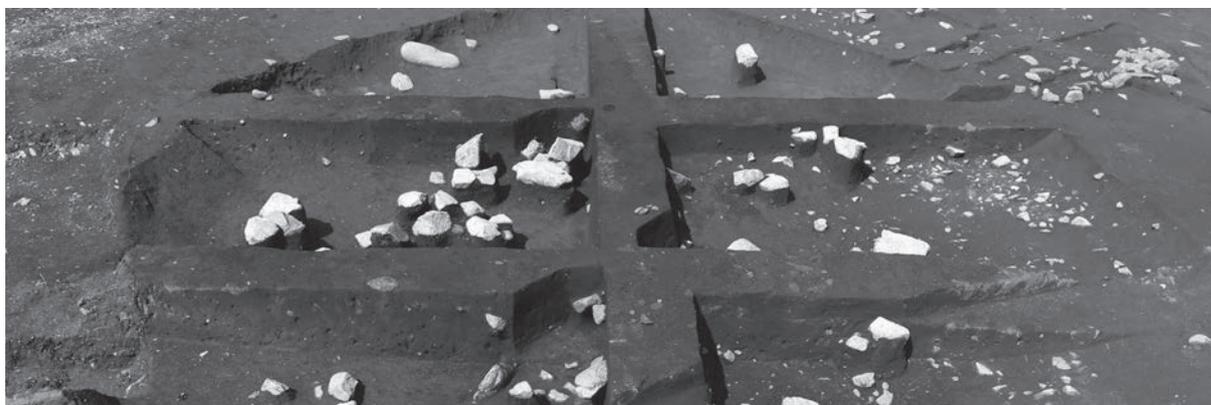
写真図版19 SI13 竪穴住居跡



SI14 竪穴住居全景（南東から）



SI14 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI14 竪穴住居 B-B'・C-C' 断面（東から）

写真図版20 SI14 竪穴住居跡（1）



SI14 複式炉全景 (南東から)



SI14 複式炉完掘 (北東から)



SI14 複式炉断面 (南東から)



SI14 複式炉 a-a' 断面 (南西から)



SI14 主軸上焼土1 (北東から)



SI14 主軸上焼土1 裁ち割り (東から)

写真図版21 SI14 竪穴住居跡 (2)



SI14・15 竪穴住居全景（北西から）



SI15 竪穴住居 A-A' 断面（南西から）



SI14・15 焼土2 裁ち割り（西から）



SI14・15 焼土裁ち割り（南西から）



作業風景

写真図版22 SI14（3）・15 竪穴住居跡



SI16 罎穴住居全景（南東から）



SI16 罎穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI16 罎穴住居 B-B' 断面（南西から）

写真図版23 SI16 罎穴住居跡（1）



SI16 複式炉全景 (南東から)



SI16 複式炉完掘 (南東から)



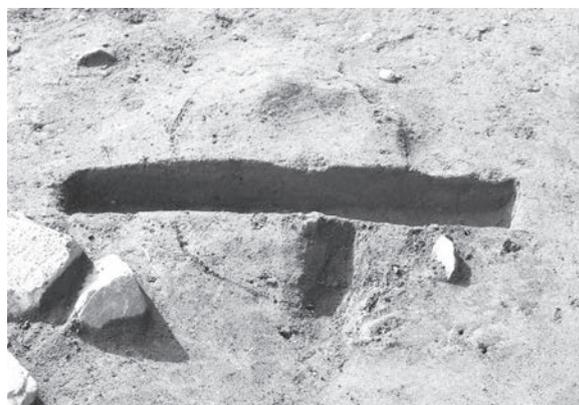
SI16 複式炉 b-b' 断面 (南東から)



SI16 複式炉 a-a' 断面 (南から)



SI16 焼土全景 (南東から)



SI16 焼土裁ち割り (南東から)

写真図版24 SI16 竪穴住居跡 (2)



SI17 竪穴住居全景（北から）



SI17 竪穴住居 B-B' 断面（北から）



SI17 竪穴住居 A-A' 断面（東から）



SI17 石囲炉検出状況（北から）



SI17 石囲炉裁ち割り（北から）

写真図版25 SI17 竪穴住居跡



SI18 竪穴住居全景（南東から）



SI18 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI18 竪穴住居 B-B' 断面（南から）



SI18 石囲炉裁ち割り（東から）

写真図版26 SI18 竪穴住居跡



SI19 竪穴住居完掘（北から）



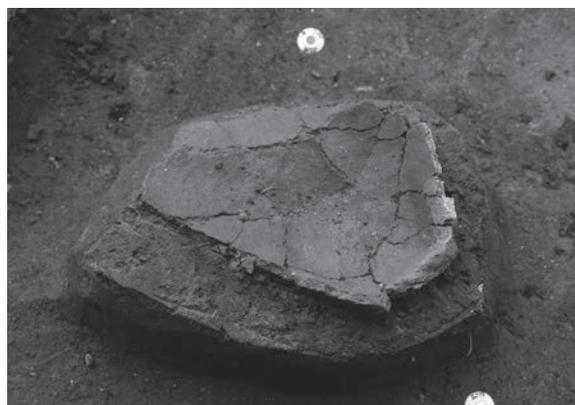
SI19 竪穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI19 竪穴住居 C-C' 断面（南から）



SI19 竪穴住居 c-c' 断面（南から）



遺物出土状況（北から）

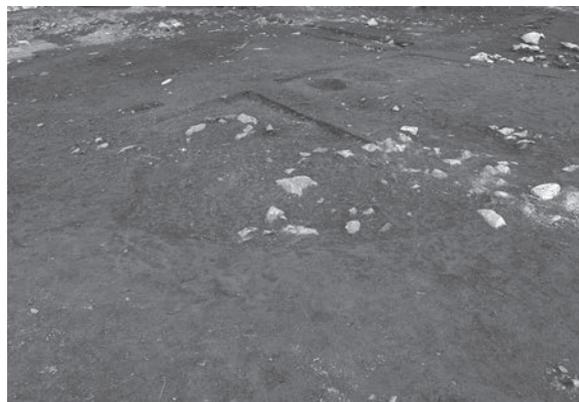
写真図版27 SI19 竪穴住居跡



SI20 竪穴住居全景（南から）



SI20 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI20 竪穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI20 柱穴 P 2 断面（西から）



SI20 柱穴 P 4 完掘（南東から）

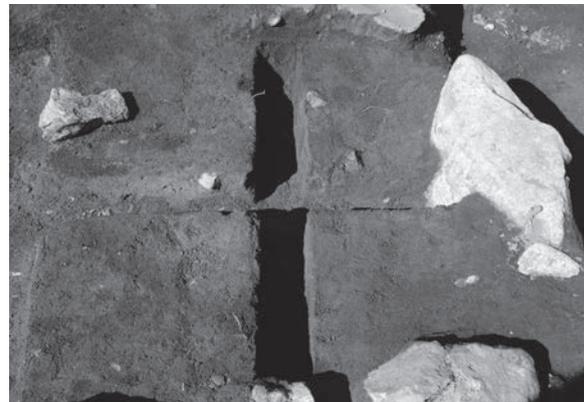
写真図版28 SI20 竪穴住居跡



SI21 竪穴住居全景（東から）



SI21 竪穴住居 B-B' 断面（北から）



SI21 石囲炉 b-b' 裁ち割り（東から）



SI21 竪穴住居 A-A' 断面（東から）

写真図版29 SI21 竪穴住居跡



SI22 竪穴住居全景（北から）



SI22 竪穴住居 A-A' 断面（北から）



SI22 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI22 石囲炉全景（北西から）

写真図版30 SI22 竪穴住居跡



SI23 竪穴住居全景（南から）



SI23 竪穴住居 B-B' 断面（東から）



SI23 竪穴住居 A-A' 断面（南から）

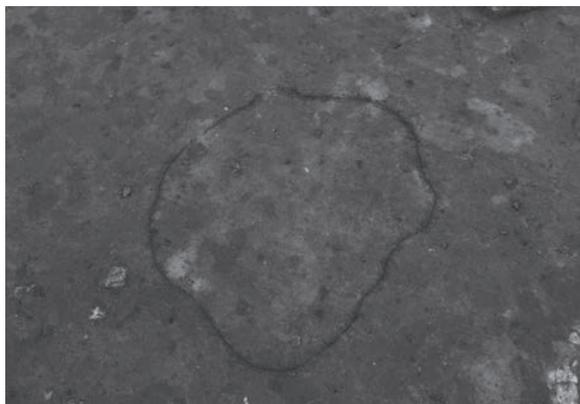
写真図版31 SI23 竪穴住居跡（1）



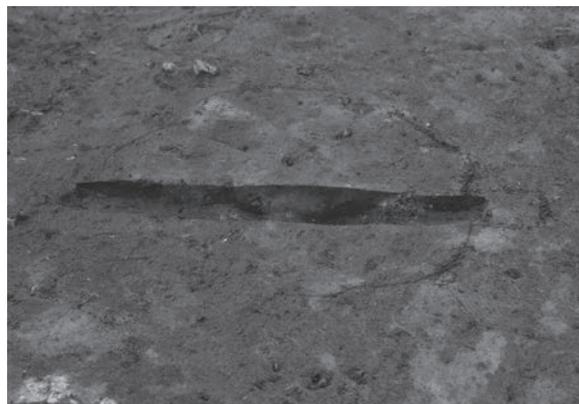
SI23 豎穴住居磨製石斧出土状況（北東から）



SI23 豎穴住居石囲炉裁ち割り（東から）



SI23 豎穴住居焼土検出状況（南から）



SI23 豎穴住居焼土裁ち割り（南東から）



6K～6N グリッド以南終了範囲（北西から）

写真図版32 SI23 豎穴住居跡（2）



SI24 竪穴住居全景（東から）



SI24 竪穴住居 A-A' 断面（南東から）



SI24 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI24 複式炉 a-a' 断面（南から）

写真図版33 SI24 竪穴住居跡



SI25 竪穴住居全景（東から）



SI25 竪穴住居 A-A' 断面（西から）



SI25 竪穴住居 B-B' 断面（南から）



SI25 地床炉全景（東から）



SI25 地床炉裁ち割り（東から）

写真図版34 SI25 竪穴住居跡



SI26 竪穴住居全景（南から）



SI26 竪穴住居 B-B' 断面（西から）

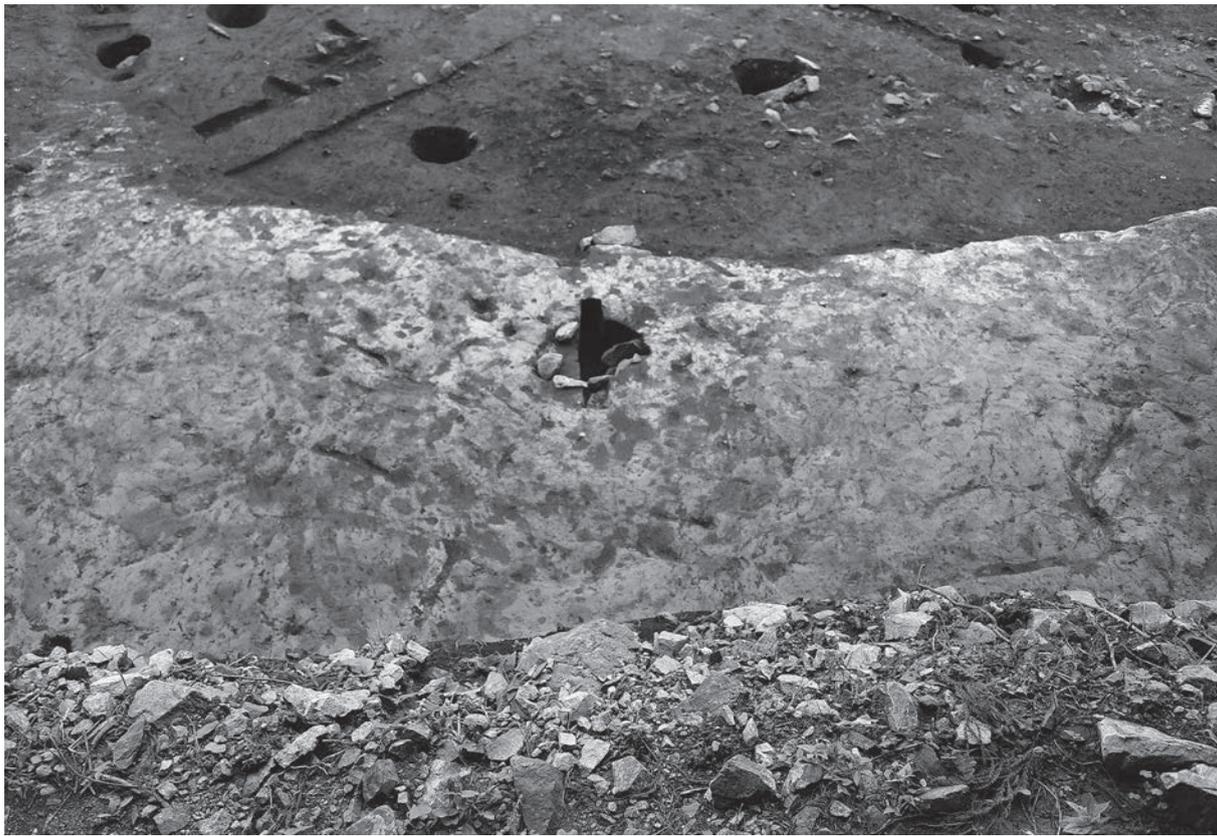


SI26 竪穴住居 A-A' 断面（南西から）



SI26 石囲炉裁ち割り（北西から）

写真図版35 SI26 竪穴住居跡



SI27 竪穴住居全景（北から）



SI27 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI27 石囲炉裁ち割り（東から）



作業風景（北から）



作業風景（南東から）

写真図版36 SI27 竪穴住居跡



SI28 竪穴住居全景（南東から）



SI28 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI28 竪穴住居 B-B' 断面（南西から）



SI28 竪穴住居 C-C' 断面（南から）

写真図版37 SI28 竪穴住居跡（1）



SI28 竪穴住居複式炉全景（南東から）



SI28 竪穴住居 a-a' 断面（南西から）



SI28 竪穴住居複式炉 b-b'・c-c' 断面（南東から）



調査区東側（北西から）

写真図版38 SI28 竪穴住居跡（2）



SI29・30 竪穴住居全景（南から）



SI29 複式炉 a-a' 断面（東から）



SI29 壁溝断面（西から）



SI29 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



調査区中央南部終了（南西から）

写真図版39 SI29・30 竪穴住居跡



SI31 竪穴住居全景（南から）



SI31 竪穴住居 C-C' 断面追加（南から）



SI31 竪穴住居 C-C' 断面（南から）



SI31 石囲炉裁ち割り（南西から）



作業風景（西から）

写真図版40 SI31 竪穴住居跡



SI33 竪穴住居全景（北西から）



SI33 竪穴住居 A-A' 断面（北東から）



SI33 石囲炉全景（北西から）

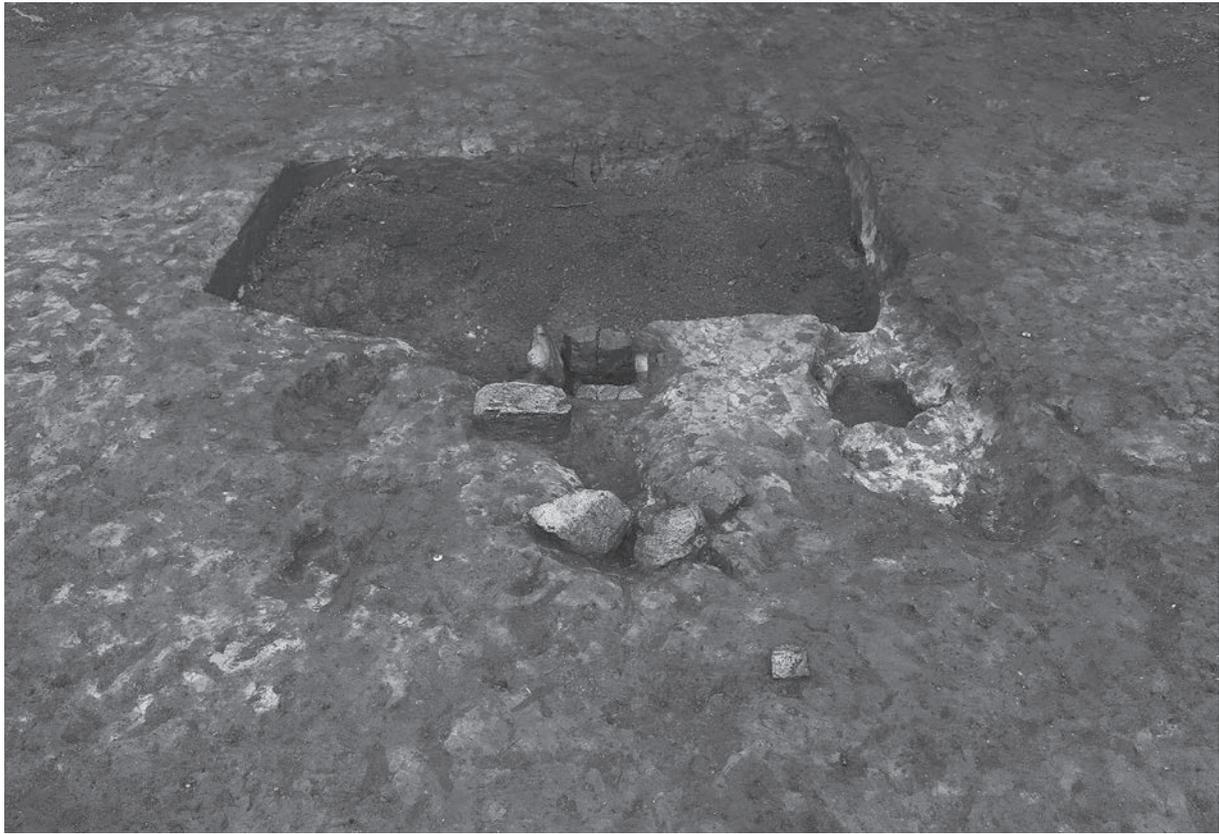


6K～6N グリッドトレンチ断面（北西から）



作業風景（東から）

写真図版41 SI33 竪穴住居跡



SI34 竪穴住居全景（南から）



SI34 竪穴住居 A-A' 断面（北から）



SI34 石囲炉全景（北から）

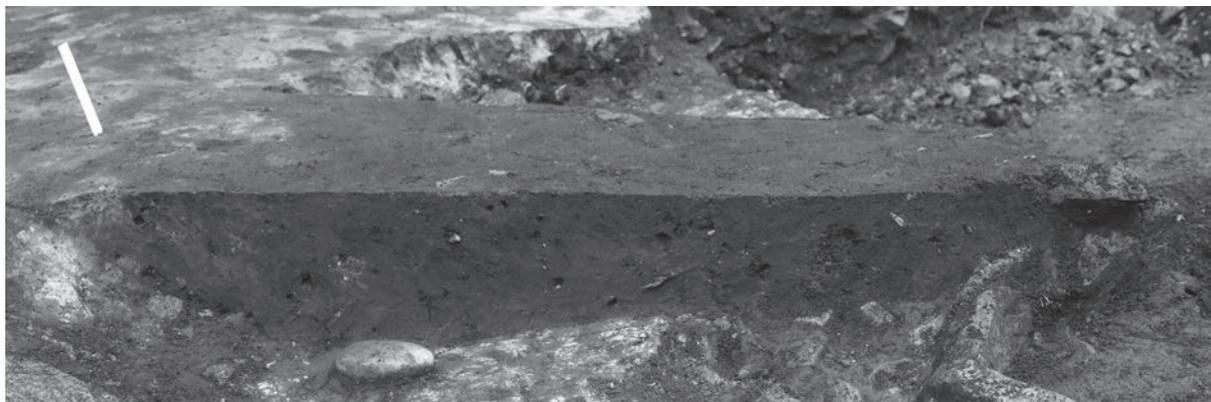


作業風景（南東から）

写真図版42 SI34 竪穴住居跡



SI35 竪穴住居全景（南から）



SI35 竪穴住居 A-A' 断面（南から）



SI35 石囲炉全景（南から）



SI35 石囲炉裁ち割り（南から）

写真図版43 SI35 竪穴住居跡



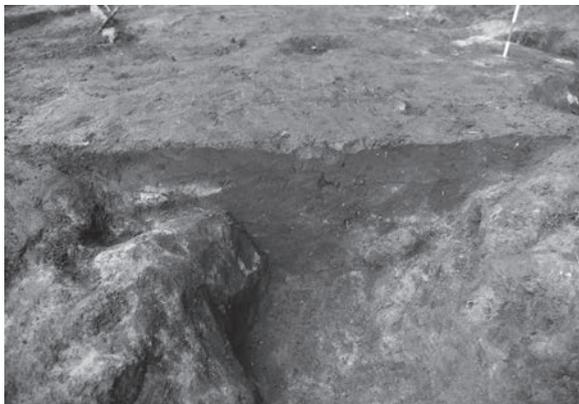
SI36 竪穴住居全景（北西から）



SI36 複式炉断面（南から）



SI36 竪穴住居掘方 B-B' 断面（西から）



SI36 竪穴住居掘方 A-A' 断面（南東から）



調査区南西終了（北東から）

写真図版44 SI36 竪穴住居跡



SI37 竪穴住居全景（南から）



SI37 竪穴住居 B-B' 断面（南から）



SI37 竪穴住居 A-A' 断面（東から）

写真図版45 SI37 竪穴住居跡



SI38 竪穴住居全景（北から）



SI38 土器埋設炉①（北から）



SI38 土器埋設炉②（北から）



SI38 土器除去後（北から）



SI38 土器埋設炉断面（北から）

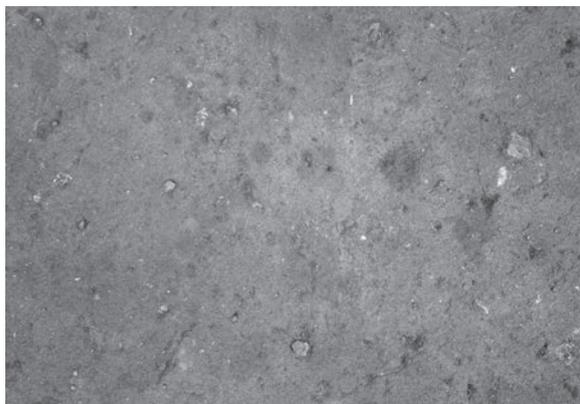
写真図版46 SI38 竪穴住居跡



SD01 溝全景 (西から)



SD01 溝断面 (西から)



SN01 焼土検出状況 (南から)



SN01 焼土断面 (西から)



SK04 土坑全景 (北から)



SK04 土坑断面 (北から)



SK05 土坑全景 (南から)



SK05 土坑断面 (南から)

写真図版47 SD01 溝跡、SN01 焼土遺構、SK04・05 土坑跡

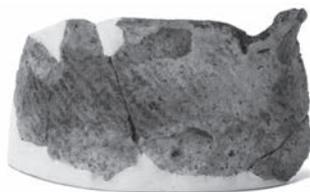


4(2)



5(1)

S101



25



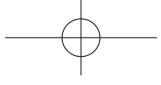
10



12

S102

写真図版48 縄文土器 (1)



14



29

S103



31



32

S105



36



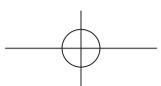
38



39

S106

写真図版49 縄文土器 (2)





40



51



50



57



63

S108



S106



64

S109

写真図版50 縄文土器 (3)



68



S111

87



88

写真図版51 縄文土器（4）



91



S111



97



98



96

※96~98はミニチュア土器

99

写真図版52 縄文土器 (5)



101

S112(1)



109

S112



131



S114

112



119

S115



133

S119



写真図版53 縄文土器 (6)



SI19

132



142



139



SI20

151



SI24

181



182



183



SI21

155

写真図版54 縄文土器 (7)



187



212

S133



190

S128

写真図版55 縄文土器 (8)



218



219



S137



223



S138



224

写真図版56 縄文土器 (9)



226



227



228

SK05



256



258



257



261

遺構外



1



2



3a



3b



3c



6

SI01



7



8

※4・5は立体写真に掲載



9

SI02

写真図版57 縄文土器 (10)



11a

11b



13



15



16



17



18



19



20



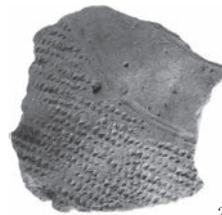
21



22



23



24



26

※10・12・25・29は立体写真に掲載



S103

27



28



30



S105

33



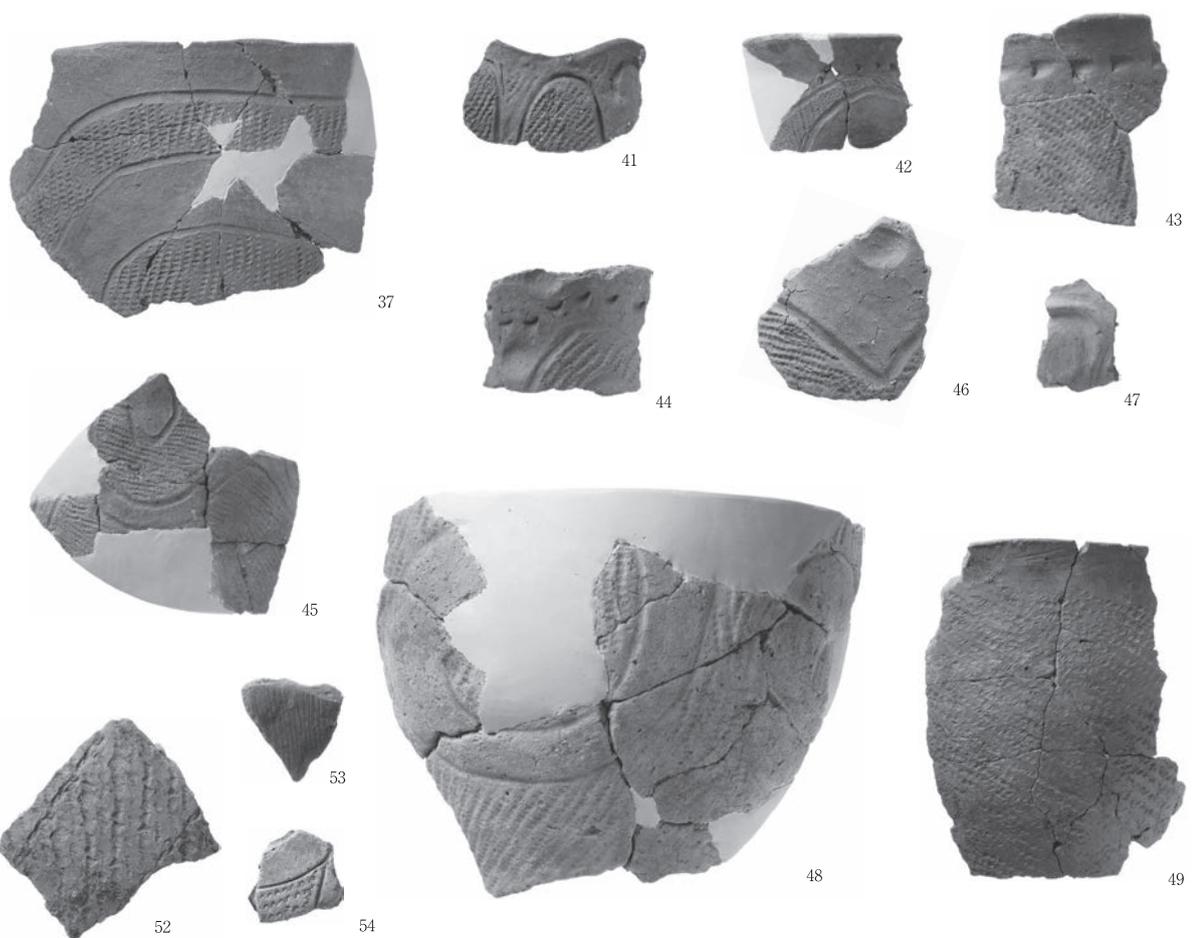
34



35

※31・32は立体写真に掲載

写真図版58 縄文土器 (11)



S106

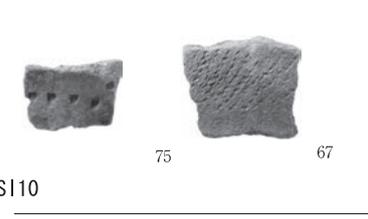
※36~40・50・51は立体写真に掲載



S107



S109
※64は立体写真に掲載

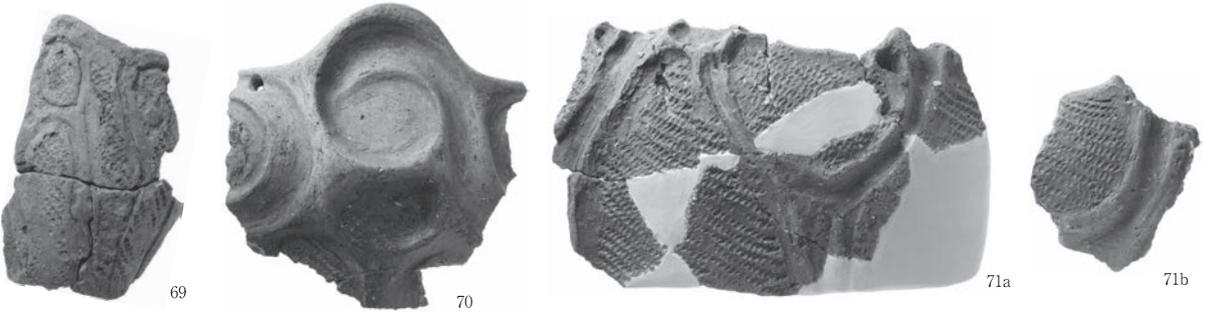


S110



S108

※57・63は立体写真に掲載



S111

※68は立体写真に掲載

写真図版59 縄文土器 (12)



72a



72b



73



74



76



77



75



79



80



81



82



84



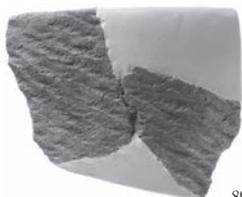
83



85



86



89



90



92



93



94



95

S111

※78・87・88・91・99は立体写真に掲載

写真図版60 縄文土器 (13)



S114

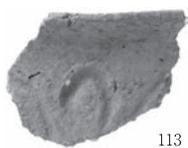
108

110

111a

111b

※101・109・112は立体写真に掲載



113



114



116



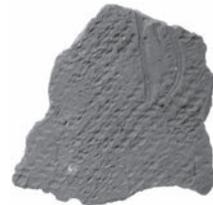
118



115



117



120



121



122



123

S115

※119は立体写真に掲載



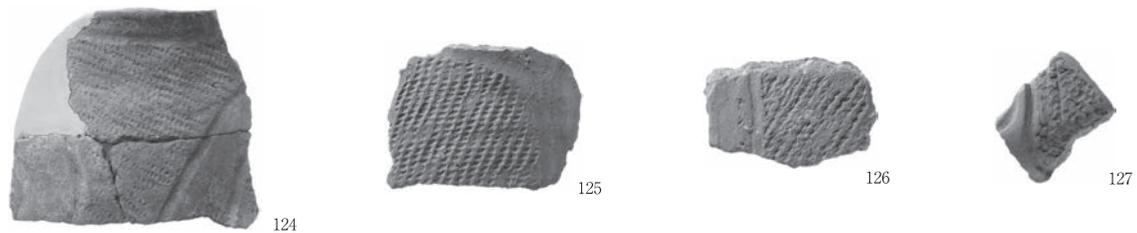
128



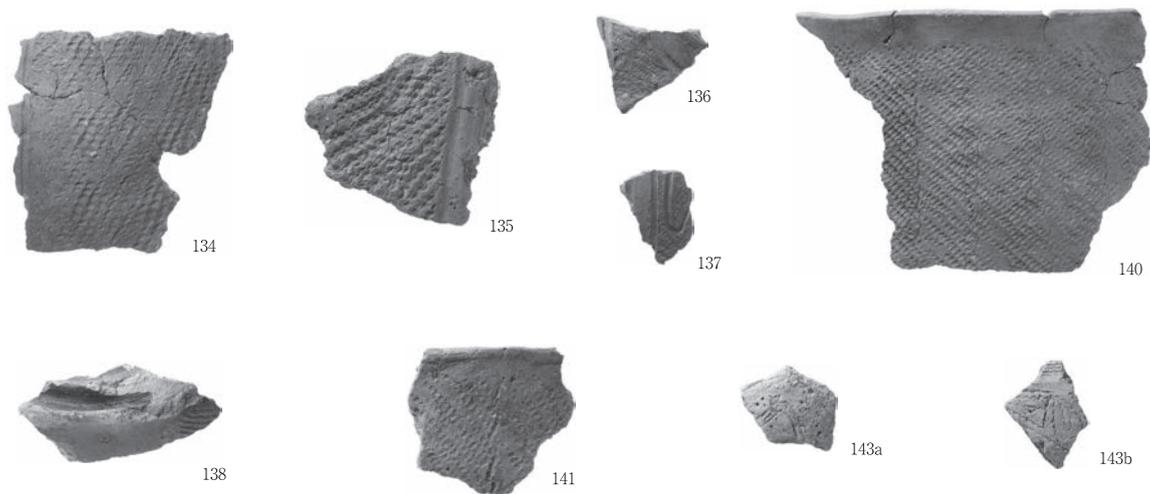
129

S117

写真図版61 縄文土器 (14)

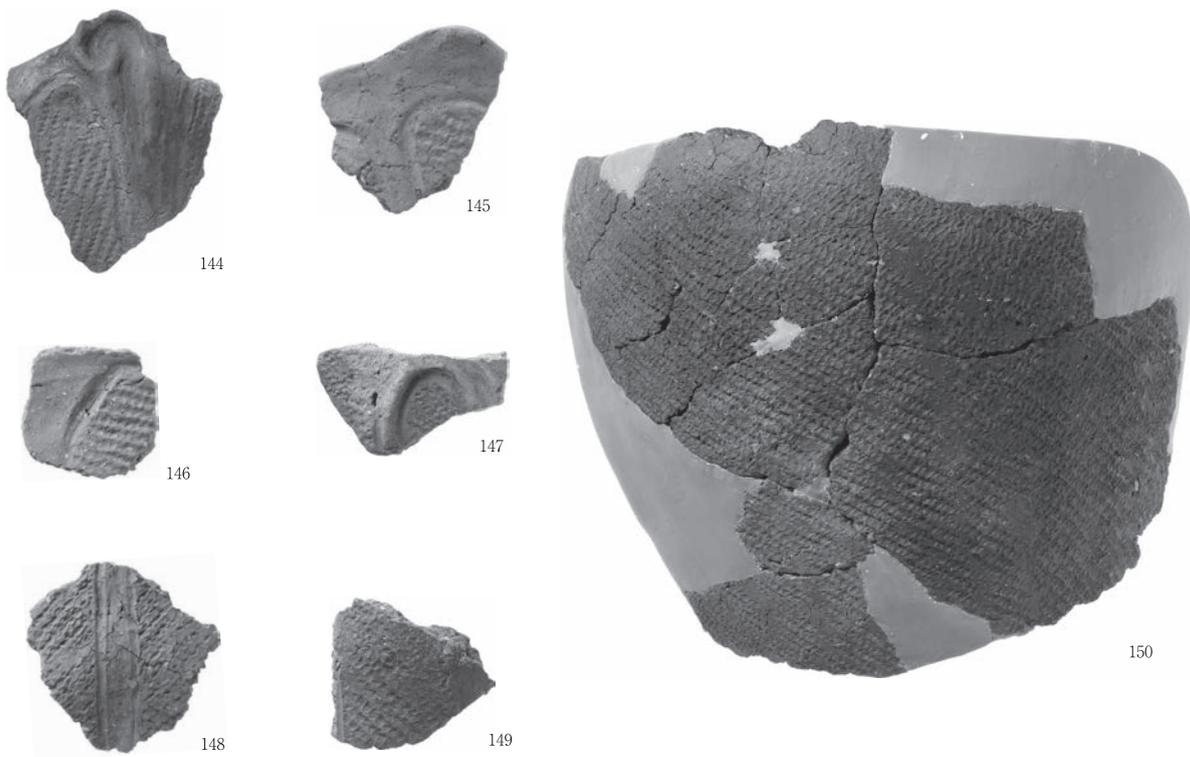


SI16



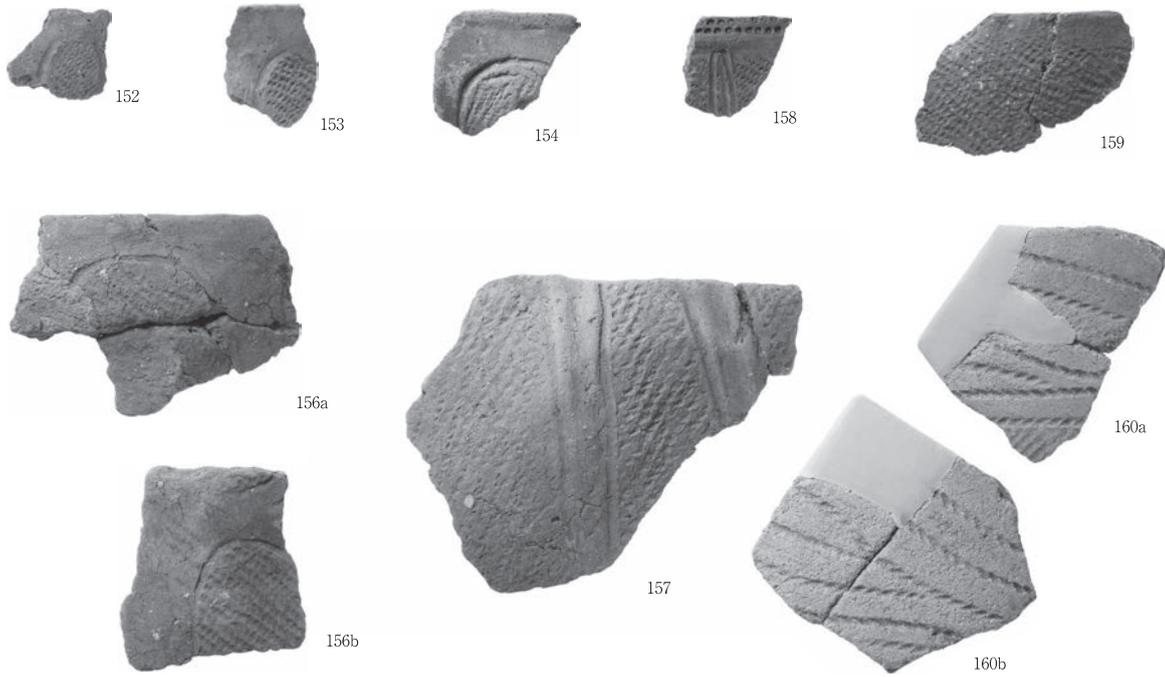
SI19

※130~133・139・140・142は立体写真に掲載



SI20

写真図版62 縄文土器 (15)

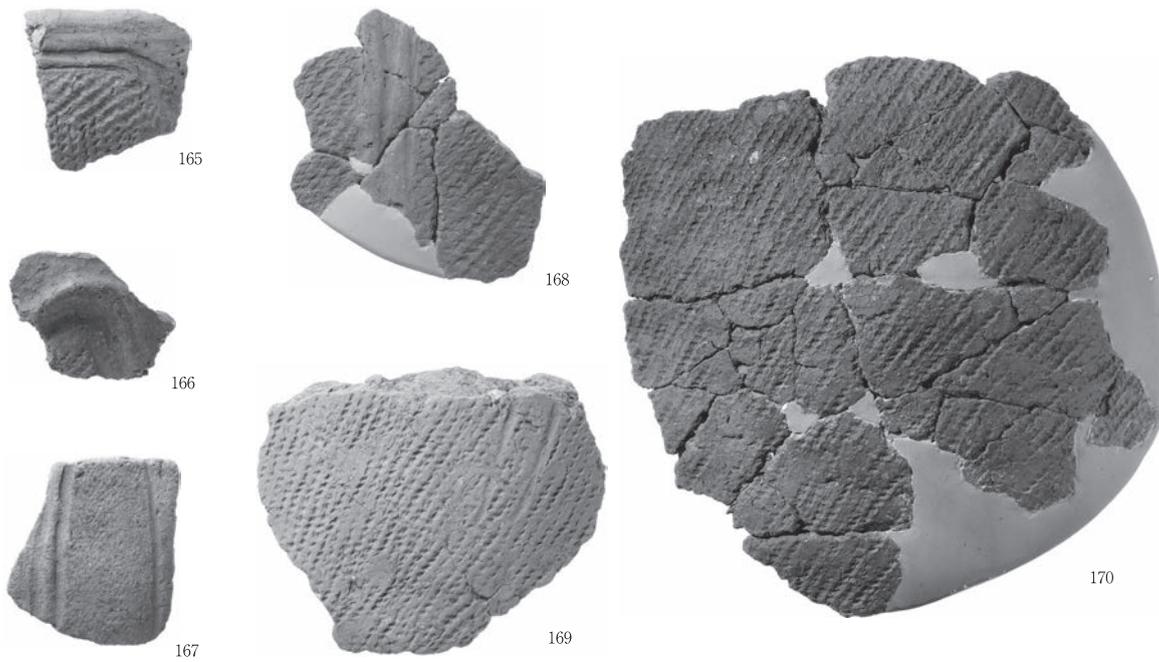


S121

※150・151は立体写真に掲載



S122

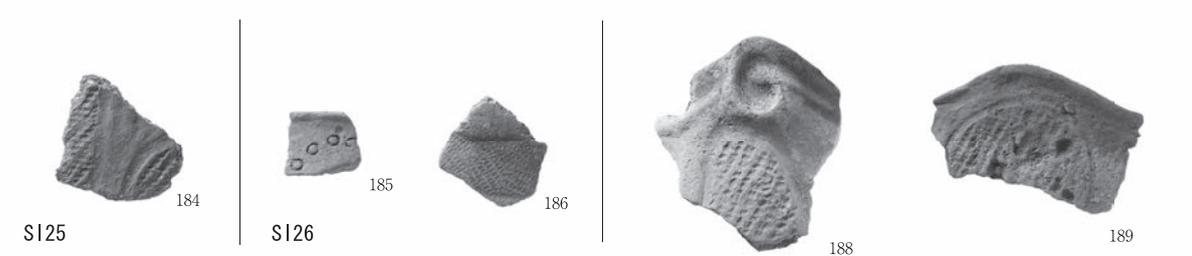


S123

写真図版63 縄文土器 (16)



S124



S125

S126



S128

写真図版64 縄文土器 (17)



200



202



201



203



205



204



206b



206a

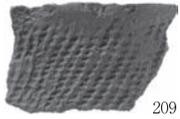


207



208

S128



209



210



211



215



216



217

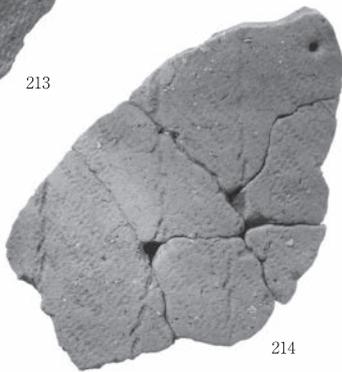
S129

S131

S135



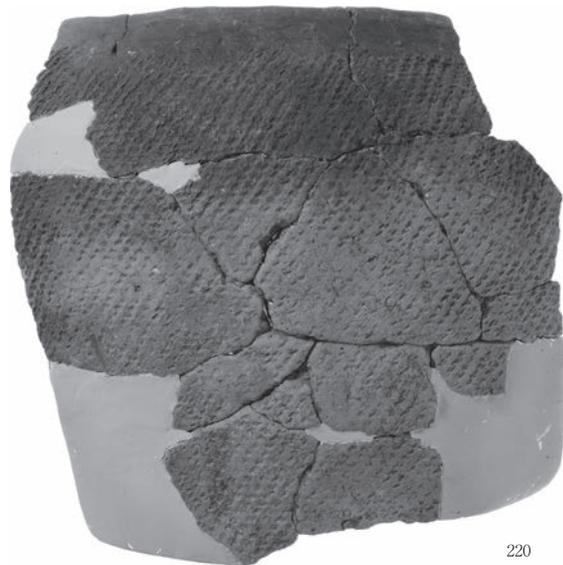
213



214

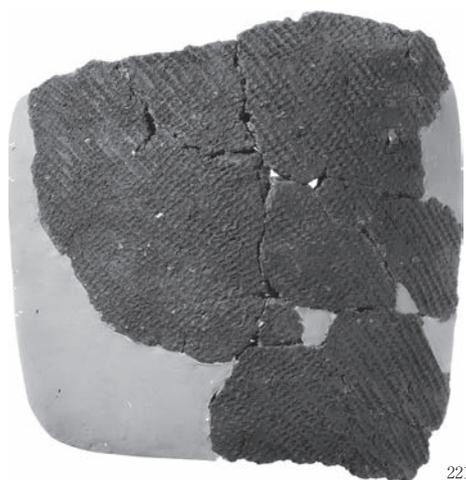
S134

S137



220

写真図版65 縄文土器 (18)



221

S137(2)



222

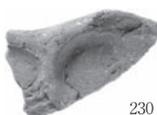
S138



225



229



230



231



232



233



234



235

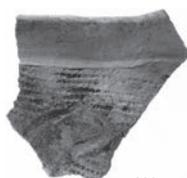


236



237

遺構外



238



239



240



241



242



243



244

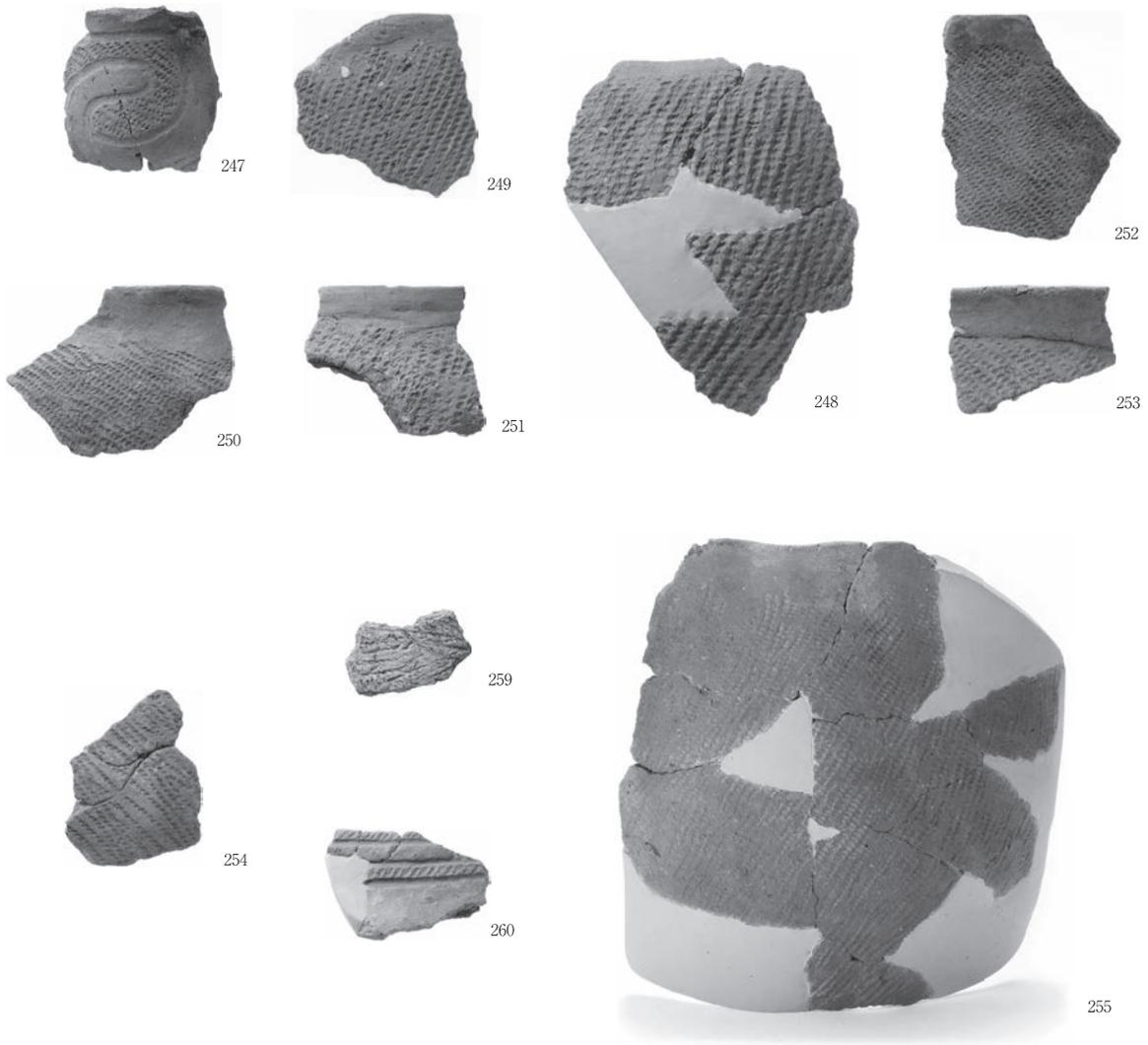


245

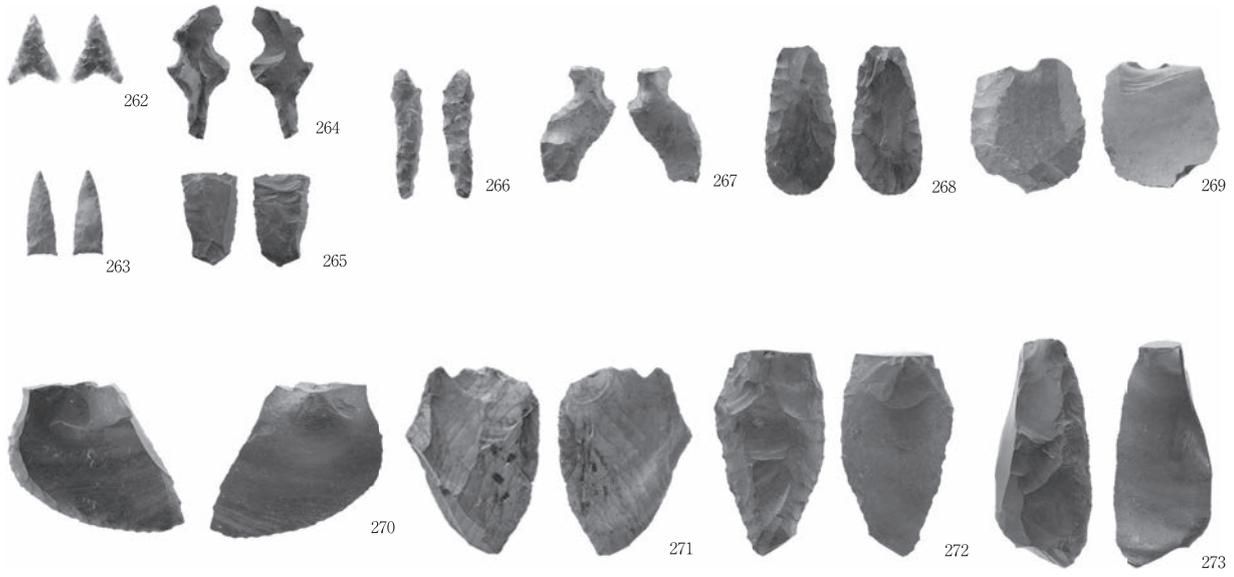


246

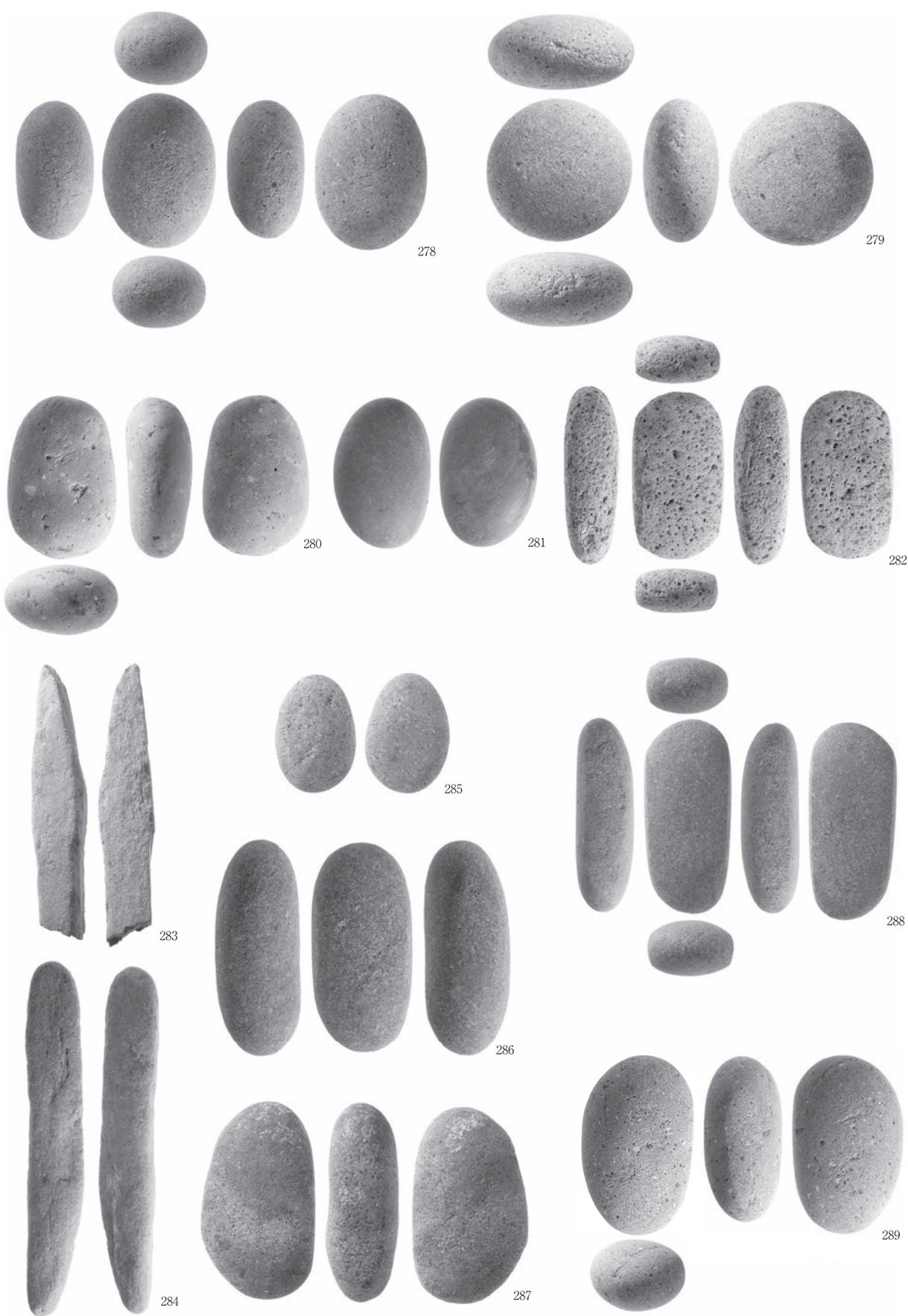
写真図版66 縄文土器 (19)



写真図版67 縄文土器 (20)



写真図版68 石器 (1)



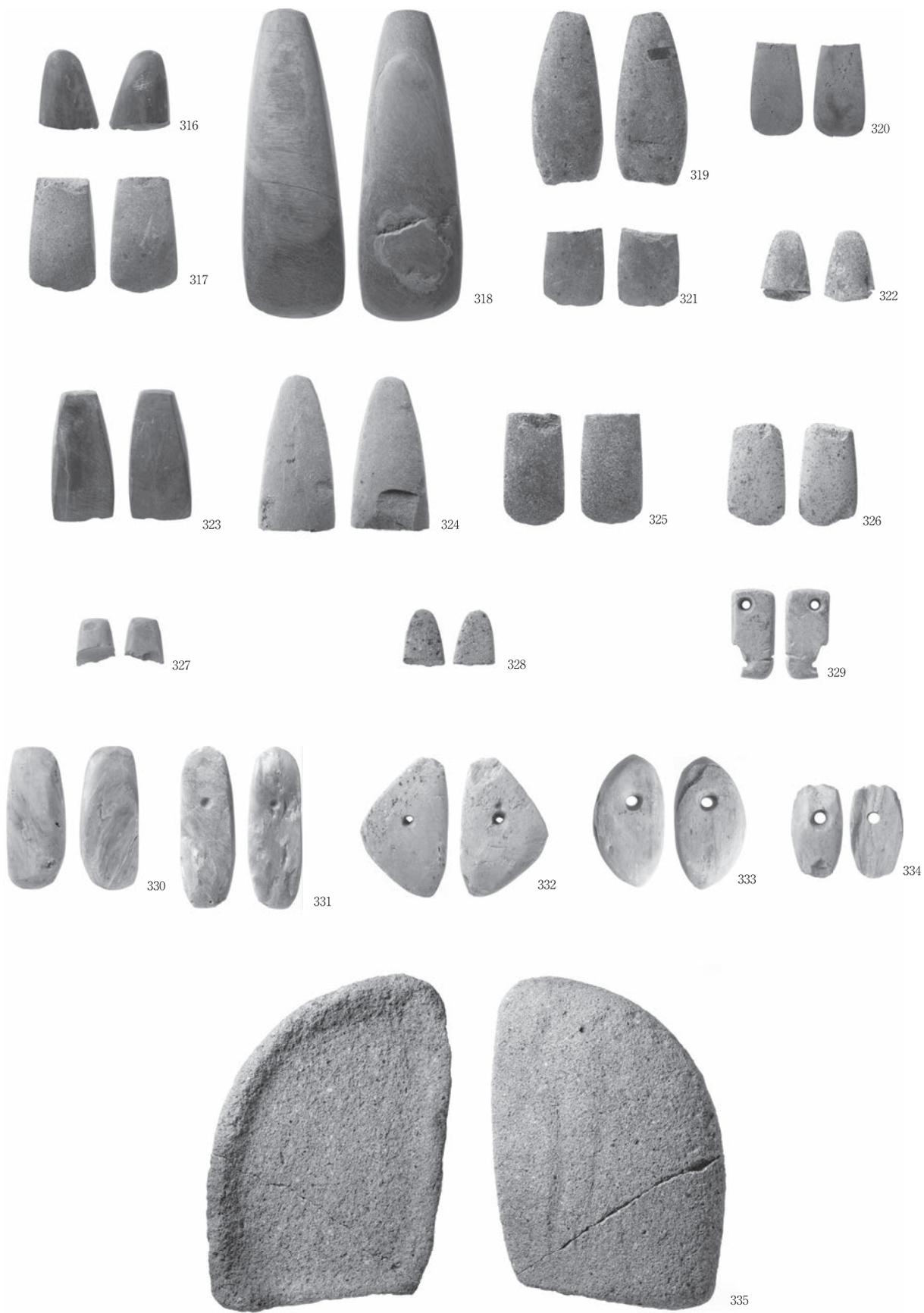
写真図版69 石器 (2)



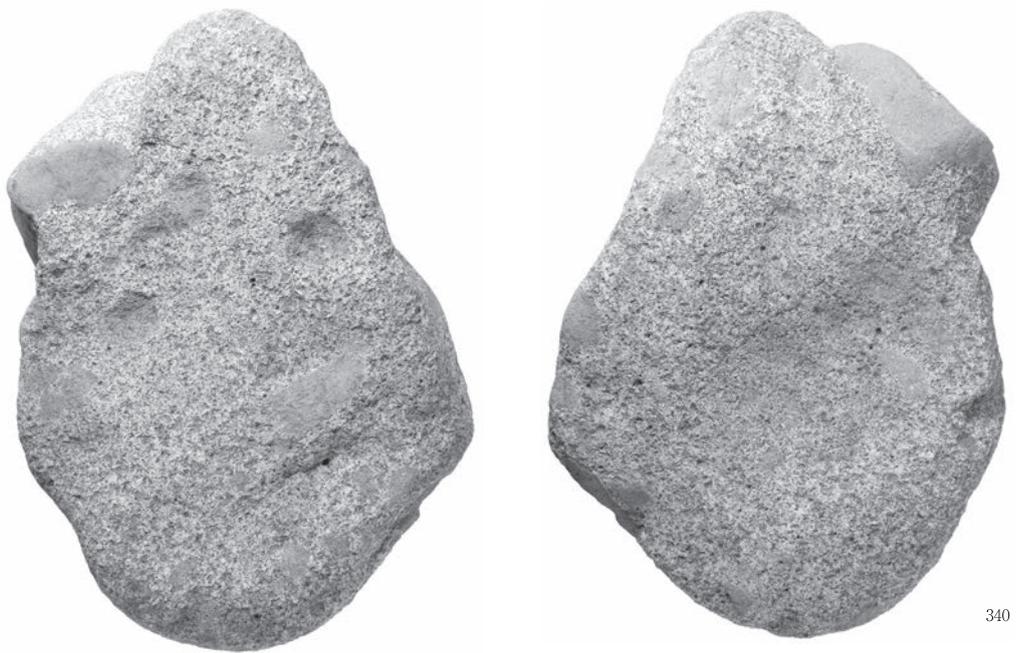
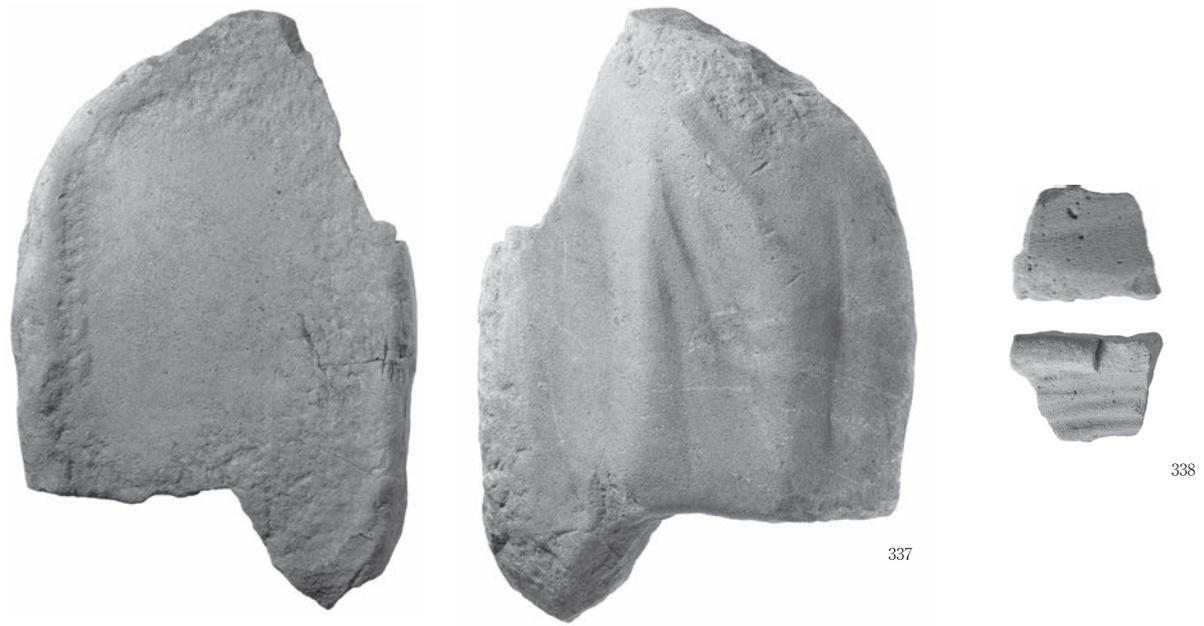
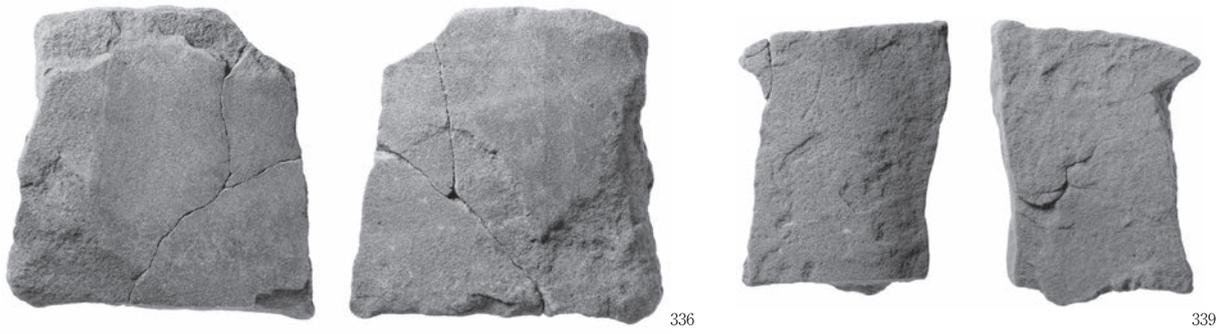
写真図版70 石器 (3)



写真図版71 石器 (4)



写真図版72 石器 (5)



写真図版73 石器 (6)



341



342



343(1)



343(2)

写真图版74 石器 (7)

報告書抄録

ふりがな	こなり2いせきはつちようさほうこくしょ							
書名	小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第644集							
編著者名	藤本玲子・佐々木隆英							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2015年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こなり2いせき 小成Ⅱ遺跡	いわてけんかみへいぐん 岩手県下閉伊郡 いわいづみちょうおもとあざ 岩泉町小本字 こなり 小成4-36ほか	03483	LG53-0313	39度 49分 18秒	141度 57分 40秒	2013.07.01 ～ 2013.10.11	1,900 m ²	三陸沿岸道路 (田老～岩泉線) 工事に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小成Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 38 棟 土坑 2 基	縄文前期土器、大木 8・9・10式土器 ミニチュア土器、円 盤状土製品、石鏃、 石錐、石匙、異形石 器、不定形石器、ス クレイパー、敲磨器 類、多面体敲石、磨 製石斧、垂飾、石皿、 台石		縄文時代中期後葉の集落跡。		
		時期不明	溝跡 1 条 焼土遺構 1 基					
要約	大木9式期を中心とする複式炉、石囲炉、地床炉を伴う竪穴住居跡 38 棟が検出され、縄文時代中期後葉を中心とする集落跡であることが分かった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 644 集

小成Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 27 年 3 月 12 日

発 行 平成 27 年 3 月 19 日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話(019) 638-9001

発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川 4 番 1 号
電話(0193) 62-1744

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話(019) 654-2235

印 刷 第一印刷株式会社
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目 6-40
電話(019) 646-6001

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015